

博士論文

機能動詞結合の特殊性が日本語習得に及ぼす影響

—中国語を母語とする学習者を対象に—

岡嶋 裕子

目次

第1章 はじめに.....	1
1.1 研究動機.....	1
1.2 研究課題.....	5
1.3 本研究の特色.....	5
1.4 本稿の構成.....	7
第2章 理論的背景.....	9
2.1 村木（1991）による「機能動詞結合」の提示.....	9
2.1.1 機能動詞の定義と展開パターン.....	9
2.1.2 機能動詞結合の構成要素.....	10
2.1.3 機能動詞結合の特徴.....	11
2.1.4 機能動詞結合の文法的意味.....	12
2.2 「機能動詞結合」に関わるその他の諸論文.....	12
2.2.1 影山（1993）.....	12
2.2.2 藤井・上垣（2008b）.....	13
2.2.3 英語の Support Verbs.....	14
2.3 「機能動詞結合」に関わる諸問題.....	15
2.3.1 機能動詞結合の項表示.....	15
2.3.1.1 Grimshaw & Mester（1988）.....	15
2.3.1.2 影山（1993）.....	16
2.3.1.3 Matsumoto（1996）.....	18
2.3.1.4 藤井・上垣（2008b）.....	19
2.3.2 機能動詞は空疎な動詞か 神田（2002）.....	19
2.3.3 機能動詞結合が持つ独自の役割.....	21
2.3.4 機能動詞結合における助詞の問題.....	23
2.3.4.1 「VN をする」の助詞「を」の使用条件.....	23
2.3.4.2 「を」の有無による格助詞の変化.....	27
2.3.4.3 「の」による事態性名詞への修飾 （「NP の VN をする」）.....	27
2.3.5 機能動詞結合への連体／連用修飾 奥津（2007）.....	30
2.3.6 機能動詞結合とヴォイス 影山（1996）.....	32
2.3.7 機能動詞結合の判別 藤井・上垣（2008b）.....	33
第3章 第二言語習得教育における先行研究.....	36
3.1 日本語教育.....	36
3.1.1 誤用要因を探った研究.....	36
3.1.1.1 スル動詞結合対象.....	36
3.1.1.2 全ての機能動詞結合対象.....	38

3.1.2	日本語能力による習得の違い	41
3.1.3	「名詞+動詞」結合における母語転移	42
3.2	英語教育	45
3.2.1	母語との関わり	45
3.2.1.1	母語転移	45
3.2.1.2	軽動詞借用ストラテジー	49
3.2.2	学習者の過剰/過少使用	50
3.2.3	誤用タイプ	51
3.2.4	習得難易に影響を及ぼす要因	53
3.2.4.1	頻度、意味の透明性、母語	53
3.2.4.2	高頻度動詞の多義性	57
3.2.4.3	語結合の制約程度	57
3.3	L2 先行研究からの示唆	58
第4章	研究の概要	63
4.1	研究方法	63
4.2	用語	64
第5章	作文調査の枠組み	66
5.1	調査目的	66
5.2	調査対象データ	67
5.3	分析方法	67
5.4	分析項目	70
第6章 [調査1]	中級 CLJ の機能動詞結合習得	74
6.1	調査対象	74
6.2	調査結果	74
6.3	考察	81
6.3.1	高い正用率	81
6.3.2	機能動詞ごとの使用割合	81
6.3.3	誤用分析	82
6.3.3.1	「非結合語」の誤用	82
6.3.3.2	文法上の誤用	85
6.3.3.3	用法の誤り	91
6.3.3.4	母語の影響	99
6.4	まとめ	101
第7章 [調査2]	日本語学習歴による習得の違い (CLJ : 中級 vs. 上級)	103
7.1	調査対象	103
7.2	調査結果	103
7.3	結果の分析	108

7.3.1	頻度	108
7.3.2	誤用タイプ順位	110
7.4	考察	112
7.4.1	機能動詞結合の多様性	112
7.4.2	各誤用タイプが占める割合	113
7.4.3	母語の影響	117
7.5	まとめ	118
第8章	[調査3] 母語での漢字使用の有無による習得の違い (中級: CLJ vs. 非漢字)	119
8.1	調査対象	119
8.2	調査結果	119
8.3	結果の分析	124
8.3.1	頻度	124
8.3.2	誤用タイプ順位	126
8.4	考察	128
8.4.1	事態性名詞の語種と難易度	128
8.4.2	CLJ がスル動詞を多用していたのはなぜか	130
8.4.3	誤用: 共通するものとししないもの	131
8.4.4	母語での漢字使用と機能動詞結合の習得	140
8.4.4.1	CLJ は母語知識を活用して機能動詞結合を多用	140
8.4.4.2	中国語の構文と機能動詞結合との関わり	141
8.5	まとめ	146
第9章	[調査4] 日本語母語話者と中級 CLJ の産出使用	147
9.1	調査対象	147
9.2	調査結果	148
9.3	結果の分析	149
9.4	考察	150
9.4.1	中級 CLJ ₂ が母語話者より異なり数が多かったのはなぜか	151
9.4.2	支援動詞の多様性	153
9.4.3	機能動詞結合の過剰使用	154
9.5	まとめ	158
第10章	作文調査結果総まとめ	159
第11章	[調査5] 機能動詞結合産出実験	168
11.1	リサーチ・クエスチョン (RQ)	168
11.2	実験協力者	168
11.3	調査方法	168
11.3.1	調査材料	168

11.3.2 調査の流れ	172
11.3.3 正誤判定	172
11.4 調査結果と考察	175
11.4.1 RQ I : CLJ はどのように機能動詞結合を習得しているか	175
11.4.1.1 RQ I - i 機能動詞結合を適切に使用できるか	175
11.4.1.2 RQ I - ii 誤用にはどのようなタイプがあるか	176
11.4.1.3 まとめ	182
11.4.2 RQ II : どのような機能動詞結合が習得に容易 or 困難か	183
11.4.2.1 RQ II - i 習得難易に関わる機能動詞結合の属性	183
11.4.2.2 RQ II - ii 動詞の意味の役割	198
11.4.2.3 まとめ	204
第 12 章 総括的論議と結論	205
12.1 機能動詞結合の習得と日本語能力	205
12.1.1 先行研究での L2 能力と習得との関係	205
12.1.2 本調査での機能動詞結合習得と日本語能力との関係	208
12.1.2.1 産出数	209
12.1.2.2 正用割合	210
12.1.2.3 使用状況	210
12.1.2.4 誤用	214
12.1.3 L2 能力と機能動詞結合の習得 (研究課題 I 結論)	217
12.2 機能動詞結合の特殊性が習得に及ぼす影響	219
12.2.1 機能動詞結合の産出知識があるとはどういうことか	219
12.2.2 機能動詞結合の特殊性が習得に及ぼす影響 (研究課題 II 結論)	220
第 13 章 習得に向けての提言	228
13.1. 機能動詞結合の学習プラン	228
13.2 『機能動詞結合用法辞典』の作成	230
13.2.1 事態性名詞の取る項の統語及び意味内容の表示	230
13.2.2 『機能動詞結合用法辞典』テンプレート	234
第 14 章 今後の課題	239
謝辞	241
参考文献	242
資料	250
資料 1 中級 CLJ の作文 (第 6 章) で使用された機能動詞結合	250
資料 2 上級 CLJ の作文 (第 7 章) で使用された機能動詞結合	275
資料 3 非漢字学習者の作文 (第 8 章) で使用された機能動詞結合	285
資料 4 日本語作文と中国語対訳文との同形同義事態性名詞使用事例 (8.4.4 で使用)	302

資料 5	日本語母語話者の作文（第 9 章）で使用された機能動詞結合	310
資料 6	文字数 450 字以上の中級 CLJ の作文（第 9 章）で使用された機能動詞結合 ..	315
資料 7	文字数 450 字以上の上級 CLJ の作文（9.4.3）で使用された機能動詞結合	315
資料 8	調査協力同意書（第 11 章）	316
資料 9	産出実験質問紙（第 11 章）	316
資料 10	産出実験の正答数集計結果（第 11 章）	318

第1章 はじめに

「連絡」「保護」など、動詞と同様に事態を指し示す名詞を事態性名詞という。この事態性名詞を文中で動詞として用いるためには、機能動詞と結びつける必要がある。機能動詞というのは「実質的な意味を名詞にあずけて、自らはもっぱら文法的な機能をはたす動詞（村木、1991；203）」で、「勉強をする」、「相談する」などの動詞「する」（以下「スル」）が典型的であるが、そのほかに「与える」「とる」などさまざまなものがある。機能動詞結合とは、この機能動詞と事態性名詞との語結合である（例；「連絡（を）する」、「影響を与える」、「休養をとる」）。日本語教育で機能動詞結合を対象とした研究は、鈴木（2009、2014）、庵（2010）、岡嶋（2012）、李（2012）、黄（2017）が見られるのみで、未開拓の分野であり、また、教育現場でも機能動詞結合は学習対象として顧みられていない。しかし、機能動詞結合を構成する事態性名詞の多くは二字漢語でサ変動詞のものが多く、日本語の運用にサ変動詞は必要不可欠であるので、日本語教育において機能動詞結合は重要な位置を占める。

機能動詞結合は、「名詞＋動詞」の結びつきであることからコロケーションの一種である。コロケーションは語彙習得の観点から研究がおこなわれており、機能動詞結合の習得研究も語彙習得研究の中に位置づけられると考える。従来の語彙習得研究では、語彙項目を語彙単独で扱ってきたが、近年「流暢で適切な言語使用はコロケーション知識を必要とする（Nation, 2001; 323）」とチャンクとしての語が注目されている。しかし、日本語教育のコロケーション研究では、「名詞＋形容詞」、「名詞＋動詞」、「副詞＋用言」など語と語の結びつきのみを調査対象としており（秋元；1993、曹・仁科；2006）、構文、文法などとの関連でとらえているものはない。機能動詞結合は後述のように、取る項や修飾語など統語的関わりが深く、構文レベルで捉えることが重要である。本研究は、「語彙知識と統語的構文知識とは連続性を持っている（藤井、2001）」という構文理論の立場に立ち、以下では語彙の枠内に止まらず、その統語的関係を調査分析する。

本研究は、機能動詞結合という視点を日本語教育の研究及び現場へ導入することを目的とする。以下では、日本語学習者による機能動詞結合の習得促進を図るため、機能動詞結合の特殊性が習得に与える影響を調査分析する。

日本語学習者には様々な母語を持つ者がいるが、本研究では、特に中国語を母語とする日本語学習者（Chinese learners of Japanese：以下 CLJ）を研究対象とする。

1.1 研究動機

機能動詞結合には、習得における特有の困難がある。まず、機能動詞結合を構成する事態性名詞と機能動詞の結びつきはさまざまで、規則性がない。たとえば、「攻撃」と「打撃」は意味的に近似しているが、「攻撃」は「攻撃する」とスルと結合するが、「打撃」は「*打撃する」（*：非文、以下同様）とはいえず、「打撃を与える」となる（村木、1991；236）。学習者は語の意味を知っていても、どの事態性名詞に、どの機能動詞を結びつけた

らよいのかを知らなければ、日本語の文中で動詞として使用することはできない。藤井・上垣 (2008 b) では本稿の機能動詞構文に相当する支援動詞構文について「イディオム性が高く、語彙記述において構文に参加する動詞と名詞との語彙的選別性を記述する必要がある (p.434)」と述べている。

次にあげるのは、学習歴 1 年 8 か月の CLJ の作文である。下線部は誤って使用された機能動詞結合である。

「古代から、タバコはずっと人間の生命安全を脅威してきています。・・・(中略)・・・その上に医学によって、タバコを吸う人より回りの人のほうが受けた毒害が多いです。また、電車は人々に対して通勤に欠けないことで、毎日毎日乗らなければなりません。それで、人々の身体は仕事の疲労を受けるほかに、汚染された空気を呼吸せざるをえない。それはどんなにひどいことだろうか。みんなご存じのように、健康な身体は一切のことの基礎です。健康な身体がなければ何もできません。もちろん国家の繁栄も実現できません。」

(国立国語研究所作文データベース：下線は筆者による)

「*安全を脅威する」「*毒害を受ける」「(身体に)*疲労を受ける」「*繁栄を実現する」は、意味的には誤っておらず、作文執筆者の伝達意図は伝わる。しかし、これらの「事態性名詞と機能動詞の結びつき」及び「機能動詞結合が取る項」は、慣用性に反するので誤りとなるのである。

また、機能動詞結合は語と語の組み合わせであることからコロケーションの一種ではあるが、統語的側面もあり、特殊な性格を有している。例えば、「掃除する」と「を」なしで名詞とスル動詞が結びついた時には、一語の複合動詞となり、目的語に助詞「を」を取り、「部屋を掃除する」となる。しかし、「掃除をする」と助詞「を」が間に入った時は「掃除」は名詞扱いとなり、「部屋の掃除をする」と助詞は「の」となる。学習者の中には「*部屋の掃除する」と、一語動詞に連体修飾する誤用が見られる。「を」なしでスルと結びついて複合動詞の構成要素となった事態性名詞をも名詞扱いしてしまうからである。これは、機能動詞結合に特有の修飾の誤用である。実際に、学習者の作文の中で見られたのは、次のようなものである。

<1-1> *おじいさんは長生きで、幸福な生活していきますよ。

<1-2> * 日本語会話の練習しながら、話の技巧も習います。

(2 例とも「華東法政大学作文コーパス」による)

さらに、事態性名詞に結びつく機能動詞はさまざまで、似たようなものが多いが、その文中での使用には制約がある。例えば、事態性名詞「注意」の場合、「注意する」と「注意を向ける」とは、近似しており、言い換えが可能な場合もあるが、学習者の作文からの<1-3>例のように、言い換えができないものもある。

<1-3>* 東洋は・・・(中略)・・・子供の教育はもっと科学的な応用力を養うことを注意する。¹ (「華東法政大学作文コーパス」)

筆者の意図を解すると、「東洋では、・・・子供の教育について、以前よりもっと科学的な応用力を養うことに注意を向けるようになった。」ということになる。

このように、単なるコロケーションに止まらない習得困難さが機能動詞結合にはある。しかし、日本語の文中で、読む、聞くなど、受動的に接する場合は、意味の把握は容易なので、学習者は問題の所在に気づかない。学習者のみならず、教師も名詞や動詞を単語として個々に学ぶことは指導しても、名詞と動詞をペアで学習させる、また、「注意する」と「注意を向ける」のように、事態性名詞に組み合わさる動詞によって、意味や用法に違いが生ずることに気づかせるなどの指導をすることはほとんどない。このような背景からか、日本語教育の研究分野では、近年、語と語の共起を対象とするコロケーション研究が取り上げられるようにはなったが、機能動詞結合の研究はほとんど行われていない。

機能動詞結合の産出においても、作文などでは、学習者は既に習った、あるいは辞書で確認した等、自信のある機能動詞結合しか用いないので、誤用はそれほど見られない。しかし、会話やスピーチなど、正確さよりも話者の意図伝達が優先される場面では、しばしば事態性名詞に誤った動詞が結びつけられて用いられている。

日本語の場合、機能動詞結合で用いられる事態性名詞は、二字漢語でサ変動詞の語幹となるものが多い。相澤(1993)は、「複合サ変動詞を全く使わないような言語生活が考えられない」(p.284)として、国立国語研究所の『日本語教育のための基本語彙調査』の「語彙表」の中に含まれている複合サ変動詞をすべて洗い出し、そのリストを作成している。「複合サ変動詞」とは、「二字漢語や外来語に『する』を付加した (p.284) 動詞のことである。その結果、「語彙表」の「基本語六千」の中から、1013が「複合サ変動詞」として得られたという。即ち、日本語教育に必要な「基本語六千」の内、1/6を「複合サ変動詞」が占めていることになる。その1/6を占める「複合サ変動詞」の中で「概略、語種では漢語が全体の9割弱を占め (p.293)」ている。

ここから、日本語学習において、漢語事態性名詞の習得がいかに重要であるかがわかる。また、相澤の調査で認定された「複合サ変動詞」は、「意味分野では『人間活動』と『抽象的關係』とを合わせて、全体の9割弱を占めている (p.293)。「人間活動」に属するものとしては「掃除する」「命令する」などがあり、「抽象的關係」に属するものとしては「変化する」「移動する」などがある。これらを用いないで日本語を運用することは不可能に近い。

特に中・上級学習者になり、抽象的な表現や、専門的な内容を日本語で表すためには、漢語サ変動詞は必須である。にもかかわらず、作文などの産出においては、学習者は自信のない機能動詞結合の使用を避けるのに加え、誤った使用でも意味が通じることが多いため、機能動詞結合は学習の対象として看過されてしまっている。機能動詞結合を用いなく

¹ この例文の分析については、6.3.3.3、13.2.2を参照。また、本稿では機能動詞結合と関わりのない助詞等の誤りは誤用としなかった。

れば、学習者が伝達しようとする意図を日本語で十分に伝えることは困難で、大きな制約が生じる。

このように、流暢で豊かな日本語運用のために機能動詞結合が不可欠であるにも関わらず、これまでの日本語教育ではほとんど研究がおこなわれていない。機能動詞結合は、他のコロケーション同様、見る、聞くなど受容的に接する場合には、その意味の透明性から理解はたやすいので、問題は、話す、書くなどの産出である。産出の場合、その機能動詞結合をどのような文脈で用いるのかが重要になる。機能動詞結合を実際に文脈の中で用いようとするなら、機能動詞結合が意味的、文法的にその文脈に適合しているかを考慮しなければならない。

これまで文脈を考慮した機能動詞結合の分析を行っているのは、鈴木(2009)、岡嶋(2012)、黄(2017)のみである。さらに、機能動詞結合の文法的側面を見た習得研究はこれまで1つもない²。機能動詞結合は、「名詞+動詞」のコロケーションの1種ではあるが、次章の理論的背景で見ていくように一般的な「名詞+動詞」コロケーションとは異なる特殊な性質を持っている。学習者が機能動詞結合を習得する際に、その特殊性がどのような影響を及ぼすかを明らかにしなければならない。

本来、様々な母語を持つ学習者を調査対象とし、日本語の機能動詞結合習得における普遍的問題を探求すべきであるが、研究の端緒として、今回はCLJを対象とする。なぜなら、既に述べたように機能動詞結合を構成する事態性名詞の多くは漢語で、中国語と共通するものが多く、CLJは機能動詞結合の習得において、母語からの正の転移を招きやすく有利である半面、負の転移も受けやすいと思われるからである。名詞の場合は、中国語の漢語をそのまま日本語の文中に取り入れてしまうことも可能だが、動詞の場合は活用があるので直接埋め込むことはできない。そこで、機能動詞を用いて事態性名詞を動詞化するのだが、結合すべき機能動詞の選択はたやすすくない。

また、CLJを対象とするもう1つの理由として、中国語を母語とする学習者と日本語習得との関連性を明らかにしたいということがある。先述のように、日本語と中国語とでは、共通する語が多く、CLJにとって、他の言語を母語とする学習者よりも、日本語の習得に有利だと思われる。実際、日本語教育の現場では、他の学習者に比べ、CLJは日本語習得が著しく速いと感じられる。それは、果たして、語彙、表記の共通性だけによるものだろうか。日本語と中国語とでは、SOV、SVOと語順が異なるが、それでもなお、単なる語彙の共通性以上にCLJに有利な条件があるのではないだろうか。それを解明する糸口が機能動詞結合にあると思われる。なぜなら、機能動詞結合は名詞と動詞の組み合わせであるので、単なる語と語の共起性以上の統語的構造が問題になるからである。

機能動詞結合についての先行研究³では、L1⁴の影響が重要視されている(Wang, 2001;

² 事態性名詞への修飾、格助詞「を」の挿入などの機能動詞結合に特有な文法についての研究。一般的な助詞、活用などの文法は除く。

³ 機能動詞は軽動詞、脱語彙化動詞、支援動詞など様々に呼ばれている。

⁴ 母語

Nesselhauf, 2004; Wang & Shaw, 2008; 李, 2012; 黄, 2017)。CLJによる機能動詞結合の習得実態の分析を通して、中国語と日本語習得との関連性も見ていきたい。

なお、漢語が日本語の習得に及ぼす影響を考える時、朝鮮語は不可欠であるが、筆者の語学力が及ばなかったため、本稿ではCLJのみを対象とする。

本研究は、機能動詞結合という視点が日本語学習に取り入れられ、学習者に気づきを促し、また教師の指導に役立てられることを目指す。

1.2 研究課題

本研究の第1目的は、これまで述べてきたように機能動詞結合の習得を促す方策を探ることである。秋元(1993)によると、「名詞+動詞」のコロケーションはコロケーションの8割を占め、最も多くを占めているという(p.33)。機能動詞結合は、「名詞+動詞」コロケーションの一種であるが、先行研究によると、「名詞+動詞」コロケーションの産出は上級レベルになっても困難である(Howarth, 1998; Altenberg & Granger, 2001; Nesselhauf, 2004; Wang & Shaw, 2008; 鈴木, 2009; Miyakoshi, 2009; Laufer & Waldtman, 2011; Satake, 2015)。

日本語を第二言語として学ぶ際には、前節の研究動機で述べたようにサ変動詞が存在するので、機能動詞結合の習得は不可欠である。にも関わらず、現在、日本語教育での機能動詞結合の習得研究は未開拓の分野である。したがって、まずは学習者が機能動詞結合をどのように習得しているかの実態を把握する必要がある。本研究の調査対象はCLJであるので、CLJの習得実態を把握する。その中で、どのようなことが問題となっているのかを明らかにし、習得を促す方策を探りたい。

そこで、本研究全体にわたって、次のことを課題とする。なお、本研究では、機能動詞結合の理解知識ではなく、産出的知識のみを対象とする。

[研究課題]

- I 中国語を母語とする学習者の場合、日本語能力が上がると共に機能動詞結合の習得も進むのか
- II 機能動詞結合の特殊性は、中国語を母語とする学習者が日本語を学ぶ際に、どのような影響を及ぼしているのか

機能動詞結合の習得実態を把握する調査では、学習者の作文分析と産出実験を行う。作文だけでは、学習者の使用回避、言い換えを見られず、また実験だけでは調査する側が想定した問題側面にのみ焦点が当たり、それ以外の側面を見ることができないからである。

1.3 本研究の特色

本研究の特色は第1に、機能動詞結合のすべてを調査対象としていることである。日本語教育研究で機能動詞結合を扱ったものは数少なく、先述のように、鈴木(2009, 2014)、

庵 (2010)、李 (2012)、岡嶋 (2012)、黄 (2017) だけである。しかし、黄、岡嶋以外はいずれもスル動詞のみで、また、黄も 30 の機能動詞結合を調査対象としただけで、機能動詞結合の習得を総合的・体系的に調査研究したものではない。岡嶋の調査対象は「影響する」と「影響を与える」だけである。

第 2 に、本研究では、機能動詞結合における名詞と動詞の語彙的結びつきや意味的側面だけでなく、統語的なふるまいをも含めて習得に与える影響を調査分析したことがあげられる。統語的ふるまいというのは、前述したように事態性名詞が助詞「を」なしで直接スル動詞と結びついて複合動詞となった場合 (例；「勉強する」) と「を」が間に入った場合 (例；「勉強をする」) とで、目的語を結びつける助詞が異なること (「英語の勉強をする」→「英語を勉強する」)、及び「*バドミントン_を練習する」のように機能動詞結合が取る項に適、不適が生ずる問題などである。

第 3 の特色として、本研究では、中国語母語話者による機能動詞結合の習得状況と比較対照するために、漢字を母語に用いない日本語学習者 (以後、「非漢字学習者」) 及び日本語母語話者が作文で使用した機能動詞結合も調査分析した。それによって、中国語母語話者のみならず、非漢字学習者及び日本語母語話者それぞれに特有の、また、両者に共通の特徴も明らかにすることができた。

第 4 の特色は、日本語作文での機能動詞結合とその母語 (中国語) 対訳とを照応し、比較分析したことである。本研究で用いた国立国語研究所の対訳作文データベースには、さまざまな言語を母語とする日本語学習者の作文が収録されているが、それにはその作成者自身による母語での対訳が付いている。それを利用することによって、学習者が日本語作文の中で用いた機能動詞結合に対応する母語訳を照応することが可能になり、作文作成者の表現意図や母語の影響を分析し、根拠づけることができた。

第 5 に、作文分析のみならず、実験も行い、両者の違いを対照して分析した。作文では、学習者は自信の持てない表現を回避ないし言い換えをする可能性があり、習得の実際を見るのが難しい面がある。そこで実験を行い、機能動詞結合を強制的に産出させることによって、作文では見られなかった側面を調査した。

第 6 に、個々の機能動詞結合が持つ属性が、どのように学習者の習得に影響を与えるか調査したことがあげられる。学習者に機能動詞結合を産出してもらった実験では、その結果を頻度、学習者の母語との関連、機能動詞結合が含まれる文の項構造、事態性名詞と結びつく機能動詞の多寡と 4 つの側面から分析した。

7 番目として、これまでの機能動詞結合の先行研究では、学習者の誤用のみを対象にしたものが多かったが、誤用のみではなく、何が習得を促すのかというプラス面も見たことが挙げられる。また、誤用分析においても、従来は L1 転移のみに焦点が当たっていたが、誤用は L1 転移のみではなく多様な要素によって引き起こされるのだという視点に立ち、分析を行った。さらに、誤用は習得においてマイナスであるとするのではなく、学習者が習熟していく過程で必要なプロセスであるという中間言語の視点に立ち、分析を進めた。

1.4 本稿の構成

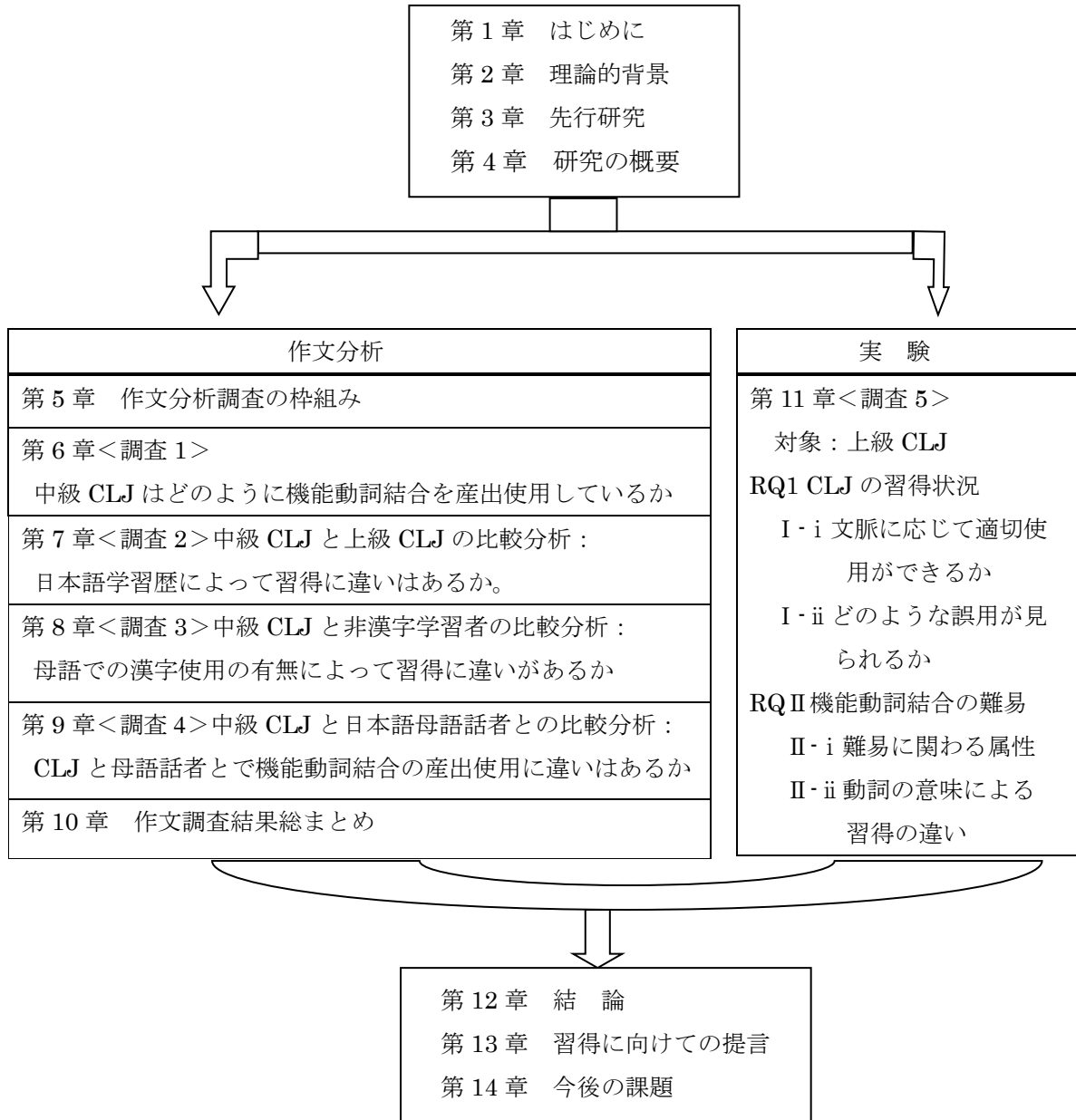
本稿の構成は次の通りである（表 1.1）。まず、第 1 章「はじめに」で本研究の動機、研究課題、特色について述べ、第 2 章では、理論的背景として、統語論的、国語学的な立場での先行研究から機能動詞結合の諸特徴を把握する。第 3 章では、機能動詞結合に関わる第二言語習得の先行研究を概観し、それぞれの到達点を明らかにし、整理する。それによって、機能動詞結合についての理論的全体像をつかみ、本研究の調査分析の基盤とする。第 4 章で本研究の概要を述べる。

第 5 章では、6～9 章の作文分析調査における枠組みを提示する。学習者の作文分析は、4 つの調査課題に分かれている。第 6 章の調査課題 1 では、中級 CLJ の作文を分析し、どのように機能動詞結合を産出使用しているかを調査する。この調査結果で明らかになったことをデータ解析の土台とし、7 章以降で提示する作文分析及び実験を行う。第 7 章、調査課題 2 では、日本語能力が向上するとともに機能動詞結合の習得も促進されているかを調査する。そのために、上級 CLJ の作文を分析し、6 章の中級 CLJ の結果と比較対照する。第 8 章、調査課題 3 では、母語で漢字を使用しない中級日本語学習者の作文分析を行い、中級 CLJ の分析結果と比較対照し、母語での漢字使用の有無が機能動詞結合の習得に影響を与えるか否かを見る。第 9 章、調査課題 4 では、日本語母語話者の作文を分析し、中級 CLJ の結果と比較対照し、CLJ と母語話者とで機能動詞結合の産出使用に違いがあるかを見る。第 10 章では、6～9 章の作文調査の結果をまとめる。

第 11 章では、調査課題 5 の実験について報告する。実験では、作文では見られなかった習得側面を明らかにするために、上級学習者を対象に、機能動詞結合の産出を強制的に促す空所補充テストを行う。

第 12 章では、以上の調査結果を総合的に考察し、本稿の 2 つの研究課題に対する結論を述べる。第 13 章で、以上の結果に基づいた習得に向けた提言を行い、第 14 章で今後の課題を述べる。

表 1.1 《本論文の構成》



第2章 理論的背景

「はじめに」で述べたように、機能動詞結合構文は、他の構文と異なり特殊な性質を有するため、学習者が習得する際に特有の困難を与えている。本章では、第二言語習得における機能動詞結合に関わる先行研究を見ていく前に、その理論的背景となっている日本語学、統語論、構文理論等の分野での機能動詞結合研究を整理、概観する。その中で、機能動詞結合の特殊な性質とは何であるかを把握する。

機能動詞は、当初ドイツ語の分野で研究されていたが、岩崎（1974）がドイツ語だけでなく、日本語にも機能動詞に相当する動詞が見られると論じたのが、日本語の機能動詞研究の始まりである。岩崎は、ドイツ語の機能動詞には、*bringen, kommen, geben, machen* などがあるが、日本語の機能動詞については「厳密に言えば『・・・(を)する』型の動詞がその唯一のものであろう (p.92)」と、スルについてのみ論じている。それに対し、村木は日本語にもスルだけではなく、「与える」「受ける」「生じる」など多数の機能動詞が存在するとし、それらの機能動詞を類型化して紹介した。村木に始まった日本語における機能動詞研究は、現在、自然言語情報学の分野で発展し、大竹（2005）、藤田・降播・乾・松本（2006）、黒田（2008）、小町・飯田・乾・松本（2010）などがあるが、日本語教育の分野での研究は数少ない。

本章では、はじめに村木（1991）によって提唱された機能動詞結合論を紹介し、次に、村木以外の機能動詞結合に関わる諸論文として影山（1993）、藤井・上垣（2008a）及び英語での *Support Verbs* についての論文を見ていく。さらに、機能動詞結合をめぐる諸問題についての論議を取り上げる。

2.1 村木（1991）による「機能動詞結合」の提示

本節では、村木（1991）の機能動詞結合論について概観する。

2.1.1 機能動詞の定義と展開パターン

村木（1991）は、機能動詞とは「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞 (p.203)」であるとして、次のような例を挙げている。

例) (さそいを) かける / (連絡を) とる / (考慮に) 入れる / (においが) する
(p.204 に基づく)

そして、「多くの機能動詞は、本来の実質的な意味をうしない、名詞に託された、行為・過程・状態・現象などの何らかの側面を特徴づけているにすぎない。このような機能動詞と名詞の結びつきを、機能動詞結合とよぶ (p.204)」とする。

村木によると、機能動詞結合には2つの展開パターンがあり、ひとつは「動詞の語結合への展開 (p.209)」であり、もうひとつは「名詞が語結合に展開 (p.210)」するものである。

る。前者の「動詞の語結合への展開」は、和語動詞に限られ、「一つの動詞が、動詞を含むシンタグマに広がり、形式上は、動詞をひきのばしたすがたである。これは、 $\langle V \rightarrow N+V \rangle$ と一般化できるタイプである (p.210)」とする (N:名詞、V:動詞)。

例) におう → においがする
まばたく → まばたきをする
さそう → さそいをかける (村木、1991; 209 より)

もうひとつの「名詞の述語形式化」は、「動作性の意味内容をもつ名詞を述語形式化する (p.210)」もので、「 $\langle N \rightarrow N+V \rangle$ と一般化できるタイプ (p.210)」であり「名詞の動詞派生と考えることもできる (p.210)」とする。

例) 期待 → 期待をかける／もつ／いだく
動揺 → 動揺をおこす
決断 → 決断をくだす (p.210 より)

この「名詞の述語形式化には、漢語系や洋語系の名詞におおくみとめられる (p.212)。」それは、日本語の動詞には体系的な語形変化があるため、「一般に他の品詞からの動詞への転成を困難にしているはずである。そのため借用語である漢語や洋語の単語が、形態的な拘束のない名詞の仲間として日本語のなかにとりこまれ、それを動詞化することになる。現代日本語の場合、名詞からの動詞化は、生産力のたかい『-する』にたよっている。

(p.212)」

「しかし、『打撃』『プレッシャー』のように複合語のつくれなない (『打撃する』『プレッシャーする』は不可) タイプの、動作性の意味内容をもった名詞もあり、そういう名詞については、機能動詞を添えた統語的な手段で、『打撃 をあたえる／うける』『プレッシャーを かける／うける』のように表現する (p.213)」。

2.1.2 機能動詞結合の構成要素

機能動詞結合を構成する 2つの要素は名詞と動詞である。「機能動詞とむすびつく名詞は、典型的には行為をあらわす名詞である (p.214)」が、村木はそのほかに以下のような状態名詞や現象名詞も含まれるとする。

動作名詞: 「さそいを かける」の「さそい」などの動詞連用形と、「決定を くだす」の「決定」のようなサ変動詞の語幹。

状態名詞: 例) 「平和を たもつ (平和であり続ける)」「不振に おちいる (なる)」

現象名詞: 自然現象 例) 「稲光が する」「黒光りが する」

感覚表現 例) 「においが する」「音が する」

生理現象 例) 「まばたきを する」「汗を かく」

病理現象 例) 「はきけが する」「やけどを する」

動作名詞に入りにくい名詞:

場面や文脈にささえられて、臨時的に動作名詞のような特徴をもって使われる。

- 例) ・きょうの午後、客があります。
 ・そろそろお茶にしましょう。

(p.214-215 を筆者要約)

機能動詞結合を構成する動詞は機能動詞であるが、「機能動詞であるか実質動詞であるかは、その用法によってきまるものであって、動詞に固有の性質ではない。(p.217)」「同一の動詞であっても、むすびつく名詞の種類によって実質的な意味があったり、希薄になったり (p.220)」し、連続体をなしているとして、村木は、「あつめる」の例を挙げている。

具体名詞 → 動作性を欠く抽象名詞 → 動作名詞／現象名詞
 例) 〈切手をあつめる〉 〈視線をあつめる〉 〈注目をあつめる〉

(p.219 に基づく)

「切手をあつめる」といった具体名詞「切手」と結びついた「あつめる」の用法と、「注目をあつめる」などの機能動詞表現の間には、「視線をあつめる」といった動作性を欠く抽象名詞などと結びついた表現が位置しているとする。

2.1.3 機能動詞結合の特徴

村木 (1985) は、「機能動詞結合は、慣用句と自由な語結合の中間に位置する (p.21)」とし、村木 (1991) では、機能動詞結合の特徴を次のように、結合のつよさ、名詞表現、「～する」との交替、格支配の面から分析している。

(1) 結合のつよさ

機能動詞結合の結びつきは、自由な語結合より強く、慣用句より弱く、「名詞と動詞の間に、他の語句が入りにくい(p.231)」。

<2-1>- a いつ山田にさそいをかける？

-b 山田にさそいをいつかける？ (p.231)

機能動詞結合「さそいをかける」の間に「いつ」が入った<2-1>-bの文は不自然である。

また、<2-2>の例を見ると「機能動詞結合 (b) は、名詞句の語順の交替においても自由な結合(a)と慣用句(c)の中間に位置づけられる。(a)は自然で、(c)は最も不自然である。(b)はその中間である。(p.231-232)」

<2-2> - a 絵を壁にかける。

- b ? 誘いを友達にかける

- c ?? 拍車を不況にかける (p.232)

(2) 名詞表現

「名詞表現とは、文や句の中で、名詞が核になっている表現構造をさす(p.232)」が、「機能動詞は、形式的には、動詞として動詞文を成立させ、統語構造のかなめとしてはたらくが、意味的には添え物としての存在で、中心は名詞にうつされ、その結果、名詞表現の性格をおびる (p.233)」。

〈動詞表現〉

- ・彼は捨て身で抵抗した。
- ・抽象芸術へ移った。
- ・雨が漏る。

〈名詞表現〉

- ・彼は捨て身の抵抗に出た。
- ・(そこには) 抽象芸術への移行があった。
- ・雨漏りがする。

(p.223 より)

(3) 「～する」との交替

「機能動詞結合には、『～する』と交替するものがある〔ママ〕¹。『においが する⇔におう』『さそいを かける⇔さそう』『決定を くだす⇔決定する』といった交替である。この特徴は機能動詞結合が全体で動詞相当であることを傍証するものである。(p.236)」

(4) 格支配

「同一の動詞について、実質動詞としての格支配と機能動詞としての格支配に違いがみられる (p.239)」。

- | | | |
|-----------------------|---------|---------|
| 例) 「太郎が次郎をさそう」の「さそう」 | : 2 項支配 | 次郎・・・対格 |
| 「太郎が次郎にさそいをかける」の「かける」 | : 3 項支配 | 次郎・・・与格 |

(p.238 より)

2.1.4 機能動詞結合の文法的意味

村木は、多くの個別・具体的機能動詞結合を、ヴォイス的、アスペクト的、ムード的意味を持つものの3つに類型学的に分類し提示している。

ヴォイス的な意味を表す機能動詞結合には、「注意を受ける」「信頼をあつめる」などの受動表現、「注意を与える」「攻撃をかける」などの能動表現、「完敗を喫する」といった使役の受動態を表すものがある。アスペクト的な意味を表す機能動詞結合には、「沈黙をまもる」「接触をたもつ」「準備をすすめる」などを挙げている。また、ムード的な意味を表す機能動詞結合としては、「援助を望む」「協力を願う」「調査を命じる」のようなモーダル表現があるとする。(機能動詞結合の事例は pp.240-295 による)

2.2. 「機能動詞結合」に関わるその他の諸論文

2.2.1 影山 (1993)

影山 (1993) は、機能動詞の中のスルについて論じている。村木と同じく、影山も『VN²をする』構文に現れる『する』はほとんど固有の意味を持たない形式動詞であり、この構文の意味はVNによって規定される(p.276)」とし、次の例を挙げている。

- (2-3) 母校のサッカーチームがインドネシアに遠征をした。
- (2-4) 警察は参考人から事情の聴取をした。

(p.276)

¹ 挙げられている例は、「決定する」以外は、「～する」ではないが、村木の原典のまま引用。

² 動名詞。影山 (1993) 『『する』を伴って動詞化する表現 (p.26)』。本研究の事態性名詞に相当する。

〈2-3〉の『インドネシアに』は『する』ではなく『出張』（〔ママ：「遠征」の誤り）の項（Goal）であり、また（略；本稿では〈2-4〉）の『参考人から』および『事情（の）』は『聴取』の項（Source, Theme）である（p.276）」とし、次のように述べている。

格助詞で表わされる名詞句は、それが現れる文の本動詞と文法関係を結ぶのが普通であるのに、（略；本稿では〈2-3〉〈2-4〉）では構文上は『する』の目的語として表出しているVNが文中の項の文法関係を規定している。（p.276）

影山（1993）ではさらに、動詞ではなく事態性名詞がどのようにして文中の項を規定するのかを論じているが、それについては2.3.1.2で詳しく述べる。

2.2.2 藤井・上垣 (2008b)

村木（1991）は、機能動詞結合をヴォイス、アスペクトなどの文法的機能から類型化した。が、事態性名詞と動詞の結合面だけを対象とし、その結合が文脈の中で意味的、統語的にどのように用いられるのかについては論じていない。

藤井・上垣（2008b）は、次項で述べる英語における **Support Verbs** に該当する日本語の動詞を「支援動詞」と用語化し、典型的な支援動詞構文（機能動詞結合構文）はイデオム性が高く、以下の条件を満たすものであるとして、機能動詞結合が文中で意味的、統語的にどのように構文を形づくるかの視点を提示した。

- i 事態性名詞が本動詞の直接目的語（日本語ではヲ格目的語）となっており、
 - ii その事態性名詞が項構造をもち、
 - iii その名詞と本動詞が項を共有する、
 - iv （動詞ではなく）参与する事態性名詞が第一義的な意味フレーム想起要素となる構文。
- (p.432)

学習者の作文分析では、「*ヘアスタイルをする」「*笑顔をする」等と、本動詞「する」のヲ格目的語に事態性を持たない名詞が用いられていた。しかし、条件 i から、本動詞の直接目的語は、事態性名詞でなければならないことが示される。

一般的な構文では、主要な役割を果たすのは項構造を持つ動詞であるが、支援動詞構文の場合、条件 ii から、項構造を持つのは動詞ではなく事態性名詞であり、事態性名詞が文の統語的振るまいを規定する。作文での誤用に「*先輩は私たちに練習を行いました」というのがあった。この文で項構造を持つのは事態性名詞「練習」であるが、「練習」は動作主と対象を項に持つが、着点二格は持たない（例；「私はドリブルを練習しました」）。

条件 iii の「名詞と本動詞が項を共有する」ことによってどのように文を実現するかについては、2.3.1.4 を参照されたい。

条件ivから、意味的にも第一義であるのは、動詞ではなく名詞であることが示される。「*えんじょ（援助）をもらう」「*せんそう（戦争）をうける」などの学習者の作文での誤用を見ると、結びつける動詞が間違っているにもかかわらず事態性名詞「えんじょ」「せんそう」の意味によって伝達意図を解することは容易である。

なお、上述の4つの条件は典型的な支援動詞構文についてのものであるが、軽動詞（「する」）が参与する構文は、「動詞の構文への意味的寄与度が最少であり、軽微である（p.434）」のものであるとされる。

また、村木では、さまざまな機能動詞結合の事例があげられているが、名詞と動詞の結びつき方における多様性にはほとんど触れず、一律に扱っている³。しかし、機能動詞結合における名詞と動詞の結びつきには、イディオム性の高いものから、組み合わせに幅があり合成性が見られるものまでさまざまである。藤井・上垣は、支援動詞構文は、典型的なもの、軽動詞が参与するもの、動詞の意味寄与度の強いものなど、参与する支援動詞の特徴により多様であると述べている。

動詞の構文への意味寄与度のより強い支援動詞構文として、藤井・上垣は 'lodge a complaint' を挙げている。'make a complaint' という軽動詞構文の動詞は、「構文への意味寄与度が極めて軽微なのに対して、・・・（中略）・・・'lodge' という動詞自体の意味が構文の意味に寄与しており、単に項を共有し、'支持'する以上の意味役割を果たしている。（p.434）」

2.2.3 英語の Support Verbs

これまで、日本語の機能動詞結合がどのようなものであるかを見てきたが、英語ではどうか。英語では、日本語の機能動詞に相当する動詞を **Support Verbs** と呼んでいる。Atkins, Rundell & Sato (2003) は、**Support Verbs** を次のように定義づけている。

Support Verbs は、(略)ターゲットとする（事態または状態）名詞を動詞節のような述語に変え、あるフレーム要素をその主語とさせる動詞で、程度差はあるが意味的に無色である。
(p.354 ; 筆者翻訳)

Atkins, et al.はその例として、**gaze** を事態性名詞にとる **verb+noun** の様々な **Support Verbs** を挙げている。

例) 〈名詞 gaze〉 direct, drop, fix, give, hold, lock, lower, pass, run, sweep, tear,
turn (p.355)

Atkins, Fillmore & Johnson (2003) は、「**Support Verbs** が生じるのは、主要な意味フレームが、動詞ではなく名詞または会話の他の部分によって導かれる文の中である。その

³ 村木 (1991) では、機能動詞結合と自由な結合・慣用句との「名詞+動詞」の結びつきの度合いについて論じているが、機能動詞結合内部のそれぞれの結びつきの度合いについては論じていない。

主な機能は主要フレームとなる語のフレーム要素を表現するための文法構造を提供することである。(p.270; 筆者翻訳)」と述べ、次の例を挙げている。

〈2-5〉 Someone was having a heated **argument** with an official.

「someone は have の文法的主語であるが、論理的には argument の主語である。(中略) have は名詞 argument の意味を独自にはあまり述べていない。(p.270; 筆者翻訳)」

2.3 「機能動詞結合」に関わる諸問題

日本語学において、機能動詞結合の問題を提起したことは、村木の大きな功績である。しかし、既に述べたように、村木(1991)は動作名詞と形式動詞による語結合という語レベルで主に論じており、事態性名詞への修飾、ヴォイスの転換、機能動詞結合から対応する一語動詞への転換の際に生ずる助詞の問題など、機能動詞結合の文脈での用い方については、論じていない。また、村木は多くの機能動詞は意味的に「空疎」であるとしているが、本当に「空疎」なのだろうか、そうでないのならそれぞれの機能動詞によって、「空疎」の度合いはどのように異なるのだろうかという問題が残る。事態性名詞が名詞でありながら動詞のように項を有するのなら、修飾は連体なのだろうか、連用なのだろうか。さらに、「名詞+動詞」の組み合わせが機能動詞結合であるかどうかは、どのようにして判別するのだろうか。

本節では、機能動詞結合を巡る問題として、機能動詞結合の項表示、機能動詞の「空疎性」、機能動詞結合が持つ独自の役割、助詞、機能動詞結合への修飾、ヴォイス、及び機能動詞結合の判別の7つを取り上げ、これまでの先行研究の成果を概観する。

2.3.1 機能動詞結合の項表示

機能動詞結合では、事態性名詞が項構造を持ち主要な意味を担うことに先行研究で異説はないが、どのようにして事態性名詞がその項を実現するかについて、多くの議論がある。

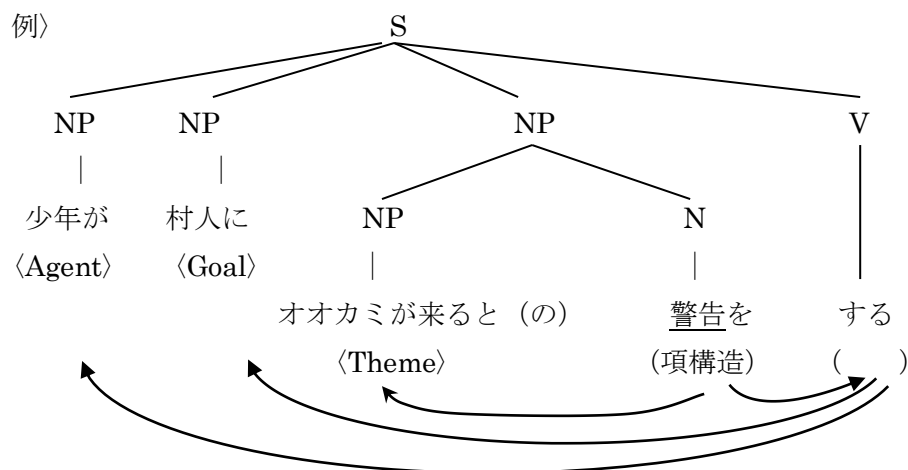
2.3.1.1 Grimshaw & Mester (1988)

一般的には、本動詞が文中の名詞句と文法関係を結ぶのが普通であるのに、なぜ軽動詞構文では、事態性名詞が文法関係を規定するのかについて、Grimshaw & Mester (1988)は、項転移論をとる。

「スルは、語としては不完全で、軽い (p.205、筆者翻訳)」。スルの複合体は、「項転移」を行い、名詞句はその項を、軽動詞スルの項構造に転移する。「その結果、スルと目的語名詞句の両方が、それぞれの格表示領域を保持したまま、格表示者として活性化する。名詞は、項をスルに貸して、スルを格表示者に変え、自らは不毛な格表示者に留まる。(p.205、筆者翻訳)」

影山(1993)が、G & M (p.213) の例文とツリーに基づいて表した下図を参照されたい。

G & Mによると、名詞「警告」の項構造は、Agent と Goal と Theme の3つの項リストをなしているが、「転移によって、『警告』と関連したリストからスルの項構造に項が挿入され、『警告』の項構造には Theme だけが残される。(p.212; 筆者翻訳)」



影山 (1993: 277)

2.3.1.2 影山 (1993)

影山は、G & Mの項転移論に異を唱え、抽象的編入論を提示した。

「日本語では一般に名詞句内部にある表現はその主要部である名詞を除いて『の』で標示される。(p.307)」しかしながら、「VNの内項は全てVNの内部に生成される」にも関わらず、「VNのある種の項は『の』を伴うことが許されず、見かけはVN句の外に位置するように思える (p.314)」として、影山は次の例を挙げている。

<2-6> デジタルからアナログへ信号の変換をする。

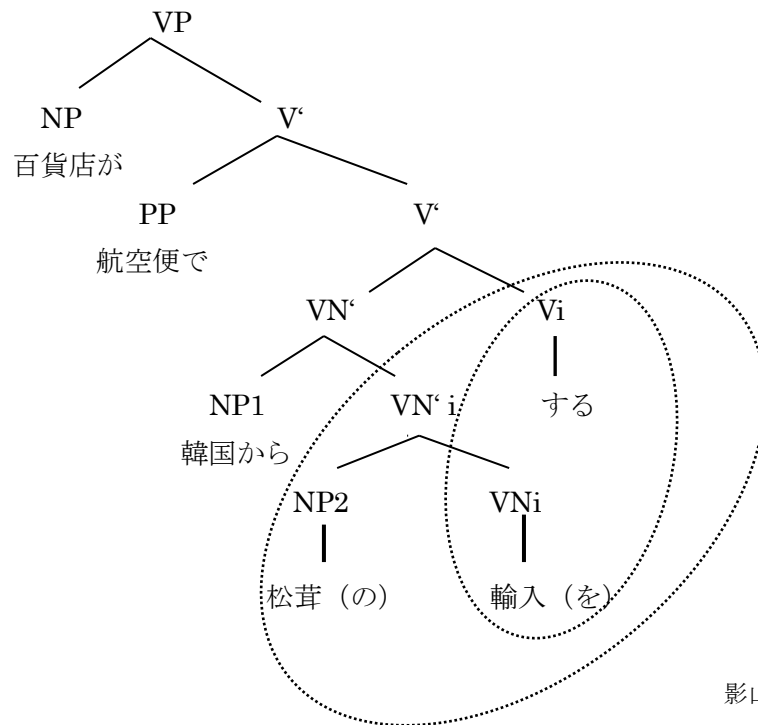
<2-7> アメリカへ自動車の輸出をする。

<2-8> 囚人が牢獄から脱走をした。

(p.309)

<2-6> ~ <2-8> の「下線部は、外見上は『の』を伴わないからVN句の外に表出されているように思える。しかしながら、意味解釈から判断すると、各々のVNが直接に要求する項 (P.309)」である。

この問題を解決するものとして、影山は、抽象的編入という分析を提案している。抽象的な編入は、形態的な編入と異なり、実際に転移があるわけではなく、代わりに同一指標がふられる。抽象的編入による解決方法として、影山は以下の2つの可能性があるとする。



影山 (1993: 315)

(1) 外側の点線枠の可能性

「一般に一次複合語においては直接項だけが複合され、『自動車輸出』に対して『*米国自動車輸出』という複合語は不適格になるが (略)、それと同じように (略: (筆者付加) 上のツリー) の、VN'においては主要部『輸入』と複雑述語⁴を構成できるのは直接項の『松茸』だけであり、起点を表す『韓国から』は、VN 句から外へはじき出されることになる。この状況を示したのが (略: (筆者付加) 上のツリー) の外側の点線枠である。(P.316)」

「韓国から」は抽象的編入 (外側点線枠) の枠外になり、「VN ではなく動詞『する』によって統率されることになり、従って『の』を伴わない形で表面化する (P.316)。」

(2) 内側の点線枠の可能性

「『輸入を』だけが抽象的に編入され、その結果として、『韓国から』と『松茸』双方が VN の投射から抜け出て動詞の投射に入る (P.316)」。

⁴ 2 つないしそれ以上の動詞が連結し、一つの述語として機能するものである。ただし、影山 (1993) では『NP の VN する』構文が統語的には迂言的な句であるが、機能的には全体で 1 つの述語を構成している (p.304) とされる。

2.3.1.3 Matsumoto (1996)

Matsumoto は、項移動理論ではスル構文で説明できない事実があるとして、藤井・上垣 (2008b) と同じく、軽動詞構文は、統語的述語補部 (=主語のない補部) を主要部とする動名詞を伴う繰り上がり/コントロール構文であると論じている。(以下の引用文はすべて、筆者が翻訳)

Matsumoto は、「G&M は『する』とその使役動詞『させる』だけが、日本語の軽動詞であると主張している。しかし、実際は本質的に『する』と同じ現象を示す多くの動詞が存在する(p.119)」として、「始める」と「試みる」を取り上げて論じている。

『始める』と『試みる』は両方とも、軽動詞の極めて重要な性質を見せる (p.119)」と述べ、次の性質を挙げている。

- (1) 「動名詞の項が属格標示なしに現れることを許す (p.119)」

<2-9>- a 彼らは東京へ [物資の輸送を] 始めた。

-b ジョンはそのスパイと [接触]を試みた。 (p.119)

(例文は、原文でローマ字表記してあるものを、筆者が漢字・仮名混じり文に書き改めた。以下同様)

- (2) 『何テスト』で属格なしの句が、『始める』や『試みる』の項ではなく動名詞の項であることを示す (p.119)」

<2-10>- a *彼らは東京へ何を始めましたか。 (p.119)

-b *ジョンはそのスパイと何を試みましたか。(意図的読み) (p.120)

VN をヘッドとする NP を「何」と置き換えると、<2-10>の文は許容されない。

- (3) 『する』と同様に、動名詞だけがその項に動詞的格標示を許す (p.120)」

<2-11>-a 彼らは、東京湾 {からの/から} 出航を始める。

-b 彼らは、東京湾 {からの/*から} 出航式を始める。 (p.120)

『始める』は、出発点『東京湾から』が、VN をヘッドとする NP の外に現れることを認可するが、非 VN (出航式) をヘッドとする NP の場合は認可しない。VN だけが、項に動詞的格標示を与えている。(p.120)」

Matsumoto は、『始める』や『試みる』と同じようにふるまう多くの動詞がある (p.122)」と述べ、「述語補部の主語が、項の一つによってコントロールされるか束縛されることを要求する軽動詞の性質を示す (p.124)」動詞として、以下の動詞を新しく提示している。

新しく定義された軽動詞 (p.124-125)

- ① 非対格 VN (繰り上がり動詞) : 始める、繰り返す、続ける、ありうる、可能だ

- ② 非・非対格 VN (コントロール動詞) :

企てる、忘れる、考える、望む、願う、目指す、計画する、決定する、希望する、できる、命じる、求める、許す、認める、許可する

これらの動詞は全て繰り上がり動詞か、コントロール動詞であるとして「繰り上がり・コントロール軽動詞」と名付けている。Matsumoto は、繰り上がり動詞でもコントロール動詞でもないものは、軽動詞の性質を持つことはできないとする。

2.3.1.4 藤井・上垣 (2008b)

支援動詞構文(本論での機能動詞構文に該当)の大きな特徴として、藤井・上垣(2008b)は、「その事態性名詞が項構造を持ち」「その名詞と本動詞とが項を共有する」(p.432)ことであるとする。その、項共有という特性に基づき、藤井・上垣は、以下で述べる漢語を事態性名詞とする支援動詞構文の項構造分析をおこなった。

《漢語を事態性名詞とする支援動詞構文の項構造分析》

藤井・上垣(2008b)は、漢語を事態性名詞とする支援動詞構文を主語一致型と非主語一致型の2つに分類している。

(以下は、藤井・上垣、2008b ; 435 による)

主語一致型(1-a)は、「動詞の統語上の主語が事態性名詞の意味上の主語と一致し、主語コントロール構造を形成する構文」である。

例)「私の場合、一週間待って再出品をにかけています」

この例では、「事態性名詞の意味上の主語は主動詞の統語上の主語『私』と一致する。」

他方、非主語一致型(1-b)は、「名詞の主語が動詞の主語以外の項(与格等)と一致する構文」である。

例)「一部の利用者による不適切な利用は、他の利用者に大きな迷惑をかける」

上例の『迷惑をかける』では、事態性名詞『迷惑』の意味上の主語は、主動詞の統語上の与格と一致する。「迷惑する」のは、「他の利用者」である。

この非主語一致型(1-b)には「許可をとる」「了承をとる」などの異種が見られる。

例)「本は出版社に了承をとらない限り引き取ってられません。」

「事態性名詞『許可』『了承』の意味上の主語が非主語に一致するのに加え、その事態性名詞の非主語(与格)が主動詞の主語と一致するという交差パターンの項共有を呈している。」

なお、本研究では、この項構造のタイプ分類を、機能動詞結合の産出実験の結果分析に用いた。

2.3.2 機能動詞は空疎な動詞か

神田(2002)

村木は、機能動詞結合は「動作の主たる意味は名詞の方にあつて、動詞の動作的意味はそえもので二次的(村木、1985; 21)」で、機能動詞は本来の「実質的な意味を失い、実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能を果たす動詞(村木、1991; 203)」であり、「動詞が実質的な意味を空疎化させている(村木、1991; 222)」と述べて

いる。しかし、藤井・上垣（2008a）によると、機能動詞は単なる空疎な動詞ではなく、多様な役割を担っている（2.2.2 参照）。

神田（2002）は、機能動詞は実質的な意味を失った動詞という村木の分析に異を唱え、機能動詞結合における動詞は、「そえもの」以上の働きがあるとし、「名詞の動作性では十分に表しえない微細な意味、あるいは（略；（筆者付加）ヴォイス、アスペクト、ムードなどのような）文法的なカテゴリーへの関与を明確に表現するために必然的に用いられたものである（p. 57）」と述べている。

神田は、単純動詞と機能動詞がある場合に、機能動詞結合が用いられる理由として、以下を挙げている。（pp.57-58）

①「機能動詞結合は単純動詞では表しえない『動作の方向・ありか・様相』を表す。」

「『影響を与える／及ぼす／受ける』のような機能動詞結合は、「影響する」と比較すれば『影響』が『だれ・どこに、どのように』及んでいくのかを述べるためであり、また能動・受動態といったヴォイス上の差異をも表す。また、『与える』と『及ぼす』との相違からうかがえるように主体の意図性の程度にも違いがある。」

②「機能動詞結合は単純動詞のみでは表しえない『動作主体の数』を表す。」

「『絶賛を博す』の場合、…（中略）…受身形『絶賛される』と同じ意味ではあるが、『誰』から絶賛されるかという『能動主体』は一人ではない。すなわち『多くの人々から絶賛される』と書き換えられる。」

③「機能動詞結合は相応の形容詞や副詞などの修飾語を用いることなく『動作の行われる様相、程度』などの微細な意味をその動詞の意味特徴によって表現する。」

「『判断を下す』をとりあげれば、『判断する』と比べて『決然たる行為の遂行』という含意がある。」

④「構成動詞によっては、前項にとる名詞が一定の傾きをもつものに限定される場合があり、同じ傾向をもつ新たな語結合を作り出す可能性もある。」

「『絶賛を博す』の場合、構成動詞の前に来る名詞は『好評／人気』のように肯定的評価を持つものに限られている。一方、『輦蹙／反感／恨みを買う』のような機能動詞結合における『買う』は、否定的評価を持つ名詞のみをとる。」

神田は、機能動詞結合がこのような特徴を示すのは、「機能動詞結合においても、それを構成する動詞に、それぞれに固有のもとの意味の残存が見られるためであり、語結合によって動詞の意味が変化するものではないからである（p. 58）」とし、「機能動詞結合における動詞は名詞と同等の重要性を持って（p. 58）」いると結論づけている。

そして、神田は、個々の機能動詞結合の持つ意味特性を、語結合としての他動性の強いものと弱いものに分類することを試みている。

2.3.3 機能動詞結合が持つ独自の役割

村木 (1991)

村木は「機能動詞表現では、内容的には、名詞が主役で、動詞がわき役である。そこに名詞に力点のおかれた名詞表現ができ上がる。(p.233)」として、名詞表現の特徴を4つ挙げている。

第1の特徴として「名詞表現は、動作・作用・現象などをさししめす名詞が連体修飾を自由にうけて、表現内容をくわしくゆたかにするということ (p.233)」を挙げている。

例) 生来の女好きで、患者に対して怪しからぬ振る舞いがあったとか、
(水上滝太郎「大阪の宿」) (p.234)

第2には、「ある種の現象を表現する文では、動詞表現がとりにくく、名詞表現によってしかあらわせないものもある。(p.234)」

例) 南アフリカ沖合いで核実験とみられる大きな爆発があった。 (p.234)

第3は、文体のちがいである。「新聞のニュース記事や評論、法律分野や機械類の使用説明書などの文章によくみられる表現である。(p.234)」

最後に、並列構造を簡潔にいいあらわせることができることを挙げている。

例) 自分という存在が、数限りない人々の羨望と恨みと妬みを浴びながら、
(伊藤整「火の鳥」) (p.235)

「これらを動詞表現でいいあらわすならば、(中略)『人々から羨望されたり、恨まれたり、妬まれたり、・・・』のように、(中略)同じ並列構造でも、いくらか冗長的な表現となるであろう。(p.235)」

佐藤佑 (2011a)

「誘いをかける」は「誘う」、「引っ越しをする」は「引っ越す」、「会議を開催する」は「会議を開く」と言い換えが可能である。このように同じ意味を表す一語動詞があるにも関わらず、なぜ機能動詞による表現が必要なのかということに対し、佐藤 (2011a) は、機能動詞結合の独自の役割について論じている。

機能動詞結合の中では、スルを用いたものが圧倒的に多いが、佐藤はスル構文が積極的に用いられる動機として、次の二通りを上げている。

(1)「動詞述語文との対応関係を持たない VNP¹ を動詞を用いて動詞述語的に用いるという構文上の要請 (p.153)」による。

<2-12> (飛行機の：引用者註) キャンセル待ちの手続きをして (シーズンオフだったし、何しろ時間が早かったから、二枚くらいのチケットをとるのは簡単なことだった)、それから二人は一緒にコーヒーをのんだ。 (神様のボート) (p.153)

<2-13>「スケールの練習も、ちゃんとやってる？」 (いちご同盟) (p.153)

¹ Verbal Noun Phrase 動名詞句

これらは『キャンセル待ちをするために（書類などを）手続きする』『スケールを弾けるようになるために練習する』・・・(中略)・・・といったような迂言的な言い方も可能ではあるが、そうして動詞を用いた表現に持ち込むより、VN句と機能動詞の組み合わせで述べた方が簡潔で理にかなった表現になる。(p.153)

(2) 対応する動詞句があるが、それと VNP とが等価ではないため。

次の<2-14>例の「朝のお祈りをする」と「朝、お祈りする」の場合がそれであり、前者には、後者であらわされた事実だけでなく、新たなニュアンスが加味されているとする。

<2-14>?? 朝礼の鐘が鳴る。 / 続いて校内放送で讃美歌が流れる。週一度のお神堂朝拝
以外は、教室で朝のお祈りをする、まず聖歌を歌い、学園長の話聞き、心を
静めて神に祈りを捧げるのだ。(マリア様がみてる) (p.154)

「朝のお祈り」を対応する動詞句「朝、お祈りする」と置き換えると意味が変わり、許容度が低くなる。それは、『朝のお祈りをする』という動詞句が『朝、お祈りする』という事実を提示するだけにとどまらず、新たなニュアンスが加味されているからに他ならない。『朝のお祈り』は、主人公たちにとって習慣として、毎朝するべきものとして存在している。(p.154)

このように、あらかじめ当該事態を意識したうえで取り組むという性質（「前提性」）が現れるのは、VNP が当該事態の総体を提示するという特性（「総括性」）を持つからだという。

VN では『動作そのもの』だけでなく、『動作の様態（ありよう）』もまた同時にとらえられる (p.155)。「朝のお祈り」は『平穏な学校生活を送るために』『(週 1 回のお神堂朝拝を除き) 教室で』『みんなで手を合わせ、目を閉じて』というように、ただ『祈る』だけでなく、その行為が行われる目的や場面、行われ方といったあらましまでが意識されている。(p.155)

佐藤は、対応する動詞句があるがそれと VNP とが等価ではない例として、次の例も挙げている。

<2-15> こういう時、たみはあまり口を利かない。切れて駄目になった電球を使って、
仙吉の靴下の繕いをしている。(あ・うん) (p.153)

「靴下の繕いをする」は「靴下を繕う」と対応している。「動作主体である『たみ』は、<仙吉の靴下を繕う>行為について、『針を糸で』『土間で』などのあらましを意識した上で実行に移していると思われる（『靴下を繕っている』では、外部から発見したような読みになり、同様の含意は見出されなくなる）。このように『VNP をする』構文においては、事態の総体がいずれも共通了解、あるいは話し手や動作主体自身の了解において、それがどのような行為であるのかまで（程度の差こそあれ）前もって意識されている (p.155)。

このような前提性が現れるのは、上例のように「VNP が少なくとも特定の構文において当該事態の総体を提示するという特性を持つ (p.155)」からである。

佐藤は、村木の枠組みにならい、スル動詞構文に続いて、アスペクト的、ヴォイス的、ムード的な機能動詞構文のそれぞれの例について分析し、「VNP は多く、事態を『すべきこと』として提示し、動作主がそれを前提的に認識するという含意を持ちうる (p.173)」と結論づけている。

佐藤 (2011b) は、動詞述語を用いては言及できない VNP 特有の事態把握、提示があるとして、VNP を用いなければ表しえない独自の意味領域として、以下を挙げている。(p.2)

- ① 「VN の中には、(略) 動詞の文脈からは独立してある事態を表すものがある。(名詞性優位の VN)
例) 「キャンセル待ちの手続き」と同じ内容を、「手続きする」を述語とする文で述べることはできない。(〈2-12〉参照)
- ② 「副詞との対応関係が見出せない動作・作用を質的に規定する」形容詞があり、「VN を用いなければ述べられない事態が存在する」。例) 「水臭い挨拶」
- ③ 「動詞連用形や指示詞など、そもそも純粋な名詞ではない V スルノ・V スルコトでは伴うことができない要素を伴う VN 句も散見され、VNP が独自の意味領域を持つ」。
- ④ VNP は「文脈の助けも借りて事態を簡潔に述べることに特化した表現」であり、「『当該事態において、情報として最も重要な要素一つを形而下に伴う名詞句』として表出する」。
- ⑤ 「VN を後項とした複合名詞 (全力疾走、投球練習) を形成することにより、ある事態を一語的に述べることで、さらに他の連体修飾要素を伴えるようになる」。

佐藤 (2011a) は機能動詞結合とそれに該当する一語動詞との差異だけではなく、類似の機能動詞結合間の相違についても言及している。「受動文・使役文に接近するタイプの機能動詞結合では、『する』との乖離 (p.169)」があり、機能動詞結合では VNP の表す事態を前提的にとらえるという特別な含意が生まれている場合が少なくないとする。

例) 人の注目を集める：

「人に注目される」+あらかじめ(前提的に)「注目されよう」という意気込みを抱いて積極的に行動する (p.169)

2.3.4 機能動詞結合における助詞の問題

2.3.4.1 「VN をする」の助詞「を」の使用条件

「する」を用いた機能動詞結合でも、「掃除をする」「案内をする」などの場合は、事態性名詞とスルの間に助詞「を」を挿入することができるが、「誕生する」「蒸発する」の場合は、「*誕生をする」「*蒸発をする」と「を」を挿入することはできない。どのような場合に助詞「を」の挿入が可能であり、どのような場合は許容されないのかについては、諸説がある。

非対格説

Miyagawa (1989 b)、Tsujiura (1990a、1990b)、小林 (1998)、Kageyama (1999) は、「VN をする」構文で使えない動名詞は非対格であるとし、その理由を共に「Burzio の一般化」(25 頁参照) を用いて説明している。

以下で、影山（1993）（1996）に基づいて、非対格についてまとめる。影山によると、自動詞には、非対格自動詞（unaccusative verbs）と非能格自動詞（unergative verbs）の2種があることが広く認められている（Perlmutter, 1978: Perlmutter & Paul, 1984: Rosen, 1984: Burzio, 1986: Keyser & Roeper, 1984: Levin, 1986: Bresnan & Zaenen, 1990）。

2種の自動詞の違いは、「意味的には、ごく大雑把に言うと、意図的に動作を行う動作主（Agent）を主語に取る自動詞が非能格、意図を持たずに受動的に事象に関わる対象（Theme）を主語に取る自動詞が非対格である（影山、1993: 43）」。

他動詞、非対格自動詞、非能格自動詞の統語構造は、次のようになる。

	<u>外項</u>	<u>内項</u>	例
1) 他動詞	:	(x < y >)	He <u>wrote</u> a letter.
2) 非能格自動詞	:	(x < >)	She <u>talked</u> .
3) 非対格自動詞	:	(< y >)	An accident <u>occurred</u> .

x と y は、動詞の項（主語または目的語）
（影山、1996 ; 19, 21 に基づく）

他動詞は外項（x）と内項（y）を備えているが、自動詞では、非能格動詞は外項だけを持ち、逆に非対格動詞は内項だけを持つとする。非対格動詞では主語に相当するものが実際には内項であり、他動詞の目的語に相当している。

「非対格性の仮説」は主にヨーロッパ言語について提出されたものだが、日本語でも成り立つことが、Miyagawa (1989 a)、Terada (1990)、影山 (1993) などで、検証されているという。

影山 (1993) は「あらゆる VN に『を』が付くわけではない (p.279)」と述べ、自動詞にも「を」がつくものとつかないものがあり、「自然に生じるような事態を表し、主語名詞句はその出来事ないし状態を意図的に操作することができない (p.280)」次の VN のようなものはヲ格表示を拒むとする。

<2-16> 超高温度の原始宇宙のなかでは、いろいろな素粒子が発生（*を）し、消滅（*を）した。

<2-17> 昨日、入院中の友人が死亡／死去（*を）しました。

<2-18> 長男が誕生（*を）した。

<2-19> 水が蒸発（*を）した。 (p.280)

「他方、同じく自動詞であっても、意図的な行為を表わす・・・(中略)・・・場合には「を」が可能である (p.280)。」

食事をする／講演をする／自殺をする／結婚をする／運動をする／仲直りをする (p.280)

影山（1993）によると、「VN のヲ格表示の可能性は、動作が意図的か否かという意味的な要素に対応している（p.281）。」「意図的なコントロールというのは、・・・（中略）・・・外項（external argument）に該当し、外項は典型的には動作主である（p.283）」。「自動詞の内、「意図的行為を表す非能格 VN は VN 自体にヲ格を許すが、他方、意図性のない事象を描写する非対格 VN はその『非対格』の名の通り VN 自体にヲ格を許さない(p.283)」。

影山は非対格 VN がなぜ対格表示できないのかを、「外項を取る動詞のみが目的語に対格を与えることができる（p.283）」という「Burzio の一般化」（Burzio 1986:178）によって説明する。

VN が外項を持つのは対格か非能格であり、その場合だけスルは VN から項構造を受け継ぐので、主動詞スルは格表示を実行できるのである。要するに、対格 VN と非能格 VN は対格表示されるが、非対格 VN は許されない。

対格 VN : 研究をする

非能格 VN : 運動をする

非対格 VN : *死去をする

(Kageyama, 1999 ; 320 筆者翻訳)

アスペクト説

すべての非対格 VN が [VN ヲ-スル] 構文を容認しないわけではなく、またすべての他動詞 VN が [VN ヲ-スル] 構文を容認するわけではないとして、非対格説を否定している。

(以下の引用原文は筆者翻訳、また、原文の例文は、ローマ字表記されたものを筆者が漢字仮名混じり文に書き改めた。)

Uchida & Nakayama (1993) は、動詞を次の 4 つに分類した。

他動詞	A	勉強する / 勉強をする	B	中止する / *中止をする
		研究する / 研究をする		誤解する / *誤解をする
		掃除する / 掃除をする		破壊する / *破壊をする
		修理する / 修理をする		占拠する / *占拠をする
		運転する / 運転をする		逮捕する / *逮捕をする
				(p.633)

自動詞	A	発言する / 発言をする	B	安心する / *安心をする
		交渉する / 交渉をする		完成する / *完成をする
		旅行する / 旅行をする		帰国する / *帰国をする
		散歩する / 散歩をする		到着する / *到着をする
				(p.637)

他動詞でも、自動詞でも、A群のVNは[VNヲ-スル]構文を取れるが、B群のVNでは、[VNヲ-スル]構文が成立しない。AとBのVNの違いを見ると、他動詞、自動詞に関わらず「A群の名詞は進行表現をとる動作や動作性を表すが、B群は表すことができない (p.634)」として、以下のテストを行っている。

他動詞でも自動詞でも「A群のスル複合語に進行形『～テイル』を接続すると、すべて進行の読みを表す (p.634)」

他動詞 A 勉強している／掃除している／運転している

自動詞 A 発言している／旅行している／散歩している

しかし、「スル複合語に『～テイル』を接続すると、B群の名詞は、進行の読みを生じない。むしろ、その文は完了または状態を表していると解される。(p.634)」

他動詞 B 誤解している／破壊している／逮捕している

自動詞 B 安心している／完成している／到着している

また、時制的、アスペクト的修飾でも、他動詞であるか、自動詞であるかに関わりなく、A群とB群とでは、違いを見せる。

A群のVNを「一時間の間」で修飾すると動作の継続の意味になり、「一時間で」という語で修飾すると動作の完了を表し、両方とも修飾が容認されるとする。

他動詞 A <2-20>-a メアリーは一時間の間庭を掃除していた。

-b メアリーは一時間で庭を掃除した。 (p.635)

自動詞 A <2-21>-a ビルはそれについて一時間の間交渉している

-b ビルはそれについて一時間で交渉した。 (p.638)

しかし、B群の場合は、継続を表す「一時間の間」という修飾は、他動詞、自動詞に関わらず容認されないとする。

他動詞 B <2-22>-a *軍隊が一時間の間橋を破壊していた。 (p.635)

-b 軍隊が一時間で橋を破壊した。 (p.636)

自動詞 B <2-23>-a *ひかり号は京都に一時間の間到着している。

-b ひかり号は京都に一時間で到着する。 (p.638)

以上から、Uchida & Nakayama は、[VNヲ-スル]構文が可能かどうかは、「VNのアスペクト的性質によるものであり、直接目的語のNPに対格を振り当てる時、動詞スルは一般的な重い動詞である (p.664)」と結論付けている。

非対格&アスペクト両要因説

Miyamoto (1999) は、自動詞VNを含む「VNをする」構文が可能であるためには、非対格性だけでなくその自動詞構文のアスペクト性も関わっている、「即ち、複文的な『VNをする』構文の対格NPのヘッドであるためには、その自動詞は非能格であり、かつ進行アスペクトでなければならない。もし、その自動詞がこれらの両方の特性を欠くならば、『VNをする』構文の対格NPのヘッドとなることはできない。もし、これらの特性の一

つを欠いた場合は、『VN をする』構文を形成するかどうかは境界的である。(p.192; 筆者翻訳)」と述べている。

Miyamoto は、自動詞 VN のアスペクト性を Vendler (1967) に基づき動作、状態、達成、成就に 4 分類し、このアスペクト制約と非対格性制約によって、自動詞 VN を含む「VN をする」構文の文法性を 3 段階に分けている。

(例文は、Miyamoto 1999 : 196 に基づき、ローマ字表記のものを筆者が漢字仮名混じり文に書き換えた)

(I) 文法的

i 非能格 動作 : 子供が体操 (を) した。

(II) 非文法的

i 非対格 状態 : お化けが存在 (**を) している。

ii 非対格 達成 : 太郎が死亡 (*を) した。

(III) 境界的

i 非能格 成就 : 兵士たちが基地に帰還 (??を) した。

ii 非対格 動作 : クラゲが浮遊 (??を) した。

iii 非対格 成就 : ゼラチンが凝固 (*?を) した。

2.3.4.2 「を」の有無による格助詞の変化

岩崎 (1974) は、「を」の有無による格助詞の変化について述べている。日本語では、次の例が示すように、格助詞「を」が重複して動詞と結合することはない(「二重ヲ格制約」)。

*敵を攻撃をする

敵を攻撃する / 敵に対して攻撃をする

*借金の返済を催促をする

借金の返済を催促する / 借金返済の催促をする (p.88 より)

『・・する』型の動詞には、例えば『・・を変更する』『・・を説明する』のように格助詞『を』を取る他動詞が多いので、これらを『・・をする』型の動詞で言い換えるためには、『を』の重複を避けるための変形操作が必要となるが、その代表的なものが目的語(『を』)を付加語(『の』)に変える方法である。(p.88)」

時日を変更する → 時日の変更をする

事情を説明する → 事情の説明をする (p.88)

2.3.4.3 「の」による事態性名詞への修飾 (「NP の VN をする」)

この節では、「NP の VN をする」構文で表される、VN へのノ格による NP の接続に関する先行研究を見ていく。

影山 (1993)

影山は、前節でみてきた「二重ヲ格制約」に言及し、「日本語では、二重ヲ格の制約(柴

谷 1978) が存在するため、他動詞の目的語はヲ格を避け、『～の』の形で現れるのが普通である。(p.295)」と、次の例を挙げている。

<2-24>-a ? *質流れ品を販売をする。

-b 質流れ品の販売をする (p.295)

影山は、どのような VN が「NP の VN をする」構文がとれ、どのような VN がとれないのかについて論じ、「直接目的語を取る他動詞的 VN の多くは、『NP の VN をする』構文に納まることことができる。(p.296)」とする。

機械の修理をする／ホテルの予約をする／患者の診察をする／

会場の下見をする／マンガの立ち読みをする (p.296 より)

上例のような「NP の」の部分が VN に対して対象に該当するものは、適格に「NP の VN をする」構文を取ることができる。

他方「NP の VN をする」構文を取ることができないものを見てみると、「目的地『に』、相手『と』、起点『から』などの雑多な意味格は通常、VN 句の内部に残れない。(p.297)」

<2-25>-a *西ドイツへの亡命をする、

-b 西ドイツへ亡命をする

<2-26>-a *会社への電話をする

-b 会社へ電話をする

<2-27>-a *アパートからの夜逃げをする

-b アパートから夜逃げをする

<2-28>-a *友人との仲直りをする

-b 友人と仲直りをする (p.297 に基づく)

また、「対象 (Theme) と同様にヲ格で表示される表現であっても、経路 (Path) 及び起点 (Source) を表わすもの (p.297)」、は「NP の VN をする」構文を取ることができない。

*公園の散歩をする／*大学の卒業をする (p.297 に基づく)

では、「NP の」に対象 (Theme) が該当する場合は、つねに「NP の VN をする」構文を取ることができるかという、そうではないとして、次の例を挙げる。

*ホステスの殺害をする／*財布の紛失をする／*記憶の喪失をする／

*進学希望をする／*車の所有をする／*異性の意識をする

(p.298 に基づく)

影山は「NP の VN をする」構文を取れるかどうかでは、「a. 主語の意図性 b. 完了結果に偏らない継続動作 (p.304)」の 2 点が重要であるとする。(a) の主語の意図性は、「NP の」の部分には VN に対して対象に該当するものがくるのであるから、2.3.4.1 で取り上げた「Burzio の一般化」によって説明されるという。(b) では「NP」に継続動作が要求され、完了アスペクトは排除されるとして、次の例を挙げている。

<2-29>-a 医師が患者の診察をした。

-b *医師がホステスの殺害をした。 (p.300)

なぜ、「NPのVNをする」に継続動作という条件が要求されるのかについて、影山は正確な理由はわからないとしながら、次のような推測を述べている。「NPのVN」は名詞句であるので、名詞に基づく一般的特性を示す。即ち、一般に「名詞は恒常的あるいは総称的時制（つまり、時間的に限定されない継続状態）を表すということであり、恒常的ないし総称的時制は『NPのVN』構文における継続的な動作と軌を一にする。（p.304）」

そして、「NPのVN」の形でVN句の中に残ることができるのは、継続動作の対象を表す表現が最高一つだけであるとする。

<2-30>-a 日本が米国に[自動車の輸出]をする

-b *日本が[米国への自動車の輸出]をする (p.306)

以上をまとめると、「NPのVN」の形で「VN句の中には継続動作の対象を表す表現が最高一つだけ残ることができ、『に、から、と』などの意味格はVN句の中に残れず、助詞『の』を取り去った形でVN句の外に標示される。（p.307）」

佐藤佑 (2011 a)

影山は、どのようなVNが「～の」を取れるのかについて論じているが、一方、佐藤佑 (2011 a) は、いわば逆方向で、「NPのVNをする」構文に現れたNPをどう解釈するかについて論じている。

VNは、「より広い文脈においてVNの意味を具体化している (p.67)」が、さらに「連体修飾を受けたり複合が起こったりすることで、当該事態にまつわる特定の事物を名詞句内に提示することを可能にしている。(p.67)」「VNは多くの場合必要最小限の項を伴 (p.69)」うが、「情報として最も重要な要素がノ格で現れている (p.80)。」

ノ格で表されるVNの項は、一項自動詞に対応するVNの場合、「名詞がノ格であらわされれば、対応する動詞文において、それはガ格相当の(主体の)項であると自動的に解釈される。(p.72)」

例) オレの家出／目の充血／人のざわめき／葉の重なり

(p.71、p.72の例文に基づく)

二項動詞以上に対応するVNの場合の「意味解釈は、個々の文脈において初めて確かなものとなっている。(p.73)」

一方、VNにおける主体・対象の省略と削除が行われるのは、次の場合である。VN句において主体が現れうるか否かは、文脈により、「当該の文脈における主語とVNの主体が異なる場合(略)は、VNは(略)主体の項を伴い(ノ格名詞は主体として解釈され)、主語とVNの主体が同一である場合は(略)VNは対象の項を伴う(ノ格名詞が対象として解釈される)(p.74)」この場合、「主体は省略されているのではなく、義務的に削除されている(p.74)」(同一名詞句削除)。また、「当該の文脈において終始同一の人物(略)について語っている場合は、(略)主体を明示すると冗長な感があるものの、文法的に不適格ということにはならない。(p.74)」

二項動詞以上に対応する VN でも、主体／対象の解釈が一義的なものがある。「対象＝無生物であることが明らか（少なくともそうであることが常識的）な VN (p.77)」では、無生物がノ格で現れていれば概ね対象と解釈される。

例) 車の運転／借金の返済／靴下の繕い (p.76 の例文に基づく)

しかし、「対象＝無生物であることが明らか（少なくともそうであることが常識的）な VN でかつ人名詞がノ格で現れている場合は、(中略) 主体としての解釈以外は難しくなる。(p.77)」

例) 加代子の運転／生徒の演奏 (p.77 の例文に基づく)

佐藤は、「英語の勉強をする」のような機能動詞文に対し、VN と機能動詞がヲ格なしで直接結びついた一語の動詞を用いた「英語を勉強する」などのようなものを動詞述語文としている (p.152)。この機能動詞文と動詞述語文は等しい意味にはならず、「英語の勉強をする」の方が「本格的に、明確な心構えを持って取り組むという意味合いが強まる (p.154)」とする。

影山 (1993) でも、「NP の VN をする」と「NP を VN する」の違いについて論究している。(本稿 6.3.3.2.3 参照)

「NP の VN をする」という構文において「NP の」の部分は、項（目的語）とも修飾語とも解釈できる。ところが、これを「NP を VN する」と言い換えると、修飾語の意味は消滅し、目的語の解釈しか残らない。「NP の」が VN と項関係を結ぶときだけ、VN が「する」に編入されるということである (p.268)

例) 「英語の勉強をする」

解釈 1 「英語そのものを勉強する」・・・目的語の解釈

解釈 2 「英語に関していろいろなことを勉強する」・・・修飾語の解釈

「英語を勉強する」 解釈 1 のみ (p.269 に基づく)

2.3.5 機能動詞結合への連体／連用修飾 奥津 (2007)

奥津は、名詞と動詞の間に助詞「を」が挿入された機能動詞結合には、連体修飾も、連用修飾もとれるとする。

代表的な機能動詞「する」の場合は、分離形と非分離形がある。非分離形の場合「VN する」は一語化して動詞相当になっているから、次の例の a のように動名詞に対して連体は取れず、b のように連用をとる。分離形「VN を する」の場合は、c のように動名詞が目的語になって明らかに名詞であるから、連体がとれる。しかし、「VN を する」も機能動詞文の述語として働くから、d のように連用成分もとることができる。

- a.*太郎は 毎日 はげしい練習する。
- b. 太郎は 毎日 はげしく 練習する。
- c. 太郎は 毎日 はげしい練習を する。
- d. 太郎は 毎日 はげしく 練習を する。 (p.18)

奥津は、次のようなさまざまな副詞的表現が機能動詞結合を修飾する例を提示している。

(1) 様態表現

- イ形容詞 a. . . . 専門用語には 詳しい説明を 加えています。(村木)²
 b. . . . 専門用語には 詳しく 説明を 加えています。

ダ形容詞

- 「～な」 a. 末息子と二人きりの気楽な一週間に ひそかな期待を 抱いていた. . . . (村木)
 b. 末息子と二人きりの気楽な一週間に ひそかに 期待を抱いていた. . . .

- 「～の」 a. 婆さんは 一心不乱のお祈りを あげていた。(村木)
 b. 婆さんは 一心不乱に お祈りを あげていた。

- 「て形」 a. 彼は 捨身の抵抗に出た。(村木)
 b. 彼は 捨身で 抵抗に出た。(村木)

- 擬態語 a. 朝日は. . . 首相の新聞批判にも 堂々たる反論を 加えた。
 b. 朝日は. . . 首相の新聞批判にも 堂々と 反論を加えた。(村木)

- 受身 a. 日本は. . . 各国から高い評価を された。
 b. 日本は. . . 各国から高く 評価をされた。(村木)

- 動詞文 a. 全農家に特集を配って、意識改革を目ざした指導を強める。(村木)
 b. 全農家に特集を配って、意識改革を目ざして 指導を強める。

形式副詞

- 「～まま」 a. 弁慶は 立ったままの大往生を遂げた。
 b. 弁慶は 立ったまま (で) 大往生を遂げた。

- (2) 程度表現 a. 日本の経済は いちじるしい発展を とげた。
 b. 日本の経済は いちじるしく 発展を とげた。

- (3) 頻度表現 a. 中隊は敵から 13回もの攻撃をうけた。
 b. 中隊は敵から 13回も 攻撃をうけた。

- (4) 目的表現 a. . . . 支出増をカバーするための借金を つくる. . . .
 b. . . . 支出増をカバーするために 借金をつくる. . . .

- (5) 理由表現 a. ぼくは 健康なので 病気のための欠席を したことはない。
 b. ぼくは 健康なので 病気のために欠席を したことはない。

² 村木 (1991) を奥津が引用した例

- (6)順接表現 a. いろいろ迷ったあげくの決断を ください。
b. いろいろ迷ったあげく 決断を ください。

(p.14~28 から抜粋)

奥津は、「名詞+を+動詞」であっても、機能動詞結合でなければ、連用修飾はとれないとする。

機能動詞文では・・・(略)。動名詞が連体成分をうけることができるのは、それが名詞として働く場合だから、原則として「を」格を取る分離形に限るわけである。しかしそれは機能動詞文の場合であって、次の例は動名詞が目的語になっており、連体成分は様態表現であるが、しかし、連用とは対応しない。

a. 太郎は はげしい練習を やめた。

b. *太郎は 練習を はげしく やめた。

b が非文であるのは、「やめる」が機能動詞でないからである。 (p.19)

このように機能動詞構文だけが、連体修飾と連用修飾がとれる理由を、奥津は次のようにまとめている。

副詞(句)は「連体の場合は動名詞の名詞的な面にかかり、連用の場合は動名詞の動詞的な面にかかるが、どちらも動名詞のウゴキの意味を修飾し、機能動詞文全体としては同義的である。このことが機能動詞文における連体と連用の対応を可能ならしめているのであろう。」 (p.30)

2.3.6 機能動詞結合とヴォイス 影山(1996)

影山(1996)は、機能動詞結合を構成する事態性名詞の中で大きな割合を占める漢語は、自動詞として機能するか他動詞として機能するかは、形態的に区別がつかないので、判別が困難であると述べている。「サ変動詞は派生接辞が付かないから、ヴォイスの転換を行うにしても、形態的な手掛かりはない。(p.203)」

影山によると、サ変動詞は、自動詞のみのもの、他動詞のみのもの、自他両用のものの3種類に区別される。

a. 自動詞のみ

事故が発生する、地価が下落する、火薬が爆発する、水が蒸発する、
株価が暴落する、ビルが乱立する

b. 他動詞のみ

ビルを爆破する、通行人を殺害する、家を新築する、郊外を緑化する、
顔を整形する、主張を正当化する

c. 自他両用

拡大する、縮小する、変形する、完備する、完成する、正常化する、回転する、開店する、展開する、解散する、実現する、解消する、具体化する

(p.202)

ある語が自動詞であるか、他動詞であるかの判別はどのようにしてなされるのかについて、影山は次のように述べている。

これらの動詞が自動詞として機能するか他動詞として機能するかは、恣意的に決まっているのではなく、意味的な要素によって定められる。その1つは、田窪（1986）や Jacobsen（1992：211-220）で指摘されているように、実世界において原型的、典型的な状況がどのように認識されているかという基準である。たとえば、水が蒸発するという事態は自然に起こるのが典型的であるから、「蒸発する」は自動詞として機能し、他方、「主張を正当化する」という場合は、その行為を行う動作主が必要であるから、「正当化する」はもっぱら他動詞として使われる。 (p.202)

このような基準があるにしても、日本人母語話者ですら判別に迷うものがある。母語で漢字を用いる中国語を母語とする学習者と非漢字学習者では、漢語事態性名詞の自他の判別では、困難さに非常な違いを生じると思われる。(8.4.3 参照)

2.3.7 機能動詞結合の判別 藤井・上垣（2008b）

村木（1991）は、「具体名詞と動作名詞の二側面をあわせ持った単語もある。」(p.216)として、「料理」の例をあげている。

「食卓に 料理を 並べる」の場合は、モノとしての「料理」を意味するが、「料理に 時間を かける」における「料理」は、料理することの意、つまり、行為をあらわしていて、「料理」という語は、具体名詞と動作名詞の双方の性質をそなえている。ある名詞が動作名詞であるかどうかは、このように語結合の中できまってくるものであり、シンタグマに依存していると言ってよい。 (p.216)

では、どのようにして具体名詞と動作名詞とを区別し、また、「名詞+動詞」の組み合わせが、機能動詞結合であるかないかを見分けるのだろうか。

藤井・上垣（2008b）は、本稿の機能動詞に該当する支援動詞について、「支援動詞構文判別テスト」（表 2.1）を提示している。

表 2.1 支援動詞構文の判別テスト (藤井・上垣、2008b ; 434)

テスト (1) 軽動詞「する」が直接(「を」なしで)サ変動詞を構成するか 例：連絡をとる→連絡する する ⇒合格
テスト (2) 目的語名詞を修飾する形容詞が、動詞句を修飾する副詞に言い換え可能か 例：緊急の連絡をとる→ 緊急に連絡をとる 言い換え可能 ⇒合格 頻繁な>頻繁に； 緊急の>緊急に； 突然の>突然に； 大きな>大きい； 長期の>長期に
テスト (3) 目的語名詞句を「何を」で問う疑問文が自然か 例： Q : # 何をとったの？ A : 連絡をとったの 疑問文が自然でない ⇒合格
(1) & (2) & (3) すべて合格 ⇒ 第一グループの支援動詞構文 (さらに、1a、1b に細分類)
(1) は不可；(2) & (3) 合格 ⇒ 第二グループの支援動詞構文
それ以外 ⇒ その他 (非支援動詞構文)

この藤井・上垣の判別テストは、2.2.2 で紹介した次の支援動詞構文の定義に基づいている。

- (i) 事態性名詞が本動詞の直接目的語(日本語ではヲ格目的語)となっており、
- (ii) その事態性名詞が項構造をもち、
- (iii) その名詞と動詞とが項を共有する、
- (iv) (動詞ではなく) 参与する事態性名詞が第一義的な意味フレーム想起要素となる構文。(p.432)

藤井・上垣によるこの定義と判別テストとの関係は以下のようになる。

テスト (1) は、定義 (ii) 「名詞が項構造をもつ」ことを最も明確な手段で確かめるテストである。テスト (2) は、動詞の意味的寄与度を計り定義 (iv) 「名詞が意味フレームを想起する」かをみるテストである。テスト (3) は、統語的固定制をみるテストである。(p.434)

藤井・上垣は、この判別テストの結果によって支援動詞構文を 2 グループに分けている。第一グループは、「連絡をとる」が「連絡する」となるように、「を」なしで直接事態性名詞と結びつけてサ変動詞とすることができるものである。第二のグループは、「打撃を与え

る」を「*打撃する」、「脅威を与える」を「*脅威する」とできないように、事態性名詞がサ変動詞を構成することができない支援動詞構文である。

さらに、第一グループを 1a、1b に細分類している。1a は「動詞の統語上の主語が事態性名詞の意味上の主語と一致」する構文であり、1b は「名詞の主語が動詞の主語以外の項（与格等）と一致する構文」である（p.434）。（2.3.1.4 参照）

なお、本研究の実験（第 11 章）では、このタイプ分けを用いて、分析を行った。

第3章 第二言語習得教育における先行研究

この章では、第二言語教育における機能動詞結合に関する先行研究を、日本語教育におけるものと英語教育におけるものと、2つに分けてみていく。機能動詞結合の産出は上級レベルになっても困難であるとされる (Miyakoshi ; 2009、Altenberg & Granger ; 2001、Nesselhauf ; 2004)。しかし、その習得研究の歴史は浅く、近年になっていくつも見られるようになったばかりで数少ない。

3.1 日本語教育

日本語教育で機能動詞結合を扱った先行研究は、誤用要因を探ったものと日本語能力による習得の違いを見たものが主である。

一方、本調査が対象とする中国語を母語とした日本語学習者の語彙習得は、母語の中国語の影響を抜きに語ることはできない。しかし、機能動詞結合の L1 転移を取り上げた研究は、李 (2012)、黄 (2017) 以外は管見の限り見られない。そこで、機能動詞結合も「名詞+動詞」のコロケーションの一種であることから、L1 転移に関しては、広く「名詞+動詞」のコロケーションにおける先行研究を取り上げる。

以下の日本語教育における先行研究は、誤用要因、日本語能力による習得の違い、母語の影響に関するものの順に紹介する。

3.1.1 誤用要因を探った研究

機能動詞結合の誤用要因を対象とした研究では、機能動詞の内、スル動詞のみを扱った鈴木 (2009)、庵 (2010) がある。スル動詞だけでなく支援動詞¹も含めた機能動詞全体を対象としているのは、管見の限り黄 (2017) だけである。

3.1.1.1 スル動詞結合対象

ここでは、スル動詞結合の誤用だけを対象とした研究を紹介し、支援動詞結合も含めた機能動詞結合全体の誤用を対象とした研究については、次の 3.1.1.2 で述べる。

鈴木 (2009) は、指導に役立てることを目的に、コロケーションの観点から、上級日本語学習者は動詞「する」に関してどのような習得上の困難点があるかについて調査を行っている。中国・韓国が多数を占める留学生の作文コーパスを使用し、鈴木自身が作文から「する」が使われている句、「する」を使うべき句を抜き出し、辞典を参照しながら正誤判定を行い、その後、2名の母語話者が判定を確認したという。

その結果、延べ数で正用は 317、誤用は 102 で誤用率は 24.3%、異なり数では正用は

¹ 「影響を与える」の「与える」、「連絡をとる」の「とる」など、スル動詞以外のすべての機能動詞。(4.2 参照)

160、誤用は 76 で誤用率は 32.3%だったと報告している。

表 3-1 「する」コロケーションの正誤数

	述べ数	異なり数
正用	317	160
誤用	102 (24.3%)	76 (32.3%)

注) 原文データに従い、筆者作成

「コロケーションの誤用は、コロケーションの結びつき自体を誤っている『結びつきの誤用』とコロケーションの結びつきは正しいが文脈を見ると誤用であると判断される『文脈上の誤用』(p.65)」があった。

誤用原因では、類義の語またはコロケーションの混同によるものが一番多く 34 例あった。

- 例) ・「する」と「やる」の混同 *質問をやらないでください
 ・類義語の混同 話題を*一緒(共に)する
 ・類義のコロケーションの混同

豊かな*生活を過ごしている(生活をしている/送っている)

母語からの直訳は 11 例あったが、スルの過剰使用は 3 例のみだった。

以上の結果から、鈴木はコロケーションの誤用では「文脈などコロケーションの『外』の情報についても分析を進める必要がある (p.74)」とする。また、「母語に直訳をしたと思われる誤用は約半数であった (p.74)」ことから、「コロケーションの誤用の原因が母語だけでなく、・・・(中略)・・・類義語や類義のコロケーションの混同が考えられる (p.73)」と考察している。

したがって、学習者に「する」のコロケーションを指導する際には、「母語との異同をリストで示すだけでは不十分であり、類義の動詞や名詞、コロケーションを整理して示す必要がある (p.74)」と結論付けている。

庵 (2010) は、漢語サ変動詞のうち、非対格自動詞について、日中の言語間のズレを、明らかにするため、日中で同形同義の「動名詞」を用いて調査文 93 を作成し、アンケートを取った。調査対象は、日本語母語話者と非母語話者で、非母語話者は、中国黒竜江大学の初級～超上級の日本語学習者だった。

その結果、「非対格自動詞の場合、母語話者は概ね『される』を回答しないのに対し、中国語話者は『される』を回答している割合が相対的に高い場合があることがわかり (pp. 176-177)」、「日本語においても『非対格性の畏』に類する現象が観察された (p.180)」と述べている。

「非対格性の畏」というのは、「母語の違いに関わらず、第二言語として英語を学習する学生に、次のような誤用が見られる (p.177)」ものだという。

* My mother was died when I was just a baby.

* He was arrived early. (庵 : 177、Oshita、2000 より)

「これらは非対格自動詞を受身にすることによる誤用である。(p.177)」

庵によると、Oshita (2000) はこのような誤用が起こる理由を次のように、非対格自動詞の場合と受動文を対照して説明しているという。

S 構造

(3-1) He arrived early. [s He_i [v_p [v' arrived t_i] early]]

(3-2) Marry was kissed by John. [s Marry_i [v_p [v' was kissed t_i] by John]]

(pp.177-178 に基づく)

(3-1) の非対格自動詞の場合と、(3-2) の受動文を比べると、両者とも「D-構造から S-構造への写像に、NP 移動が関わっていることがわかる。(p.178)」とし、「非対格性の罫という考え方は日本語の非対格自動詞にも当てはまるように思われる (p.178)」と述べている。

影山 (1993) は、外国人学習者の非対格構文における誤用について、「他動詞の場合は目的語の助詞が落ちるのに対して、自動詞の場合は、非対格自動詞の主語の助詞が落ちる。自動詞の動作主主語で助詞が脱落する例は見つからない。(p.63)」と述べている。次の例は影山があげる格助詞の脱落の例である。

- ・唐の詩__読む時.....
- ・秋葉原でテープレコーダ__買う時.....
- ・もし、時間__あれば.....
- ・また友達__来て遊ぶ時.....

(__は、格助詞があるべき位置を示す。p.63 より抜粋)

そこから、「外国人学習者が、非対格自動詞の主語が構造的に動詞の統率位置にあることを知っていることが窺える (pp.63-64)」と述べている。

3.1.1.2 全ての機能動詞結合対象

ここでは、スル動詞だけでなく支援動詞も含めた機能動詞結合全体での誤用を対象にした研究を見ていく。

黄 (2017)

黄は、日本語学習者が日本語と中国語の同形同義名詞 (S 語) に機能動詞を結び付ける際、どのような誤用が生じるのかを調べた。黄は、誤用を単に中国語の影響によるものかどうかで見るだけでなく、それとは区別した第二言語習得過程で生じる特有の誤用を考察している。また、フォローアップ・インタビューを行うことにより、学習者がどのようにしてその誤用に導かれたのかというプロセスも明らかにしている。

調査対象は、日本語レベルが初級と中級の中国の大学の日本語学科の学生 71 名で、調査材料としたのは、村木 (1991) に掲載されている「S 語+を/に+機能動詞」表現の中で

頻度の高い順に抽出した 30 ペアである。調査材料とした S 語名詞は、日本語では名詞と動詞の両方の用法があり、かつ中国語では名詞または動詞であるものに絞り、品詞を統制している。

調査はこれらを用いた例文の中の機能動詞部分を空所にした 30 問の補充テストで行われた。30 点満点で、平均は 7.44 であり、「中国人日本語学習者にとって、機能動詞結合の習得は容易でない (p.30)」としている。

黄は分析に当たって、誤用を三つに分類した。

- I 中国語の影響により起こったと考えられる誤用
- II 日本語の能力が不十分であることにより起こったと考えられる誤用
- III その他

分類ごとに誤用を分析した結果は次のとおりである。

I 中国語の影響により起こったと考えられる誤用

黄は空所補充テストの際、「調査対象者に日本語の下に中国語で訳を書いてもらい、どのような意味だと思って、その動詞を書いたのかも記述してもらった。(p.31)」また、フォローアップ・インタビューも行い、誤用の理由を聞き取っている。

フォローアップ・インタビューでの聞き取りに基づき、誤用のプロセスを大きく 2 つのパターンに分けている。

以下は黄の調査結果 (p.32~36) を筆者がまとめたものである。

- (1) 日本語の S 語ヲ格名詞を見て、その語と共起できる中国語を想起し、想起された中国語を日本語に訳す

注) (日) : 日本語 (中) : 中国語

- ① S 語ヲ格名詞と結合する中国語の漢字の一部を転用したことによる誤用

例) (日) (中)

* 成功を取る ; 取得成功

中国語の影響による誤用 1005 の半分以上 561 を占める (55.82%)

- ② S 語ヲ格名詞と結合する中国語の二字漢語をそのまま産出したことによる誤用

(日) (中) (日) (中)

例) * 期待を投入する ; 投入期待 * 期待を増加する ; 増加期待

* 成功を獲得する ; 獲得成功 * 調整を進行する ; 進行調整

この誤用数は非常に少なかった。

- ③ S 語ヲ格名詞と結合する中国語の動詞を日本語に翻訳する際に起こった誤用

- i S 語ヲ格名詞と共起する中国語の漢語動詞を日本語に翻訳しようと思ったがうまく翻訳できなかった。 例) (日) (中)

* 生活を生きる : 过着生活

- ii 語単位ではうまく翻訳できたが、日本語では共起関係が成立しなかった

例) (日) (中)

* 成功をもらう ; 取得成功

この誤用ケースは 初級 139、中級 115 と、初中級ともに多かった。

- (2) S 語ヲ格名詞と共起する中国語がないなど、パターン(1)で処理できない場合に用いられる方法である。「このような場合は、S 語ヲ格名詞の類義語、または同じ場面やトピックで使われる関連語を想起してから、パターン(1)で処理していく (p.34)」。

④ S 語ヲ格名詞の類義語や関連語の連想によって起こった誤用

- a 「S 語ヲ格名詞の類義語(中)、または同じ場面やトピックで使われる関連語(中)と共起する漢語(中)があり、それをそのまま産出した誤用 (p.34)」。

例) *拍手を獲得する

拍手≡掌声 → 掌声+獲得→拍手+獲得→獲得拍手→拍手を獲得する

- b 「S 語ヲ格名詞の類義語(中)、または同じ場面やトピックで使われる関連語(中)と共起する漢語(中)があり、」「その中に含まれる漢字一字を使った和語動詞を産出して起こった誤用 (p.34)」。

例) *拍手を収める

拍手≡掌声 → 掌声+収獲→拍手+収獲→収獲拍手→拍手を収める

- c S 語ヲ格名詞の類義語(中)、または同じ場面やトピックで使われる関連語(中)と共起する漢語(中)があるが、その日本語相当語がみつからなかったため、他の語で代用。

例) *拍手を沸く

拍手≡掌声 → 掌声+响起 (鳴り響く) → 拍手+响起 → 响起拍手
→ 拍手を沸く

II 日本語の能力が不十分であることにより起こったと考えられる誤用 (日本語の影響)

⑤ S 語ヲ格名詞と類似した意味を用いることによる誤用

「S 語ヲ格名詞の類義語(日)、または同じ場面やトピックで使われる関連語(日)を和語動詞にして産出した誤用である。(p.34)」。

例) *生活を暮らす *注意を注目する *修正を書き直す

『生活』は、『スル』を付加して動詞として使えるが、『生活する』と同義として使える動詞には、初級レベルで学ぶ『暮らす』がある。そこで、『生活を()』について『*生活を暮らす』という解答を行ったと考えられる。(p.36)」

この誤用は、初級 52、中級 21 で計 73 となり、日本語の影響による誤用の半分以上を占める。

⑥ 習得したコロケーションから和語動詞を借用

例) *抵抗に買う *会話を乗る *注意を配る

『*抵抗に買う』という誤用を産出したのは、学習者がすでに『恨みを買う』を習得しており、『恨み≡抵抗』と考えたためだという。(p.35)」

⑦ 自他動詞の混同、品詞の違い、助詞の間違い

例) 自他動詞の混同; *考慮に入る *決定を下る

品詞の間違い ; 動詞ではなく、特に形容詞を産出してしまふ

*感動を優秀だ *攻撃を激烈だ

助詞の間違い ; *考慮に払う

⑧ コロケーションとしては正しいが、文脈に合わないもの

III その他

例) *反対に達する *決定を取る *拍手を取る

中国語の影響による誤用の中で最も多かったのは、誤用区分 I ①の「S 語ヲ格名詞と結合する中国語の動詞から漢字の一部を転用したことによる誤用」だったが、「和語動詞の中で、中国語の前項漢字と後項漢字のいずれをより多く選ぶかと言うと、前項漢字が 76.64% で圧倒的に多い。これは、中国語の語構成に関わると考えられる。これは、前項漢字は動作を表す動詞で、後項漢字は結果補語となる場合が少なくないためだと考えられる (p.39)」

3.1.2 日本語能力による習得の違い

前述の日中の S 語名詞と機能動詞の結合の誤用について調査した黄 (2017) は、「日本語習熟度が上がるにつれて、機能動詞結合の習得も進むのか」として、日本語能力の違いによる習得の異なりについても分析している。

黄 (2017)

黄が対象としたのは、日本語習熟度が初級のものの中級のものとの対比であり、習得が進んでいるかどうかは、誤用の面から判断している。

下の表が、前述の黄が用いた機能動詞部分を空所にした補充テストの結果であるが、初級と中級の得点の間には有意差が見られたという。

表 3-2 機能動詞結合テストの結果 (30 点満点)

	M	SD	得点範囲	N
初級	5.23	2.55	0~11	39
中級	10.13	4.75	2~20	32
全体	7.44	4.43	0~20	71

注 : M は平均
SD は標準偏差
N は人数

黄 (2017) p.30 より

黄が調査対象とした結合は 30 だったが、「27 の結合で中級学習者は初級学習者より正答率が高かった。このことから、中国語を母語とする日本語学習者は、日本語習熟度が高くなると、機能動詞結合の習得がおおむね進んでいると言えよう」と結論づけている。

この内、統計的に有意に、中級学習者が初級学習者より正答率が高かったのは、下の 7 つであったという。

生活を送る／注意を払う／注目を集める／成功を収める／考慮に入れる／
誤解を招く／批判を浴びる

この7結合で中級の方が初級より習得が進んでいた理由として、黄は「動詞の意味用法の多様性」を挙げる。7結合の動詞は、初級では具体的な名詞との共起で学習するので、初級学習者は、抽象的な名詞とも共起するということを習得していなかったためだとする。

さらに、黄は使用頻度との関わりも指摘している。上述の7つの結合は使用頻度が高く、使用頻度が高いものほど、習得されやすいことが示唆されると述べている。

全体的には、日本語習熟度が上がるにつれて、誤用が減っていたが、習熟度と関係があるものと関係がないものがあったとする。

習熟度と関係なく見られたものとして、「習得したコロケーションから動詞を借用して、そのまま産出したことによる誤用（前項黄論文での誤用区分Ⅱ⑥）」と「自他動詞の混同による誤用（前項黄論文での誤用区分Ⅱ⑦）」の2つを挙げている。

一方、日本語習熟度と関係がある誤用として、「S語ヲ格名詞と結合する中国語の動詞から漢字の一部を転用したことによる誤用（前項黄論文での誤用区分Ⅰ①）」を挙げている。これは、「初級学習者の誤用が中級学習者の二倍ほどで、日本語習熟度が高くなると、減少していく傾向にある（p.38）」。

機能動詞結合ではないが、劉（2017）は、中国語と韓国語を母語とする日本語学習者の書き言葉コーパスを用いて「名詞+動詞」コロケーションと日本語能力との関係を調査している。劉は、学習者を下位、中位、上位の3群に分け、使用頻度と誤用が日本語能力によって異なるかを調べた。

その結果、「コロケーションの使用頻度は、全体から見るとL2能力が上がるにつれて高くなるが、下位群と上位群の間にしか有意差が見られ（p.70）」なかったとして、コロケーションは、上級にとっても難しく、習得が遅いと結論している。

一方、「コロケーションの誤用数は下位群から中位群までは増えていき、上位群になるとコロケーションの習得が進んだことにより、大幅に減った（p.71）」。そのことから「学習者のL2能力があがるにつれ、誤用が一時的に増えるが、その後習得が進み、誤用が減っていくという過程を経ている（p.71）」と述べている。

3.1.3 「名詞+動詞」結合における母語転移

L1の影響を対象とした多くの研究では、L1によって引き起こされる誤用について調査しており、正用を引き起こすL1の影響についての研究は数少ない。そのため「母語干渉」という形で、L1は第二言語の習得を阻害するものとして扱われたこともあった。しかし、近年、習得を促す大きな働きをするものとしてL1が注目されている。

サ変動詞を対象にした李（2012）、機能動詞結合を調査した黄（2017）は、L1の影響を

² 第二言語

扱っているが、いずれも誤用分析だけで正の転移については見ていない。一方、「名詞＋動詞」を対象にした小森外（2012）、小森（2013）の調査では、L1は負の転移ばかりではなく正の転移も引き起こすとしている。

黄のL1の影響の調査については、3.1.1.2を参照されたい。

李（2012）

李は、日中同形の二字漢語サ変動詞を取り上げ、母語の中国語が与える影響という観点から誤用原因を分析している。

李は、日本国内の日本語学校に通う中級と上級のCLJの作文を調査し、誤用を次の4つに分類した。

- (1) 品詞性及び自他動詞に関する誤用
- (2) 意味用法に関する誤用
- (3) 活用語尾と共起性に関する誤用
- (4) 助詞に関する誤用

分析の結果、誤用の二字漢語動詞が含まれている例文を総数で割った誤用率は、45.7%と高かった。各誤用分類の分析結果は次のとおりである。〈 〉内の数字は抽出された分類ごとの誤用例数である。

- (1) 品詞性及び自他動詞に関する誤用 〈14例〉

品詞性に関する誤用では次の例を挙げている

例) *忙しいというより充実のほうがびったりかもしれない。

(充実している：下線部を正用に直したもの、以下同様)

「日本語では、『充実する』は動詞として使われるが、中国語では形容詞として使われるため、学習者が『充実だ』、『充実だった』という誤用が生じやすいと考えられる。(p.122)」

「品詞性に関する誤用では動詞を形容詞として使用する誤用が一番多い (p.123)」として他に「不足する」、「興奮する」、「緊張する」の例があったと報告している。

次の例は自他動詞に関する誤用例である。

例) *昔を回顧すると、感動させたことが次々と思い出される。 (感動した)

「『感動する』は・・・(中略)・・・中国語では他動詞として使われるが、日本語では自動詞の用法しかない。(p.123)」またこの文を中国語訳すると「让」を用いるが、この「让」を日本語動詞の「させる」と置き換えることによって、「感動させる」という誤用を生じていると述べている。

- (2) 意味用法に関する誤用 〈36例〉

例) *日本の文化を了解したい。 (理解したい)

*担任の先生は私たちの状況について、とても了解しています。 (理解して)

「日本語の『了解する』は中国語の『了解』とずれがあることが言えるだろう。日本語では、『了解する』は説明によって、対象の事情や相手の意図などを理解して納得する。『了

解』は『理解』の上に、さらに相手を容認する気持ちの加わったものであると言ってもいい。(p.124)」

(3) 活用語尾と共起性に関する誤用 (32例)

例) *普通の話を通して、日本人の思想も考え方についてもだんだん理解してきた。
(理解するようになって)

*日本の社会はもっと理解します。(理解できるようになりたい)

『だんだん』・『ますます』・『もっと』などの副詞が前についているので、後ろも『～よう』という変化の言葉を加えないとおかしい (p.126)。「もっと」などを中国語に訳すと「更加」となるが、上記例文を中国語に訳すと『更加』という言葉しか変化の意味を表さない、後ろに変化を表すことばがないため、誤用しやすいことが見える。これはアスペクトに関する問題であると考えられるだろう。アスペクトによる誤用が語尾に関する誤用の中では一番多いことがわかった。(p.126)」

(4) 助詞に関する誤用 (25例)

例) *私たちは今、日本に生活しています。(で生活して)

「生活する」を「中国語に翻訳すると『在～生活』になるので、『在』を考えると一番出てくるのは日本語助詞『に』である (p.127)」。

例) *自分にとって、中国とは違う生活が体験している。(を体験している)

『体験する』は日本語では他動詞なので、『を』を使用すべきである。中国語を翻訳すると『体验了～』になり、自動詞用法の傾向がある (p.127)」。

李は、助詞の誤用を、助詞の未習得、中国語に助詞がないからというだけで終わらせるのではなく、該当する中国語語彙、品詞の違いによって根拠づけ、分析を深めている。

小森外 (2012)

小森外は、機能動詞結合ではないが、CLJの「漢語連語と和語連語の習得」を調査し、正誤判断テストで「中国語と同じ共起語を用いる場合と用いない場合の比較」を行っている。中国語と同じ共起語が取れる場合とは、中国語での「保持传统」が日本語で「伝統を保持する」となるようなものである。他方、中国語と同じ共起語を用いることができない場合とは、中国語の「建设家庭」を日本語で「*家庭を建設する」と言えないような類である。テストの結果、中国語と同じ共起語が取れる漢語の方が、中国語と同じ共起語が取れない漢語より、得点が有意に高かったという。

さらに、小森 (2013) では、CLJはL1知識を和語にまで転移させているかを調べるため、同漢字語和語と異漢字和語を比べたテストを行っている。同漢字語和語とは、「中国語で成立する同形同義語の連語形式の中で、中国語と同じ漢語が使われる和語の連語 (p.96)」であり、異漢字和語とは中国語と同じ漢字を使わない連語のことであるという。小森のあげた例では、中国語の「發生感情」は日本語で「感情が生まれる」となり、中国語と日本語で「生」の字を共有しているので同漢字語和語である。しかし、中国語の「破壊財産」

は、日本語で「財産を失う」となり、「失う」と「破壊」に共有する字がないので異漢字和語となる。その結果、「同漢字語和語テストの方が異漢字和語テストより得点が高かった。このことから… (中略) … L1 の正の転移が起こっていることが推測される (p.102)。」と述べている。

小森の調査の結果によると、CLJ は、日中で共通する漢語のみならず、「名詞+動詞」の組み合わせまでも、日本語の習得に役立てていることがわかる。

3.2 英語教育

日本語を対象とした研究では機能動詞という用語が一般的だが、英語の機能動詞に該当する語で使用されている用語は、軽動詞 *light verb* (Wang, 2001; Miyakoshi, 2009)、脱語彙化動詞 *delexical verb* (Altenberg & Granger, 2001; Wang & Shaw, 2008)、支援動詞 *support verb* (Nesselhauf, 2004) と、論文によってさまざまである。日本語以外で英語等の機能動詞の習得を調査した研究では、*do*, *make*, *take* など特定の高频出動詞を取り上げて、その軽動詞用法を見ているものが多い (Nesselhauf, 2004; Wang, 2001; Altenberg & Granger, 2001; Wang & Shaw, 2008)。ただし、Miyakoshi (2009) は、特定の軽動詞に絞らず、すべての英語の軽動詞用法を調査対象としている。

本節では、英語等の軽動詞習得研究で論議の中心となっている L1 転移を取り上げた研究についてはじめに延べ、次に母語話者と学習者を比べた場合の軽動詞構文の過剰/過少使用について調査した研究、学習者の軽動詞使用における誤用を分析した研究を見る。そして最後に、頻度と意味が習得に及ぼす影響を調査した先行研究を紹介する。

なお、以下での引用文はすべて本論文筆者の翻訳による。

3.2.1 母語との関わり

ここでは、はじめに軽動詞構文の習得に学習者の母語が関わるか関わらないかを論じた研究を紹介し、次に学習者が母語の語彙項目を L2 に転移する際に取りうる戦略について述べた論文を取り上げる。

3.2.1.1 母語転移

Wang (2001) は、第二言語での *Light verb + Noun* コロケーションの習得は言語転移であることを示すことを目的に、3つのテストを行った。*Light Verb* とは軽動詞であり、本研究の機能動詞に相当する。

調査材料とした軽動詞は、共通する意味が *doing* である *Light verb* で、英語では、*do*, *make*, *take*, *give*, *have*、中国語では *zuo* (做), *gao* (搞), *jinxing* (进行), *da* (打), *kai* (开) の5つである。調査に当たり、Wang はコロケーションを形成するために用いられる軽動詞の中国語と英語間での異なった状態を、以下で見るように7つのタイプに分けている。

調査対象は中国の大学1年生で中級レベルの英語学習者150人である。

1) テスト 1

英語 25 文の中の軽動詞部分が空白になっている空所補充テスト。空白に埋める英語の軽動詞は四肢選択式になっている。このテストはタイプ 1 のコロケーションの影響を見るものである。

タイプ 1 は、中国語では 1 つの軽動詞で表されるが、対応する英語では複数の軽動詞で表されるものである。

- 例) zuo yanjiu — **do** reseach
zuo gongxian — **make** contribution
zuo biji — **take** notes
zuo meng — **have** a dream
zuo yanjian — **give** a lecture

テストの結果、平均誤用率は 44.1% に達し、タイプ 1 の [軽動詞+名詞] コロケーション習得は非常に困難を示した。なぜなら、英語では、*do, make, take, give, have* の 5 つの軽動詞が、中国語では同じ軽動詞 *zuo* に相当するからである。したがって、「タイプ 1 の [軽動詞+名詞] コロケーションの L2 習得に関しては、L1 の影響が明らかである (p.114)」としている。

2) テスト 2

中国語文に 2 つの英訳がついた 15 のテストで、どちらか適切と思う英訳を選ぶことを求められる。2 つの英訳の 1 つは [軽動詞+名詞] コロケーションを含んだものであり、他の 1 つはこの [軽動詞+名詞] を 1 つの実質動詞で置き換えたものである。

このテストはタイプ 2 と 3 のコロケーションの影響を見るものである。

タイプ 2 は中国語と英語が [軽動詞+名詞] または実質動詞 1 つの同じ形式に対応するものである。

- 例) zuo jue ding / jue ding — **make** a decision / decide
Jinxing tanhua / tanhua — **have** a talk / talk

タイプ 3 は中国語では、[軽動詞+名詞] だが、英語では [軽動詞+名詞] または実質動詞 1 つで表されるものである。

- 例) da dianhua — **make** a call / call
kai wanxiao — **make** a joke / joke

テストの結果、「タイプ 2 と 3 あわせて 83.7% が L1 で用いられる構文と同じ L2 の構文を産出で用いていた (p.117)。」即ち、中国語文で [軽動詞+名詞] のものは英語文でも [軽動詞+名詞] を選択し、中国語文で実質動詞であるものは英語文でも実質動詞のものを選択していた。

「したがって、タイプ 2 と 3 の [軽動詞+名詞] コロケーションに関して、明らかな L1 の影響が見られた (p.117)」としている。

3) テスト 3

テスト 3 は動詞部分が空白になった 20 の英語の句で、それぞれに添付された中国語と同じ意味になるように動詞を書き入れるもので、タイプ 4~7 のコロケーションの影響を見るものである。

タイプ 4 は中国語で実質動詞 1 つだが、英語では [軽動詞+名詞] または実質動詞 1 つに対応するものである。

例) *weixiao* — smile / *give* a smile

英文の解答で中国語と同じ実質動詞を求められている場合は実質動詞が産出されやすかった。しかし、英文の解答で中国語で用いられていない軽動詞が求められると、困難を示し、平均誤用率は 40.73% だった。

タイプ 5 は中国語で [実質動詞+名詞] であるものが、英語では [軽動詞+名詞] または [実質動詞+名詞] であるものである。

例) *zhao jiekou* — *make* / find an excuse

被験者は軽動詞ではなく実質動詞を選ぶものが多く、64.35% に上った。

タイプ 6 は中国語で [実質動詞+名詞] であるものが、英語では [軽動詞+名詞] または実質動詞 1 つであるもので、中国語には英語に対応する形式がない。

例) *liuxia yinxiang* — *make* an impression / impress

テストの結果は 83.9% が正用だった。このような形式では「被験者は [軽動詞+名詞] コロケーションを習得するのが困難ではないかという疑問が生ずる。しかし、結果を見ると、学習者はこのタスクを行うのに軽動詞を用いることはほとんど困難ではないようである。(P.119)」

タイプ 7 は中国語で [実質動詞+名詞] であるものが、英語では [軽動詞+名詞] であるもので、中国語の形式は英語の形式と全く異なる。

例) *chi fan* — eat* / *have* dinner

平均正用率は 94.35% に上り、このタスクで正しい軽動詞を用いることはまったく困難ではなかった。

以上の調査の結果を Wang は次のように結論づけている。(pp.119-126)

- 1 平均 61.84% の理解と産出に正負の L1 転移が見られたことから、学習者の L1 は L2 の [軽動詞+名詞] コロケーションに影響している。
- 2 学習者は L1 で用いるのと同じ形式を、L2 の [軽動詞+名詞] コロケーションの理解と産出に転移している。
- 3 習得が困難な [軽動詞+名詞] コロケーションは L1 と L2 の形式が全く異なるタイプ 1 である。その次に困難なのが、対応する L2 のタイプは L1 にとっては新出となるタイプ 4 と 5 だった。

一方、習得が容易なのは、L2 の構文の中に L1 と同じ形式が含まれているタイプ 4 と 5 で、この場合、学習者は自分と同じ形式を好んで選んでいる。次に容易だったの

は、タイプ 6 と 7 で L1 と L2 の形式が全く異なるものは、インプットが十分ならばほとんど困難がない。

Wang & Shaw (2008)

以上、見てきたように Wang (2001) は、第二言語の [軽動詞+名詞] コロケーションの習得には大きな L1 転移があると主張している。しかし、Wang & Shaw (2008) は L1 転移とすることに疑問を呈している。

Wang & Shaw は、最近の研究では、語彙と同様にコロケーションも L1 の転移による傾向があるとし、この仮説を確かめるために、スウェーデン語を母語とする英語学習者 (SSLE) と中国語を母語とする英語学習者 (CSLE) のコロケーションの誤用を比べている。SSLE も CSLE も英語力が超上級レベルの大学生である。

調査対象は、SSLE と CSLE が書いた英語のエッセイで用いられた高頻度動詞の [動詞+名詞] コロケーションである。have、do、take、make のような高頻度動詞は、一般的な用法と脱語彙化した用法によってしばしば多義性が高いという。「脱語彙化」した動詞というのは、軽動詞、本稿の機能動詞のことである。

スウェーデン語は典型的に英語に近いのに対し、中国語は英語と距離がある。それにも関わらず、両者とも do と make を混同し、誤用での語の選択が類似していた。

スウェーデン語には脱語彙化して用いることができる 1 つの動詞 göra があり、例えば göra förändringar、göra sitt bästa は、英語の make change、do one's best に相当する。先行研究 (例: Biskup 1992; Bahns 1993; Granger 1998b) では、L1 と学習者の目標言語が近い関係にある時、コロケーション使用で特に転移が起りやすいとされている。したがって L1 転移の影響で、do changes や make the cleaning のような問題のあるコロケーションが SSLE にあるのは驚くに当たらない。しかし、do a great effort (make a great effort) と make damage (do damage) のような類似した誤用が CSLE にも見られる。中国語の do (zuo) と make (zhihao) は英語のように脱語彙化しては用いられない。即ち、do (zuo) も make (zhihao) も effort (Jinli) や damage (pohuai) と結びつけても中国語では何の意味も持たない。したがって、これらのケースを単に L1 転移に帰するのは疑問である。

(p.218)

しかし、Wang & Shaw も L1 がコロケーション習得に及ぼす影響を否定するわけではなく、その影響は深いところで働いているとする。即ち、それぞれの L1 と TL (目標言語) との異なった関係がコロケーションの産出の際に異なったストラテジーを採らせることにあるという。TL と L1 が近い関係だと習得は促進される。

さらに、それ以外に「中間言語コロケーションの促進において、すべての学習者に普遍的で、TL に基づく重要な要因がある (p.223)」と、最後に述べている。

3.2.1.2 軽動詞借用ストラテジー

機能動詞結合を構成する名詞は、漢語系や洋語系のものが多い。村木によると、「日本語の動詞には体系的な語形変化がある」ため、借用語である漢語や洋語の単語を動詞として取り入れることができない。それらが動詞として日本語の文中で用いられるためには、「形態的な拘束のない名詞の仲間として日本語のなかにとりこまれ、それを動詞化することになる。現代日本語の場合、名詞からの動詞化は、生産力のたかい『ーする』にたよっている。(p.212)」

Wichmann & Wohlgemuth (2008) は、ある言語から他の言語への動詞の借用方法を次の4つのタイプに分類した。

1) 軽動詞ストラテジー

2) 間接的挿入

「多くの言語では、借用動詞を同化するために、接辞が必要とされる。(p.6)」

3) 直接的挿入

「借用動詞は形態素、統語の同化なしに目標言語の文法に直接埋め込まれる(p.7)」

4) パラダイム転移

「まれなケースでは、借用動詞は、レシピアント言語の形態素はまったく用いず、機能を保持したままドナー言語の大部分の動詞形態素とともに借用される (p.9)」

そのうち、軽動詞ストラテジーは「Do ストラテジー」ともいい、日本語の場合、軽動詞に相当する「スル」を借用事態性名詞に結合させて動詞化するものである。言語によっては、軽動詞は借用動詞と複合形を形成して、句構造というより、複合動詞とみなされることがあるという。日本語では、事態性名詞にスル動詞を直接接続させた「相談する」「攻撃する」などは一語動詞とみなされるので、これに相当する。次章以降で分析するように中国語を母語とする学習者は、「*滅滅する(滅亡する)」「*游行する(行進する)」など、「Do ストラテジー」を用いて、母語の動詞をそのまま日本語に持ち込む誤用が見られた。

論文の中で Wichmann & Wohlgemuth は、Moravcsik (1975) への反論を述べている。Wichmann & Wohlgemuth によると、Moravcsik は、「動詞は、ある言語から他の言語に転移する場合は、最初は名詞として借用され、処理されるが、それをターゲット言語で動詞として処理するためには、ある種の動詞化が要求される (p.1)」とし、「動詞は動詞として借用されることはない (p.1)」と主張したという。

それに対し、Wichmann & Wohlgemuth は、上述の彼らの動詞の借用法の4タイプの中に、「直接的挿入」が含まれることから、「動詞はしばしば非動詞として借用されるが、必ずしも名詞として借用されるわけではなく、会話の一部としてあいまいに言い表される (p.14)」と述べている。

3.2.2 学習者の過剰／過少使用

Altenberg & Granger (2001) は高頻度動詞の中で Make を取り上げ、英語学習者の脱語彙化用法（本研究での機能動詞としての用法）は母語話者と比べて、過剰使用されているか過少使用されているかを調べた。

高頻度動詞は通言語的に次の性質を持っているという。

- ・ 基本的意味を表し、他の意味領域を支配する
- ・ 多くの言語で対応する高頻度語がある
- ・ 2種の意味拡張によって、高度の多義性を持つ
 - より一般的、抽象的、脱語彙化（文法化）された用法を生じるという普遍的傾向がある
 - 様々な言語的に特化した傾向が、特殊な意味、コロケーション、イディオム用法を生み出す
- ・ 外国語学習者にとって問題が多い (p.174 ; 下線は筆者付加)

最後の「外国語学習者にとって問題が多い」という性質は、上記のそれ以外の性質の結果である。

Altenberg & Granger によると、EFL（外国語として英語を学ぶ学習者）の高頻度動詞使用については、正反対の見解がある。Hasselgren (1994)、Källkvist (1999) などの研究では、高頻度動詞は学習者によって過剰使用されると主張している。しかし、反対に、Sinclair (1991) は、高頻度動詞は学習者によってできる限り使用回避されるとする。

この論議を受けて、Altenberg & Granger は、EFL と母語話者のコーパスにおける Make の使用を比較している。EFL はスウェーデン語母語話者（SW）およびフランス語母語話者（FR）の大学 2.3 年生で英語能力は両者とも上級レベルである。比較対象とした母語話者（NS）はアメリカの大学生である。

Altenberg & Granger は、Make の用法を「作る」など 8 つに分け、コーパスで出現頻度を調べた結果、最も多かったのは使役用法で、次は脱語彙化用法だった。

Make の脱語彙化用法の、それぞれのコーパスでの出現頻度は次のようになり、SW も FR も脱語彙化構文を過少使用しており、Sinclair の説を支持していた。

SW : 59* FR : 134* NS : 187

* : NS と各群との間に統計的有意差有

さらに分析を深めると、NS と非母語話者では、脱語彙化用法に驚くべき違いがあった。NS は、脱語彙化用法の Make と共起するトークンの 1/3 が発話関連の名詞だったが、SW・FR では 9～13% でしかなかった。発話関連の名詞とは、argument, claim, point, statement, case, comment, observation, reference などであるが、「Collins Cobuild English Grammar (1990; 150-1) によると、動詞 Make はしばしば発話行動を表す名詞

と共に用いられ、それらの名詞の多くは報告を表す動詞と関連している (to make a remark — to remark that) (p.178)。」

学習者は、脱語彙化構文を過少使用するだけでなく、また、それらを誤って使用していた。それらの誤用には、言語内要因であるものもあれば、言語間要因であるものもあった。即ち、ある誤用は母語に対応する構文があるが、ある誤用は対応していなかった。

Altenberg & Granger は、最後に「FFLは、上級レベルでも Make のような高頻度動詞に非常な困難がある。とりわけ、脱語彙化用法は背反的であることが示された (p.189)」と結論している。

3.2.3 誤用タイプ

Nesselhauf (2004) は、ドイツ語を母語とする大学生の上級英語学習者を対象に、学習者が支援動詞³構文の使用において典型的に犯す誤りを特定することを目的に、調査を行っている。調査対象はコーパスでのエッセイで使用された「動詞+名詞」の組み合わせで、have, take, make, give の4つの支援動詞が用いられたものである。

調査の結果、誤用率は23%で、最も誤りが起こりやすいのは make を含んだ支援動詞構文、次は give と take を含んだ構文だった。最も誤りが生じにくいのは have を含んだ構文だった。

一方、支援動詞構文の誤用タイプとして特定されたものの中で、最も多かったのは「動詞の誤り」だった。これは、他の支援動詞研究の調査結果を支持するものであり、学習者は適切な動詞選択が困難であることが確認されたとする。

そこで、Nesselhauf は、それまでの支援動詞研究の調査結果にない新しい視点として、以下を提示している。

まず、先行研究では、「動詞の誤り」以外の誤用は重要とみなさず、数量で示していないことを挙げている。いくつかの研究では、動詞の選択の誤りを正すために置き換える動詞が支援動詞であるか、実質動詞であるかで2タイプに区別しているが、それを数量で示していないという。Nesselhauf の調査では、動詞の誤り15の内、支援動詞は12で、実質動詞は3だった。

次に、先行研究で示されることはなかったが、Nesselhauf の調査で新たに分かった点として、実際に英語に存在し学習者がよく使っているが、誤った用い方をしているために、意図した意味が伝わらない次のような組み合わせがあることを挙げている。

例) If I wanted to draw a plan I would have to **take measures** first, I would have to know how much space there is. (P.117)

take measures という言い方は英語にあるが、この文脈では measure が適切である。

「名詞の誤り」8つの内7、また「実質動詞の代わりに支援動詞構文を用いた誤り」14

³ この「支援動詞」は support verbs のことで、本稿の支援動詞とは異なり、スル動詞も含んだカテゴリである。したがって、本稿の「機能動詞」に相当する。(4.2 参照)

の内 11 がこれに該当する。「もし、組み合わせの文脈が考慮されなければ、このような誤用はたやすく見過ごされてしまい、そしてこれまで多くが見過ごされてきてしまった。

(p.117)」と述べている。

Nesselhaufは調査の結果出てきた誤用には、いくつかのタイプがあったという。1つは、take a step を *make a step、have an experience を *make an experience のように（誤った）支援動詞構文を形成しているものである。また、〈動詞+接尾辞〉と支援動詞構文とを混同しているものもあるとして、次の例を挙げている。

例) Although there are a lot of programmes and care for mentally ill people it is quite hard to *have a look at* all of them. (p.118)

have a look at と look after が混同されている。

Miyakoshi (2009) は、日本人の英語学習者 32 人を英語力によって 2 グループに分け、次の課題で、名詞と軽動詞の結合における習得を調査した。

課題 L2 学習者はどんな誤用を犯すのか？

L1 転移によるのか？

L1 語句からの逐語訳や回避等のストラテジーを取るのか？ (p.28)

実験では、40 の V+N コロケーションについて、空所補充テストを行った。テストは、文中の目的語 N が提示されて、V を産出するものだが、コロケーションは全て日本語と逐語的な対応がないものを選んだとする。その結果、以下の 6 タイプの誤用がみられた。

①意識 N と V のミスマッチ 意味的に関連のある動詞を使用

例) *screw/ beat the eggs

②軽動詞の誤用 例) *get/ run a risk

③L1 転移 例) 目をとめる *stop one's eyes / catch one's eyes

息を殺す *kill one's breadth / hold one's breadth

④動詞以外の語の使用 前置詞や形容詞など

⑤コロケーションの混同

⑥名詞形態素的同義語 例) take action *act action

(p.32-34 から抜粋;筆者翻訳)

①と②の誤用が突出しており、2 つとも、上級学習者のエラー割合の方が初中級よりも高かった。Miyakoshi は、調査の結果を次のようにまとめている。

(1)「学習者はコロケーションを産出する際に、L1 知識を非常に活用する (p.38)」として「コロケーション・エラーの 61%は、アラビア語からの負の転移であることを発見した (p.38)」という Mohmoud (2005) を紹介している。

(2)「同じ意味を持つ語に異なったコロケーション使用制約があり、それらの語は特定の組み合わせでしか生じないことに学習者は気付いていない。(p.39)」

- (3) 「学習者は軽動詞の使用に困難がある。(p.39)」
- (4) 「一般的英語力とコロケーション産出知識とは相関がある・・・(中略)・・・しかし、上級学習者でも、コロケーションに関して、困難がある。(p.39)」

3.2.4 習得難易に影響を及ぼす要因

日本語教育で習得難易に影響する機能動詞結合自体の特性を調査したものに、先述の庵(2010)がある。庵は、漢語サ変動詞で「非対格自動詞の場合、母語話者は概ね『される』を回答しないのに対し、中国語母語話者は『される』を回答している割合が相対的に高い場合がある(pp.176-177)」と述べ、「『非対格性の畏』に類する現象(p.180)」が、日本語学習にも影響を与えている可能性を述べている。

機能動詞結合ではないが、「名詞+動詞」における漢字使用が、日本語習得に及ぼす影響について調査した研究に小森・三國・徐・近藤(2012)がある。小森外は日本語のS語の名詞で、中国語と同じ共起語を取るものと、中国語と同じ共起語とらないものとの、習得に違いがあるかを調べた結果、中国語で同じ共起語をとるS語の方が、テストの得点が有意に高かった。

習得を調査したものではないが、2章で紹介した藤井・上垣(2008b)では漢語事態性名詞の項構造について分析している。後述する本研究の作文の調査結果では、機能動詞結合が取る項の誤用も多く、事態性名詞を文中で逸脱なく用いるためには、構文の中での項の影響も考慮しなければならない。

英語教育では、母語との関わりでWang(2001)を紹介した。Wangによると、習得が困難な[軽動詞+名詞]コロケーションはL1とL2の形式が全く異なるタイプである。その次に困難なのが、対応するL2のタイプがL1にとっては新出となるタイプだった。一方、習得が容易なのは、L2の構文の中にL1と同じ形式が含まれているタイプで、この場合、学習者は自分と同じ形式を好んで選んでいる。次に容易だったのは、L1とL2の形式が全く異なるもので、インプットが十分ならほとんど困難がないという(3.2.1参照)。

以下では、上記以外の「動詞+名詞」コロケーションの習得に影響を与える要因について調査した研究を紹介する。

3.2.4.1 頻度、意味の透明性、母語

Miyakoshi(2009)は頻度、意味の透明性、学習者のL1が英語の「動詞+名詞」の習得に及ぼす影響を調べることを目的に2つの実験を行った。

「コロケーションの頻度と学習者の運用の関係を調べた実験的調査はほとんどない。しかし、Hatch(1974)によるとインプットの頻度とL2習得とは明らかに関係がある。Miyakoshi(2004)は形容詞述語を含んだコロケーションを調査し、学習者の運用は、目標コロケーションの頻度と正の関係があった。(p.25)」と、頻度を調査対象とする理由を述べている。

またコロケーションの意味的透明性を取り上げる根拠として、Irujo (1986) が字義通りの意味でないことが L2 の比喩的表現の学習を困難にしていると述べていることを挙げている。また、字義通りの意味でないものは L2 学習者にとって難しいが、コアである意味は習得しやすいという Kellerman & Jordan (1977) の心理的有標性とも関連しているとする。(p.26)

調査に協力したのは、アメリカ在住の 66 人の日本人学生で、うち 35 人は英語習得レベルが初中級、31 人は上級だった。

調査材料としたのは、次の 8 つの日本語の軽動詞と、それに対応する英語の「動詞＋名詞」のコロケーションである。

なる	； to be / to become	する	； to do	ある	； to have
とる	： to take	得る	； to get	与える	； to give
受ける	： to receive	作る	： to make		

実験は、英文の中で提示された目的語に適合する動詞を産出する空所補充テストである。実験協力者は、できるだけ多くの与えられた日本語訳にマッチする組み合わせを産出することが求められた。評価は 6 人の英語母語話者が (1) 意図した意味が伝えられているか (2) 自分がその表現を同じ文脈で用いるかについて 6 段階で行った。

◆実験 1 習得における頻度の役割

実験材料とするコロケーションの頻度は、the British National Corpus (BNC) の出現頻度に基づき決定した。BNC コーパスに 150 例以上あるものを高頻度、14 例以下のものを低頻度としている。意味は、すべて透明性の高いものに統制している。

そのようにして 36 の「動詞＋名詞」のコロケーションを選び、次の表のように分類している。

表 3.3 実験 1 の 6 つのコロケーションタイプ

	動詞タイプ	頻度	意味	例
A1	英語と日本語と 同じ軽動詞	高頻度	字 義 通 り	Get a job
		低頻度		Have a cut
A2	英語と日本語と 異なった軽動詞	高頻度		Have lunch (日本語 ; Take lunch)
		低頻度		Make a discovery (日本語 ; Do a discovery)
A3	英語は実質動詞 日本語は軽動詞	高頻度		Fall victim (日本語 ; Become victim)
		低頻度		Cast a ballot (日本語 ; Do a ballot)

Miyakoshi (2009 ; 50)

実験で得た回答によって、困難性のヒエラルキーを提示した（表 3.4）。困難性は、母話話者が文法性判断をし、許容されると判断されたものが産出された動詞全体に占める割合に基づいている。

表 3.4 コロケーションの難易度ヒエラルキー

A1 高頻度 (同じ軽動詞) 60.19%	A2 高頻度 (異なり軽動詞) 44.03%	A1 低頻度 (異なり軽動詞 ⁴ [ママ]) 37.66%	A2 低頻度(同じ軽動詞 [ママ]) 30.68%
			A3 高頻度 (実質動詞) 29.94%
			A3 低頻度 (実質動詞) 27.63%
易 <-----> 難			

(% は、許容された文法判断の割合)

Miyakoshi (2009 ; 74)

文法性判断で「高く評価された学習者の産出の割合は、高頻度 A2 タイプ (44.03%) よりも高頻度 A1 (60.19%) タイプのほうが著しく多い。(略) 高頻度 A2 タイプ (44.03%) のコロケーションは、低頻度 A1 タイプ (37.66%) よりも高く評価されている。(略) 低頻度 A1 タイプ (37.66%) は、低頻度 A2 (30.68%) よりも著しく高い得点を得ている。(略) 他の 3 つのタイプ (A2 低頻度、A3 高頻度、A3 低頻度) に大きな違いはない。(P.94)」

このヒエラルキーから、以下が示されるとする。

- ① 軽動詞を含んだコロケーションは実質動詞の場合よりやさしい
- ② 軽動詞を含んだコロケーションの中でも、頻度の高いものが低いものよりやさしい
- ③ 実質動詞の中で頻度の低いコロケーションと高いコロケーションに有意差はない

Miyakoshi は実験 1 で、4 つの要因、即ち、頻度、L1 に該当する「動詞+名詞」の有無、軽動詞か実質動詞か、用いる軽動詞が日英で同じかどうかに関して分析したが、その結果を、やさしいタイプと難しいタイプに分け、次の表に示している。

表 3.5 コロケーションタイプの難易

変数	やさしいタイプ	難しいタイプ
(1) 頻度	高頻度	低頻度
(2) L1 該当の有無	L1 該当有	L1 該当無
(3) 軽動詞対実質動詞	軽動詞	実質動詞
(4) 軽動詞の異同	同じ軽動詞	異なる軽動詞

Miyakoshi (2009 ; 112)

⁴ 原典では(異なり軽動詞)となっているが(同じ軽動詞)の間違いだと思われる。
同じく、右上段の A2 低頻度の(同じ軽動詞)は(異なり軽動詞)の間違いと思われる。

◆実験 2 習得における意味の役割

意味的透明性によって、30の「動詞＋名詞」のコロケーションを選んでいる。透明度は、母語話者が1～10までを評価したという。透明度1は字義通りではないもので、透明度10は字義通りのものである。頻度は、高頻度でも低頻度でもないものに統制したとする。

30のコロケーションは下の表のように6つにタイプ分けされていた。

表 3.6 実験 2 の 6 つのコロケーションタイプ

タイプ	動詞タイプ	意味	例
A1	英語と日本語と 同じ軽動詞	字義通り	Do a project
		抽象的	Have an ear (for)
A2	英語と日本語と 異なった軽動詞	字義通り	Take an exam (日本語；試験を受ける)
		抽象的	Take a dive (日本語；下落する)
A3	英語は実質動詞 日本語は軽動詞	字義通り	Develop cancer (日本語；癌になる)
		抽象的	Bear witness (日本語；目撃する)

Miyakoshi (2009 ; 122)

実験 1 と同様、得られた回答を母語話者が文法性判断をし、許容されると判断されたものが産出された動詞全体に占める割合によって、困難性のヒエラルキーを提示している。

表 3.7 コロケーションの難易度ヒエラルキー

A1 字義通り (同じ軽動詞) 53.92%	A1 抽象的 (同じ軽動詞) 44.37%	A3 字義通り (実質動詞) 34.83%	A2 抽象的 (異なり動詞) 23.36%	A3 抽象的 (実質動詞) 14.36%
A2 字義通り (異なり軽動詞) 50.32%				
易 <-----> 難				

(% は、許容された文法判断の割合)

Miyakoshi (2009 ; 146)

字義通り A1 タイプ (53.92%) と字義通り A2 タイプ (50.32%) には有意差はなかったという。しかし、他の組み合わせには、統計的に著しい差が見られたとする (A2 字義通り vs. A1 抽象、A1 抽象 vs. A3 字義通り、A3 字義通り vs. A2 抽象、A2 抽象 vs. A3 抽象)。

「このヒエラルキーは、字義通りのコロケーションは抽象的なものよりやさしいということを示している。軽動詞コロケーション(A1、A2)と実質動詞コロケーション (A3) の両方で、字義通りコロケーションは抽象的なものよりやさしい。p.146」と結論している。

3.2.4.2 高頻度動詞の多義性

3.2.2 の過剰／過少使用で取り上げた **Altenberg & Granger (2001)** は、英語学習者の高頻度動詞 MAKE の使用について調査し、上級学習者でも高頻度動詞には非常な困難があると述べている。

Altenberg & Grange は MAKE には異なった意味と用法があると言って、8つの主要なカテゴリーを挙げている。

- | | | |
|---|-------------------|--|
| 1 | (創造の結果として)何かを作り出す | make furniture, make a law |
| 2 | 脱語彙化(機能動詞)用法 | make a distinction / a decision / a reform |
| 3 | 使役用法 | make sb believe sth |
| 4 | (金を)かせぐ | make a living |
| 5 | 連結動詞用法 | she will make a good teacher |
| 6 | make it (イデオムの) | if we run, we should make it |
| 7 | 句／前置詞用法 | make up, make out of |
| 8 | 他の用法 | make good, make one's way |

そして、MAKE の主要な用法は、脱語彙化(機能動詞)と使役であるとする。

脱語彙化用法は、最初は非常に‘安全’そうに見せていながら、問題児としてあらわれる裏切り者である。それは、使役用法においても同様である。・・(中略)・・高頻度動詞は初期の指導課程で出会うが、一度教えられるとそれらは無視されやすい。これは不幸なことである。なぜなら、これらの動詞は非常に複雑なのに、学習者は高頻度動詞の文法、語彙パターンについて、非常に大まかな知識しか持たない危険性がある。
(pp.189-190 : 筆者翻訳)

3.2.4.3 語結合の制約程度

機能動詞結合ではないが、**Nesselhauf (2003)** はドイツ語を母語とする上級英語学習者のエッセイで、**take a break** のような [動詞-名詞] コロケーションを対象に「学習者がコロケーションを産出する際の誤用タイプを分析し、語結合の制約程度と学習者の L1(母語)がコロケーション産出に及ぼす影響を調査した (p.223)」。

Nesselhauf は、動詞の意味に基づいてコロケーションを定義づけ、コロケーションとは「名詞の使用には制限がないが、動詞の意味が制限されているので、用いられている意味での動詞は特定の名詞としか結びつかないもの (take a picture / photograph but *take a film / movie) (p.226)」だとする。**Nesselhauf** は、ある動詞が、それが用いている意味で、いくつもの名詞と結びつきうるかで、コロケーションの制約程度を判別した。

Nesselhauf は調査の結果を次のように述べている。

制約が中程度の結合の誤用割合が最も大きく、反対に、(pay attention や run a risk のような) RC1 に分類される結合 (筆者注; 制約の大きいコロケーション) の誤用が最も少ないことが分かった。学習者は、動詞がいくつかの名詞としか結びつかない結合の制約には気づくが、(exert, perform や reach のように) 動詞が広範囲の名詞と結びつく結合の制約にはあまり気づかないようだ。この現象は、次のように説明される。即ち、RC1 タイプの結合は全般的に習得されやすく、産出されやすいが、RC2 タイプ(筆者注; 制約が中程度のコロケーション)の結合は学習者によって、より創造的に(時には創造過剰に)組み合わせられるからである。

(p.233)

「制約程度が学習者にとって困難な語結合に与える影響は比較的少なかったのに対し、学習者の L1 は、先行研究が予測したよりも非常に大きな影響を及ぼしていることが分かった (p.223)。」そこで、次に Nesselhauf が学習者の L1 コロケーション制約がコロケーション産出に及ぼす影響を調査したところ、L1 の影響による誤用は誤用全体の 45%を占めていた。Nesselhauf は、コロケーションを教える際には、共起する語彙要素を前置詞や冠詞等を含めた全体を対象とすることに加え、学習者の L1 を実際に参照することが重要であると結論付けている。

3.3 L2 先行研究からの示唆

機能動詞を取り上げた先行研究では、作文やエッセイを分析したもの (Altenberg & Granger, 2001; Wang & Shaw, 2008; 鈴木, 2009; 李, 2012) と実験によるもの (庵, 2010; 黄, 2017; Wang, 2001; Miyakoshi, 2009) の 2 種類がある。それぞれ 1 つの調査方法を取っているが、作文だけでは学習者は自信が持てるものだけを産出するので回避を見ることができない。また、実験だけでは、すべての対象をとりあげるわけには行かないので調査者が注目する限られた材料しか調査できず、それ以外のものを見ることができない。理想的には、学習者の作文等の産出分析と実験との両方からのデータを組み合わせで総合的に考察することが望ましい。

また、鈴木 (2009)、李 (2012) は調査対象としてスルを、また Altenberg & Granger (2001) は MAKE をとりあげ、それらがどのような語と結びつくかを調査している。つまり、機能動詞を取り上げ、それにどのような名詞が結びつくのかという調査方法をとっている。しかし学習者の運用という面から考えると、特に日本語の場合、逆方向で事態性名詞にどのような動詞が結びつくのかを調査するという方法のほうがよいのではないだろうか。なぜなら、機能動詞結合の主要な意味は名詞にあるので、作文等の産出の場合、学習者は自分の表現したい内容を持つ名詞をまず念頭に置き、次にそれを文中で用いるためにどのような動詞を用いることができるかというプロセスを取ると思われるからである。特に CLJ の場合、日中で同形同義の事態性名詞を使用することができるので、「事態性名詞 → 機能動詞」というプロセスになるのではないだろうか。

また、機能動詞結合の場合、「事態性名詞+機能動詞」で複合動詞のような働きをしているので、名詞と動詞を切り離さず「名詞+動詞」のペアを調査単位に据える視点も必要だと考える。さらに「名詞+動詞」のペアを調査対象とするだけでも不十分で、そのペアが文脈の中でどのように用いられるのかも分析する必要がある。Wang (2001)、Miyakoshi (2009) 及び李 (2012) は、「名詞+動詞」のペアを調査対象としてはいるが、その文中でのふるまいについては見ていない。Nesselhauf (2004) では、目標言語に実際に存在する「名詞+動詞」の組み合わせでも、誤った文脈で用いるために、意図した意味が伝えられないもののがかなり見られるので、誤用を見る際には、文脈を考慮する必要があるとしている。しかし、Nesselhauf (2004) は今後の研究の方向性を示唆するもので、本格的な調査は行っていない。

鈴木 (2009) は「コロケーションの結びつきは正しいが文脈を見ると誤用であると判断される『文脈上の誤用』(p.65)」があるとし、「コロケーションの誤用は・・・(中略)・・・文脈などコロケーションの『外』の情報についても分析を進める必要がある。(p.74)」と述べている。鈴木は文脈も含めた分析を提示してはいるが、鈴木『文脈上の誤用』というものは意味的に不適合なものをさし、統語的な側面は指摘していない。前章で述べたように、機能動詞結合は、名詞と動詞「する」の間に助詞「を」が入るか入らないかで修飾語の形が変化するなど、文中での統語的ふるまいを見ることが重要である。

調査内容を見ると、機能動詞を取り上げた先行研究では、誤用要因を分析したものが多い。その多くは、誤用要因として L1 転移のみを取り上げている (Wang, 2001 ; Wang & Shaw, 2008 ; 李, 2012)。Wang では 'Light verb + Noun' の習得は L1 転移によると明確に結論づけている。それに対し、Wang & Shaw は、「学習者の母語干渉はコロケーション使用において否定できない役割を果たしているが、・・・(中略)・・・調査されたコロケーションの正用ないし誤用は、学習者の言語間で対応する『候補』の探索によって単純に引き起こされたのではない。(p.223)」と、L1 転移とだけすることに疑問を呈している。

Altenberg & Granger (2001) は、学習者の誤用は、すべてが L1 に対応する語に置き換えられるわけではなく、「誤用は言語内のものもあるし、言語間のものもある (p.180)」としている。

鈴木 (2009) も誤用原因を L1 転移だけに帰すべきではないとする。鈴木『文脈上の誤用』の調査では「母語の直訳をしたと考えられる誤用は全体で 49.1%と、半数以下にとどまっている。・・・(中略)・・・本研究の分析から、コロケーションの誤用の原因が母語だけではなく、その外的原因も重視すべきだといえる (p.73)。」

英語学習者の軽動詞の使用を調査した Miyakoshi (2009) では、①意識 ②軽動詞の誤用 ③L1 転移 ④動詞以外の語の使用(前置詞や形容詞など) ⑤コロケーションの混同 ⑥名詞形態素的同義語 と 6 タイプの誤用が見られたという (3.2.3 参照)。日本語の機能動詞結合の使用における誤用でもこのようにタイプ分けできるのであろうか。またこれ以外の誤用は見られないのだろうか。

黄(2017)は機能動詞結合の誤用を「L1の影響によるもの」と「日本語の能力が不十分であることにより起こったと考えられる誤用」とを区別している。しかしながら、機能動詞結合を調査対象としているにもかかわらず、後者の「日本語の能力が不十分であることにより起こったと考えられる誤用」を分析した内容は、一般的なコロケーションの誤用分析(例;ヲ格名詞と類似した意味を動詞にして用いた誤用)だけとなっている。わざわざ機能動詞結合をとりあげたのであれば、他のコロケーションとは異なる機能動詞結合の特殊性に言及することが望まれる。

誤用要因として、L1の影響以外のものを取り上げた他の研究に、Altenberg & Granger (2001)がある。Altenberg & Grangerは、学習者が母語話者に比して脱語彙化動詞を過少使用する問題を取り上げている。過剰使用か過少使用かを調べた研究で、機能動詞(軽動詞/脱語彙化動詞)を調査対象にしたものはAltenberg & Grangerだけである。軽動詞ではないが「Verb-Noun」のコロケーションを対象にした調査では、Howarth (1996)、Laufer & Waldman (2011)、Satake (2015)がある。これらの研究では、英語のNSとNNS⁵のコーパスを比較調査し、NNSはNSと比べ、動詞-名詞コロケーションを過少使用していると報告している。

Altenberg & Grangerが過剰使用か過少使用かを調べたのは、1つの動詞MAKEについてだけであるが、日本語の機能動詞一般についても過少使用が見られるのだろうか。

これまで見てきたL1の影響を調べた研究では、Wang & Shaw (2008)が中国語を母語とする英語学習者とスウェーデン語を母語とする英語学習者と、異なった母語を持つ学習者を調査している。しかし、日本語教育の「名詞+動詞」コロケーションを対象とした研究では中国語を母語とした学習者のみを対象とし、他の言語を持つ母語話者との対照分析は行っていない。これでは、その言語を母語とする学習者に特有の影響か、すべての学習者に共通の影響かを見分けることはできない。

日本語習熟度と機能動詞結合の関係を調べた研究に、黄(2017)がある。「中国語を母語とする日本語学習者は、日本語習熟度が高くなると、機能動詞結合の習得がおおむね進んでいる」と結論している。しかし、Miyakoshi (2009)の調査では、上述の意識、軽動詞の誤用の2つともで、上級学習者の誤用割合の方が初中級よりも高かった。

軽動詞ではないが「Verb-Noun」のコロケーションを対象に調査したHowarth (1996)、Laufer & Waldman (2011)、Satake (2015)でも黄とは異なった結果だった。Howarthでは、学習者の一般的な言語習熟度と使用されたコロケーションの数及び許容度は無関係であった。またLaufer & Waldmanでは、上級学習者は初中級学習者よりも著しく多くの誤用コロケーションを産出しており、能力とコロケーションの正確さとは反比例するとしている。Satakeでも「不自然な動詞と名詞の組み合わせの割合は、習熟度と共に増加する(p.118)」という。

⁵ Non Native Speaker : 非母語話者

Miyakoshi (2009)は、このような現象を説明するものとして Wray (2002)の「言語習得定型モデル」を紹介している。Wray のモデルは、いかに子供が、未分析のコロケーションを、成長と共に解きほだき、分析するかを4段階で示しているという。第1段階は全体的プロセスの段階で子供はゲシュタルト的に発話する。第2段階は主に分析的で、子供は語や形態素を特定し、それらがどう結びつくかに興味を持つ。第3段階では、定型表現とコロケーションが再び子供のアウトプットの中で大きな割合を占めていく。第4段階で全体的プロセスと分析的プロセス間のバランスが保たれる。

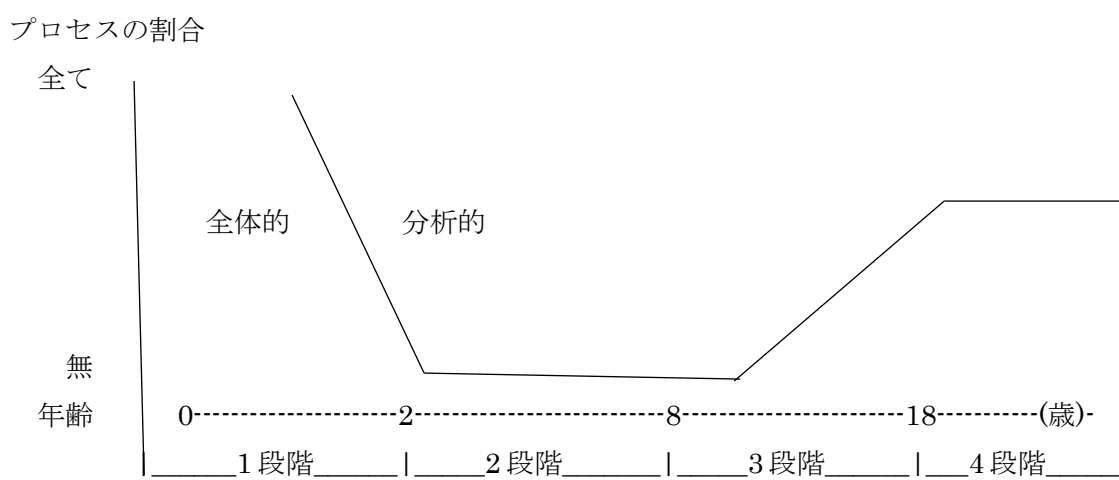


図 3-1. 誕生から成人までの全体的プロセスと分析的プロセスのバランス

Miyakoshi (2009) p.9

さらに、機能動詞調査ではないが日本語学習者の「名詞+動詞」コロケーションの使用と日本語能力との関係を調べた劉 (2017) は、なぜ上述のような異なった主張がなされたのかに対して示唆を与える結果を報告している。劉の調査では、誤用数は下位群から中位群までは増えていき、上位群になると大幅に減っていた。このように「学習者の L2 能力が上がるにつれ、誤用が一時的に増えるが、その後習得が進むと、誤用が減っていく (p.71)」理由を、劉は McLaughin (1990)の 再構築理論 (restructuring) によって考察している。劉によると、McLaughin は「学習者がより高いレベルの言語能力に達する際に、言語知識の再構築が起こると述べている。再構築の初期段階においては、誤用が増え、流暢さが損なわれるが、その後、自動化が起こり、学習者はより高い言語レベルに到達すると論じている。(p.71)」

機能動詞結合の習得は日本語能力が上がると共に向上していくものかどうか、更なる調査が必要である。

一方、先行研究では、「N+V」コロケーションが、どのような場合に習得が容易であるか困難であるかを調査している。小森外 (2012) は L1 と L2 で同じ共起語を取るもの、

そして Wang (2001) は、L1 と L2 の構文で軽動詞、実質動詞の形式が同じものの習得が容易であるとしている。

Miyakoshi (2009) では、高頻度でかつ L1 と L2 で同じ軽動詞を含むコロケーションの習得が最もやさしく、意味的には、字義通りのコロケーションが抽象的なものより習得が容易であるとしている。Altenberg & Granger (2001) は、脱語彙化動詞は高頻度であるが、高頻度の動詞は多義性があり、非常に複雑なのに無視されやすく、学習者にとっては困難があると結論づけている。

以上の先行研究では、L1 干渉など、機能動詞結合の習得に関わるマイナスの側面しか見えていないが、習得を促進させるプラスの面を取り上げることが重要である。鈴木 (2014) は、動詞「する」と共にどのような語が用いられるかを論じる中で、これまでのコロケーション習得研究とは異なった新たな視点を提示している。鈴木が対象としたのは機能動詞用法に限らず、すべての用法に関わる「する」であるが、鈴木は「学習者のコロケーション使用を、その時点で学習者が持つ中間言語に基づく産出 (p.123)」と見て、「中間言語分析」を行っている。

第4章 研究の概要

4.1 研究方法

本研究では、機能動詞結合の産出を対象とし、調査分析を行う。なぜ、理解ではなく産出を対象とするのかというと、機能動詞結合は語同士の慣用的結び付きであることからコロケーションの一種と考えられるが、学習者にとってコロケーションで問題となるのは産出であり、理解は問題がないとされるからである (Nesselhauf, 2003 ; Laufer & Girsai, 2008)。そこから、L2 のコロケーション能力を調査した研究の多くは、L2 のコロケーションの理解知識ではなく産出知識を調査している (Bahns & Eldaw, 1993; Nesselhauf, 2003; Siyanova & Schmitt, 2008)。

「コロケーションの性質上 (筆者加筆 : 即ち、非常に意味的透明性が高い)、学習者にとって、理解は普通問題がないので、学習者の問題の所在は、コロケーションの産出を分析することにある。」 (Nesselhauf, 2003 ; 223-4、筆者翻訳)

Gabry's-Biskup (1990) がポーランドの英語学習者を対象に実験を行ったところ、英語のコロケーションからポーランド語への翻訳は 100%正しかったが、ポーランド語のコロケーションから英語への翻訳には正解がなかったと報告している (Bahns & Eldaw, 1993; 103 より引用、筆者翻訳)。

本研究の目的である機能動詞結合の特殊性が習得に及ぼす影響を明らかにするために、1章の研究課題で述べたように、まずは学習者が機能動詞結合をどのように習得しているかの実態把握を目的とした調査を行う。

先行研究を見ると、黄 (2017) は日本語能力の向上と共に「名詞+動詞」コロケーション習得も進むとするが、Howarth (1996) では一般的な言語習熟度とコロケーション習得とは無関係だという。Miyakoshi (2009)、Laufer & Waldman (2011)、Satake (2015) では、上級学習者は初中級学習者よりも著しく多くの誤用コロケーションを産出するとさえする。

本調査では、日本語能力が上がると共に機能動詞結合の習得も進むのかという問題を軸に、学習者が機能動詞結合をどのように習得しているかの実態を見ていく。そのために、作文分析と実験を行う。

分析に用いる作文は、次の3つのコーパスである。

国立国語研究所 : 「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース オンライン版」

東京外国語大学 : 「日本語学習者言語コーパス」

華東法政大学 : 「華東法政大学作文コーパス」

¹ make a decision, a bitter disappointment などのコロケーションは、読む、聞くなど受容的に接する場合にはすぐに意味が理解できる。しかし、学習者が実際にそれらを用いて書く、話すなどの産出を行うのは困難である。

本調査で対象とするレベルは中級と上級である。機能動詞結合を学習するには、ある程度の日本語力が要求されるため、初級段階の学習には、ほとんど機能動詞結合が現れないので、初級は調査対象に含めない。

作文分析では、まず、中級 CLJ の作文を分析し、機能動詞結合の使用実態を把握する。次に上級 CLJ の作文を分析し、中級の分析結果と比較対照し、日本語学習歴によって同一母語内で機能動詞結合の習得に違いがあるかを見る。さらに、中級の非漢字学習者の作文分析を行い、中級 CLJ の分析結果と比べ合わせ、母語の漢字使用の有無によって言語間で機能動詞結合の習得に違いを生ずるかを見る。また、日本語母語話者の作文分析も行い、中級 CLJ の分析結果と比較対照し、母語話者と学習者とで機能動詞結合の産出使用に違いがあるかを見る。

作文では、言い換えや使用回避をしている可能性があるため、強制的に産出を促す実験も行う。実験では、国内の日本語学校で日本語を学び、日本語能力試験 N1 または N2 を取得した上級学習者を対象に、空所補充テストを行う。

これら、すべての調査分析結果を総合的に考察し、中国語を母語とする学習者は日本語能力が上がると共に機能動詞結合の習得も進むのか、また機能動詞結合の特殊性は日本語を習得する際にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。

4.2 用語

本稿では、「機能動詞結合」は、村木（1985）にならい、「連絡をとる」「考慮に入れる」などの「機能動詞を含む語結合 (p.15)」とする。「連絡する」「考慮する」などの「する」は「最も基本的な動詞」で、「機能動詞の典型例である。」(p.19)

「事態性名詞」とは、機能動詞と結びつく事態を表す名詞とする。本稿では、藤井・上垣（2008 b）にならい、事態性名詞は次の4種から成るものとする。

① 動名詞（サ変動詞）：

スルと直接結合して動詞を作る。 例) 「刺激」を与える、「許可」を受ける

② 連用形名詞：

スルと必ずしも助詞「を」なしで直接結合しないもの。

例) 「疑い」をかける、「悩み」を持つ

③ 外来語：

スルと直接、助詞「を」なしで結合するもの。

例) 「アドバイス」を受ける、「コミュニケーション」を持つ

スルと直接結合しない語 例) 「バランス」をとる、「ショック」を受ける

④ その他：

言語間対照を念頭にした広義のもの

例) 「苦情」をいう make a complaint、「噂話」をする spread a rumor
(pp.432-433 より)

「機能動詞」は、「スル動詞」と「支援動詞」から構成されるものとする。「スル動詞」は、「攻撃する」「実施する」のスルであり、「支援動詞」は「誘いをかける」「連絡をとる」の「かける」「とる」など、スル以外の機能動詞のすべてを含む。

この支援動詞という用語と定義は、先行研究で述べた藤井・上垣（2008 a）を継承したが、藤井・上垣では、スル動詞も含めた全体を支援動詞と呼んでいる（詳しくは、2.2.2 参照）。本稿では用語上の必要性から、便宜上、藤井・上垣の枠組みからスル動詞を除いたものを「支援動詞」とし、スル動詞とは区別する。

第5章 作文調査の枠組み

6～9章では、コーパスを用いて学習者と日本語母語話者の作文分析を行う。この章では、その分析を行うに際しての枠組みを提示する。

5.1 調査目的

事態性名詞と機能動詞が結びついた機能動詞結合について、村木は、機能動詞は名詞の添え物に過ぎず、意味的に「空疎」であると述べた。そこにみられるように、機能動詞結合は、それを構成する事態性名詞の意味さえ分かっているならば、文脈の中で読む、聞くなどして、受動的に接する限り、理解は容易である。特に、中国語を母語とする学習者の場合、事態性名詞の多くは漢語で、その漢語の中には日中で共通するものが多いため、さらに理解が容易になる。しかし、機能動詞結合を「理解」と同じように、会話や文章で産出的に用いることができるのだろうか。理解が容易であればあるだけ、学習者は問題の所在に気づかず、機能動詞結合を学習の対象としては、看過してしまっているように思われる。

本章では、CLJの書いた作文を調査分析し、以下の疑問点を明らかにする。

- ・ CLJは、ライティングにおいて適切に機能動詞結合を産出使用しているか。
- ・ 使用数の多さだけでなく、多様な結合を使いこなして、日本語で豊かな表現ができているか。
- ・ 日本語学習歴の積み重ねとともに、機能動詞結合の習得も進んでいるのか。
- ・ CLJは母語の中国語で日本語と同じ漢字を使用しているが、そのことが機能動詞結合の習得に影響を及ぼしているか。
- ・ CLJは機能動詞結合の産出においてどのような誤用を犯すのか。
その誤用はどのような要因によって引き起こされるのか。
誤用の内容と誤用タイプは、日本語能力レベルによって違いがあるか。
- ・ 機能動詞結合の使用は、CLJと日本語母語話者とで違いがあるか。
違いがあるとしたら、どのような点が違うのか。

以上の疑問点を解明するために、6章（調査1）では、中級CLJを対象に機能動詞結合の習得状況と習得における問題点を調べ分析し、調査の土台を構築する。それをもとに、7章（調査2）では上級CLJの作文、8章（調査3）では母語で漢字を使用しない中級学習者の作文、さらに9章（調査4）では、日本語母語話者の作文を調べ分析し、それぞれを6章の中級CLJの調査結果と比較対照し考察する。以上の作文調査の結果全体は10章でまとめて提示する。

5.2 調査対象データ

作文データは、オンライン上で公開されている次の3つのコーパスを用いた。

国立国語研究所：「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース オンライン版」

東京外国語大学：「日本語学習者言語コーパス」

華東法政大学：「華東法政大学作文コーパス」

例文で、末尾に㊦とあるものは国立国語研究所、㊧とあるものは東京外国語大学、㊨とあるものは華東法政大学のコーパスを利用したものである。

語彙の偏りが出ないように、作文テーマは多分野にわたるようにした。使用した作文のテーマは次の通りである。

- 「国の行事」
- 「たばこについてのあなたの意見」
- 「外国からの援助について」
- 「アルバイトについて」
- 「英語を大学の必修科目にすべきか」
- 「私の好きな○○○」
- 「インターネットと私の生活」
- 「現代若者の生活」
- 「子供の時の夢」
- 「私の友人」
- 「学習到達度調査について」
- 「読書の方法」
- 「私の失敗談」
- 「私の長所と短所」
- その他

なお、コーパス作文の中で、学習歴の記載のないものは、データから外した。

5.3 分析方法

作文からの機能動詞結合の抽出は、以下の通りに行った。

<分析範囲>

機能動詞結合は、コロケーションの一種ではあるが、事態性名詞と機能動詞の結びつきであるため、特殊な性質を有している。

村木 (1991)は、機能動詞とは「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞 (p.203)」であると規定し、機能動詞結合では「語結合全体が動詞とは異なる独自の格支配を見せる (村木、1985: 22)」としている。その例として、村木

表 5.1 支援動詞構文の判別テスト (藤井・上垣、2008b ; 434 から抜粋)

テスト (1) 軽動詞「する」が直接(「を」なしで)サ変動詞を構成するか 例：連絡をとる → 連絡する <u>する ⇒合格</u>
テスト (2) 目的語名詞を修飾する形容詞が、動詞句を修飾する副詞に言い換え可能か 例：緊急の連絡をとる → 緊急に連絡をとる <u>言い換え可能 ⇒合格</u> 頻繁な>頻繁に； 緊急の>緊急に； 突然の>突然に； 大きな>大きい；長期の>長期に
テスト (3) 目的語名詞句を「何を」で問う疑問文が自然か 例： Q: *何をとったの？ A: 連絡をとったの <u>疑問文が自然でない ⇒合格</u>
(1)& (2)& (3)すべて合格または (1)は不可で (2)& (3)合格 ⇒支援動詞構文 上記以外 ⇒非支援動詞構文

注) スル動詞結合の判別も含む

表 5.1 に注をつけ、「スル動詞結合の判別も含む」としたのは、テスト (1) で「する」が直接(「を」なしで)名詞と結びつく場合は、サ変動詞を構成するので問題なく機能動詞結合であるが、そうでない場合には(2)(3)のテストが必要になるからである。「N+を+する」には、「事態性名詞+を+する」だけではなく「普通名詞+を+する」があるので、N が事態性名詞か、普通名詞であるかを判別しなければならない。

影山 (1993 ; 256) に掲載されている「普通名詞+を+する」の例を挙げる。

- ・日曜日は家族でトランプをする。[ゲームやスポーツなどの活動]
- ・父は町医者をしています。[教師、弁護士、運転手などの職業]
- ・課長はいつも洒落たネクタイをしている。[手袋、エプロン、リボン、ネックレスなどの装身具: (影山 1980)]
- ・子供は不思議そうな顔をしていた。[変な形、きれいな色、青い目、長い髪のような譲渡不可能部分: (影山 1990)]

この判別テストでは、「名詞+動詞」の結合が機能動詞結合かそれ以外の一般的な結合であるのかを判別するだけでなく、名詞が事態性名詞であるのか、普通名詞であるのか、また動詞が機能動詞か、普通の動詞であるのかも判別することができる。

このことを、判別テストを用いて説明する。

名詞の判別

- A テスト(1) 迷惑をかける→迷惑する する ⇒合格
 テスト(2) ひどい迷惑をかける→ひどく迷惑をかける 言い換え可能 ⇒合格
 テスト(3) Q: *何をかけたの？ A: 迷惑をかけたの 疑問文が自然でない ⇒合格
 (1)& (2)& (3)すべて合格 ⇒機能動詞結合

- B テスト(1) お湯をかける→*お湯する する不可 ⇒不合格
 テスト(2) 熱いお湯をかける→*熱くお湯をかける 言い換え不可能 ⇒不合格
 テスト(3) Q: 何をかけたの? A: お湯をかけたの 疑問文が自然 ⇒不合格
 (1)& (2)& (3)すべて不合格 ⇒非機能動詞結合

AとBでは、同じ動詞「かける」を用いているのにAは機能動詞結合となり、Bが機能動詞結合とならないのは、Aの名詞「迷惑」は事態性名詞であるが、Bの名詞「お湯」は普通の名詞だからである。

動詞の判別

- C テスト(1) 誘いをかける→*誘いする する不可 ⇒不合格
 テスト(2) しつこい誘いをかける→しつこく誘いをかける 言い換え可能 ⇒合格
 テスト(3) Q: *何をかけたの? A: 誘いをかけたの 疑問文が自然でない ⇒合格
 (1)は不可で (2)& (3)合格 ⇒機能動詞結合

- D テスト(1) 誘いを断る→*誘いする する不可 ⇒不合格
 テスト(2) しつこい誘いを断る→*しつこく誘いを断る 言い換え不可能 ⇒不合格
 テスト(3) Q: 何を断ったの? A: 誘いを断ったの 疑問文が自然 ⇒不合格
 (1)& (2)& (3)すべて不合格 ⇒非機能動詞結合

CとDでは、同じ名詞「誘い」を用いているのに、Cは機能動詞結合となりDが機能動詞結合とならないのは、Aの動詞「かける」は機能動詞であるが、Bの動詞「断る」は普通の動詞であるからである。

<機能動詞結合の抽出>

上記判定基準に基づいて、筆者が、データ作文の中から機能動詞結合の抽出を行った。

<正誤判定>

次節(5.4)で提示する誤用タイプに含まれるものを誤用とし、それ以外のものを正用として、筆者と日本語教師1名の2人で、抽出された機能動詞結合の40%について正誤判定を行った。コーエンのカップ係数を求めた結果、 $k = .617$ で実質的に一致しているとみなされることが確認されたので、残りのデータについては筆者が判定した。

5.4 分析項目

本研究で行う作文分析は、5.1の作文調査の目的を踏まえ、以下の項目を調査分析する。これらの項目は作文コーパスを事前調査して取り出したものである。対象となる作文は、中級CLJ、上級CLJ、中級非漢字学習者、及び日本語母語話者のものである。ただし、日本語母語話者の誤用分析はない。

I 使用機能動詞結合

- (1) 延べ数と異なり数
- (2) 正用数と誤用数 / 正誤割合
- (3) 種類別機能動詞数 <スル動詞/支援動詞/機能動詞欠如>

II 正用ではどのような機能動詞結合が多用されたか

III 誤用タイプ

[A] 日本語に存在しない事態性名詞と動詞の組み合わせ

1. 「非結合語」：日本語に存在しない名詞と動詞の組み合わせ

(1) 名詞の誤り

- ① 「非日本語」：日本語に存在しない語を事態性名詞として使用しているもの

例) *儲金する

- ② 「非事態性名詞」：日本語の名詞であるが、事態性を有さないもの

例) *娯楽をする

(2) 動詞の誤り：文脈から判断して、名詞の選択は正しいが動詞に問題があるもの

- ① 「非慣用動詞」³：文脈から、筆者の意図は読み取れるが、慣用的にその名詞には結びつかないものを機能動詞として用いているもの

例) *〈アルバイトをすれば〉いろいろな社会経験が取れます。Ⓜ

(社会経験ができます)

*私はもう十八年ぐらゐきました。いろいろな失敗を受けました。Ⓜ

(いろいろな失敗をしました)

(〈 〉は筆者付加 / ()内は下線部に対応すると思われる適切な日本語)

- ② 「機能動詞欠如」(文法上の誤用 I)

：文脈から判断して、機能動詞を用いるべきところで用いていないもの

例) *インターネットも広く応用られている (応用されている) Ⓜ

これは、スル動詞を欠如させて、事態性名詞を直接活用させている。このような

³ 「*社会経験を取る」「*失敗を受ける」などは、伝達しようとする意図は伝わるし、意味的には文脈に合ってもいる。しかし、日本語として非常に違和感がある。それは、これらの「事態性名詞+機能動詞」(機能動詞結合)の組み合わせは日本語にはないからである。

日本語の「名詞+動詞」は、名詞と動詞を任意に組み合わせることができるものもあるが、「事態性名詞+機能動詞」(機能動詞結合)の場合、慣用性があるので名詞と動詞を任意に結び付けて用いることはできない。ある事態性名詞にどの動詞が共起するかは、規則性がないので、学習者は単語をひとつひとつ暗記していくように、機能動詞結合の名詞と動詞の組み合わせをセットでひとつひとつ蓄積していくしかない。

ものは、分析の際には、文法上の誤用に含める。

2. 理由不明：なぜ、その語を用いたのか、推測不可能なもの

例) *勤勉につける④

*せいふはこのくにを、おいていさせなければなりません⑤

[B] 事態性名詞と機能動詞の組み合わせは日本語に存在するものだが、次の点で不適切であるもの

1. 文法上の誤用 II

文脈から判断してその動詞と名詞のペアを用いること自体は適切であるが、文法的に誤りがあるもの

(1) 修飾の誤り

例) *英語の勉強する (英語を勉強する／英語の勉強をする)

: 一語の複合動詞「勉強する」への連体修飾

(2) ヴォイスの誤り 例) *国を復旧させる (国を復興する)

(3) 項の誤り

例) *正月を準備する (正月の準備をする／正月の料理を準備する)

: 単なる修飾語を項としている

(4) 「を」を取れないスル結合への「を」の過剰使用

例) *蒸発をする : 非対格自動詞 (?⁴) への「を」の使用

*英語を勉強をする : 二重ヲ格制約違反

(5) 機能動詞結合内への語句挿入⁵

例) *訓練をよくしなかつたら分かる漢字をおぼえていません。⑥

ただし、上記以外の機能動詞結合と関わりのない動詞の活用、助詞、表記の誤用などは対象外とした。

2. 用法の誤り

文脈から判断して、その事態性名詞と機能動詞のペアを用いること自体が不適切であり、他のペアを用いるべきであるもの。

(1) 名詞の誤り

例) *中国人を了解する (理解する) ⑥

*大学から奨学金の提供を受ける (交付を受ける) ⑥

(2) 動詞の誤り⁶

⁴ 先行研究で述べたように、助詞「を」を取れるかどうかは、非対格説の他に諸説がある。

⁵ 機能動詞結合の特徴として、村木 (1991) は「名詞句と動詞の間に、他の語句がはいりにくいこと (p.231)」を挙げている。

⁶ 非慣用動詞は伝達しようとする意図は伝わるし、意味的には文脈に合ってもいるものであるが、日本語にない名詞と動詞の組み合わせである。用法の誤りはそれと反対に、日本語にある名詞と動詞の組み合わせだが、意味的に文脈に合っていないものである。この例の「影響を受ける」「連絡をとる」は、

例) * (タバコを) 吸う人が吸わない人に、影響を受けるので、
(影響を与える)

* 明日の会議は中止になったと彼から連絡をとったの
(連絡を受けたの)

日本語にあるが、この文脈に合わせるには、それぞれ別の結合「影響を与える」「連絡を受ける」を用いなければならない。非慣用動詞も用法の動詞の誤りも同じ動詞の誤りではある。しかし、前者の場合、学習者は名詞と動詞の組み合わせそのものを学ぶ必要があるが、後者の場合は、既に名詞と動詞の組み合わせはマスターしているので、どのような文脈でその組み合わせを用いるかを学ぶ必要がある。

非結合語の動詞の誤りか、用法の誤りの動詞の誤りかによって、学ぶべき内容が異なるので、この違いを学習者が認識することは重要である。とりわけ用法の誤りの場合、学習者はその名詞にはどの動詞を用いるべきかを自分では習得済みであると思い、問題の所在に気づきがないので注意が必要である。

第6章 [調査1] 中級 CLJ の機能動詞結合習得

本章では、中級 CLJ が作文で産出した機能動詞結合を調査分析し、その習得状況と問題点を探り、機能動詞結合習得において CLJ 一般が抱える基本的な問題点を考察する。その結果を調査全体の枠組みとし、7章では上級 CLJ、8章では非漢字学習者、9章では日本語母語話者、それぞれの作文と本章での中級 CLJ の分析結果を比較対照し、CLJ の機能動詞結合習得の全体像を明らかにする。

6.1 調査対象

調査対象は、日本語学習歴 10～18 か月で、外国語として日本語を学ぶ中級 CLJ 91 名の作文 136 で、1 作文平均文字数は 485 だった。調査は前節で述べた方法で行った。

6.2 調査結果

I 使用された機能動詞結合

表 6.1 は、作文から抽出された機能動詞結合の延べ数と異なり数を正誤別にまとめたものである。

表 6.1 中級 CLJ の作文調査の結果

		総産出数	1 作文平均
	学習歴	10～18 か月	
	学習者数	91	
	作文数	136	
	平均文字数		485
機能動詞結合数	延べ	776	5.7
	異なり	357	2.6
正誤別機能動詞結合数 (延べ)	正用数 (正用割合)	637 (82.1%)	4.7
	誤用数 (誤用割合)	139 (17.9%)	1.0
機能動詞種類別 使用延べ数	スル	683 (88.0%)	5.0
	支援	76 (9.8%)	0.6
	欠如	17 (2.2%)	0.1

注) 正用割合 = 正用数 ÷ 延べ数 / 誤用割合 = 誤用数 ÷ 延べ数

学習者の作文の中で、機能動詞結合は延べ数で 776 抽出され、そのうち正用は 637 で全体の 82.1%、誤用は 139 で 17.9%を占めていた。機能動詞結合は異なり数では、357 あった。また、1 作文平均で用いられていた機能動詞結合は、延べ数では 5.7 で、うち正用 4.7、誤用 1.0 だった。1 作文平均で用いられていた機能動詞結合の異なり数は 2.6 だった。機能動詞の中で、スル動詞と支援動詞をどのように使い分けていたかを延べ数で見ると、スル動詞は 683 (88.0%)、支援動詞は 76 (9.8%) だった。

II 正用で多用された機能動詞結合

正用で多く用いられていた機能動詞結合は次の通りである。

(数字は全作文での出現回数)

勉強する 29 / 練習する 24 / 利用する 16 / 参加する 16 / 成功する 14 / 準備する 12 / 禁止する 11 / 失敗する 11 / 生活する 10 / 努力する 11 / ダウンロードする 11 / 掃除 (を) する 9 / 仕事をする 9 / 注意する 9 / 後悔する 9 / 影響を与える 8

III 誤用内容

表 6.2 誤用タイプ別機能動詞結合

[誤用総数: 143]

A 日本語にない組み合わせ

非結合語の使用				理由不明	計
名詞の誤り		動詞の誤り			
非日本語	非事態性	非慣用動詞	機能動詞欠如 (文法上の誤用 I)		
18 (12.6%)	15 (10.5%)	29 (20.3%)	21 (14.7%)	4 (2.8%)	87 (60.8%)

B 日本語にある組み合わせだが不適切

文法上の誤用 II					用法の誤り		計
修飾	ヴォイス	項	助詞「を」	N・V 間に 語句	名詞	動詞	
13 (9.1%)	8 (5.6%)	7 (4.9%)	2 (1.4%)	0	13 (9.1%)	13 (9.1%)	56 (39.2%)

注) 誤用タイプには 4 例、重複しているものがある。

表 6.2 に提示した誤用結果の具体的事例は以下のとおりである。

なお、例文の後ろの () は、執筆者の伝達意図を推測して筆者が付加したものである。

[A] 日本語にない事態性名詞と機能動詞の組み合わせ

1. 「非結合語」

(1) 名詞の誤り

① 「非日本語」 18

<6-1> * 中国人は大変形式を注重します (重視します)㊦

<上記以外の例>

* 思念する / * 会する / * 紹介する (2 例) / * 儲金する / * 投江自殺する / * 滅滅する / * 暢談する / * 接受する / * 表演をする / * 対歌する / * 遊行をおこなう / * 措施をつかう / * 建白がある / * 摘写られる / * 需用する / * 獲取する

② 「非事態性名詞」 15

<6-2> * 「来年ご健康いたします」とかとお祈りします。㊦

この文の筆者が言い表したいことは『「来年も、健康でありますように」などと祈ります。」ということだと考えられるが、「健康」は日本語では、一般名詞であるのに事態性名詞のように、スル結合をしている。なお、非事態性名詞が用いられた場合、本調査では、下記の通りすべてスル結合になっていた。学習者は、結びつける動詞がわからない時には、スル・ストラテジーをとっているようだ。

<上記以外の例>

* 革命する / * 不合格する / * 観月をする / * 娯楽をする / * 日本語専攻する / * 高度発展する / * 番組をする (3 例) / * 買いませんする / * 頑張る (2 例) / * 教える / * ヘアスタイルをする

(2) 動詞の誤り

① 「非慣用動詞」 29

「非慣用動詞」には、「意識」「スル・非慣用動詞」「L1 ペア」「L1 品詞適用」の 4 種が見られた。

ア. 「意識・非慣用動詞」 (12 例)

対象とする事態性名詞に、意味的に適合するものを動詞として結びつけているもの。<6-3>で示すように、その名詞と動詞の組み合わせによって表そうとした執筆者の表現意図は推測できるが、機能動詞としての慣用性に欠けるので誤用となる。「意識・非慣用動詞」の場合、意味で動詞が結びつけられているので、スル動詞使用は、一つもない。

<6-3> * <読書は>さまざまで、多くの示唆をもらうことである (示唆を得る) ㊦
執筆者は、「多くの示唆を得る」ということを言い表したいのだということが、動詞の意味から容易に推測できる。しかし、「示唆」の場合は、機能動詞結合の慣用性から「もらう」ではなく、「得る」を用いなければならない。

<上記以外の例>

*失敗を起こす／*希望を頑張る／〈先生が〉*授業をやる／*失敗をやる／*損傷ができる¹／*いいアドバイスをあげて／*デートへ行く／*おいのりをあげる／
〈悩む〉感じができる／〈強く〉感じがある／*努力さえであれば

イ. 「スル・非慣用動詞」 (2例)

事態性名詞は適切だが、サ変動詞でないものにスル動詞を接続してしまったもの
<6-4>*英語は必修科目として、特に関心されています。

(関心を持たれています) 華

<6-5>*彼らの生活の近況も関心します。 (近況にも関心があります) 処

ウ. 「L1 ペア・非慣用動詞」 (10例)

中国語の名詞と動詞のペアを持ち込んだと考えられるもの

(後ろの《 》に、該当する中国語を記載)

<6-6> *まわりの人に危害を持ってくる : 《带来危害》(危害をもたらす) ⑩
中国語の名詞と動詞のペアであるかどうかは、その組み合わせが次の4つのいずれかに記載されているものを中国語の名詞と動詞のペアとした。

- ・ 講談社 『日中辞典』相原茂(編)
- ・ 講談社 『中日辞典』相原茂(編)
- ・ 中央研究院資訊科學研究所「中央研究所現代漢語語料庫」
- ・ 国立国語研究所「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース オンライン版」中国語対訳

<上記以外の例>

*安定がある《有安定》／*失敗を受ける《受到失敗》／*発展をあげる《給予発展》／*経験が取れる《吸取教訓》／*努力を通して《通過努力》／*経験を持っている《有経験》／*感覚を持っている《有感覺》／*生活を過ごす《過生活》／*有害がある《有害》

エ. 「L1 品詞適用・非慣用動詞」 (5例)

中国語の品詞分類を事態性名詞に適用して機能動詞を選択したが、日本語の名詞と動詞の慣用的な結びつきではないものである。ここで見られたのは、変化を表す漢語を名詞または形容動詞として、とらえたと考えられるものである。

*理解になる／*深刻化になる (2例) / *発達になる

判定に当たっては、五味・今村・石黒(2006)に基づいた(6.3.3.4参照)。

次の例は、変化を表すものではないが、やはり中国語と日本語の品詞の違いから生じた誤用である。

¹ スル動詞には、その補充形である可能形「できる」、尊敬語「なさる」も含む。ただし、「やる」は本研究ではスル動詞には含まず、支援動詞に属するものとする。なぜなら、森田(1989)によると、スルのくだけた言い方である「やる」は、「あちら側へと進ませる行為」で、「する」と異なり、意志的な行為に限られるからである(p.1165)。

<6-7> *他人の観点を参考すると、・・・(後略) (参考にすると) ㊦

「参考」は日本語では名詞であるのに、中国語では他動詞²であるため、「参考する」と動詞として用いている。

②「機能動詞欠如」 (文法上の誤用 I) 21

ア. 事態性名詞に直接助動詞を接続しているもの (事態性名詞の直接活用) (7例)

<6-8> *インターネットも広く応用されている。 (応用されている) ㊦

<上記以外の例>

*浄化れる / *摘要られる / *破壊られる / *感心られる / *禁止られる / *重視られる

イ. 機能動詞を用いるべきところで用いていないもの

(上記の事態性名詞の直接活用以外) (14例)

<6-9> *私は自立です。 (自立しています) ㊦

<上記以外の例>

*感心でした / *成長につれて / *休学の時 / <気持は> *緊張で / *強調過ぎです / *失敗しました (2例) / *掃除初めます / <アニメ関係の仕事をするという夢を> *実現ため / *放棄だと思えます / *悪い影響を酷くする / *おしゃべりたり / *おしゃべる

2 理由不明 4

なぜ、その事態性名詞に、その動詞を結びつけたのか、推測不可能なもの

*大きい働きを果たす / *勇気をかける / *勤勉につける / *悪い影響をかけてくる

[B] 日本語の機能動詞結合として存在する事態性名詞と機能動詞の組み合わせだが、文法上及び用法上不適切な機能動詞結合

1. 文法上の誤用 II

(1) 修飾の誤用 13

事態性名詞「失敗」「利用」に、助詞「を」なしで直接スルを付け「失敗する」「利用する」とすると、一語の複合動詞となる。にもかかわらず、学習者は名詞扱いをして、<6-10>では名詞「私(の)」を、<6-11>では指示語「その」と形容詞「便利な」で連体修飾している。

<6-10> *私の失敗したことは興味がない学科を選びました。 (私が失敗した) ㊦

<6-11> *その便利な利用するにつれて、・・・(後略) (?それを便利に利用する) ㊦

<上記以外の例>

a. 「[VN をする]」の「を」を補えば可

*幸福な生活して / *会話の練習しながら / *いろいろな失敗した (2例) /

² 判定は石、王 (1983) による

*安全の確保して／*本の発売すること

b. 「VNを^をする」の「を」を補っても不可、または「を」を挿入できないもの]

*自分の努力する／*真面目な練習した／*他の人に悪い影響する／*宮廷貴族の生活する時／*どんな流行したか

(2) 事態性名詞に起因する機能動詞のヴォイスの誤り 8

<6-12> *このドラマは悲劇ですが、ほんとに感動されました。(感動しました)㊦

<6-13> *話す時発音がすごくきれいし、クリアし、感心られました。(感心しました)㊦

ヴォイスの誤りはすべて心理動詞で、中国語の心理動詞が受け身形などを伴って表現されることが多いために生じた誤用である(吉永、2011)。

<上記以外の例> (具体的な例文と誤用理由については、6.3.3.2.2 参照)

*感動された(上例以外に3例)／*感動させて／*感心された／*なんと感動させられる

(3) 取る項の誤用 7

<6-15>は「バドミントン」に「を格」を与えているが、考察で述べるように、「バドミントン」は単なる修飾語であるので、「を格」を取って項となることはできない。ここに提示した<6-14>～<6-20>は全て、同様の項を取れないものに項を与えた誤用である。

<6-14> *私は時々絵画を練習するかわりに、毎日遊びました。

(絵の練習をする)㊦

<6-15> *バドミントを練習する時、まだ技法が悪かった。

(バドミントンの練習をする)㊦

<6-16> *コンテストのために先輩達は私達に練習を行いました。(練習させました)㊦

<6-17> *先生に出し宿題とテストを準備して、全部完成してしまいます。

(テストの準備をして)㊦

<6-18> *毎日ひとびとはたいへんいそがしくて春節を準備しています。

(春節の準備をして)㊦

<6-19> *テストや宿題が全然準備しませんでした。

(宿題の準備をする)㊦

<6-20> *高校時代に試験を勉強しなかった、

(試験のために勉強しなかった)㊦

(3) 「～を^をする」の「を」の過剰使用 2

<6-21>は「を」のつかないスル結合への「を」の使用、<6-22>は二重ヲ格制約に違反しているものである。

<6-21> *無理して出場をして試合に負けた。

(無理して出場して)㊦

<6-22> *ほうきは家を掃除をします。

(ほうきで家を掃除します。)㊦

2 用法の誤り

以下の事例は、事態性名詞と動詞の組み合わせそのものは、日本語に機能動詞結合として存在するのだが、文脈から判断して、他の結合を用いるべきものである。それには、(1)文脈上、その事態性名詞を用いることが誤っているとみなされるものと、(2)その事態性名

詞を用いること自体は正しいが、組み合わせられた動詞が不適切であるものの2種類があった。

(1) 名詞の誤り

13

文脈から判断し、その事態性名詞を用いることが誤っているもの

- <6-23> *父は私に高校の美術クラスの入学試験に参加させられました。
(入学試験を受けさせました) ㊦
- <6-24> *試験に参加する (3例) (試験を受ける) ㊦
- <6-25> *私はきっと自信心を育成しなければなりません。
(自信を 育てなければ/持つようにならなければ) ㊦
- <6-26> *〈社内での仕事を経験してもらおう〉という案が登場しています。
(案が出ている) ㊦
- <6-27> *日本人といい交流ができるために、一生懸命勉強しなければなりません。
(コミュニケーションをとる) ㊦
- <6-28> *〈コスプレの〉新しいキャラクターがある時、私はきっと一生懸命完成します。
(作り上げます) ㊦
- <6-29> *節約しなければ、失敗します。母はいつも「自分金銭の管理は・・・(後略)」
(困ったことになる) ㊦
- <6-30> *緊張しやすいの私はとても心配しやすくなります。 (不安になる) ㊦
- <6-31> *人はインターネットの安全を心配する。 (安全性を疑う) ㊦
- <6-32> *いろいろな用事を発生します。 (いろいろな用事ができます) ㊦
- <6-33> *旅行の時、・・・(中略)・・・いろいろな新鮮なことを発生します。
(新鮮な出来事が起きます) ㊦

(2) 動詞の誤り

13

以下の例は、事態性名詞を用いることそのものは適切であるが、結びつけられた動詞が、文脈から考えて、不適切である。右の()内に示したような機能動詞を結びつけて用いたほうがよい。

- <6-34> *世界は一人の世界ではなく、自本の感覚が注意するばかりでなく、みんなのことと生存環境のことを注意しなければなりません。 (注意を向ける) ㊦
- <6-35> *中国人は誕生日にだんだん注意をします。 (注意を向けるようになった) ㊦
- <6-36> *東洋は・・・(中略)・・・子供の教育はもっと科学的な応用力を養うことを注意する。 (応用力を養うことに注意を向ける:2例) ㊦
- <6-37> *インターネットは、・・・(中略)・・・われわれの生活に非常に影響した。
(影響を与えた) ㊦
- <6-38> *個人の権利はもし他人の権利を悪く影響したら、・・・(後略)
(悪い影響を与えたら) ㊦

- <6-39> *自分の行為は必ず他の人に悪い影響しないうちに起こされる。
(悪影響を及ぼさない範囲で)㊦
- <6-40> *一人でたばこを吸ってほかの人を影響しないとはまだ。
(影響を与えないなら自由だ)㊦
- <6-41> *北海道へ行って撮った写真を見ながらその時の感じがしました。
(その時のことを思い出しました)㊦
- <6-42> *コンテストのために先輩達は私達に練習を行いました。(練習させました)㊦
- <6-43> *日本語学科を読みたいですから、私は再び試験しようと思います。
(試験を受けよう)㊦
- <6-44> *私は高校生のとき、一つ失敗した
(失敗を犯した)㊦

6.3 考察

6.3.1 高い正用率

正用数を機能動詞結合総数(延べ数)で割った正用率は、81.4%で、適切に機能動詞結合を使用している割合は高かった。しかし、前節の調査結果で見てきたように、「勉強する」は29回、「練習する」は24回と、頻度の高いやさしい結合を繰り返し使用していた。学習者は自信の持てない機能動詞結合を避け、無難なものだけを使用していると考えられる。したがって、正用率が高いことが、即、習得が進んでいることを意味するわけではない。

6.3.2 機能動詞ごとの使用割合

表 6.3 で機能動詞ごとの正誤割合を見ると、正用の場合、スルの使用割合が93.5%と、ほとんどスルしか用いていない。

表 6.3 正誤別、各機能動詞の占める割合

機能動詞 結合	使用機能動詞 (延べ数による)			計
	スル	支援動詞	欠如	
正用	591 (93.5%)	41 (6.5%)		632 (100%)
誤用	92 (63.9%)	35 (24.3%)	17 (11.8%)	144 (100%)
計	683 (88.0%)	76 (9.8%)	17 (2.2%)	776 (100%)

表 6.4 は機能動詞欠如を除いたスル動詞結合、支援動詞結合それぞれの正誤割合を示したものである。スルの場合、スル結合の総産出数 683 の内誤用は 88 であるので誤用数を産出総数 683 で割った誤用率は 12.9%である。それに対し、支援動詞結合の誤用数 35 を支援動詞の総産出数 76 で割ると 46.1%で、支援動詞結合のほうがスル動詞結合よりも誤

用割合が4倍近く高い。やはり結び付く動詞の種類がさまざまな支援動詞結合の習得のほ
うが学習者にとって困難であるようだ。

表 6.4 機能動詞別正誤割合

	スル	支援動詞	計
正用	595 (87.1%)	41 (53.9%)	636
誤用	88 (12.9%)	35 (46.1%)	123
計	683 (100%)	76 (100%)	759

6.3.3 誤用分析

以下では、タイプ別に、どのような誤用が見られ、またなぜそのような誤用が生じたの
かを詳しく分析する。

6.3.3.1 「非結合語」の誤用

藤井・上垣 (2008a) によると、本稿の機能動詞結合に相当する支援動詞構文 (SVC :
Support Verb Construction) は、「本動詞と名詞との組み合わせは自由ではなく、選別性
を示す。さらに、・・(中略)・・分裂文化、主題化、受動化、関係節化などによって、SVC
の名詞句と動詞とを統語的に分離させると容認度が落ちたり動詞の意味解釈が変化したり
する、という統語的固定制を呈する。(p.944)」

本調査で日本語にない名詞と動詞の組み合わせによる「非結合語」の誤用が生じたのは、
この名詞と動詞の組み合わせにおける選別性に違反したためである。文法の誤りである「機
能動詞欠如」を除いた「非結合語」が誤用全体に占める割合は 43.4%と最も大きな割合を
占めていた。「非結合語」の誤用には、① 非日本語名詞、② 非事態性名詞、③ 非慣用動
詞、④ 機能動詞欠如の4パターンがある。

① 「非日本語」名詞

[A] 1. (1) ①の18例であるが、すべて日本語にない中国語の語彙を事態性名詞とし
て用いていたものである。6.3.3.4 「母語の影響」に詳述した。

② 「非事態性」名詞の使用

非結合語の名詞の誤りの内、事態性名詞でないものを事態性名詞としていたのは、次の
ようなものである。

<6-45> *今度もっと頑張りしようと思っています。(頑張ろうと思って) ㊸

<6-46> *おじいさんはちゃんと顔を洗ったり、ヘアスタイルをしたり、西服を整理した
りして・・・(後略) (髪を整えたり)㊹

「頑張り」「ヘアスタイル」など事態性名詞でないものにスルを結びつけている。

また、「非事態性名詞」の中には、中級 CLJ 2、上級 CLJ 3 と事例は多くなかったが、両者に共通して「複合名詞」に機能動詞を接続させる次のような誤用が見られた。

〈中級〉〈6-47〉 *インターネットサービスも高度発展しているのである。㊦

〈6-48〉 *汨羅江に投江自殺しなければなりません。㊦

〈上級〉〈6-49〉 *環境汚染をしないために・・・(後略) ㊦

〈6-50〉 *日本では日常生活できる子供の発見力や考え力などに大事にして、育てる。㊦

〈6-48〉、〈6-49〉は、国研の作文コーパスからのデータなので、作成者自身による中国語の対訳がある。〈6-48〉は「被迫投汨罗江自杀」、〈6-49〉の対訳は「为了不污染环境已经被政府禁止了」となっている。〈6-47〉の中国語訳には身投げした場所「汨罗」が間に入っており、〈6-49〉の中国語訳は「污染环境」と日中間でよく見られる逆転語になっているが、対訳中国語文の中の語を複合名詞として、そのまま日本語文で用いている。したがって、このような複合語を事態性名詞として、機能動詞結合の構成要素とする誤用は、母語の中国語の影響によるものであると判断される。

野村(1974)が行った新聞語彙調査では、4字漢語でサ変動詞となるものは、1%しかなく、「四字漢語は、単語としての機能が非常に制約されている(p.44)」。「四字漢語は、名詞的連語を構成することがおおく、用言的連語を構成して、語基に相当するはたらきをもつことはすくない。(p.46)」と述べている。即ち、四字漢語は機能動詞と結びついて機能動詞結合となることは極めて少ないということになる。

野村によると、四字漢語と比較すると、三字漢語の方がサ変動詞の語幹となりやすい。野村は「語基の結合の緊密さから言っても、また、『語+語』の構造でないことからいっても、・・・(中略)・・・三語基³のほうは、『合成語』として一語扱いをするのが穏当だ(p.44)」とする森岡⁴を引用し、三字漢語は一語扱いするのが妥当であると述べている。辞書でも「近代化」「乱反射」「再検討」などの三漢字語は、一語として登録されており、スルが接続できるかどうか明記してある。

したがって、日本語教育の場面では、学習者に対し、四字漢語については、ほとんどの場合、そのままでは機能動詞として用いることはできないので「*環境汚染をする」ではなく「環境を汚染する」、「*高度発展する」ではなく「高度に発展する」のように四字漢語を構成する語基に分けて文中で用いるよう促すとよい。また、三字漢語については、二字漢語の場合と同じく辞書でスルが用いられるかどうか確認するよう教示する。

③「非慣用動詞」

非慣用動詞には、ア.意識 イ.スル ウ.L1 ペア エ.L1 品詞適用の4種がある。

³ 三字漢語に相当する

⁴ 森岡健二「日本文法形態論」：野村(1974)によると『月刊文法』に43年から45年にかけて連載された。

ア. 「意識・非慣用動詞」

下の〈6-51〉、〈6-52〉のように、やりもらい、コトの生起出現などの意味に適合する動詞を事態性名詞に接続しているものである。

〈6-51〉 *自分のおいのりを友達にあげます。 (友達のためにお祈りしました) ㊦

〈6-52〉 *私の不注意である失敗を起こしました。 (失敗してしまいました) ㊧

「おいのり」「失敗」自体は、事態性名詞であり、文脈から判断して適切な語であるが、それらに結びつけた動詞が不適切である。学習者は、「あげる」「起こす」など、意味的に妥当と思われるものを用いたものと思われるが、機能動詞結合の慣用性に違反している。

「意識・非慣用動詞」の場合、母語での名詞と動詞の組み合わせをそのまま日本語に逐語訳している可能性もある。しかし、その場合も、学習者は、日本語文の中でその動詞を用いると意味的に適合すると思ったものを用いている。母語で用いられる動詞の直訳になる動詞を機能動詞として用いたのだとしても、全く日本語文で意味をなさないものまでも用いているのではない。「意識・非慣用動詞」の場合、作文執筆者がどのような背景でその動詞を用いたのかは、曖昧である(意味で選んだのか、母語の影響によるのか)。母語概念を用いたかどうかは、学習者の心理的プロセスなどを見ないと、母語の影響であるとは断定できない。

したがって、日本語ではその名詞と一緒に用いない動詞が日本語文で用いられ、かつその名詞と動詞の組み合わせが中国語で用いられることが一般的であることが、中日辞典などで確認され、母語の影響が明白であるもののみを、本稿では「L1・ペア非慣用動詞」として母語の影響によるものに含め、この「意識・非慣用動詞」とは区別した。

「非慣用動詞」のうち、中国語の名詞と動詞のペアを持ち込んだと考えられるウ「L1 ペア・非慣用動詞」、エ「L1 品詞適用・非慣用動詞」については、6.3.3.4「母語の影響」で後述する。

名詞の場合にしろ動詞の場合にしろ、いずれも学習者が機能動詞結合というものに認識が至っていないことから誤用が生じている。学習者は、名詞に動詞を結びつけることによって、その名詞を文中で動詞として用いることができるということは、意識的にか無意識的にか、知っていると思われる。しかし、その結びつきに制約があること、即ち、名詞は事態性名詞でなくてはいけないこと、またその事態性名詞に結びつける動詞には慣用性があり、意味的に妥当ならどの動詞を結びつけてもいいわけではないことに思いが至っていない。

6.3.3.2 文法上の誤用

文法上の誤用は、I と II 合わせて 51 例で、中級 CLJ の誤用全体の 35.7% と大きな割合を占めていた。事態性名詞を直接活用させている「文法上の誤用 I」については、6.3.3.4 「母語の影響」で後述するので、ここでは、「文法上の誤用 II」についてだけ述べる。

6.3.3.2.1 1 語動詞への連体修飾

事態性名詞への修飾の誤りというのは、[B] 1 (I) で提示した「* 便利な利用する」「* 私の失敗した」など、事態性名詞部分だけを切り離してナ形容詞（形容動詞）や「名詞+の」で連体修飾しているものである。

このような誤用は、「VN をする」と「VN する」を混同することによって生じている。事態性名詞とスルが「VN をする」と助詞「を」で結び付いた場合の VN は名詞であるが、「VN する」と「を」なしで直接結び付いた場合は複合語となり、一語で動詞として機能するという、機能動詞結合についての明示的知識が学習者に欠けているのである。

「利用する」「失敗する」など、事態性名詞が助詞「を」なしでスル動詞と結びついた場合は、上述のように一語の複合動詞となるので、「* [便利な利用] する」「* [私の失敗] する」のように、語の内部に句（「便利な」「私の」）を侵入させることは、語の「緊密性の制約」違反となる（影山、1993）。

6.2 の調査結果で提示した連体修飾の誤用は全てスル動詞結合だった。奥津（2007）によると、事態性名詞と機能動詞の間に助詞「を」が入らないスル動詞結合以外のすべての機能動詞結合には、連体修飾も連用修飾も可能である（2.3.5 参照）。事態性名詞と機能動詞が複合語化した「VN する」の場合だけが連体修飾できないのである。したがって、学習者は、事態性名詞に連体修飾や連用修飾された機能動詞結合を数多く見聞きしているので、「VN する」にだけ制約があることに気づかないのであろう。

では、学習者には、「VN する」の場合には、VN とスルの間に助詞「を」を入れさえすれば、連体修飾も連用修飾も可能なので間違いないと言えばよいかというと、そのように単純にはいかない。VN とスルの間に助詞「を」を挿入できないものもあり、また「を」が挿入できても「・・・のVNヲスル」とできないものもあるからである。

6.2 のスル動詞結合への連体修飾の誤用は、a 事態性名詞とスルの間に助詞「を」を補えばよいもの（VN をする）と、b 「を」を補ってもだめなものと、大きく 2 つに分類できる。

a. 「を」を補えばよいのは次のものである。

<6-53> * 子供のときからいろいろな失敗したことがありました。㊦

<6-54> * 日本語会話の練習しながら、話の技巧も習います。㊦

<6-55> * おじいさんは長生きで、幸福な生活していきますよ。㊦

<6-56> * インターネットは・・・(中略)・・・よく処理しさえすれば、安全の確保して大きい収穫がある。㊦

<6-57>* 〈インターネットを利用すれば〉CDや本の発売することを待つ必要はない。㊦
 <6-53>では、助詞「を」を補い、「子どもの時からいろいろな失敗をしました」とすれば問題はない。

b. 「を」を補ってもだめなものは、次の7つである。

<6-58>* 毎日真面目な練習したり、一生懸命準備しました。㊦

<6-11：再掲>* (インターネット) その便利な利用するにつれて、たくさん問題が出てくる・・・(後略) ㊦

<6-59>* 公共の場所で、自分の行為は必ず他の人に悪い影響しないうちに起こされる。㊦

<6-60>* この作品はどんな働きがあるか、どんな流行したかがはっきり見える。㊦

<6-61>* 赤旗がひらひらと翻る時、みなさん中国の強くに自分の努力をするはずでしょう。㊦

<6-10：再掲>* 私の失敗したことは興味がない学科を選びました。㊦

<6-62>* 平安時代の宮廷貴族の生活する時、私たちの頭の中に先ず浮かぶのは、「源氏物語」の世界・・・(後略) ㊦

「利用する」「努力する」などの結合になぜ誤用が生じるのかを見るために、これらがどのような特徴を持っているのか、以下で分析する。

相澤(1993)は二字漢語に「する」を付加した複合サ変動詞(「を」抜きのスル動詞結合)の用法を調べているが、本稿ではその用法の内、次のl, m, nの3点を用いて上記7つのスル動詞結合の特徴を調べる。

l 「を」格を支配するか 例) 「部屋を掃除する」と言えれば○

m 「～ヲスル」と言えるか 例) 「掃除ヲスル」と言えれば○

n lの同義として「・・・の～ヲスル」と言えるか

例) 「部屋の掃除をする」と言えれば○ (p.291)

この3点で上記bの7つのスル動詞結合の分析をすると、表6.5になった。

表 6.5 各スル動詞結合の特徴

		「を」	「ヲ」	「の」
<6-58>	(真面目な) 練習する	○	○	○
<6-11>	(便利な) 利用する	○	○	○
<6-59>	(悪い) 影響する	×	×	×
<6-60>	(どんな) 流行する	×	×	×
<6-61>	(自分の) 努力をする	×	○	×
<6-10>	(私の) 失敗する	○	○	×
<6-62>	(貴族の) 生活する	×	○	×

「を」: 「～をVNする」と言えるか / 「ヲ」: 「VNヲする」と言えるか

「の」: 「～のVNをする」と言えるか

<6-58>と<6-11>は全て○だが、これらは、連体修飾を連用修飾にして、「真面目に練習する」「?便利に利用する」となれば、問題が解決する。但し、<6-11>の場合、修飾語の選択が不適切なので、修飾語句を変えて「有効に利用する」などとする必要がある。

反対に、<6-59>と<6-60>は全て×だが、「影響する」「流行する」の用例を国立国語研究所 KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」BCCWJ で調べると、「大きく影響する」「著しく影響する」、「広く流行する」「長く流行する」と形容詞での連用修飾は見られたが、「～い影響する」という連体修飾の例はなく、形容動詞が用いられている例も皆無だった。この「影響する」「流行する」は「*影響をする」「*流行をする」と「を」のある形はとれないからである。また「～の影響する」「～の流行する」という形も取れない。したがって、「影響する」「流行する」のような「VN ヲする」と助詞「ヲ」を挟めない機能動詞結合は、どのような連体修飾も取れないということになる。「影響する」は頻度の高い語で、悪い場合に使うことが多いが、学習者はどのように処理したらいいのか困惑しているようだ。この「*悪い影響する」だけでなく「*他の人に悪く影響する」「*わるくにえいきょうします」とさまざまな誤用が見られ、学習者も直観的にか「影響する」に「悪い」はそのまま付加することができないと思い、苦戦している。

<6-61>、<6-10>、<6-62>の例では、すべて「～のVNをする」と言えないスル動詞結合に「～の」を用いたことによる誤用である。どのようなスル動詞結合であれば、<6-10>、<6-59>～<6-62>のように「～のVNをする」と言えないかは、2.3.4.3を参照されたい。

複合サ変動詞の用法の一覧表を作成した相澤（1993）は、次のように述べている。

体系的な視点から複合サ変動詞化の可能性をチェックし、情報として整備しておくことも、日本語教育の立場からは必要となる。複合サ変動詞化しないというネガティブな情報が、日本語学習者にとっては、かえって有意味な情報となりうるからである。

（相澤、1993:296）

「影響する」「利用する」以外に、どのようなスル動詞結合が連体修飾を排除するのかなどの情報を学習者が利用できるように整備することが、必要である。

6.3.3.2.2 心理動詞のヴォイスの誤用

吉永（2011）は、「中国語の心理動詞は具体的に使役形などを伴って表現されることが多い（p.175）」とする。また3章の先行研究で紹介した李（2012）も、自他動詞に関する誤用として、次の例を挙げている。

例) 昔を回顧すると、感動させたことが次々と思い出される。 （感動した）

『感動する』は・・・(中略)・・・中国語では他動詞として使われるが、日本語では自動詞の用法しかない。（p.123）」またこの文を中国語訳すると「让」を用いるが、この「让」を

日本語動詞の「させる」と置き換えることによって、「感動させる」という誤用を生じていると、李は述べている。

感情表現には、主体に関する制限があるが、寺村（1982）によると「原則に従わないときの許容度は、述語の種類、文脈、状況によって異なり、また人によっても多少の違いが見られる（p.150）」とあるので、以下に本調査での感情表現の誤用を文脈と共に提示する。

「感動する」を使役、使役受け身にしたものは次のようであった。

<6-63>*彼〈映画の中の武士〉の信念はやっと天皇陛下に感動させて、・・・（後略）
（感動を与えて）㊦

<6-64>*張さんはうっかりして山の下へ落ちそうだ。奥さんは自分の歯で張さんの服を咬り、一時間もしてからやっと助かられた。その時、奥さんは口に血がいっぱいだ。なんと感動させられるだろう。（なんと感動的な話だろう）㊦

庵他（2001）の『日本語文法ハンドブック』では、感情動詞の使役について次のように述べている。

◆「私」などが抱く主観的な感情を表す場合、使役文はやや不自然です。

?首相の突然の辞意が（私を）驚かせた。

?彼の無責任な態度が（私を）がっかりさせた。

Xが「国民、人々、世間」など一般の場合は、使役文も不自然さは感じられません。

首相の突然の辞意は世間を驚かせた。

政府の無策ぶりは国民をがっかりさせた。

（『日本語文法ハンドブック』P.128；例文番号略）

本調査の<6-63>例は「『国民、人々、世間』など一般の場合」ではなく、「天皇陛下」個人の感情を表している。また、<6-64>では感嘆文の中で用いられているが、感嘆文は話し手の感情をそのままに表すものなので、使役受け身は不自然である。

本稿での心理動詞のヴォイスの誤用では、使役だけでなく、受身にされたものも見られた。

<6-12：再掲>*このドラマは悲劇ですが、ほんとに感動されました。（感動した）㊦

<6-65>*この映画は悲しくて、感動された故事を描かれています。（感動的な）㊦

<6-66>*三年前、一匹の犬は感動された。彼の名前は「クイル」、本の名前と同じようだ。（感動を受けた）㊦

<6-67>*過去の優勝者に向けても絶対にあきらめない粘り強い意志に感心された。（感心した）㊦

これらは中国語の「被・・・（中略）・・・感動／佩服了」に影響されたものである。

以上の感情動詞を使役や受け身にする誤用は、一般的なヴォイスの誤用ではなく、結びつく機能動詞に事態性名詞が影響を及ぼして引き起こされる誤用なので、機能動詞結合に固有の誤用と考える。

6.3.3.2.3 取る項の誤り

機能動詞結合の取る項の誤りは、その項が対格の場合、「VN をする」と「VN する」を区別せず、かつ個々の機能動詞結合の取る項の使用制約を知らないことによって引き起こされる。

「N の VN をする」と助詞「を」を取って事態性名詞が名詞のままで用いられた場合は、N 部分には修飾語と目的語の両方がとれる。しかし、「VN をする」を「VN する」と言い換え、事態性名詞を「を」抜きでスルと結合させると一語動詞となり、ヲ格に目的語を要求するようになる。したがって、「N を VN する」となった N には、修飾語は取れず、制約が生じるのである（影山：1993、長谷川：1999）。

「練習」と「準備」を事態性名詞に取った誤用例を再掲する。

<6-15：再掲> *バドミントを練習する時、まだ技法が悪かった。

(バドミントンの練習をする時) ㊦

<6-18：再掲> *毎日ひとびとはたいへんいそがしくて春節を準備しています。

(春節の準備をして) ㊧

学習者がこのような誤りを犯すのは、「N の VN をする」には「N を VN する」と言い換えられるものもあるが、言い換えられないものもあるのに、2つを混同してとらえているからである。例えば、「日本語の勉強をする」「部屋の掃除をする」の場合は、「日本語を勉強する」「部屋を掃除する」と言い換えることができるが、「バドミントンの練習をする」「春節の準備をする」の場合は、「*バドミントンを練習する」「*春節を準備する」と言い換えることはできない。<6-15>と<6-18>の「バドミントン」「春節」は単なる修飾語であり、項ではないのでヲ格を取ることはできないのである。

影山（1993）は、目的語であるか修飾語であるかを、「～のための」で置き換えられるかどうかで判別している。

ア *公園のための掃除をする

cf. 公園を掃除する

*全国各地の方言のための調査をする。

cf. 方言を調査する

イ ピアノ発表会のための練習をする。

cf. *ピアノ発表会を練習する

遠足のための準備をする

cf. *遠足を準備する

(p.267 に基づく)

「直接目的語に相当する『NP の』は『NP のための』と言い換えることが不可能だが(略；本稿ではア)、単なる修飾語と見なされる場合は『～のための』で置き換えられる(略；本稿ではイ)。(p.267)」

影山の判別方式は、日本語母語話者には有効であろうが、学習者には「Nのための」と言い換えることができるかどうかの判別は困難である。「NをVNする」のNには直接目的語しか取れないと理解したとしても、Nの制約はそれだけではない。さらに、「VNする」の項となるNはどのような意味を持つ語であるかも問題になる。例えば、「準備する」の場合、目的語には「ドレス」「花」のようなモノだけで、「結婚式」というようなコトは取れない。

結婚式の ドレス／花／料理 を準備する

* 結婚式を準備する

しかし、「練習する」の場合には、目的語には「ドリブル」「シュート」のようなコトだけで、「ボール」のようなモノは取れない。

サッカーの ドリブル／シュート／パス (のやり方) を練習する

* (サッカー) ボールを練習する

「準備する」も「練習する」も（機能）動詞はスルで同じであるにもかかわらずこの違いが出るのは、目的語を要求しているのが動詞ではなく、個々の具体的内容を持つ事態性名詞であるからである。要求される目的語がコトであるか、モノであるか⁵というような内容は、個々の事態性名詞によって規定される。しかし、「準備」の目的語にはモノが要求されるが、「練習」の目的語には、コトが要求されるということは、辞書で調べてもわからないことが多い。『大辞林』では、「準備」「練習」の意味は次のようになっている。

「準備」：用意すること。支度すること。

「練習」：技能・芸事などが上達するように同じことを繰り返しならうこと

「練習」の場合は、「上達するためにならう」とあるので、自分自身の状態変化（＝上達する）のために意思的に行う動作なので、「練習」の目的語はドリブル、シュートなどの「やり方」＝コトであることは推測できる。他方、「準備」については、「用意」「支度」と同義語で言い換えているだけなので、『大辞林』の記述では、目的語にどのような性質のものがとれるのかを知ることはできない。

しかし、『日本語基本動詞用法辞典』では、単に意味だけではなく文型も提示されており、さらにその文型の主語、目的語等を構成する名詞の意味特性も記述されているので、「ある動詞がどういった意味特性を持つ名詞と結び付くかの情報 (p.xix)」も手に入れることができる。また、一般の国語辞典では、「練習」「準備」などは名詞として扱われ、スルを用いることができるかどうかを記載してあるだけであるが、『基本動詞用法辞典』では、見出

⁵ 船田 (1969) によると「コトの特性を時間に沿って進行、発展する性質、即ち過程性とみなし、そのような性質に欠ける『非過程的』概念をモノとみなす (國廣、1970より引用)。

『広辞苑』で「サッカー」を調べると「11人ずつの2組が、ゴールキーパー以外は腕や手を使わずに、革製のボールを蹴り、また、頭でうって、一定時間内に相手方のコートに数多く入れ合い、得点を争う。」とある。この「蹴る」「頭で打つ」「争う」等は過程的でコトである。一方、この過程を総体として捉えて「サッカー」という名称を与え、対象の内実を閉じ込めた概念は、「非過程的」でモノである。したがって、「*サッカーを練習する」とは言えない。

し語を「練習する」「準備する」として、動詞として扱っているので、日本語学習者にとっては非常に役に立つ辞書である。

『基本動詞用法辞典』での「練習する」「準備する」の文型は次のとおりである。

「練習する」：[人・集団] {が／は} [事・活動・方法] を練習する。

「準備する」：[人・組織] {が／は} [人・組織] (のため) に [物・金・食事] を準備する。

6.3.3.2.4 「VN をする」の助詞「を」の誤用

本研究の調査では、「VN をする」の助詞「を」における誤用は、「を」のつかないスル結合への「を」の使用、二重ヲ格制約違反が各 1 例ずつ、2 例しか見られなかった。なぜなら「相談 (を) する」「買い物 (を) する」など、VN に修飾語がつかない場合、「VN-する」に「を」が挿入可能かどうかなどは、あえて問題にせず、「VN する」と直接スルをつけてしまえば問題は起こらず、かえって自然な日本語になることが多いからである。また、後者の二重ヲ格制約については、本調査で 1 例しか誤用がなかったことにみられるように、学習者は初級段階で学習している⁶ので、既習事項である。

しかし、事態性名詞と機能動詞の間に助詞「を」を挿入できるものとできないものがあることを知らないと、「*水が蒸発をする」「*飛行機が到着をした」のような誤用を生じる。また、連体修飾語をとれるものと取れないものとの判別もできなくなる。「を」が挿入できず VN スルと一語動詞の形しか取れないものは、どんな連体修飾語も取れず、それらを形容詞や形容動詞で連体修飾すると「*急な出発する」「*悪い影響する」のような誤用になってしまうからである。

したがって、事態性名詞と機能動詞の間に助詞「を」を挿入できるものとできないものがあることを学習者に提示することは必要である。

6.3.3.3 用法の誤り

用法の誤りは、事態性名詞と動詞の組み合わせ自体は日本語に存在するのだが、文脈から判断して他の機能動詞結合を用いるべきもので、事態性名詞が不適切なものと、機能動詞が不適切であるものの 2 種類があった。次の例は、前者の事態性名詞が不適切なものである。

<6-26：再掲> *〈社内での仕事を経験してもらう〉という案が登場しています。㊦

<6-33：再掲> *旅行の時、・・ (中略) ・・いろいろな新鮮なことを発生します。㊧

自然な日本語にすると、<6-26>は「～という案が出ています」、<6-33>は「新鮮なできごとに出会います／が起きます」のようになる。<6-26>、<6-33>の事態性名詞が不適切な

⁶ 例：「壁を塗る」と「ペンキを塗る」という 2 文を学習者が一文で表したい時には、そのまま「*壁をペンキを塗る」とせず、「壁にペンキを塗る」としなければならない。

ことによる誤用は、機能動詞結合に特有の誤用ではなく、語彙の問題ともみられる。しかし、この誤用のほとんどは、漢語事態性名詞の代わりに「出る」「起きる」など、一語の和語動詞と置き換えると日本語として自然になるものである。CLJは、「登場」「発生」など、母語の漢語に依存して日本語文を作成し、その漢語を動詞として用いるためにスルをはじめとする機能動詞を利用しているのである。したがって、このような事態性名詞の誤用も、機能動詞結合に関わる問題ととらえることができる。これは、9.4.3で言及する機能動詞結合の過剰使用の問題である。

次に用法の誤りの内、機能動詞の選択が不適切であったものについて述べる。これは、その機能動詞結合自体は日本語に存在するものであるが、文脈によって、事態性名詞に結びつける機能動詞には使用制約があるのに、それにしなかった使い分けをしないために、生じるものである。この誤用は13例あったが、内「注意」が5例、「影響」が4例を占めていた。以下、事態性名詞ごとに見ていく。

① 影響

日本語の新聞を調査した谷部（2002）は、『影響』は『ーヲアタエル／ーヲウケル』両形とも、『ースル／サレル』形を上回る唯一の語（p.151）であるなど、「影響」だけが他の語と違ったさまざまな振る舞いを見せたと報告している。また、藤井・上垣（2008b）は、本稿の調査と同じ国立国語研究所のBCCWJを用いて機能動詞結合の事例を分析したが、「与える」が参与する事態性名詞のほとんどが一桁の事例しかない中で、「影響」のみが316例と群を抜いていた。

朱（2018）では、BCCWJで、動詞「受ける」のヲ格名詞の出現頻度を調べ、上位100語を報告しているが、1位は「影響」で頻度1551と、2位の「教育」の698の2倍以上で、断トツの高頻度を示している。

このように「影響」は、機能動詞結合での使用頻度が特別に高い上に、特異な振る舞いを見せ、以下で示す複雑な使用制約がある。本研究の作文調査でも「影響する」の使用が数多く見られ、誤用も多かった。中級CLJで「影響する」の誤用が4例見られたが、次章で取り上げる上級CLJでも4例の誤用があった。いずれも用法の誤りで、上級になっても「影響する」を日本語文の中で用いるのには困難が見られた。

本研究での誤用例は以下である。

〈中級〉（再掲）

- 〈6-37〉 *インターネットは、・・・（中略）・・・われわれの生活に非常に影響した。
（影響を与えた）㊦
- 〈6-38〉 *個人の権利はもし他人の権利を悪く影響したら、・・・（後略）
（悪い影響を与えたら）㊦
- 〈6-39〉 *自分の行為は必ず他の人に悪い影響しないうちに起こされる。

(悪影響を及ぼさない範囲で)㊦

<6-40> *一人でたばこを吸ってほかの人を影響しないとはまだ。

(影響を与えないなら自由だ)㊦

<上級> (7章参照)

<6-68> *〈点数が人間の一生を左右するという考え方は〉子供まで大きく影響してしまう。(大きな影響を与えてしまう)㊦

<6-69> *他人に影響しなところに吸う (影響を与えないところ)㊦

<6-70> *別の人にえいきょうしない (影響を与えない)㊦

<6-71> *人権というのは人の行動が回りに影響しない (影響を与えない)㊦

岡嶋 (2012) では、国立国語研究所の BCCWJ 「少納言」 から「影響する」の用例 100 を抜き出して、「影響する」の “causer” と「対象」に、人間、国、会社などの「人間活動の主体」を取れるかどうかを調べている。その結果が、表 6.6 であり、「影響する」の “causer” には 100%、「対象」には 97%、人間活動の主体が来なかった。

表 6.6 「影響をする／与える」の “causer” と「対象」

		「影響する」	「影響を与える」
計		100	100
“causer”	「主体」	0	10
	その他	93	70
	不明	7	20
“対 象”	「主体」	3	24
	その他	91	69
	不明 7	6	7

岡嶋 (2012) より

本調査では、「影響する」の “causer” と「対象」に「人間活動の主体」を取った例が多く見られたので、改めて国立国語研究所の BCCWJ から「影響する」の事例 100 を抜き出し、“causer” と「対象」に「人間活動の主体」を取るかどうかを調べた。その結果が表 6.7 で、岡嶋 (2012) と同じく「影響する」の “causer” 及び「対象」に人間活動の主体を取った例はほとんど見られなかった。

表 6.7 「影響する」の “causer” と「対象」 : 本項での調査

	人間活動の主体	その他
“causer”	1	99
対象	6	94

朱 (2018) は、岡嶋 (2012) の結果を受けて文法性判断テストを行っているが、“causer” と「対象」について、岡嶋と同じ結果であったと述べている。

そこで、本調査の分析では、「影響する」に限っては、「影響する」の“causer”及び「対象」に人間活動の主体を取った場合は、誤用と判定することにした。先に提示した誤用は、〈6-37〉〈6-38〉以外はすべて「影響」の着点に「人間活動の主体」をとったために生じていることで説明される。

岡嶋の結果は、母語話者 3 人だけで判断した結果なので、断定はできず、更なる調査分析が必要だが、同じ事態性名詞に異なった動詞が結びついた場合に、どのように使い分けられるかを探る方策として、1 つの端緒となると考える。

なお、調査結果で「動詞の誤り」で挙げられた「影響」の事例では、目的語として助詞「を」をとるものが多かった。

〈6-38 : 再掲〉 *個人の権利はもし他人の権利を悪く影響したら、・・・(後略)
(悪い影響を与えたら) ㊦

〈6-40 : 再掲〉 *一人でたばこを吸ってほかの人を影響しないとほまだ。
(影響を与えないなら自由だ) ㊦

また、助詞の間違いであって、機能動詞結合の誤用というわけではないが、次の例でも「影響する」に「を格」を用いていた。

〈6-72〉 コンピュータウイルスは・・・(中略)・・・深刻的にインターネットの利用者の合法権利を影響する。㊦

〈6-73〉 気持ちを悪く影響して、・・・(後略) ㊦

〈6-74〉 (インターネット) もし、ウイルスがあれば、システムを影響する。㊦

石、王 (1983) によると、日中同形同義語「影響」は、日本語では自動詞で「に格」をとるが、中国語では他動詞である。そのため、「影響」の目的語として「を」格をとる CLJ が多いのである。

②「注意」

1. 今回出てきた誤用は、次のとおりである。

〈6-34 : 再掲〉 *世界は一人の世界ではなく、自本の感覚が注意するばかりでなく、みんなのことと生存環境のことを注意しなければなりません。(注意を向ける) ㊦

〈6-35 : 再掲〉 *中国人は誕生日にだんだん注意をします。(注意を向けるようになった) ㊦

〈6-36 : 再掲〉 *東洋は・・・(中略)・・・子供の教育はもっと科学的な応用力を養うことを注意する。(応用力を養うことに注意を向ける : 2 例) ㊦

全てスル結合であるが、これは「注意」の品詞が日本語と中国語で異なるために生じたと思われる。「注意」は日本語では、名詞またはサ変動詞「注意(を)する」で用いられるが、中国語では動詞の用法しかない。「中国人の日本語学習者が母語の品詞に影響され、母語に存在しない品詞の使用を避ける傾向のある(何、2015)」ため、「注意」を事態性名詞

として「向ける」「受ける」などと共に使うのではなく、動詞「注意（を）する」のみを使ってしまおうようだ。

下の文は、〈6-34〉の出典作文の一部である。この文章全体を見ると太字部分で〈6-34〉の筆者が何を伝えかかったかがわかる。太字部分の前に、「気持ちが悪い時、煙草はしばしめ悩みが解消します。」とあるので、これが太字の「自本の感覚」を指し、〈6-34〉の意味するところは、「自分の気分や悩みの解消にばかり気配りするのではなく、他の人のことや環境にも気を配らなければならない」という意味だと推測できる。

今、煙草すう男は成年男子だけでなく女性と青少年も沢山あります。彼たちにして煙草の危害がもっと多いです。煙草をすう男だいぶ煙草をすったら悩みといらいらするの気もちが解消します、実際、専門家から是正します。煙草をすう男は目に遭う時、気持ちが悪い時、煙草はしばしめ悩みが解消します。しかし、同時に血痕中のニコチンも増えます。ニコチンはすこしずつなくなると悩がも度来きます。それで煙草は体を悪くなるだけで物ですから、禁煙運動がするの必要が充分にあります。

外に、煙草で自然環境、空気が汚染されます。試験をすると毎日スモッグの内の芽が枯れて黄ばんです。スモッグは私たち生存の基本的空気品質が悪くあります。**世界は一人の世界ではなく、自本の感覚が注意するばかりでなく、みんなのことに生存環境のことを注意しなければなりません。**環境と人間のよくなるために禁煙運動しなければなりません。

国立国語研究所

『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース オンライン版』

(太字、下線は筆者による)

「注意」は『大辞林』『広辞苑』によると ア. 心を集中させて気をつけること イ. 警戒すること ウ. 忠告 の3つの意味⁷が掲載されている。

〈6-34〉の例で近いのは、アの意味だと思われる。しかし、「注意する」をこの文脈で用いるとしっくりしない。「注意を向ける」「注意を払う」などを用いて次のように書き換えると意図がよく伝わるのではないだろうか。

世界は自分一人の世界ではないので、自分の気分や悩みにが注意を向けるばかりでなく、他の人のことや生活環境のことに注意を向けなければなりません。

神田 (2002) は、機能動詞結合における動詞は、「名詞の動作性では十分に表しえない微細な意味、あるいは(略)文法的カテゴリーへの関与を明確に表現するために必然的に用いられたものである」「機能動詞結合における動詞は名詞と同等の重要性を持って」いる (p.57) と述べている。「注意を向ける」は「注意」に「向ける」が結びつけられたことに

⁷ 他に心理学用法、柔道用語もあるが、割愛した。

より、「注意する」では置き換えられない特有の意味が生じている。このことについての詳細な分析は13章で行う。

③「練習」

本調査での「練習」を事態性名詞に取った誤用は次の例である。

〈6-42：再掲〉 *コンテストのために先輩達は私達に練習を行いました。⑧

なぜ「*練習を行う」は誤用となるのだろうか。影山（1993）は、「～をする」構文が成り立つのは複雑事象名詞と単純事象名詞であるという。単純事象名詞とは、「動作ないし出来事を意味するが形態上は通常の名詞（p.187）」であり、「する」と複合化しない。即ち、「を」なしで直接「する」と結びつかないものである。「同じく動作・出来事を表し『する』と複合化する動名詞は、単純事象名詞に対して複雑事象名詞（p.187）」で、複雑事象名詞だけが項を取る。

「単純事象名詞は述語として『する』以外に『行う』や『実施する』等の通常他動詞を取ることができるが、複雑事象名詞即ちVNは形式動詞としての『する』を要求する。

（p.271）」

即ち、「練習」が単純事象名詞であるならば、「練習を行う」と言えるが、「練習」が複雑事象名詞ならば、「練習を行う」というのは成り立たない。影山は、単純事象名詞と複雑事象名詞を判別する手段を提示している。「単純事象名詞は名詞であるから指示を持ち、『それ』で代用できるが複雑事象名詞は複雑述語⁸の一部であるから、『それ』で代用できない。

（pp.271-272）」

〈6-75〉*先輩たちは練習をしましたが、私たちはそれをしませんでした。

また、「単純事象名詞は可算名詞として『多数』などの数量詞を取ることができるが、複雑事象名詞は動詞的概念であるから数量詞と相容れない（p.272）」という。

〈6-76〉*先輩たちは練習を多数しました。

「練習」は、「それ」で代用できず数量詞とも相容れないので、複雑事象名詞である。そのため、「練習」は、「行う」を伴うことができず、〈6-42〉は誤用となるのである。

④「試験」

事態性名詞「試験」が「試験する」とスル結合になる時、「試験」の対象が人間の場合⁹、通常その主体は、「教師」であって、学生ではない。次の〈6-43〉のように、学生の側から述べる時は、「試験を受ける」としなければならない。

〈6-43：再掲〉 *日本語学科を読みたいですから、私は再び試験しようと思います。⑨
人の場合でも、「試験される」と受け身の形でスル結合を用いることがないわけではないが、不本意で迷惑な感情を強調するときに限られる。中国語で「試験する」は「考試」で教師

⁸ 「名詞的概念と動詞的な概念を合わせて、ひとまとまりの活動を表すもの」（中右、影山、由本：1997）例）登山、餅つき

⁹ 「耐久性を試験する」など、対象がモノの場合は別である。

が行っても学生が受けても受動・能動が変わらないためにこのような誤りが生じたと思われる。

「試験」については、「*試験に参加する」という誤用が4例見られた。三喜田（2007）によると、『試験に参加する』は中国人学習者の作文中にかなり頻繁に見受けられる表現で（p.4）、三喜田は次の誤用例を挙げている。

<6-77>* 来年大学の入学試験に参加するので、今勉強しなければなりません。

（三喜田、2007: 4、下線筆者）

三喜田は、この誤用は、「明年想参加大学入学考試 所以現在不学習不行」などという中国語文から導かれた文であろうと述べ、「中国語にあつては『参加考試』は日常ごく普通に用いられるきわめて自然な表現である（p.4）」とする。

本調査で「参加する」は「試験」だけではなく、「結婚式」にも用いられていた。

<6-78>* 姉さんの結婚式に参加するために、……（後略）㊦

また、「参加する」は、本調査で次のように、さまざまな語に結びつけて用いられていた。以下の例は、日本語として多少違和感がある。しかし、「参加する主体」が「参加する対象」（試合、コンテストなど）に、どのように関わるかによって用いられないこともなく、誤用とまでは言えない。

<6-79> よく各地の試合に参加しました。㊦

<6-80> 学校のおしゃべりコーナーに参加します。㊦

<6-81> パーティに参加する人々は……（後略）㊦

<6-82> 大学生はこの遊行に参加しました、……（後略）㊦

<6-83> 歌謡番組に参加する、……（後略）㊦

<6-84> 革命運動に参加した時……（後略）㊦

<6-85> 日本語の朗読コンテストに参加して、……（後略）㊦

<6-86> コーラスの活動に参加しました。㊦

「参加する」は、中級 CLJ は 16 回使用しており、頻度の高い語である（本章 2 節）。

三喜田は、「参加する」を巡る誤用は、日中両国語間の意味の相違によって引き起こされるとする。

中国語の「参加」は主として動詞として働き、『現代漢語詞典』には「①加入某種組織或某種活動 ②提出（意見）」のように語釈されている。語釈の②は日本語には見られない意味であるが、①の意味は日本語と共通する。……（中略）……日本語の「参加」は『広辞苑』によると「①なかまになること。行事・会合などに加わること。②法律上の関係に当事者以外の者が関与すること」。『新明解国語辞典』（以下『新明解』とする）では「団体・組織など、目的を持った集まりの一員と成り、行動を共にすること」という説明がなされている。中国語に於ける「参加」が「ある種の組織や活動に加わること」のみを

意味するのに対し、日本語の「参加」は単に組織や活動に加わるだけでなく、「仲間意識を持ち」（『広辞苑』）、「行動を共にする」（『新明解』）といった意味までが含まれているのである。（三喜田、2007: 3）

「結婚式」の例でいうならば、「結婚式」という「活動」をするのは、当事者の新郎、新婦だけであり、たとえ家族でも「行動を共にする」ことはできないので、この場合は「結婚式に参列する」などを用いるのがよい。

以上の事例からわかるように、漢語事態性名詞の場合、「サ変動詞」としてスルと共に用いることができるかどうかだけを辞書に記載しても不十分で、結びつく機能動詞によってどのような使用制約、意味の異なりが生ずるかも記載することが必須である。

用法の誤りで、注目すべきは、13例のうち<6-42>の「練習を行う」以外、すべてがスル結合だったことである。学習者は、結びつけるべき動詞がわからずスル・ストラテジーをとったということも考えられる。機能動詞結合の使用制約を調べた岡嶋（2012）は、スル結合は、一般に支援動詞結合より使用制約が大である可能性があるとして述べているが、そのこととも関連があると思われる。

スルは「空疎」な動詞に見えるため、ほとんどの文脈で使用可能である印象を与え、学習者は気軽に用いているようだ。しかし、13.2.2で考察するように、スルと結合した事態性名詞は、その多義性を内在させたままであるので、文脈とミスマッチを生じる危険性が高い。一方、支援動詞と結合した事態性名詞は、その結合によって意味が限定されるので、名詞と動詞の結びつきが正しければ、その文脈に適しているか否かの判断が容易になり、誤用が少なくなると思われる。

また、用法の誤りで抽出された機能動詞結合は、「注意」「影響」「失敗」「試験」「練習」「感じ」の6つを事態性名詞にとるものだったが、いずれも使用頻度が高く学習者になじみがあるという共通性がある。学習者は自信のない機能動詞結合は使用回避するが、なじみのあるもの場合は、深く考えずに気軽に用いてしまうので、文脈による使用制限の存在に気づかず、誤用が生じるものと思われる。

Altenberg & Granger (2001) は MAKE のような高頻度動詞は、上級学習者でも非常な困難があるとしている。

高頻度語動詞は、教育プログラムの中で非常に早期に出会うので、これらの語は一度教えられると、顧みられないことが多い。高頻度語は非常に複雑なので、学習者がこれらの語の文法的、語彙的パターンについて非常に大まかな知識しか持たないという危険性があるのは残念である。（p.190：筆者翻訳）

6.3.3.4 母語の影響

5章4節で、誤用分析の枠組みとして、「非結合語」「文法上の誤用」「用法の誤り」のように分類したが、それらは誤用タイプである。しかし、ここでの「母語の影響」というのは、誤用要因で、誤用が引き起こされる原因に当たり、いくつかのタイプにまたがって誤用を引き起こす。病気で例えるならば、誤用タイプは「腰が痛い」「歩行困難」などの表に現れた症状であり、誤用要因は「椎間板損傷」などの病因に当たるものである。

「母語の影響」が誤用要因と考えられるのは、「非結合語」内の次の4種、計40である。

- ①「非日本語」18 ②「非慣用動詞」のうち「L1ペア」10
③「L1品詞適用」5 ④「機能動詞欠如」のうち事態性名詞の直接活用 7

① 「非日本語」 ([A] 1. (1) ①の18例：再掲)

日本語にない中国語を事態性名詞として使用

<6-1> *中国人は大変形式を注重します (重視します) ㊸

<上記以外の例>

*思念する／*会する／*紹介する (2例)／*儲金する／*投江自殺する／*滅滅する／*暢談する／*接受する／*表演をする／*対歌する／*游行をおこなう／*措施をつかう／*建白がある／*摘写られる／*需用する／*獲取する

② 中国語の名詞と動詞のペアを持ち込んだと考えられるもの (「L1ペア・非慣用動詞」) (「非慣用動詞」内の10例、[A] 1. (2) ①ウ：再掲)

<6-6> *まわりの人に危害を持ってくる：《帶來危害》 (危害をもたらす) ㊸
(《 》：該当する中国語)

「帶來」は日本語に訳すと「持ってくる」となるので、<6-6>は、中国語を逐語訳したものである。

<上記以外の例>

*安定がある《有安定》／*失敗を受ける《受到失敗》／*発展をあげる《給予發展》／*経験が取れる《吸取教訓》／*努力を通して《通過努力》／*経験を持っている《有經驗》／*感覚を持っている《有感覺》／*生活を過ごす《過生活》／*有害がある《有害》¹⁰

③ 「L1品詞適用・非慣用動詞」 (「非慣用動詞」内の5例、[A] 1. (2) ①エ：再掲) 変化を表す漢語を、名詞または形容動詞としてとらえたことによると、考えられるもの。

*理解になる／*深刻化になる (2例)／*発達になる

日本語では名詞であるのに、中国語では他動詞であるため、動詞として用いているもの。

<6-7> *他人の観点を参考すると、・・・ (後略) (参考にすると) ㊸

¹⁰ これは、他の「L1ペア・非慣用動詞」とは少し異なり、事態性名詞に含まれている漢字一字と同義の日本語をだぶって産出している。Miyakoshi (2009; 34) でも同じ誤用が報告されている。*act action (take action)、*judge one's justice (do one's justice)

④事態性名詞の「直接活用」

事態性名詞自体を動詞とみなし、機能動詞を用いずに直接活用させていたものが「機能動詞欠如」の内7例あった（[A] 1. (2)②ア：再掲）。

<6-87> * これは自分の心を浄化れると言える。 （自分の心が浄化される）㊦

このCLJの場合、「*快適が感じさせられる。」「自分をリラクシ（リラックス）させるのは大事だ。」と使役受身形、使役形は正しく用いられているので、受身形が習得されていないわけではない。「浄化」が中国語で動詞であることから、日本語の文中でも、名詞ではなく動詞として活用させていると考えられる。事態性名詞を表す漢語が中国語では動詞であることもあり、中国語を母語とする学習者は事態性名詞を動詞として扱うべきか、名詞として扱うべきか混乱していると思われる。

《上記以外の例》

*応用られる／*摘要られる／*破壊られる／*感心られる／*禁止られる／*重視られる

母語の影響が明らかなのは、①に示した日本語にない中国語の語を日本語に取り入れて、機能動詞結合の事態性名詞として用いている「非日本語」である。

②の中国語の名詞と動詞のペアであるかないかの判定には、辞書だけではなく、データとした作文コーパス掲載の執筆者自身による中国語訳も利用した。<6-6>例の「*危害を持つてくる：帶來危害」は、国研（国立国語研究所）の作文コーパスにあった例だが、国研のコーパスでは、学習者の日本語の作文それぞれに、執筆者自身が書いた中国語の訳文が掲載されている。日本語の作文をその対訳部分と照らし合わせたものが<6-6>であるが、次のように中国語の逐語訳になっている。

<6-6：再掲> *まわりの人に危害を持つてくる 周边的人帶來了很大的危害㊦
事態性名詞「危害」は、日本語文と中国語文で同じ語を使用している。また、対訳中国語文の「帶來」は、日本語文の機能動詞「持つてくる」に対応する。

また、③の中国語の品詞分類を適用したと考えられる事例には、先行研究がある。五味・今村・石黒（2006）は、「中国語母語話者は『変化』を表す二字漢語をサ変動詞としてではなく、形容詞または名詞としてとらえる傾向がある。」と述べている。次の2例は本研究の調査で見られたものである。

<6-88> * 經濟が発達になる （經濟が発達する）㊦

<6-89> * 大氣污染も深刻化になりました。 （大氣污染が深刻化する）㊦

中国語では「經濟變發達」「大氣污染變嚴重」と「發達」や「嚴重（日本語訳：深刻化）」などの変化を表す語は形容詞になるため、「發達」「深刻化」を形容動詞ととらえ、「元気になる」などと同じように「～になる」を付加したものと考えられる。

機能動詞を用いずに事態性名詞を直接活用させていた④は、それらの語が中国語では動詞であることから、日本語の文中で用いる時に動詞として活用させてしまったものと思われる。さらに、この事態性名詞の直接活用は、第8章の母語で漢字を用いない非漢字日本語学習者の作文には全く見られなかったので、「母語の影響」によるものとして分類した。

「機能動詞の欠如」のうち、直接活用でないものについては、CLJに14例あったが、非漢字学習者には1例しか見られなかった。CLJ、非漢字学習者それぞれの事態性名詞の直接活用以外の機能動詞欠如の例は次の通りである。

〈CLJ〉〈6-90〉*私の気持は緊張で、怖いです。④

〈6-91〉*休学の時、毎日はうちでテレビを見ましたから、・・・(後略)④

〈6-92〉*メロディーは難しうえに暗記しなければなりませんので、時々放棄だと思っています④

〈非漢字〉〈6-93〉*へんそうない人を立腹させます。(変装していない人を怒らせませす)④

〈6-93〉はドイツ語母語話者のものだが、なぜこのような誤用を犯したのかはわからない。調査した作文数はCLJと非漢字学習者とは同数だったのに、非漢字学習者の機能動詞欠如はこの1例だけという違いが出たので、やはり母語が影響しているのではないかと思われる。しかし、1例でも事例があり、かつCLJだけがなぜこのように機能動詞を欠落させるのかという理由が明らかではないので、「母語の影響」によるものには含めなかった。

以上は、明らかに母語の影響といえるもので、中級CLJの誤用総数143のうち40で、28.0%を占めていた。しかし、母語の影響かどうかの判別は難しいので、実際にはここに掲載したものの以上に母語が影響している可能性がある。

6.4 まとめ

作文で用いられていた機能動詞結合の正用率は82.1%と非常に高かったが、頻度の高いやさしい結合を繰り返し用いていた。作文では、自信の持てない機能動詞結合の使用を回避したためと思われる。

タイプ別に誤用の占める割合を見ると、1) 非結合語 43% 2) 文法 36% 3) 用法 18% 4) 理由不明 3%だった。

1) 「非結合語」とは、日本語にない名詞と動詞の組み合わせで、名詞の誤りによるものと動詞の誤りによるものがあった。

名詞の誤りは、「非日本語」と「非事態性名詞」の使用である。「非日本語」は、日本語にない次のような中国語の語を事態性名詞として用いたものである。

〈6-1: 再掲〉*中国人は大変形式を注重します (重視します)

「非事態性名詞」は、事態性名詞でないものを機能動詞結合に用いたものである。

〈6-2: 再掲〉*「来年ご健康いたします」とかとお祈りします。

動詞の誤りは、「アドバイスをあげる」のように、慣用的でない名詞と動詞の組み合わせ

によるものである。中国語の名詞と動詞の組み合わせをそのまま日本語に持ち込んだ例も多数見られた。〈6-6〉は、中国語を逐語訳したもので、「带来」は日本語に訳すと「持ってくる」となる。

〈6-6:再掲〉*まわりの人に危害を持ってくる : 《带来危害》(危害をもたらす)
2) 文法上の誤用で最も多かったのは、機能動詞の欠如だった。

〈6-8:再掲〉*インターネットも広く応用られている。(応用されている)

〈6-8〉では、事態性名詞に機能動詞ぬきで、直接助動詞を接続して活用させている。これは、日中で同形同義の漢語「応用」が、中国語では動詞であるために、日本語でも動詞扱いしたために生じた誤用と考えられる。

次に多かったのは修飾とヴォイスの誤用である。修飾の誤りは、事態性名詞「失敗」に、助詞「を」なしで直接スルが付き「失敗する」となると、一語で動詞となるにもかかわらず、学習者が名詞扱いするために生じる。〈6-10〉では一語動詞「失敗する」に「私の」で連体修飾している。

〈6-10:再掲〉*私の失敗したことは興味がない学科を選びました。(私が失敗した)
ヴォイスの誤りは、中国語の心理動詞が使役形などを伴って表現されることが多いために生じる(吉永、2011)。

〈6-12:再掲〉*このドラマは悲劇ですが、ほんとに感動されました。(感動した)
3) 用法上の誤用は、日本語に存在する名詞と動詞の組み合わせだが、文脈から判断して、他の機能動詞結合を用いるべきものである。

〈6-43:再掲〉*日本語学科を読みたいですから、私は再び試験しようと思います。
〈6-43〉の場合は、「試験する」ではなく、「試験を受ける」としなければならない。

第7章 [調査2] 日本語学習歴による習得の違い (CLJ : 中級 vs. 上級)

前章では、学習歴が10~18か月の中級レベルのCLJが、機能動詞結合をどのように習得しているのか見てきた。本章では学習歴18か月以上の上級CLJの作文を分析し、中級CLJの調査結果(第6章)と照らし合わせ、日本語学習歴によって機能動詞結合の習得に違いがあるかを見ていく。

学習者は、第二言語として日本語を学ぶ中で、どのように機能動詞結合を習得していくのだろうか。上級になり日本語能力が高まるとともに、機能動詞結合の習得も進むと思われるので、上級学習者の作文では、中級に比べ機能動詞結合の使用が多いのではないだろうか。上級学習者は、中級の時よりも量的に多くの機能動詞結合を産出使用しているだけではなく、さまざまな機能動詞を使い分けていると思われる。したがって、機能動詞として、単にスル動詞を用いるのではなく、多くの支援動詞を用いるようになっているのではないだろうか。

また、中級の段階では、保有する機能動詞結合数がそれほど多くないこともあり、学習した事項をそのまま忠実に用いようとするので、誤用は比較的少ないのではないだろうか。一方、日本語使用になれてきた学習歴2年程度の上級学習者は、日本語の力がつき、自分の意図することを日本語で表現することに慣れてくるため、細かい違いにこだわらずに自分の述べたいことを述べようとするので、母語の借用などの誤用が増えてくるのではないだろうか。したがって、上級学習者は中級学習者に比べ、正用も多いが誤用も多いと考えられる。また、単に量的に正用・誤用が多いだけでなく、その内容も上級と中級では異なると思われる。

7.1 調査対象

調査対象としたのは、日本語学習歴18か月以上で外国語として日本語を学ぶ上級CLJの執筆した作文49である。比較対照する中級のデータは、前章で得られた結果を用いた。

7.2 調査結果

調査は5章で述べた方法で行い、その結果を表7.1に示した。

上級の1作文平均文字数は473、中級は485だったが、作文文字数の違いが機能動詞結合の産出に違いを及ぼす可能性がある。そこで、上級と中級とで作文の文字数に違いがあるかを見るために、作文文字数を従属変数として t 検定を行った。その結果、 $t(183) = .646$, $p > .05$ で有意差は認められなかった。よって、以下では、中級と上級の作文文字数は等しいとみなして分析を行った。

I 使用された機能動詞結合

表 7.1 CLJ 中級と上級の作文調査結果

		上級	中級
	学習歴	18 か月以上	10～18 か月
	学習者数	43	91
	作文数	49	136
	平均文字数	473	485
機能動詞結合数	延べ	273	776
	異なり (異なり÷延べ)	170 (62.3%)	357 (46.0%)
	1 作文平均：延べ	5.6	5.7
	：異なり	3.5	2.6
正誤別 機能動詞結合数 (延べ数)	正用数 (正用割合)	220 (80.6%)	637 (82.1%)
	誤用数 (誤用割合)	53 (19.4%)	139 (17.9%)
種類別機能動詞の 使用延べ数	スル	214 (78.4%)	683 (88.0%)
	支援	57 (20.9%)	76 (9.8%)
	欠如	2 (0.7%)	17 (2.2%)

注) 正用割合＝正用数÷延べ数 / 誤用割合＝誤用数÷延べ数

II 正用で多用された機能動詞結合

表 7.2 正用で多用された機能動詞結合

上級 CLJ	中級 CLJ
禁止する 17 / 勉強する 13 放送する 8 / 公表する 6 影響を与える 5 / 追及する 5	勉強する 29 / 練習する 24 / 利用する 16 参加する 16 / 成功する 14 / 準備する 12 禁止する 11 / 失敗する 11 / 生活する 10 努力する 11 / ダウンロードする 11 掃除 (を) する 9 / 仕事をする 9 注意する 9 / 後悔する 9 / 影響を与える 8

Ⅲ 誤用内容

5章で立てた誤用要因分析の枠組み(5.4)にしたがって、上級CLJの作文での誤用を分析した。その結果を、中級CLJの誤用分析の結果と対比して、表7.3にまとめた。

表 7.3 誤用内訳 [誤用総数：上級 54 / 中級 143]

A 日本語にない組み合わせ

	非結合語の使用				理由不明	計
	名詞の誤り		動詞の誤り			
	非日本語	非事態性名詞	非慣用動詞	機能動詞欠如 (文法上の誤用 I)		
上級 CLJ	6 (11.1%)	8 (14.8%)	15 (27.8%)	2 (3.7%)	0	31 (57.4%)
中級 CLJ	18 (12.6%)	15 (10.5%)	29 (20.3%)	21 (14.7%)	4 (2.8%)	87 (60.8%)

B 日本語にある組み合わせだが不適切

	文法上の誤用 II					用法の誤り		計
	修飾	ヴォイス	項	「を」	間に語句	名詞	動詞	
上級 CLJ	1 (1.9%)	3 (5.5%)	0 (0%)	1 (1.9%)	0	13 (24.0%)	5 (9.3%)	23 (42.6%)
中級 CLJ	13 (9.1%)	8 (5.6%)	7 (4.9%)	2 (1.4%)	0	13 (9.1%)	13 (9.1%)	56 (39.2%)

注1) 機能動詞結合の中には複数の誤用要因を持つものがある。

2) %は各項目の件数を中級、上級それぞれの誤用総数でわったもの

表 7.3 の上級の誤用の具体例は以下のとおりである。中級の誤用例については、6章を参照されたい。

[A] 日本語にない事態性名詞と機能動詞の組み合わせ

1. 「非結合語」

(1) 名詞の誤り

① 非日本語 6

<7-1> *たばこのコマーシャルを制限する (制限する)㊦

<上記以外の例>

*紹介したい / *家団できます / *致死する / *受けた毒害 / *争論が出した

②「非事態性名詞」 8

<7-2> *自家製するのは一番おいしい㊦

<7-3> *人間の体はタバコに含まれる物を需要するようになる㊦

<上記以外の例>

*環境汚染をしない／*日常生活できる／*人に有害する／*考えをしならば(考えなければ)／*爆竹をつける／*通夜する

(2) 動詞の誤り

①「非慣用動詞」 15

「非慣用動詞」は、前章 6.2、[A] 1 (2) ①の中級 CLJ の分類にならない、「意識」「スル」「L1 ペア」「L1 品詞適用」の 4 つに分類した。

ア.「意識・非慣用動詞」 (5 例)

やりもらい、コトの生起など意味的に適合する動詞だが、その事態性名詞に結びつけると慣用性に反するもの

<7-4> *ゆっくり本を読むことは人間のストレス解消に働きを果たしている㊦

<7-5> *私に関心を送った人は紹さんのほかにいなかった。㊦

<上記以外の例> *お祈りがもらえる／*理解し取る／*損を与える

イ.「スル・非慣用動詞」 (3 例)

事態性名詞は適切だが、サ変動詞でないため機能動詞にスルを用いることが不適切であるもの。

<7-6> *自分のことだけ考えて、あまり他人のことを関心したくない時だった。

(他人のことに関心を持ちたくない)㊦

<上記以外の例> *脅威して／*損害する

ウ.「L1 ペア・非慣用動詞」 (6 例)

中国語の名詞と動詞のペアを持ち込んだと考えられるもの

<7-7> *人々の身体は仕事の疲労を受ける <<承受工作的疲劳>>㊦

<7-8> *成人は努力をつける <<付出自己的努力>>㊦

<上記以外の例>

*生活をすごす<<过生活>>／*利益を持つ<<有获利>>／*重視を受ける<<受到重视>>／*興味が生じる<<发生兴趣>>

エ.「L1 品詞適用・非慣用動詞」 (1 例)

中国語の品詞分類を適用したと考えられるもの。

<7-9> *人々の生活はだんだん充実になっている。 (充実してきている) ㊦

②「機能動詞欠如」(文法上の誤用 I) 2

<7-10> *日本のことに幅広く接触によって、・・・(後略)

¹ 中国語では「受到」でひとまとまりの語であるが、日本語と共通する「受」だけに下線を施した。以下同様。

(接触することによって) ㊦

<7-11> * 社会に批判られる (批判される) ㊦

<7-10>はスルが欠如、<7-11>は事態性名詞をスルなしで直接活用させている。

2. 理由不明 0

[B] 日本語に存在する事態性名詞と機能動詞の組み合わせだが、文法及び用法上不適切な機能動詞結合

1. 文法上の誤用Ⅱ

(1) 修飾の誤用 1

<7-12> * 花婿さんの家の到着したら・・・(後略) (花婿さんの家に到着したら) ㊦

(2) ヴォイスの誤り 3

<7-13> * 国民はいろいろな苦しみをうけさせました。 (苦しみを受けた) ㊦

<7-14> * いろいろなものを読み、自分の考え力を向上する
(考える力を 向上させる／伸ばす) ㊦

<7-15> * 本の魅力を感じることを通して、鑑賞力が向上できる。
(鑑賞する力を向上させられる／伸ばせる) ㊦

(3) 取る項の誤用 0

(4) 助詞「を」の過剰使用 1

<7-16> * お寺や神社をお祝いをして、・・・(後略) (お寺や神社にお参りして) ㊦

(5) 名詞と動詞のあいだに間に語句挿入 0

2. 用法の誤り

「用法の誤り」はその事態性名詞と機能動詞の結合は日本語に存在するが、文脈上、他の機能動詞結合を用いるべきものである。

(1) 名詞の誤り 13

文脈から判断し、その事態性名詞を用いることが誤っているもの

<7-17> * お寺や神社をお祝いをして、・・・(後略) (お寺や神社にお参りして) ㊦

<7-18> * 中華人民共和国は五十年ぐらい前に建立されました (樹立されました) ㊦

<7-19> * 学歴程度のあがりなどに感動しなければならない
(～などを喜ばなければ／に感謝しなければ) ㊦

<7-20> * 中国人を了解する (理解する) ㊦

<7-21> * テレビでたばこのコマーシャルをキャンセルしたり、 (中止したり) ㊦

<7-22> * 〈結婚式に〉両方の親は出場すべきだ。 (出席すべき) ㊦

<7-23> * 未来の希望を浄化するため、・・・(後略) (??) ㊦

<7-24> * 人はたばこを依頼する。 (たばこに依存する) ㊦

<7-25> * 人間の健康を破壊する。 (健康を損ねる) ㊦

<7-26> * タバコを吸うことを停止しがります (吸うのをやめたがり) ㊦

<7-27> * 先決条件はここで本当に合意したいの目標です。

(大切なのは、本当に心から納得できる目標だ)㊦

<7-28> *人間の合理的な要求を合致するため・・・(後略) (??)㊦

<7-29> *日本語は欧米語より難しく、制限することが多い、 (制約が多い) ㊦

(2)動詞の誤り 5

文脈から判断し、その事態性名詞には他の機能動詞を用いるべきもの

<6-68:再掲> *〈点数が人間の一生を左右するという考え方は〉子供まで大きく影
響してしまう。 (大きな影響を与えてしまう) ㊦

<7-30> *女性の父母に婚約してもらう (婚約を認めてもらう) ㊦

<6-69:再掲> *他人に影響しなところに吸う (影響を与えないところ) ㊦

<6-70:再掲> *別の人にえいきょうしない (影響を与えない) ㊦

<6-71:再掲> *人権というのは人の行動が回りに影響しない (影響を与えない) ㊦

7.3 結果の分析

表 7.1 で報告した使用延べ数などの調査結果及び表 7.3 の誤用内訳から、上級 CLJ の習得と中級 CLJ の習得とはどのような関係があると言えるのかを以下で分析する。

7.3.1 頻度

ここでは、表 7.1 で提示した使用延べ数などの個々の項目に、上級と中級とで有意差が見られるかを統計的に分析する。

(1) 機能動詞結合数

上級 CLJ と中級 CLJ とで作文で用いられた機能動詞結合の数に違いがあるかを調べた。延べ数では、上級 273、中級 776 の機能動詞結合が用いられており、1 作文平均では、上級 5.6、中級 5.7 であった。正規分布していなかったため、ウィルコクソンの順位和検定を行ったところ、 $W=4475.0$ 、漸近優位確率 .798 で両者に違いは見られなかった。

一方、異なり数を見ると、上級は 170、中級は 357 で、1 作文平均では、上級 3.5、中級 2.6 だった。異なり数が延べ数に占める比率は、上級が 62.3%、中級が 46.0% だった。この比率に統計的有意差があるかを見るために、2 つの母比率の差の検定を行ったところ、 $\chi^2(1, N=1049) = 21.373$ $p^{**}<.001$ で、著しい有意差が見られた (表 7.4)。

表 7.4 機能動詞結合の異なり数が占める割合

	異なり数	[延べー異なり] 数	計
上級 CLJ	170	103	273
中級 CLJ	357	419	776
計	527	522	1049

以上から、上級 CLJ は中級 CLJ に比べ、作文で用いる機能動詞結合の延べ数に違いはないが、使用結合総数の中で占める異なり数の割合は中級より著しく高いことが分かった。

(2) 正誤割合

上級で使用された機能動詞結合の内、正用は 220、誤用は 53 であるのに対し、中級の正用は 637、誤用は 139 だった。誤用数を機能動詞結合総数で割った誤用割合でみると、上級 19.4%、中級 17.9% だった。正用数と誤用数の割合に両者で違いがあるかを見るために 2 つの母比率の差の検定を行ったところ、 $\chi^2 (1, N=1049) = .305$ $p > .05$ で有意差は見られなかった。

表 7.5 上級と中級の正誤数

	正用	誤用	計
上級 CLJ	220	53	273
中級 CLJ	637	139	776
計	857	192	1049

(3) 支援動詞の占める割合

使用されていた機能動詞の中で支援動詞が用いられていた割合が上級と中級で違いがあるかを調べた。機能動詞結合の中でのスル動詞、支援動詞、機能動詞欠如（用いるべきところで機能動詞を用いていないもの）それぞれの使用延べ数は、上級の場合、214、57、2、中級では 683、76、17 だった。

表 7.6 機能動詞の種類ごとの使用延べ数の割合

	スル	支援	欠如	合計
上級 CLJ	214 (78.4%)	57 (20.9%)	2 (0.7%)	273 (100%)
中級 CLJ	683 (88.0%)	76 (9.8%)	17 (2.2%)	776 (100%)
合計	897 (85.5%)	133 (12.7%)	19 (1.8%)	1049

支援動詞が機能動詞全体の中で占める割合に、上級と中級で違いがあるかを分析した。上級で用いられていた支援動詞は 57 で、機能動詞全体に占める割合は 20.9%、支援動詞以外の機能動詞（スル動詞＋機能動詞欠如）は 216 で、79.1% だった。中級の場合、支援動詞は 76 で 9.8%、支援動詞以外の機能動詞は 700 で 90.2% だった（表 7.7）。同等性の検定を行ったところ、 $\chi^2 (1, N=1049) = 22.415$ 、 $p^{**} < .01$ となり 1% 水準で有意差がみられ、上級は中級より用いた機能動詞全体の中で、支援動詞の占める割合が高いことが分かった。

表 7.7 支援動詞が機能動詞全体に占める割合

	支援動詞	その他（スル+欠如）	合計
上級CLJ	57	216	273
中級CLJ	76	700	776
合計	133	916	1049

さらに、スル動詞が機能動詞全体の中で占める割合に上級と中級で違いがあるかを分析した（表 7.8）。上級で用いられていたスル動詞は 214 で機能動詞全体の中で占める割合は 78.4%、スル動詞以外の機能動詞（支援動詞+機能動詞欠如）は 59 で 21.6%だった。中級の場合は、スル動詞は 683 で 88.0%、スル動詞以外の機能動詞は 93 で 12.0%だった。同等性の検定を行ったところ、 $\chi^2(1, N=1049) = 15.106$ 、 $p^{**} < .01$ となり、こちらも 1% 水準で有意差がみられた。機能動詞全体の中で占める割合は、支援動詞の場合、上級は中級よりも高かったが、スル動詞の場合は、上級は中級より占める割合が低かった。

表 7.8 スル動詞が機能動詞全体に占める割合

	スル動詞	その他（支援+欠如）	合計
上級CLJ	214	59	273
中級CLJ	683	93	776
合計	897	152	1049

7.3.2 誤用タイプ順位

表 7.3 で提示した結果から、上級と中級とで誤用内容の違いがあるかを分析する。

上級 CLJ と中級 CLJ の誤用を大きく「非結合語」「文法」「用法」の 3 つにまとめて、それぞれが占める割合を表 7.9 にまとめた。上級では、「非結合語」が、29 で 53.7%、「文法」は I と II をまとめて 7 で 13.0%、「用法」は 18 で 33.3%を占めていた。中級は、「非結合語」が 62 で 43.4%、「文法」は 51 で 35.7%、「用法」は 26 で 18.2%だった。

表 7.9 誤用タイプ別割合

誤用タイプ	上級 CLJ	中級 CLJ
非結合語（除；文法誤用 I）	29 (53.7%)	62 (43.4%)
文法（I+II）	7 (13.0%)	51 (35.7%)
用法の誤り	18 (33.3%)	26 (18.2%)
（理由不明）	0	4 (2.8%)
誤用総数	54 (100%)	143 (100%)

上級と中級それぞれの誤用の中で、大きな割合を占めているものを順に見ていくと、上級の場合、一番多かったのは「非結合語」、次は「用法の誤り」、「文法」の順だった。中級も一番多かったのは、「非結合語」であるが、次に多かったの「文法」で、その次が「用法の誤り」で上級とは異なっていた（表 7.10）。

表 7.10 誤用タイプ別順位

	上級		中級
1	非結合語	1	非結合語
2	用法の誤り	2	文法（Ⅰ＋Ⅱ）
3	文法（Ⅰ＋Ⅱ）	3	用法の誤り

<結果のまとめ>

以上の結果をまとめると、上級と中級では、作文で産出使用する機能動詞結合の延べ数に違いはないが、その中で異なり数の占める割合は、上級は中級に比べて高く、上級はさまざまな機能動詞結合を用いていた。使用されていた機能動詞の中で支援動詞が占める割合は、上級は中級よりも著しく高かった。

また、用いられた機能動詞全体の中で誤用の占める割合は、上級と中級で有意差は見られなかったが、誤用タイプの占める順位が異なり、上級は「非結合語」「用法の誤り」「文法（Ⅰ＋Ⅱ）」の順だったが、中級は「非結合語」「文法（Ⅰ＋Ⅱ）」「用法の誤り」だった。

表 7.11 上級 CLJ vs. 中級 CLJ 分析結果まとめ

		上級	中級
量的知識	延べ結合数	上級＝中級	
	異なり結合数	上級＞中級	
質的知識	支援動詞の割合	上級＞中級	
	誤用割合	上級＝中級	
	誤用順位	1 非結合語 2 用法の誤り 3 文法（Ⅰ＋Ⅱ）	1 非結合語 2 文法（Ⅰ＋Ⅱ） 3 用法の誤り

7.4 考察

調査の結果、機能動詞結合の習得が進むということ、単純に量的に使用量が増えるとか、誤用が少なくなったという点からだけ見るのではなく、さまざまな面から見なければならぬことがわかった。

7.4.1 機能動詞結合の多様性

上級は中級に比べ、作文における機能動詞結合の使用量には、ほとんど違いがみられなかったが、多様な機能動詞結合を用いていた。表 7.2 に示されるように、中級は正用で、「勉強する」「練習する」などのやさしい結合を繰り返し用いていた。しかし、上級になると、使用された機能動詞結合の中で、延べ数に対する異なり数の占める割合が中級と比べて高かった。中級は異なった機能動詞結合を 1 作文につき平均 2.6 しか用いていなかったが、上級は 3.5 と差がみられた。また、作文数は、上級 49、中級 136 で、中級の方が 3 倍近く多いにもかかわらず、使用されていた異なり支援動詞は、上級 29、中級 27 で、上級の方が多かった。

CLJ がどのように機能動詞結合を使い分けているかを見るために、「複 V 結合」を調べた。「複 V 結合」とは、上級、中級それぞれの作文全体の中で、一つの事態性名詞に複数の機能動詞が組み合わせられているものである（例；注意 する／を促す／を与える／を向ける）。

表 7.12 は、正用、誤用別に中級、上級が複 V 結合名詞¹をそれぞれどのような機能動詞とともに用いていたかの具体例を示したものである。作文数を見ると上級は 49 で中級 136 の 1/3 弱なので単純に比較はできないが、中級の複 V 結合名詞は正用が 21、誤用が 23 で、正誤がほぼ同数であるのに対し、上級の複 V 結合名詞は正用 16、誤用 9 で、誤用は正用のほぼ半数で、誤用割合が低くなっている。誤用に用いられている動詞を見ると、中級は上級よりも、多様でさまざまな動詞を用いているが、これは、中級が名詞と動詞の結びつきに慣用性があることに気づかず、「自由」に動詞を用いているためである。上級になると、ある程度この慣用性に気づき、意味的に妥当と思われる動詞でも、むやみに用いないようになるのだと考えられる。

¹ 複 V 結合をしている事態性名詞

表 7.12 複 V 結合に用いられた動詞

上級 作文数 49			中級 作文数 136		
VN	正用	誤用	VN	正用	誤用
影響	する／を与える／ がある		影響	する／を与える を受ける／ がある／を残す	する／をかける をひどくする
関心	を持つ	する／を送る	関心	を持つ	する
重視	する	を受ける	興味	を持つ／がある	
努力	する	をつける	危害	を及ぼす	を持ってくる
爆竹	をする／をやる	をつける	経験	する	を持っている
利益	を得る	を持つ	工夫	する／を凝らす	
理解	する	し取る	試験		をする に参加する
害	を与える／を受け る／をもたらす		失敗	する	する／を起こす を受ける／をやる
生活	する	を過ごす	生活	する	をする／を過ぎる
お祈り	する／をいただく	をもらう	感じ		がある／する
			努力	する	をする／を出す を通る
			発展	する	をあげる
			変化	する	を起こす
			要求	する／を出す	
			理解	する	になる
			練習	する	を行う
10	16	9	16	21	23

注)「影響」の「する」のように、正用と誤用の両方があるのは、用法の誤用のためである。

7.4.2 各誤用タイプが占める割合

誤用割合は、上級も中級も 19%前後と大きな違いはなかったが、誤用内容に違いが見られた。表 7.10 で、タイプごとに占める誤用割合の順序を見ると、最も多かったのは、上級でも中級でも、日本語にない名詞と動詞の組み合わせの「非結合語」であることに変わりはない。しかし、中級ではその次に大きな割合を占めていたのが「文法」の誤用、次が「用法の誤り」であったが、上級では、「用法の誤り」、「文法」の誤用の順で、中級とは違いがみられた。

上級になると、中級よりも文法上の誤用が占める割合が減り、代わって用法上の誤りが占める割合が増えている。これは、単に誤用の中で占める割合が変わっただけなのだろうか。それとも、上級では正用も含めた作文全体で用いられた総機能動詞結合の中に現れる「用法の誤り」が中級より増え、逆に、作文全体の総機能動詞結合の中に現れる「文法」の誤りは中級より少なくなっているのだろうか。その点を明らかにするために、用いられた作文全体の総機能動詞結合の中で誤用タイプそれぞれが占める割合に、上級と中級で違いがあるかを、以下で比較分析した。

① 「非結合語」の使用（「機能動詞欠如」を除く）

「機能動詞欠如」は、文法上の誤用であるので、「非結合語」から除くと、上級で「非結合語」を使用していたのは 29 で、上級が用いた正用と誤用を合わせた機能動詞結合総数 273 の中で 10.6%を占めていた。他方、中級で「非結合語」を使用していたのは 62 で、中級が用いた機能動詞結合総数 776 の中で 8.0%だった。「非結合」が作文で産出された機能動詞結合全体の中で占める比率に、上級と中級で違いがあるかを見るために機能動詞結合数を従属変数として、「2つの母比率の差の検定」を行ったところ、 $\chi^2(1, N=1049) = 1.767$ $p > .05$ で、有意差はなかった。

表 7.13 「非結合語」が総機能動詞結合内に占める比率（除く「機能動詞欠如」）

	「非結合語」の誤用	その他（「非結合語」以外）	総機能動詞結合
上級	29	244	273
中級	62	714	776
計	91	958	1049

② 文法上の誤用

文法上の誤用は、「機能動詞の欠如」を含めて分析した。前章の中級分析で見てきたように、「機能動詞の欠如」は、事態性名詞を動詞抜きで直接活用している、または、機能動詞を用いるべき時に用いていないものなので、文法上の誤りとみなされるからである。下の例（再掲）では、いずれもスルが抜けている。

例) 〈事態性名詞の直接活用〉

<7-11> 〈上級〉 *社会に批判られる (社会から批判される) ㊦

<6-8> 〈中級〉 *インターネットも広く応用られている。
(応用されている) ㊦

〈機能動詞を用いるべき時に用いていないもの〉

<7-10> 〈上級〉 *日本のことに幅広く接触によって、・・・(後略)
(幅広く接触することによって)㊦

〈6-9〉 〈中級〉 *私は自立です

(自立しています) ㊸

このような「機能動詞の欠如」を含めた、文法的誤用は、中級では 51 例、作文で産出された正用と誤用を合わせた機能動詞結合全体 776 の中で 6.6%を占めていたが、上級では 7 例で、機能動詞結合全体 273 の内の 2.6%に減少している (表 7.14)。文法的誤用が、作文で産出された機能動詞結合全体の中で占める比率に、上級と中級で違いがあるかを見るために機能動詞結合数を従属変数として、「2つの母比率の差の検定」を行ったところ、 $\chi^2(1, N=1049) = 6.211$ $p^{**} < .05$ で、有意差があった。機能動詞結合の文法的な側面は、上級になり日本語能力が向上すると共にマスターされていることがわかった。

表 7.14 文法的誤用が総機能動詞結合内に占める比率

	「文法」の誤用	その他 (「文法」以外)	総機能動詞結合
上級	7	266	273
中級	51	725	776
計	58	991	1049

③ 用法の誤り

中級では、用法の誤りは 26 で、作文で産出された正用と誤用を合わせた機能動詞結合全体 776 の中で 3.4%だったが、上級になると 18 で機能動詞結合全体 273 の中で 6.6%と、かえって用法の誤りの占める割合が増えている (表 7.15)。

作文で産出された総機能動詞結合の中で、用法の誤りが占める比率に、上級と中級で違いがあるかを見るために機能動詞結合数を従属変数として、「2つの母比率の差の検定」を行ったところ、 $\chi^2(1, N=1049) = 5.285$ $p^* < .05$ で、有意差があった。

表 7.15 用法の誤りが総機能動詞結合内に占める比率

	「用法」の誤用	その他 (「用法の誤用」以外)	総機能動詞結合
上級	18	255	273
中級	26	750	776
計	44	1005	1049

用法の誤りは、日本語の機能動詞結合として存在する動詞と名詞の組み合わせではあるが、文脈から判断して、他の機能動詞結合を用いるべきものである。この用法の誤りは、1つの事態性名詞に1つの機能動詞だけでなく、複数の機能動詞が共起することによって生ずる。例えば、事態性名詞「影響」には「する」だけでなく「与える」「受ける」「及ぼす」などの機能動詞が共起し、それぞれが結びついた結合は独自の意味用法を有する。したがって、それぞれを文脈に応じて使い分けしなければならないのに、それができていな

いために用法の誤りが生じてしまうのである。このように「複V結合」であることによって生じた用法の誤りは、上級の場合、つぎのような例（再掲）が見られた。いずれも「影響する」ではなく、「与える」または「及ぼす」を用いるべきものである。

<6-68> *（点数が人間の一生を左右するという考え方は）子供まで大きく影響してしま_う㊦（括弧内は筆者付加）

<6-69> *他人に影響しな_ところに吸_う㊦

<6-70> *別の人にえいき_{ょう}しない㊦

<6-71> *人権というのは人の行動が回りに影響_しない㊦

用法の誤りは、機能動詞結合を ワンパターンで記憶し、使用することによって生ずるものである。上級になっても学習者は、事態性名詞が漢語の場合は、サ変動詞であるかどうか、即ち、スル動詞が用いられるか否かには注意を払っても、それがどのような文脈で用いることができるのかということにまで思いが至っていない。支援動詞結合の場合も、「電話をかける」「連絡をとる」など、セットで機能動詞結合を量的に増やしているだけで、結びつける機能動詞によってどのような違いが生ずるかの内容的理解が深まっていない。

上級になって日本語能力が向上したのにかえって中級より用法の誤りが増えた理由として、ひとつには、用法の誤りを生ずるためには、ある程度の機能動詞結合についての知識が必要であることが考えられる。用法の誤りというのは、機能動詞結合を ワンパターンで記憶し、使用することによって生ずるものであるので、「事態性名詞+機能動詞」の具体的知識の蓄積を前提にしているからである。

また、ひとつには上級学習者は中級と比べ、多様な機能動詞結合を用いるようになったが、それらを文脈に応じて使い分けることができているためと考えられる。中級では、限られた機能動詞結合を自信の持てる範囲でしか使用せず、自信の持てない結合は使用回避や言い換えをするので、用法の誤りが顕在化しないのであろう。

両者を合わせて考察すると、上級 CLJ は機能動詞結合の蓄積が増え、多様な機能機能動詞結合を用いるようになったということである。用法の誤りの占める割合が増えたということは、上級 CLJ の機能動詞結合習得の進展を示すものととらえることができる。CLJ はさまざまな機能動詞結合を、実際の文脈で用いようと試み、習得しようとしているのである。用法の誤りが増えるということは、習得に必須の発展過程と言える。

学習者は試行錯誤を繰り返しながら、事態性名詞にはどんな文脈でもスル動詞を結びつけられるわけではないことや、さまざまな機能動詞結合がある中でそれらをどのように使い分けたらいいのかをを学んでいく。その際にそれに対する気づきを促し、学習を支援することが習得を促す大きな推進力となる。

①～③の結果を、表 7.16 にまとめた。

表 7.16 上級と中級の誤用タイプごとの比較

誤用タイプ	総機能動詞結合に占める誤用割合	
非結合語	上級＝中級	$p > 0.5$
文法	上級＜中級	$**p < 0.1$
用法の誤り	上級＞中級	$*p < 0.5$

以上の分析から、日本語能力が向上するのに伴い、産出された機能動詞結合全体の中で文法上の誤用が占める割合は、中級に比べ上級は少なくなっていることが分かった。しかし、上級になり、多くの機能動詞結合を用いるようになると、中級よりもかえって作文の中で「用法の誤り」が占める割合は、増加するようになる。一方、非結合語は上級になっても減少が見られず、相変わらず誤用要因の中で大きな割合を占めている。

7.4.3 母語の影響

本研究では、誤用の内、母語の影響であることが明らかな「非日本語」、中国語の名詞と動詞のペア持ち込み（「L1 ペア・非慣用動詞」）、中国語の品詞分類の持ち込み（「L1 品詞適用・非慣用動詞」）、「事態性名詞の直接活用」の4つを母語の影響による誤用とした（6.3.3.4）。

それに基づいて分析すると、上級の母語の影響による誤用は次の14になる。

（例文は再掲）

- ① 「非日本語」 6
 <7-1> *たばこのコマーシャルを制限する (制限する) ㊦
 <<上記以外の例>>
 *紹介したい／*家団できます／*致死する／*受けた毒害／*争論が出した
- ② 中国語の名詞と動詞のペア持ち込み（「L1 ペア・非慣用動詞」） 6
 <7-7> 人々の身体は仕事の疲労を受ける <<承受工作的疲劳>>㊦
 <7-8> 成人は努力をつける <<付出自己的努力>>㊦
 <<上記以外の例>>
 *生活をすごす<<过生活>>／*利益を持つ<<有获利>>／重視を受ける<<受到重视>>
 *興味が生じる<<发生兴趣>>
- ③ 中国語の品詞分類の持ち込み（「L1 品詞適用・非慣用動詞」） 1
 <7-9> 人々の生活はだんだん充実になっている。 (充実してきている) ㊦
- ④ 「事態性名詞の直接活用」 1
 <7-11> *社会に批判られる (批判される) ㊦

上級 CLJ の誤用総数は 54 であるので、母語の影響 14 はその中で 25.9%を占める。それに対し、中級は誤用総数 143 のうち、母語の影響による誤用は 40 で 28.0%だった（表

7.17)。母語の影響による誤用が占める比率が、上級と中級で違いがあるかを見るために機能動詞結合数を従属変数として、「2つの母比率の差の検定」を行ったところ、 $\chi^2(1, N=202) = .024$ 、 $p > .05$ で、有意差は見られなかった。母語の影響による誤用は日本語能力レベルが上がっても、誤用要因の中で、依然として変わらず、大きな割合を占めていた。

表 7.17 母語の影響による誤用が総機能動詞結合内に占める比率

	母語の影響	その他	誤用総数
上級 CLJ	14 (25.9%)	40 (74.1%)	54 (100%)
中級 CLJ	40 (28.0%)	103 (72.0%)	143 (100%)
計	54 (27.4%)	143 (72.6%)	197 (100%)

7.5 まとめ

上級は中級に比べ、使用延べ数に違いはなかったが、異なり数の占める割合が有意に高かった。また、用いられていた機能動詞の中で支援動詞が占める割合は、中級は9.8%であるのに対し、上級は20.9%と大幅に増えていた。中級はスル動詞のみを単純に用いているが、上級は多様な機能動詞結合を使い分けていた。

機能動詞結合総数の中で正用が占める割合は、上級も80.6%と、高い正用率を示していた(表 7.1)。大きな違いがみられたのは誤用内容である(表 7.18)。中級では文法的誤用の占める割合が35.7%と非常に高かったが、上級になると文法的誤用は13.0%と大幅に減り、文法的規則はマスターされていた。代わって、上級では、用法上の誤用が増えていた。これは、上級になっても学習者は、ある事態性名詞に結びつける機能動詞をワンパターンで記憶して用い、文脈に応じた機能動詞の使い分けに注意を向けていないためと考えられる。

表 7.18 誤用タイプ別割合

誤用要因	上級	中級
非結合語	53.7%	43.4%
文法	13.0%	35.7%
用法	33.3%	18.2%

しかし、中級でも上級でも変わらないのは、非結合語が誤用の中で最も大きな割合を占めていることである。名詞と動詞の組み合わせは慣用的で、規則性がなく、語彙習得と同様、膨大な組み合わせを1つずつ長い時間をかけて学んでいかなければならない。

第 8 章 [調査 3] 母語での漢字使用の有無による習得の違い

(中級 : CLJ vs 非漢字)

本章では、母語で漢字を使用しない中級レベルの日本語学習者 (以下、「非漢字学習者」) の作文コーパスを調査分析し、6 章の中級 CLJ の作文分析結果と比較し、対照分析する。

母語で漢字を使用する学習者は語彙習得だけでなく、「事態性名詞+機能動詞」という機能動詞結合の習得においても有利なのだろうか。機能動詞結合を構成する事態性名詞には日中で共通する漢語が多く、CLJ は、母語の漢語知識を利用して機能動詞結合を産出使用すると思われる。したがって、CLJ は非漢字学習者と比べ、機能動詞結合の産出量も多いことが予想される。また、機能動詞結合に用いる事態性名詞の語種も、CLJ ではカタカナ語や和語と比べ、漢語の占める割合が非漢字学習者よりも高いのではないだろうか。そして、用いられる漢語も、CLJ は非漢字学習者よりも難度の高い語を用いるであろうと思われる。また、漢語の事態性名詞はサ変動詞と呼ばれるように、スルと結びつけて動詞化するものがほとんどであるから、CLJ は、非漢字学習者に比べ、機能動詞結合の中でスル動詞を用いる割合が高いのではないだろうか。

CLJ は、このように母語知識を利用するので、非漢字学習者に比べ機能動詞結合の習得には有利だが、一方、日本語にない母語の漢字を用いる、日中で漢語の意味のズレがあることなどから、正用も多いが、誤用も多いのではないだろうか。また、CLJ が母語知識を利用して機能動詞結合を産出するなら、非漢字学習者にはない独自の誤用が見られるのではないだろうか。しかしながら、CLJ と非漢字学習者は、同じ日本語学習者の立場で機能動詞結合を用いるので、共通した誤用も見られると思われる。

8.1 調査対象

調査対象は日本語学習歴 10~18 か月の中級非漢字学習者で、フランス語、カンボジア語など 12 カ国語を母語とする 112 名の作文 136 (平均文字数 561 字) である¹。本章の結果を、6 章で報告した CLJ 91 名の作文 136 (平均文字数 485 字) の調査結果と比較分析する。

8.2 調査結果

I 使用された機能動詞結合

非漢字学習者と CLJ の作文それぞれの調査結果を表 8.1 にまとめた。

¹ 非漢字学習者の作文収集国内訳 : インド (13)、フィンランド (17)、オーストリア (1)、ベルギー (4)、フランス (22)、ドイツ (8)、ブラジル (11)、カンボジア (13)、モンゴル (5)、ポーランド (8)、スリランカ (8)、アメリカ (2) () 内は執筆者数

表 8.1 作文調査結果

		中級非漢字	中級 CLJ
	学習者数	112 人	91 人
	作文数	136	136
	平均文字数	561	485
機能動詞結合数	延べ	489	776
	異なり (異なり÷延べ)	242 (49.5%)	357 (46.0%)
	1 作文平均：延べ	3.6	5.7
	1 作文平均：異なり	1.8	2.6
正誤別 機能動詞結合数 (延べ)	正用数 (正用割合)	376 (76.9%)	637 (82.1%)
	誤用数 (誤用割合)	113 (23.1%)	139 (17.9%)
機能動詞種類別 使用延べ数	スル	398 (81.4%)	683 (88.0%)
	支援	90 (18.4%)	76 (9.8%)
	欠如	1 (0.2%)	17 (2.2%)

II 正用で多用された機能動詞結合

表 8.2 正用で多用された機能動詞結合

中級非漢字	中級 CLJ
行事を行う 17／勉強する 15	勉強する 29／練習する 24／利用する 16
発展する 14／掃除（を）する 12	参加する 16／成功する 14／準備する 12
努力（を）する 11／結婚（を）する 9	禁止する 11／失敗する 11／生活する 10
招待する 9／影響を及ぼす 9	努力する 11／ダウンロードする 11
反対する 7／準備（を）する 7	掃除（を）する 9／仕事をする 9
援助を受ける 9／スポーツをする 6	注意する 9／後悔する 9
説明する 6／宣言する 6／生活する 6	影響を与える 8

Ⅲ 誤用内容

表 8.3 誤用タイプ内訳

[誤用総数：非漢字 113 / CLJ 143]

A 日本語にない組み合わせ

	非結合語の使用				理由 不明	計
	名詞の誤り		動詞の誤り			
	非日本語	非事態性	非慣用動詞	機能動詞欠如 (文法の誤用 I)		
中級 非漢字	1 (0.9%)	30 (26.5%)	36 (31.9%)	1 (0.9%)	0	68 (60.2%)
中級 CLJ	18 (12.6%)	15 (10.5%)	29 (20.3%)	21 (14.7%)	4 (2.8%)	87 (60.8%)

B 日本語にある組み合わせだが不適切

	文法上の誤用Ⅱ					用法の誤り		計
	修飾	ヴォイス	項	「を」	間に語句	名詞	動詞	
中級 非漢字	10 (8.8%)	5 (4.4%)	0	0	1 (0.9%)	28 (24.8%)	1 (0.9%)	45 (39.8%)
中級 CLJ	13 (9.1%)	8 (5.6%)	7 (4.9%)	2 (1.4%)	0	13 (9.1%)	13 (9.1%)	56 (39.2%)

注 1) 機能動詞結合の中には複数の誤用タイプに分析されるものがある。

2) %は各項目の件数を CLJ、非漢字それぞれの誤用総数でわったもの

表 8.3 の非漢字学習者の誤用の具体例は以下のとおりである。(中級 CLJ の誤用については 6 章参照)

[A] 日本語にない事態性名詞と機能動詞の組み合わせ

1 「非結合語」

(1) 名詞の誤り

① 「非日本語」

1

<8-1> *がいきくじんのかいしゃをひきつけるために、このくにのせいふはこのくにをおいていさせなければなりません。㊦

② 「非事態性名詞」

30

<8-2> *手で書くことをする時に綴りの間違いがたくさん・・・(後略)

(手書きする) ㊦

<8-3> *彼女はいつも笑顔をしていて話しにもしんせつだった。

(笑顔で) ㊦

<8-4> *重要な役割を演じしました。

(演じました。) ㊦

《上記以外の例》

*しゅうかん(習慣)をする(3例) / *電光もする / *流罪する / *おとしだま(年玉)をする / *休みする / *勢力する / *旅立ちする(2例) / *毒する(2例) / *のうぎょう(農業)する / *授業計画する / *障する / *探しする / *明白する / *有害を与える(2例) / *話しようとする / *ほうしんをする / *〈サンバで〉縦隊する(2例) / *害をしています / *そんがいている(3例)

注) () 内の漢字は筆者付加

(2)動詞の誤り

①「非慣用動詞」 36

ア.「意識・非慣用動詞」 (34例)

<8-5> *けれども、またがいこくのえんじょをもらったら、いいですか。

(援助を受けたら) ㊦

<8-6> *次の作文でこのことの説明をやってみましょう。

(説明をして) ㊦

<8-7> *20年くらいせんそうをうけました。

(戦争を強いられました) ㊦

《上記以外の例》

*たんじょびパーティをあげました / *キスをあげられます / *はつげんをもって
*はいりょうをかける / *統治になる / *きょうみううける / *えんじょをもらう
(<8-5>の他に9例) / *えんじょをくれました / *えんじょをあげられません(4例)
/ *えんじょがあられませんでした / *しごとをはたらきません / *はつたつがあり
ません。 / *はってんになる(2例) / *変化行こなわれました。 / *びんぼうな生
活ももらいます。 / *あぶないものがない生活をあげる / *わるくにいけんがおこり
ます / *へんかになる(2例)

イ.「スル・非慣用動詞」 (2例)

<8-8> 他の人の健康のことに全然関心しないで、……(後略) ㊦

《上記以外の例》 *冗談をする

②「機能動詞欠如」 (文法上の誤用 I) 1

<8-9> *へんそうない人を立腹させます。

(変装していない人) ㊦

2. 理由不明 0

[B] 日本語に存在する組み合わせだが不適切

1 文法上の誤用 II

(1) 修飾の誤用 10

<8-10> *早いよやくしたほうがいいです。

(早く予約したほうがいい) ㊦

<8-11> *大学教育は社会の準備しなければなりません。

(社会に出るための準備をしなければ) ㊦

《上記以外の例》

a. [「VNをする」の「を」を補えば可]

*クリスマスのりょうりします／*日本語の勉強する／*個人的な世話しなければ
b. 「VNをする」の「を」を挿入できないもの]

*ストレスかいしやすする (ストレス解消する) / *たばこのはんたいして (2例)

*いろいろなりようしてほうがいい / *わるくにえいきょうします

(2) ヴォイスの誤用 5

<8-12> *かんそうされたえだをさがすためにしんりんへ行きました。
(乾燥した枝) ㊦

<8-13> *国をふつきゅうさせる (国を復興する) ㊦

<8-14> *かんがいがふっこうさせられて, (灌漑が復旧して) ㊦

<8-15> *そのふくさつさに人々のくらしも意見もへんかにされます。
(変化します) ㊦

<8-16> *たばこはからだにわるいいえきょうをされます。 (影響を与えます) ㊦

(3) 取る項の誤用 0

(4) 助詞「を」の過剰使用 0

(5) 名詞と動詞の間に語句挿入 1

<8-17> *訓練をよくしなかつたら分かる漢字をおぼえていません。 ㊦

2 用法の誤り

(1) 名詞の誤り 28

<8-18> *ワープロソフトがけいじする言葉の中に選ばなければなりません。
(提示する) ㊦

<8-19> *〈大学受験では〉やっぱり、社会の標準が完くなくなったらだめでしょうから、..
(中略) ..はっきり標準を通信しなければなくて、困っています。
(?基準を示さなければ) ㊦

<8-20> *脳が発展が起こらない (発達が起こらない) ㊦

<8-21> *一つの承諾を作りました。それは毎日一びつきはライオンの前に食いために
行きます。 (取り決めをした) ㊦

<8-22> *たばこというような有害なものを製作した会社 (作った会社) ㊦

<8-23> *仕事のきんちょうからや TENSION から緩和されているわけではない。
(やわらげられる) ㊦

<8-24> *たばこをすうのを停止するほうがいい (止める) ㊦

<8-25> *しばらくたから (室) と子供とのせんたくはむずかしくなりました。子供とた
かいをいしょう (一緒) にもって行くことができないとじつげんしました。
(?わかりました) ㊦

<8-26> *米国と日本といっしょうに発達国々は展開をせる国々のくらべるその数が広
めていす。 (先進国は発展途上の国と比べて) ㊦

- <8-27> *健康のためにじぶんの必要なものを限定しなければならない
(制限しなければ) ㊦
- <8-28> *じぶんの限定するものは**いちばん重要な**ものである。
(?自分で我慢することが) ㊦
- <8-29> *たばこの広めることを限定するために (抑えるために) ㊦
- <8-30> *今肺談の患いで困っている方でもご一緒になって自分のつらい経験を宣言すれば、・・・(後略) (経験を語れば) ㊦
- <8-31> *せいふはきつときけんなことにあうこくみんをじょちょうしていません。
(助けていない) ㊦
- <8-32> *これはじぶんですめていたよっていないしてきします。
(頼っていないことを示します) ㊦
- <8-33> *日本などこれからせんそうにしっばいして、じぶんでがんばって、はってんのかにまでです。
(戦争に負けても、自力で復興した) ㊦
- <8-34> *みなさんはこくさいかんけいのぼうえきをふやしています。しゅこうげいひんのはばをひろげていることです。みんかんこうぎょうを自慢することです。
(宣伝する) ㊦
- <8-35> *スラブ国民は一緒に協同したら意見の相違でやはり別れる所がぜひ起こる
(協力して働いたら) ㊦
- <8-36> *二つの行事は人々の心をよくあんしんして自分の生活をよく作るためにせわをします。
(役に立つ) ㊦
- <8-37> *二月四日にどくりつのきねんをします。
(独立を祝います) ㊦
- <8-38> *きねんする人々は12日にきょうへいきます。
(記念日を祝う人々は) ㊦
- 《上記以外の例》
- *システムを削除する／*法律を発行する／*規束(規則)を実施する／*国をふっきゅうさせる／*かんがいがふっこうさせられて／*けいざいをかいはつさせる／*くにはまだかいはつしません
- (2) 動詞の誤り 1
- <8-39> *同じ能力の学生のために計画した方が・・・(後略) (計画を立てたほうが) ㊦

8.3 結果の分析

表 8.1 で報告した使用延べ数などの調査結果及び表 8.3 の誤用内訳から、中級非漢字学習者の習得と中級 CLJ の習得とがどのような関係があると言えるのか、以下で分析する

8.3.1 頻度

ここでは、表 8.1 で提示した使用延べ数などの個々の項目に、非漢字学習者と中級 CLJ とで有意差が見られるかを統計的に分析する。

(1) 機能動詞結合数

非漢字学習者と CLJ の作文数はともに 136 で違いがないにも関わらず、作文で使用された機能動詞結合の延べ数は、非漢字学習者 489、CLJ 776 で、CLJ は非漢字学習者に比べ、極めて多くの機能動詞結合を産出使用していた。しかし、作文数は同じでも、作文文字数が機能動詞結合産出に影響を与えた可能性があるため、作文で用いられた機能動詞結合数と文字数を従属変数として判別分析を行った。

その結果、機能動詞結合数に関して $F=32.635$ 、第 1 自由度=1、第 2 自由度=270、 $p^{**}<.01$ で、著しい差がみられたが、作文文字数も、 $F=16.046$ 、第 1 自由度=1、第 2 自由度=270、 $p^{**}<.01$ で有意差があった。しかし、標準化された線形判別関数は、機能動詞結合数 .789 作文文字数 $-.553$ で、機能動詞結合数の方が判別に貢献していた。したがって、非漢字学習者と中級 CLJ とでは、作文で用いられた機能動詞結合数に著しい差があり、CLJ は非漢字学習者に比べ、作文で多くの機能動詞結合を用いていたとみなされる。

異なり数を見ると、非漢字学習者は 242、延べ数 489 に対する異なり数の比率は 49.5%、中級 CLJ は 357 で、延べ数 776 に対する異なり数の比率は 46.0% だった。1 作文平均の異なり数は、非漢字 1.8、中級 2.6 だった。延べ数に対する異なり数の比率に非漢字学習者と中級 CLJ で違いがあるかを見るために、2 つの母比率の差の検定を行ったところ、 $\chi^2(1, N=1265) = 1.460$ 、 $p > .05$ で有意差は見られなかった (表 8.4)。

表 8.4 機能動詞結合の延べ数と異なり数

	異なり数	[延べ-異なり]数	延べ数
中級非漢字	242	247	489
中級 CLJ	357	419	776
計	599	666	1265

(2) 正用と誤用

非漢字学習者の使用した機能動詞結合の内、正用は 376 で機能動詞結合総数 489 の内 76.9% を占め、誤用は 113 で 23.1% だった。それに対し、CLJ は、正用 637、機能動詞結合総数 776 の内 82.1% を占め、誤用は 139 で 17.9% だった。作文で用いられた機能動詞結合の数を従属変数として、2 つの母比率の差の検定を行い、CLJ と非漢字学習者とで正誤割合に違いがあるかを見た。その結果、 $\chi^2(1, N=1265) = 5.077$ $p^* < .05$ で有意差が見られ、非漢字学習者の方が CLJ より、機能動詞結合の中で誤用の占める割合が大きかった (表 8.5)。しかし、両者の作文数は同じであるにもかかわらず、正用総数も誤用総数も CLJ の方が非漢字学習者よりも多く、CLJ は機能動詞結合の産出において、正用も多いが、誤用も多かった。

表 8.5 中級非漢字学習者と中級 CLJ の正誤数

	正用	誤用	計
中級非漢字	376	113	489
中級 CLJ	637	139	776
計	1013	252	1265

(3) スル動詞の占める割合

CLJ のスル動詞は 683 で機能動詞結合総数 776 の内 88.0%を占めていたのに対し、支援動詞は 76 で 9.8%だった。非漢字学習者のスル動詞は 398 で機能動詞結合総数 489 の内 81.4%、支援動詞は 90 で 18.4%だった (表 8.6)。 χ^2 検定を行った結果、 $\chi^2(2, N=1265) = 26.808$ 、** $p < .01$ で著しい有意差が見られ、CLJ は、非漢字学習者に比べ、機能動詞結合の中でスル動詞の占める割合が有意に大きかった。

表 8.6 機能動詞の種類 (延べ数)

	スル	支援	欠如	合計
中級非漢字	398	90	1	489
中級 CLJ	683	76	17	776
計	1081	166	18	1265

8.3.2 誤用タイプ順位

ここでは、表 8.3 で提示した結果から、非漢字学習者と中級 CLJ とで誤用内容の違いがあるかを分析する。

非漢字学習者と中級 CLJ の誤用を「非結合語」「文法」「用法」の 3 つに大きくまとめて、それぞれが占める割合を表 8.7 に示した。非漢字学習者では、「非結合語」が 67 で 59.3%、「文法」は I と II をまとめて 17 で 15.0%、「用法」は 29 で 25.7%を占めていた。中級 CLJ は、「非結合語」が 62 で 43.4%、「文法」は 51 で 35.7%、「用法」は 26 で 18.2%だった。

表 8.7 誤用タイプ別割合

誤用タイプ	中級非漢字学習者	中級 CLJ
非結合語 (除 文法誤用 I)	67 (59.3%)	62 (43.4%)
文法 (I + II)	17 (15.0%)	51 (35.7%)
用法の誤り	29 (25.7%)	26 (18.2%)
(理由不明)	0	4 (2.8%)
誤用総数	113 (100%)	143 (100%)

非漢字学習者と中級 CLJ それぞれの誤用の中で、大きな割合を占めるものを順に見ていくと、非漢字学習者の場合、一番多かったのは「非結合語」、次は「用法」、「文法」の順だった。中級 CLJ も一番多かったのは、「非結合語」であるが、次に多かったのは「文法」、その次が「用法」で非漢字学習者とは異なっていた (表 8.8)。

表 8.8 誤用タイプ別順位

	中級非漢字学習者		中級 CLJ
1	非結合語	1	非結合語
2	用法の誤り	2	文法 (I + II)
3	文法 (I + II)	3	用法の誤り

<結果のまとめ> (表 8.9)

以上の結果をまとめると、中級 CLJ と中級非漢字学習者とでは、作文で産出使用する機能動詞結合の延べ数は、CLJ が非漢字学習者に比べて著しく多かったが、その中で異なり数の占める割合は、CLJ と非漢字学習者とで、違いはなかった。用いられた機能動詞を見ると、CLJ は、非漢字学習者に比べ、支援動詞よりもスル動詞を多用していた。

機能動詞結合全体の中で誤用の占める割合は、非漢字学習者のほうが中級 CLJ に比べ、有意に大きかったが、誤用総数で見ると CLJ の方が多かった。また、誤用タイプの占める順位が異なり、非漢字学習者は「非結合語」「用法の誤り」「文法」の順だったが、CLJ は「非結合語」「文法」「用法の誤り」だった。

表 8.9 中級非漢字学習者と中級 CLJ の分析結果まとめ

		中級非漢字学習者	中級 CLJ
量的知識	延べ結合数	非漢字学習者 < 中級 CLJ p^{**}	
	異なり結合数の占める割合	非漢字学習者 = 中級 CLJ $n.s.$	
質的知識	誤用割合	非漢字学習者 > 中級 CLJ p^*	
	誤用順位	1 非結合語 2 用法の誤り 3 文法 (I + II)	1 非結合語 2 文法 (I + II) 3 用法の誤り

注) 異なり結合数の占める割合 = 異なり結合数 ÷ 延べ結合数

8.4 考察

以下の考察では、はじめに母語で漢語を用いる CLJ は非漢字学習者よりも事態性名詞に漢語を使用することが多いのか、また、CLJ は非漢字学習者よりも難度の高い語を使用しているのかについて分析し、第2に、CLJ は非漢字学習者よりスル動詞を多用していたが、それはなぜかを考察する。第3に CLJ と非漢字学習者で誤用に違いがあるか、また両者で共通する誤用があるかについて見ていく。第4に、CLJ が非漢字学習者に比べ、著しく多くの機能動詞結合を産出していたのはなぜかについて母語との関連で論じる。そして最後に、母語での漢字使用と機能動詞結合との関わりについて考察する。

8.4.1 事態性名詞の語種と難易度

CLJ は非漢字学習者に比べ、延べ数で著しく多くの機能動詞結合を産出していたが、用いた機能動詞結合の性質に違いはないのだろうか。CLJ は、非漢字学習者と比べ、事態性名詞に漢語を使用する割合が高く、非漢字学習者よりも難度の高い語を事態性名詞に使用するのではないだろうか。反対に、外来語の使用割合では、CLJ は非漢字学習者より少ないのではないだろうか。

これらについて検証するため、以下で事態性名詞の語種及び難易度の2点について分析を行った。

《事態性名詞の語種》

CLJ と非漢字学習者が作文で用いた事態性名詞の語種を、漢語²、和語、外来語、混種語の4つに分けて分析した。CLJ は、延べ数で漢語 686、和語 30、外来語 53、混種語 7 を事態性名詞に用いており、非漢字学習者は、それぞれ 435、23、23、7 だった (表 8.10)。 χ^2 検定を行った結果、 $\chi^2(3, N=1265) = 3.539, p > .05$ で有意差はなかった。

表 8.10 事態性名詞の語種 (延べ数)

	漢語	和語	外来語	混種語	合計
CLJ	686	30	53	7	776
非漢字	435	23	23	7	488 ³
合計	1121	53	76	14	1264

《事態性名詞の難易度》

CLJ、非漢字学習者それぞれが用いた事態性名詞を、旧日本語能力試験の「出題基準」(国際交流基金、1994) に基づいて、1級、2級、3級、4級、級外、「日本語の語ではないも

² 作文の中でひらがな表記してあるものでも、本来漢字で表記されるべきものは漢語に含めた。

³ 意味を判別できなかった非漢字圏の「*おいていする」は、分類から除いた。

の」に6分類し比較した⁴(表 8.11)。その結果について χ^2 検定を行ったところ、 $\chi^2(5, N=1265) = 15.542$ 、 $p > .05$ で有意差はなかった。

表 8.11 事態性名詞の難易度比較 (延べ数)

	1 級	2 級	3 級	4 級	級外	非日本語	合計
CLJ	83	334	155	95	96	13	776
非漢字	63	204	93	87	38	4	489
合計	146	538	248	182	134	17	1265

上記分析の結果、CLJ の使用した機能動詞結合数は非漢字学習者と比べ著しく多かったが、用いた事態性名詞の語種と難易度の比率に違いはないことが分かった。CLJ は非漢字学習者よりも外来語の使用比率が少なく、難度の高い漢語を多く使用しているわけではないし、また、非漢字学習者が CLJ より漢語を用いる比率が少ないわけでも、難度の低い語に片寄った語の使用をしているわけでもなかった。

今回の調査では、CLJ の外来語の使用割合は、若干だが、非漢字学習者と比べて多いぐらいだった。それは作文のテーマと関係があると思われる。調査に用いた CLJ の作文のうち 20 は「インターネットと私の生活」というテーマで書かれたもので、「コンピューター」「ウイルス」「ダウンロード」などというネット用語が数多く出てきていた。IT 化が進むとともに、これからますます、CLJ であるか非漢字学習者であるかを問わず、このようなカタカナ語が数多く用いられていくことと思われる。

では、非漢字学習者が CLJ に比べ、漢語を用いる比率が変わらず、また難度の低い語に片寄った語の使用をしているわけでもなかったのは、なぜだろうか。非漢字学習者が用いていた事態性名詞の表記を見ると 漢字表記すべき語 458 のうちひらがなは 207、漢字は 251 で、45.2%を、次のようにひらがな表記していた。

<8-40> * 〈墓参りで〉ざっそをじょそうします。 (雑草を除草します) ㊦

<8-41> * 〈たばこは〉からだにわるいえいきょうをあたえる。
(体に悪い影響を与える) ㊦

漢字の最大の特徴は表意文字であることだが、非漢字学習者はひらがな、カタカナなどの表音文字と区別せずに漢語を学習している可能性がある。そのため、漢語であるか、和語、カタカナ語であるか、難度が高いかどうかをあまり区別せず、語彙を習得しているのかもしれない。

⁴ 分類した語は、漢語だけではなく、和語、外来語、混種語も含まれる。

8.4.2 CLJ がスル動詞を多用していたのはなぜか

CLJ が用いていた機能動詞のうちスル動詞は 88.0%だったが、非漢字学習者は 81.4%と、非漢字学習者に比べ CLJ はスル動詞を用いる割合が高かった。これは先に述べたように CLJ が母語知識を利用して母語の漢語を機能動詞結合の事態性名詞として用いようとするため、スル動詞を多用することになるのだと考えられる。特に、日本語にない漢語も日本語の文中で用いようとする際に、スル動詞が用いられる。

先行研究で述べた Moravcsik (1975) によると、母語から動詞を借用する場合、そのまま動詞として目標言語に借用されることはなく、最初は名詞として借用される⁵ので、ターゲット言語で動詞として処理するためには、ある種の動詞化が要求される。Wichmann & Wohlgemuth (2008) は、動詞の借用方法の一つとして、「Do ストラテジー」をあげている。日本語では、機能動詞スルを借用事態性名詞に結合させて動詞化する方法に相当するので、日本語の場合を「スル・ストラテジー」とした。本調査で CLJ がスル・ストラテジーを用いたと見られるのは、次のようなものである。

<8-42> *料理を紹介するは必要です。 (紹介する) ㊦

<8-43> *犯罪の行為と言う言い方は接受できますか。 (受け入れられます) ㊦

<8-44> *楚国は・・(中略)・・とうとう滅滅してしまいました。 (滅亡して) ㊦

一方、非漢字学習者が母語借用のためにスルを用いた事例は、本研究の調査では見られなかった。非漢字学習者の場合、母語の単語をそのまま日本語に持ち込むことは困難であると思われる。もちろん、非漢字学習者も、ある事態性名詞を文中で使用したいと思っても、それに接続する適切な機能動詞についての知識がない場合、スル・ストラテジーを用いないわけではないが、本研究の調査で見られたのは、次例のようなもので、母語を借用するためではなかった。

<8-45> *うるさい音楽と叫び声と冗談をするなど・・・(後略) (冗談を言う) ㊦

<8-46> *父が一人で探しする (父が一人で探す) ㊦

<8-47> *しょうらいのほうしんをすることです。 (将来の方針を立てる) ㊦

CLJ が非漢字学習者よりもスル動詞を多用していたのは、上記の理由によるものだとしたとしても、次のような疑問が残る。スル動詞の使用割合と連動することではあるが、支援動詞の使用割合は、中級 CLJ が 9.8%であるのに対し、非漢字学習者は 18.4%と倍近く高かった。事態性名詞だけではなく、支援動詞も「受ける」「与える」「得る」など漢語由来の語が多い上に、事態性名詞と支援動詞のペアには日中で共通するものが多い (8.4.4 参照) ので、CLJ にとって支援動詞の使用は、非漢字学習者に比べ有利だと思われる。にもかかわらず、なぜ非漢字学習者の方が支援動詞の使用割合が高かったのだろうか。

既に述べたように、非漢字学習者は母語語彙をそのまま日本語に借用することは困難なので、CLJ に比べスル動詞の使用が少ない。スルの代わりに意味的に妥当と思われる動詞

⁵ Wichmann & Wohlgemuth (2008) の指摘によると、多くの場合、動詞の借用は目標言語で名詞として取り入れられるが、すべてというわけではない。(3.2.1.2 参照)

を使用するので、支援動詞の占める割合が高くなるのだと考えられる。しかし、機能動詞結合としての知識を持って使用するわけではないので、非漢字学習者では、事態性名詞に結びつける動詞が意味的に妥当と思われても慣用性に違反する「非慣用動詞の誤用」が多くなる。「非慣用動詞」が誤用全体に占める割合は、CLJは20.3%であるのに対し、非漢字学習者は31.9%と1.6倍となっている（表8.3）。非漢字学習者の実際の「非慣用動詞の誤用」例には、「*えんじょをもらう」「*せんそうをうける」「*はつげんをもつ」などがある（8.2: 調査結果）。これらは母語が影響した可能性もあるが、前の2つはカンボジア、3番目はフィンランドの学習者のものなので、筆者の語学能力ではコーパスの対訳を利用することができず、解明できなかった。

CLJと非漢字学習者は、同じ正誤の機能動詞結合の産出を行っていても異なったストラテジーを取っている。CLJは、母語語彙を借用し、スル動詞を多用するが、非漢字学習者は意味的に妥当と思われる実質動詞を多用する。スウェーデン語母語話者と中国語母語話者の英語のエッセイにおける「V+N」コロケーションを比べたWang & Shaw (2008)は、コロケーション使用の正誤は、単純に学習者が言語間で適当な候補を探すからではなく、それぞれの母語と目標言語との異なった関係がコロケーション産出における異なったストラテジーをとらせることによると述べている（p.223）。

以上、CLJがスル動詞をなぜ多用するのかについて論じたが、CLJが母語知識を利用してスルを用いるのは、単にスル・ストラテジーによるのではなく、日本語と中国語の文構成における共通性にも由来すると考えられる。この点については、本章の最後で論じる。

8.4.3 誤用：共通するものとししないもの

非漢字学習者はCLJに比べ、用いられた機能動詞結合の中で誤用の占める割合が高かった。CLJと非漢字学習者の誤用は、量だけではなく、内容にも違いはあるのだろうか。表8.7は、誤用全体の中で、各誤用タイプが占める割合を、非漢字学習者と中級CLJを比較したものである。

表 8.7 誤用タイプの占める割合 （再掲）

誤用タイプ	中級非漢字学習者	中級 CLJ
非結合語（除 文法誤用 I）	67 (59.3%)	62 (43.4%)
文法（I+II）	17 (15.0%)	51 (35.7%)
用法の誤り	29 (25.7%)	26 (18.2%)
（理由不明）	0	4 (2.8%)
誤用総数	113 (100%)	143 (100%)

注)「文法上の誤用 I」は非結合語から外し、文法（I+II）にまとめた。

非漢字学習者と中級 CLJ を比べると、大きな違いは、非漢字学習者は「文法の誤り」が、15.0%しか占めていないのに対し、CLJ は 35.7%もあることである。これは、「文法上の誤用」のうち、I とした「機能動詞の欠如」が、非漢字学習者には 1 例しかなかったのに、CLJ の場合は 21 例もあったためである（表 6.2、8.3 参照）。このことについての詳しい論議は後述する（本項 8.4.3 「(2) CLJ だけに見られた誤用」）。

非漢字学習者と CLJ の誤用の中で、違いが見られるのは、他にどのようなものがあり、なぜそのような違いが生ずるのだろうか。また、同じ日本語学習者であることから、共通する誤用もあると考えられる。以下で、CLJ と非漢字学習者に共通する誤用と違いのある誤用について見ていきたい。

(1) CLJ と非漢字学習者に共通する誤用

CLJ と非漢字学習者の誤用で共通していたのは、第 1 に、両者とも誤用の中で最多を占めるのが「非結合語」であったことである。文法的誤用である「機能動詞の欠如」を除いた「非結合語」は、非漢字学習者は誤用全体の 59.3%、CLJ は 43.4%を占めていた。不適切な名詞と動詞の組み合わせである「非結合語」が生じる背景には、機能動詞結合の制約についての学習者の無自覚がある。事態性名詞と機能動詞の結びつきは、意味的に妥当と思えても、またスル動詞が意味的に空疎であっても、組み合わせには慣用性があり制約があるということに気づきがない。

Schmidt (1990) は「気づき仮説」(noticing hypothesis)を提唱し、L2 学習においては、学習者の注意が目標言語項目に向けられることが不可欠であると述べている。また、Siyanova & Schmitt (2008) は、英語学習者の[形容詞+名詞]のコロケーション習得を調査し、「非母語話者 (NNS) は、語を連続したものとしてではなく個別のものとして焦点を当てる (p.453; 筆者翻訳)」という Wray (2002) に言及し、学習者は「インプットの中のコロケーションに、常に気づいているわけではない (p.454; 筆者翻訳)」ことを示唆している。

第 2 に、CLJ も非漢字学習者も「非結合語」を使用する際、支援動詞はその持つ意味、または母語転移で選び、スル動詞には、スル・ストラテジー⁶を用いていることである。

まず、支援動詞を用いた例は次のようであった。

- 〈CLJ〉 <8-48〉 *いいアドバイスをあげて… (後略) (いいアドバイスをして) ㊦
<8-49〉 *私の不注意である失敗を起こしました。 (失敗しました) ㊦
〈非漢字〉 <8-21: 再掲〉 *1つの承諾を作りました。 (承諾しました) ㊦
<8-50〉 *がいこくからえんじよをもらったほうがいいです。
(援助を受けた)㊦

⁶ 8.4.4 で見ていくように、CLJ がスルを用いるのは、スル・ストラテジーによるだけではなく、L1 知識の利用にもよる。

支援動詞の場合、学習者は、上例のように文脈から判断して意味的に妥当と思われる動詞を選択して事態性名詞に結びつけている。その際、当該機能動詞結合を意味する母語での名詞と動詞の組み合わせの逐語訳をしている可能性もある。しかし、機能動詞結合の場合、名詞と動詞の組み合わせには慣用的な制約があるが、そのことを考慮していないために誤用が生じるのである。

一方、スル動詞を用いた場合を見ると、次のようなものがあった。

〈CLJ〉 〈6-45:再掲〉 *今度もっと頑張りしようと思っています。(頑張ろうと) ㊤

〈6-46:再掲〉 *おじいさんはちゃんと顔を洗ったり、ヘアスタイルをしたり、
西服を整理したりして・・・(後略) (髪を整えたり) ㊤

〈8-51〉 *男の人たちは女の人たちとおどって、対歌します。
(デュエットします) ㊤

〈非漢字〉〈8-52〉 *父が一人で探しする (父が一人で探す) ㊤

〈8-3:再掲〉 *彼女はいつも笑顔をしていて話しにもしんせつだった。
(彼女はいつも笑顔で) ㊤

学習者は、実質動詞があるのでそれを用いるべきなのに、わざわざ連用形名詞を作り出したり(「頑張り」「探し」、事態性名詞ではないものに機能動詞を結合させて動詞化したり(「ヘアスタイル」「笑顔」、日本語にない母語の名詞を使用したり(「対歌」)する時にスル動詞を用いている。

支援動詞の場合、CLJも非漢字学習者も、それが本来動詞として持っている「やりもらい」、「コトの成立、消滅」などの意味、または母語の名詞と動詞の組み合わせの逐語訳に基づいて動詞を選択し、事態性名詞に結びつけている。一方、スル動詞の場合は、村木(1991)も述べているように、意味的に「空疎な動詞」なので、結びつける名詞の意味を考慮せず、「自由」に結合している。学習者は、表現しようと意図する内容を持った事態性名詞を文中で用いたいが、一緒に用いる動詞が分からない時、それに適すると思われる実質動詞が見つかった場合は、それを「支援動詞」として用いるが、みつからない場合はスル・ストラテジーを取るものと思われる。

共通する誤用として第3に、CLJの場合も非漢字学習者の場合も、機能動詞結合を産出する際に母語知識を利用して、名詞と動詞の組み合わせを選んだために、不適切な組み合わせが生じている事例が見られた。筆者の語学力の限界で、英語母語話者のものしか分析できなかったが、CLJも英語母語話者も、ともに母語の事態性名詞と機能動詞の組み合わせを直接持ち込み、日本語に直訳したと思われる誤用がみられた⁷。

〈CLJ〉 〈6-6:再掲〉 *まわりの人に危害を持ってくる (“带来危害”の直訳) ㊤

〈非漢字〉〈8-53〉 *人々にも害をしています。 (“do harm to ~”の直訳) ㊤

⁷ 本章の最後で述べるように、CLJの場合は、単に母語の逐語訳によるだけではない。日本語と中国語で漢語事態性名詞が共通するのみならず、結びつく機能動詞までも共通するものがあるという構文的な要因もある。

<8-53>例は、英語母語話者のものだが、単にスル・ストラテジーを取っただけという可能性もあるが、英語には機能動詞に相当する **have**、**take**、**do**、**make** などの軽動詞があり、その直訳を機能動詞にあてはめた可能性が大きい。なぜなら、同じ「害をなす」という意味の日本語を表すのに用いた動詞が、中国語母語話者は「持ってくる（带来）」、英語母語話者は「する（do）」と異なった表現を用いており、かつその（誤用）表現がそれぞれの母語と直対応しているからである。

CLJ の場合、「L1 ペア・非慣用動詞」と「L1 品詞適用・非慣用動詞」の 15 例は、支援動詞をその意味で選択したのではなく、母語の影響によるものであった (6.3.3.4)。非漢字学習者の誤用の中でも、次のようなものは、母語の影響である可能性がある。

- <8-54> <カンボジア> *がいこくのえんじょをもらったら・・・(後略) (援助を受けたら) ㊦
<8-55> <ドイツ> *キスをあげられます (キスをしてあげる) ㊦
<8-56> <フィンランド> *はつげんをもって・・・(後略) (発言して) ㊦
<8-57> <インド> *きょうみううける (興味を持つ) ㊦

これらを用いた学習者は母語概念を用いて、日本語作文で事態性名詞に相当と思われる動詞を結びつけた可能性が高い。したがって、母語の影響の可能性はあるが、筆者の語学力の限界で学習者の母語と対照することができず、今回の調査では母語の影響という枠に含めることはできなかった。

以上見てきたように、CLJ だけでなく、非漢字学習者も母語の名詞と動詞の組み合わせの逐語訳や、スル・ストラテジーなどを利用して機能動詞結合を産出することがある。ではどうして機能動詞結合の産出数に見られるように、CLJ と非漢字学習者との間に習得上の差が生み出されるのだろうか。

両者の大きな違いは、非漢字学習者は母語概念[・]だけしか利用できないが、CLJ は母語概念[・]だけでなく、母語の語形[・]までも、そのまま日本語に持ち込めることである。また、非漢字学習者は、母語の日本語への逐語訳という形でしか母語知識を利用できないが、以下で明らかにするように、さらに CLJ は、日中で共通する漢字を媒介として、母語の「事態性名詞」と「動詞」の組み合わせにまでも、語形[・]をそのまま日本語に持ち込むことが可能なのである。そればかりでなく、ある事態性名詞に支援動詞を用いるべきか、スル動詞を用いるべきかまで、母語知識を用いてある程度判断できる。これらによって、CLJ は非漢字学習者に比べ、日本語学習において極めて有利な立場にあるのである。

CLJ と非漢字学習者に共通した誤用の第 4 は、次のような機能動詞結合に対する修飾の誤りである。

- <CLJ> <8-58> *インターネットは・・・(中略)・・・よく処理しさえすれば、*安全の確保して大きい収穫がある。 (安全を確保して) ㊦
<8-59> *日本語会話の練習しながら、話の技巧も習います
(「会話を練習しながら」または「会話の練習をしながら」) ㊦

<8-60> *おじいさんは長生きで、幸福な生活していきますよ。

(幸福に生活して) ㊦

<非漢字> <8-61> * 日本語の勉強する

(日本語を勉強する) ㊦

<8-62> * 個人的な世話しなければ・・・ (後略)

(個人的に世話をしなければ・・・) ㊦

これらは、事態性名詞とスルは、「VN する」と「を」なしで結び付いた場合、一語で動詞として機能するにもかかわらず、事態性名詞部分だけを切り離して名詞として扱い、ナ形容詞や「N の」で連体修飾する誤りである。上記の例を含めて、CLJ には 13、非漢字学習者には 10 の修飾の誤りがあったが、これは、学習者が機能動詞結合に用いられた事態性名詞が名詞であるのか、動詞であるのかをはっきりと認識していないことを示している。これも第 1、第 2、第 3 にあげた誤用の場合と同様、機能動詞結合そのものについて無自覚であることによって引き起こされた誤用であると考えられる。

そして、第 5 に、文法上の誤用の内、「VN をする」の「を」の間違いと、事態性名詞と機能動詞の間に語句を挿入する間違いは、CLJ でも非漢字学習者でも非常に少なかったことがあげられる。「を」の間違いは CLJ にだけ 2 例、語句の挿入による誤用は非漢字学習者だけだった。

「を」の間違いの 1 つは「VN をする」の「を」の過剰使用だった。

<CLJ> <6-21 : 再掲> * 無理して出場をして試合に負けた。㊦

<6-21>は、「を」を抜かして「無理して出場して試合に負けた。」とすれば、正用となる。このように、修飾語のつかない単独の「VN をする」の場合、すべて「を」を用いないで、「VN する」としてしまえばよいため、習得上はあまり問題とならないので、誤用が少なかったと考えられる。しかし、共通する誤用の第 4 で指摘したように、「VN」に修飾語がついた場合は、連体修飾の場合と連用修飾の場合とで、「を」の有無が異なり、誤用が多いので注意が必要である。

「を」を用いた CLJ の誤用の他の 1 つは、二重ヲ格制約違反のものである。

<CLJ> <6-22 : 再掲> * ほうきは家を掃除をします。㊦

6 章でも述べたが、二重ヲ格制約は、次の<8-63>と<8-64>の例のように、機能動詞結合に関わらず、他の構文にも関係する。日本語学習者は初級の段階で必ず二重ヲ格制約を学習するので、誤用が少なかったのだと思われる。

<8-63> * 母親が子供を薬を飲ませる

<8-64> * 監督が部員をグラウンドを走らせる。

一方、事態性名詞と機能動詞の間への語句の挿入について、村木 (1991) は、機能動詞結合は結びつきが強く、「名詞句と動詞の間に、他の語句が入りにくい (p.231)」と述べている。また、藤井・上垣 (2008a) は、「分裂文化、主題化、関係節化などによって、SVC⁸

⁸ Support Verb Construction 支援動詞構文：本研究の機能動詞結合構文に相当する。

の名詞句と動詞を統語的に分離させると容認度が落ちたり動詞の意味解釈が変化したりする、という統語的固定性を呈する。(p.944)」と述べている。

しかし、事態性名詞と機能動詞の間に語句を挿入した誤用は、非漢字学習者の次の1例のみで、CLJには全く見られなかった。

<8-17:再掲> *訓練をよくしなかったら分かる漢字をおぼえていません。㊦

(2) CLJ だけに見られた誤用

非漢字学習者には見られず CLJ だけに見られた誤用がいくつかあった。その1つは、母語の借用である。日本語にない語を事態性名詞に用いていたもの(「非日本語」の名詞)が、表 6.2 で CLJ は 18 あったが、次のように、全て母語の中国語の語句をそのまま日本語の文中で用いていた。

<8-65> *一家は遅くまで暢談したりします。(語り明かします)㊦

<8-66> *天安門広場で閱兵儀式と遊行をおこないました。(パレードしました)㊦

非漢字学習者の場合、日本語では名詞でないものと機能動詞とを結びつけていたのは、<8-1>の「*おいていする」1例だけで、なぜこの語が出てきたのかはわからない。機能動詞結合における母語の借用は、日本語と中国語が漢語を共有することに起因する CLJ 特有の傾向と考えられる。

CLJ に片寄って見られた誤用の第2は機能動詞の欠如で、CLJ では 21 例だったが、非漢字学習者は 1 例だけだった。本調査では機能動詞の欠如は 2 種類見られ、①事態性名詞に助動詞を接続して直接活用させ、動詞のように扱っているものと、②機能動詞を用いるべきところで用いていないものがあつた。

① 事態性名詞に直接助動詞を接続し、動詞のように活用させているものは、CLJ では次のようなものが 7 例⁹あつたが、非漢字学習者には全く見られなかった。

<8-67> *個人の権利は・・・(中略)・・・禁止られるべきです。(禁止される)㊦

<8-68> *コンピューターのシステムを破壊られで、・・・(後略) (破壊されて)㊦

日本語では、「禁止」「破壊」などの漢語は名詞に分類されるが、中国語では動詞として用いられるので、日本語でも動詞扱いして、直接活用させてしまったものと思われる。

② 機能動詞を用いるべきところで用いていない例は、CLJ で 14 例あつたが、非漢字学習者では 1 例だけだった。次の例は、CLJ が機能動詞を欠如させたものである。

<6-9:再掲> *私は自立です。(自立しています)㊦

<8-69> *私の気持ちは緊張で、怖いです。(緊張して)㊦

<8-70> *メロディーは難し・・・(中略)・・・ので、時々放棄だと思っています。(放棄しよう)㊦

⁹ 本文以外の 5 例：*浄化れる / *摘写られ / *応用られる / *感心られる / *重視られる
(但し、「感心」は中国語にない語であるので、母語の影響で動詞扱いしたとは言えない。)

〈8-71〉 *アニメ関係の仕事をする実現ために、日本語は頑張る (実現する) ㊦
 石堅・王建康 (1983) は、「中国人学生の作文の誤用例に、日本語の漢字語彙の品詞のとり違えに起因するものがある (p.56)」とし、例として、〈8-69〉と同じ「緊張」を挙げている。「緊張」は日本語では動詞であるのに、「中国語では、形容詞なのか、自動詞なのか、あるいは形容詞と自動詞に兼属しているのか不明確であり、学習者は、このような日本語を往々にして形容詞として使ってしまう (p.59)」と述べている。非漢字学習者で機能動詞を欠落させていたのは、次の1例〈8-9〉だけだったことから、やはり〈6-9〉〈8-69~71〉のような誤用も母語と日本語の漢語が共通するために生じる CLJ に片寄った傾向であると言える。

〈8-9: 再掲〉 *へんそうない人を立腹させます。 (変装していない人) ㊦

(3) CLJ と非漢字両者に見られたが、内容が異なった誤用

CLJ にも非漢字学習者にも見られたが、両者で内容が異なっていた誤用があった。その1つは、用法の誤りである。表 8.3 で用法の誤りの欄を見ると、非漢字学習者の場合、名詞の誤りは 24.8% を占めているのに、動詞の誤りはわずか1例で 0.9% しかない。それに対し、CLJ は名詞の誤りと動詞の誤りが、各 9.1% ずつと同じ割合である。これは、非漢字学習者は、名詞に結びつけるべき動詞を選ぶ以前に、事態性名詞の選択そのものに困難を生じ、つまづいているためと考えられる。CLJ は漢語知識を利用できるので、名詞そのものの選択においては、非漢字学習者に比べ、格段に有利なのである。

したがって、非漢字学習者は事態性名詞の習得に重点をおいて学ぶべきであるが、CLJ の場合は、事態性名詞にどのような動詞が結びついて用いられるのかに重点をおくべきである。

CLJ と非漢字学習者とで、内容に違いがみられた誤用の2つめは、ヴォイスの誤用である。CLJ の場合、8例あったヴォイスの誤用は、すべて心理表現だった。6例は「感動する」、2例は「感心する」で、受け身、使役、使役受け身で用いられていた。

〈6-12: 再掲〉 *このドラマは悲劇ですが、ほんとに感動されました。 (感動しました) ㊦

〈6-13: 再掲〉 *話す時発音がきれいし、クリアし、感心られました。 (感心しました) ㊦

誤用とは言えないが、ほかに次のような例があった。

〈8-72〉 ?彼女の勇氣と品質に非常に感動させられる。 (感動する) ㊦

〈8-73〉 ?これはわたしは一番感動させられたところである。 (感動した) ㊦

これらは使役受身を使っているが、日本語としては「感動する」を使った方が自然である。

石堅・王建康 (1987) は、『感動』は、中国語では自他動詞、日本語では自動詞である。日本語では使役態にして他動詞にする。注意すべきは、このような語は中国語では受動態

で用いられることが多いので、日本語でもそのまま『感動される』という形を作ってしまう (p.62)」と述べている。

一方、非漢字学習者のヴォイスの誤用 5 例のうち 3 つは自他両用の事態性名詞を用いたものだった。

〈8-12: 再掲〉 *かんそうされたえだをさがすためにしんりんへ行きました。
(乾燥した) ㊦

〈8-13: 再掲〉 *国をふつきゅうさせる (復旧する) ㊦

〈8-14: 再掲〉 *かんがいがふっこうさせられて (復興して) ㊦

上記のような自他両用事態性名詞は、次のように自動詞にも他動詞にも用いられる。

〈8-74〉 冬は空気が乾燥する。 (自動詞用法)

〈8-75〉 ふとんを干して乾燥する。 (他動詞用法)

影山 (1996) によると、「サ変動詞には派生接辞が付かないから、ヴォイスの転換を行うにしても、形態的な手がかりはない。すると、・・・(中略)・・・意味的な性質しか頼るものがない。(p.203)」そのため、日本語学習者には、ただでさえ漢語事態性名詞の自他の判別は難しいが、上記のような自他両用の場合は、さらに難解度が増すと思われる。

しかし、CLJ の場合、日中で共通する漢語知識を自他の判別に役立てることができるのである。木村 (2010) は、中国語原文と日本語訳文、及び日本語原文と中国語訳文の自・他動詞の対応関係について検証し、「自動詞と他動詞は、中国語と日本語の原文と翻訳において、自動詞は自動詞、他動詞は他動詞に対応している場合が多¹⁰」いと述べている (p.19)。また、稲垣 (2009) は、中国語には自他同形の動詞 (開、停止) があるが、「日本語にもサ変動詞で同様の現象が見られる (車が停止した/車を停止した)。そうであれば、サ変動詞の自他に関しては、中国語話者は母語の正の転移により問題なく習得できるはずである」とする¹¹ (p.90)。しかし、すべての場合に日中で自他が一致するわけではないので、日中でズレがある場合には、これまで見てきたように誤用が生じてしまう。

一方、非漢字学習者の場合、同一の事態性名詞が自動詞と他動詞両方に用いられることがあることを認識している学習者ほとんどいないと思われる。

3 つ目に、CLJ と非漢字学習者とで、内容に違いがみられた誤用として、1 語動詞への連体修飾の誤用がある。「VN する」を名詞で修飾して「N の VN する」とした際の誤用では、CLJ は N に項を用いているが、非漢字学習者は項ではないものを用いている。

〈CLJ の誤用例〉

N に主語：*私の失敗したことは／*自分の努力をする／*宮廷貴族の生活する時
〈非漢字学習者の誤用〉

〈8-11〉 *大学教育は社会の準備しなければなりません。㊦

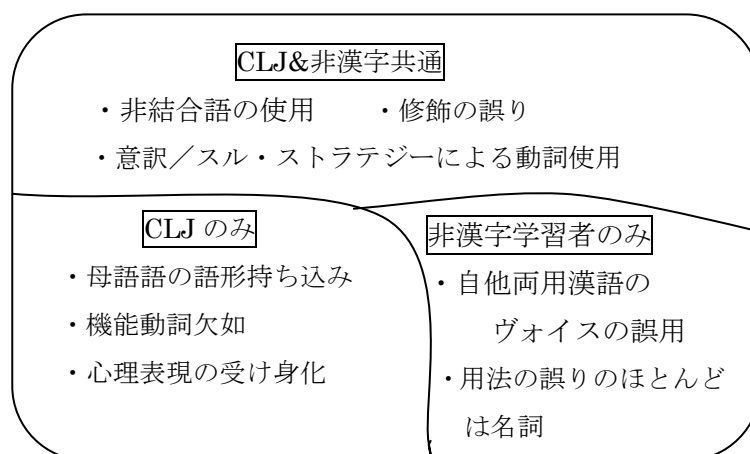
¹⁰ 木村は、「しかし、すべての動詞が一对一で対応しているものではなく、中国語原文で他動詞であるものが、日本語訳では自動詞になっていた (p.19)」すると補足している。

¹¹ 稲垣 (2009) の補足：「中国語と日本語で対応する動詞であっても、両言語間で自他交替の可能性が一致しない場合が考えられ、ズレがある場合は逆に習得を困難にする可能性もある。(p.90)」

<8-76> *たばこのはんたいしてせんでんは多いにあるけれども・・・(後略) ㊦
 非漢字学習者の誤用例の場合、「Nの」には語ではなく、「社会に出るための準備をする」
 「たばこを吸うことに反対する」と、節で表す必要がある。このような違いが生じるのは、
 非漢字学習者の日本語力が CLJ に及ばないためなのか、言語による構文の違いが影響して
 いるためなのか、その理由は現時点ではわからない。

以上の分析結果から CLJ と非漢字学習者に共通する誤用と、両者それぞれにしか見られ
 ない独自の誤用の分布を表 8.12 に図示した。

表 8.12 CLJ と非漢字学習者に共通する誤用と独自の誤用



8.4.4 母語での漢字使用と機能動詞結合の習得

以上から、機能動詞結合の習得においては、母語で漢字を使用するか否かで大きな違いが見られることが明らかになった。ここでは、CLJ がどのように母語知識を活用しているのか、なぜ CLJ が機能動詞結合の習得に母語知識を活用できるのかを論じていきたい。

8.4.4.1 CLJ は母語知識を活用して機能動詞結合を多用

以上の調査では、調査対象とした作文数は CLJ も非漢字学習者も 136 で同じだったが、CLJ は非漢字学習者よりも機能動詞結合の使用延べ数が著しく多く、また、非漢字学習者では、機能動詞結合を全く使用していない作文が 15 あったが、CLJ では 1 作文のみだった。このように非漢字学習者に比べ、CLJ の機能動詞結合使用量が著しく多かったのは、機能動詞結合を構成する事態性名詞に漢語が多いことが考えられる。しかし、それに止まらず、機能動詞結合を構成する名詞と動詞のペアまでもが日中で共通するものが多く（後述）、それを日本語の文中で活用できるので、CLJ は機能動詞結合を豊かに用いることが可能なのである。非漢字学習者に比べ、CLJ は機能動詞結合習得において圧倒的に有利な条件がそろっている。

CLJ が母語知識を利用して事態性名詞を用いていたことは、今回の調査結果から次のように裏付けられる。

1 つは、CLJ の作文で、日中で同形同義の漢語が多用されていたことである。CLJ の使用した漢語の事態性名詞を、文化庁（1978）に基づいて、S 語（Same）、O 語（Overlap）、D 語（Different）、N 語（Nothing）の 4 つに分類した。分類には、講談社の日中辞典、中日辞典を参照した。

S 語：日中両国における意味が同じか、または極めて近い語

O 語：日中両国における意味が一部重なっているが、両者の間にずれがある語

D 語：日中両国における意味が著しく異なる語

N 語：日本語の漢語と同じ漢語が中国語に存在しない、または中国語と同じ漢語が日本語に存在しない語

表 8.13 にその結果をまとめた。S 語は 496 で漢語総数 686 の内 72.3%、漢語以外を含めた事態性名詞総数 776 の中でも 63.9%と、非常に高い割合を占めている。

表 8.13 中級 CLJ 使用漢語事態性名詞の日中対照分類

機能動詞結合	S 語	O 語	D 語	N 語	計
正用	400	20	58	74	552
誤用	96	5	9	24	134
計	496 (72.3%)	25 (3.6%)	67 (9.8%)	98 (14.3%)	686 (100%)

また、CLJ が L1 漢語知識を利用して機能動詞結合を産出していることは、S 語だけでなく、日本語にない漢語 (N 語) を多用していることから見てとれる。CLJ の作文には、18 の日本語にはない漢語が機能動詞と結びつけられていたが、以下に示すようにそれらはいずれも中国語を借用したものだった。

* 思念する / * 会する / * 紹介する (2 例) / * 儲金する / * 投江自殺する / * 滅滅する / * 暢談する / * 接受する / * 表演をする / * 対歌する / * 游行をおこなう / * 措施をつかう / * 建白がある / * 摘写られる / * 需用する / * 獲取する / * 注重する

それに対し、非漢字学習者で日本語にない語を事態性名詞として機能動詞と結びつけていたのは、「* おいている」1 語だけだった。「* おいてい」が何を意味するのか、文脈からは判別できなかったが、L1 語の借用の可能性が考えられるのは、この 1 語だけだった。

さらに、「* 高度発展する」「* 環境汚染する」などの 4 字漢語を事態性名詞として用いる誤用も、非漢字学習者には見られない CLJ 特有の誤用である。6 章で言及したように、4 字漢語をスル結合で用いるのは、対応する中国語文をそのまま日本語に持ち込むためであると考えられる。

以上のように CLJ は母語の漢語知識を利用して事態性名詞を産出していたが、それのみならず以下に述べるように、機能動詞結合を構成する名詞と動詞の組み合わせにまでも母語知識を活用していた。

<8-77><8-78>は作文作成者自身の母語による対訳が掲載されている国研のコーパスからの事例である。

<8-77> 年長者はみなさんに次の一年の要求を出してくれます。

《长辈向大家提出来年的要求》^⑩

<8-78> 放送などの影響を受けやすいです。《很容易受其它人和电视广告的影响》^⑪

<8-77>例の CLJ は日本語作文で「要求を出して」という機能動詞結合を用いているが、本人が書いた中国語の対訳でも同じ「出・・・要求」が見られる。また、<8-78>例の CLJ は、日本語作文での「影響を受ける」に対応する中国語の対訳は、「受・・・影响 (影響)」で日本語の作文と中国語訳とで同形同義の漢字語が用いられている。この機能動詞結合の名詞と動詞のペアにおける日本語と中国語の関わりについては、以下で詳しく分析する。

8.4.4.2 中国語の構文と機能動詞結合との関わり

「名詞+動詞」のコロケーションと L1 との関係については、3 章の先行研究で見えてきた。L1 転移を引き起こすのは、Wang (2001) の場合、L1 でも L2 でも、名詞と動詞の組み合わせにおいて Light Verb を用いているかどうかの異同によった。そして小森外 (2012) のテストでは、日本語の S 語の漢語で、中国語と同じ共起語を取る漢語の方が、取らない漢語より得点が優位に高かった。機能動詞結合の産出実験を行った黄 (2017) は、

フォローアップ・インタビューを行い、日本語の事態性名詞に結びつく動詞を産出する際には、母語の中国語の名詞と動詞の共起を想起していることを、学習者自身の口から聞き出している。

Wang 及び小森外では、いずれも L1 と類似性がある場合に習得が進むとしているが、L2 習得に L1 知識をどの程度利用できるのかについては調べていない。L1 知識を用いると、「名詞+動詞」結合の場合、どのぐらいの割合で、プラスに利用できるのだろうか、また L1 知識を用いたことにより誤用を招く確率はどのぐらいなのだろうか。それを調査した先行研究はまだない。

ここでは、CLJ が日本語の機能動詞結合を産出する際の L1 知識利用について、以下の疑問点に基づいて考察していく。

CLJ が日本語の文中で機能動詞結合を産出しようとする際、名詞と動詞の組み合わせにおける日中の類似性は、どの程度利用可能なのだろうか。また、名詞と動詞の組み合わせが、単に日中で共通する漢語である場合だけ、L1 知識が転移するのだろうか。

日本語と同形同義の漢語事態性名詞を日本語の文中で動詞として用いる際に、スル動詞を用いるか、支援動詞を用いるかで中国語に何か手掛かりがあるのだろうか。また、支援動詞を用いようとする場合、中国語の母語知識を活用して、どの支援動詞を用いるべきか選別できるのだろうか。

この点を、明らかにするため、本研究で用いた母語対訳の付いた国研のコーパスの中で、CLJ 上級 19 人と中級 38 人、計 57 人を対象に、日本語の作文とそれを翻訳した中国語の作文（資料 4）を比較対照した。調査に際しては、日本語作文の中の機能動詞結合の事態性名詞に対応する中国語作文での訳語が、日中同形同義の〈S 語〉であるものだけを選び出した。

分析のために、対訳中国語作文の中の語を次のように分類した。分類に当たっては、中国語では簡体字で書かれていたものでも、元の漢字が日本語と同一のものは同じ漢字語とした。

〈S 語名詞〉：日本語作文の事態性名詞とその対訳中国語が同形同義である語

例) (日) 規則 ⇄ (中) 规则 / (日) 影響 ⇄ (中) 影响
ただし、日本語では名詞であるが、中国語文では動詞、形容詞として用いられているものも含む。

〈S 語動詞〉：日本語作文の機能動詞に含まれる漢字が、対応する中国語訳の動詞にも含まれている語

例) (日) 規則を作る ⇄ (中) 作了规则

〈D 語動詞〉：日本語作文の機能動詞と対応する中国語訳の動詞が全く異なる語

例) (日) 影響を与える ⇄ (中) 产生了影响

この分類を用いて、日本語の機能動詞結合に対応する対訳中国語作文部分进行分析すると、以下の 3 種に分けられた。

《対訳中国語作文での〈S 語名詞〉の用法》

A. 〈S 語名詞〉を単独使用

B. 〈S 語名詞〉に動詞を併用

{	(1) 〈S 語名詞〉+〈S 語動詞〉
	(2) 〈S 語名詞〉+〈D 語動詞〉

以下で具体例を挙げて、詳しく説明する。

A. 中国語作文で〈S 語名詞〉を単独使用

中国語作文で〈S 語名詞〉が単独で用いられているものとは、〈S 語名詞〉に動詞が併用されていないものである。これに対応する日本語作文内の機能動詞結合には、スル動詞結合のもの、支援動詞結合のものがある。

①対応する日本語がスル動詞結合の例

〈8-79〉の中国語文の「賛成」は〈S 語名詞〉が単独使用され、他の動詞は併用されていないが、対応する日本語文では、「賛成します」と、スル動詞が用いられている。

〈8-79〉 我是賛成前者的, . . . (後略) 私は前の方が賛成します㊦

〈8-80〉 吸烟对人体有害这是早经科学验证了的
*たばこは人に有害するのは化学の域で確定しました㊦

〈8-81〉 放鞭炮污染大气 这个时候、大気を污染するので… (後略) ㊦

〈8-82〉 人们越来越重视过节了。 人々は祝日を重視してきます。 ㊦

〈8-83〉 后面再说明。 後で説明する。 ㊦

②対応する日本語が支援動詞結合の例

〈8-84〉の中国語文の「影响」(影響)は〈S 語名詞〉が単独使用され、他の動詞は併用されていないが、対応する日本語文では、「影響を受ける」と、支援動詞「受ける」が用いられている。

〈8-84〉 对女性和小孩的影响远大于对男性的。
女の人と子どもは男の人より悪い影響をうける㊦

〈8-85〉*吸烟有害健康。(たばこは)健康に有害があつて㊦

B. 中国語作文で〈S 語名詞〉に動詞を併用

中国語作文で〈S 語名詞〉に併用されていた動詞には、〈S 語動詞〉のもの、〈D 語動詞〉のものがある。

(1) 〈S 語名詞〉+〈S 語動詞〉

この分類に属するのは、日本語作文で支援動詞結合のものだけである。なぜなら、日本語作文でスル動詞結合の場合、動詞はスルであり、〈S 語動詞〉ではない。

下記<7-7>の日本語文の「疲労」の中国語対訳〈S 語名詞〉の「疲労」には、日本語の機能動詞「受ける」に含まれる漢字と同じ「受」という〈S 語動詞〉が用いられている。また、<8--86>の日本語文中の「規則」の中国語対訳〈S 語名詞〉である「規則」には、日本語文の「作る」に含まれる漢字と同じ「作」が用いられている。

<7-7: 再掲> 人们的身体除了要承受工作的疲劳以外, . . . (後略)

*人々の身体は仕事の疲労を受けるほかに, . . . (後略) ㊦

<8-86> 如果真的作了规则禁止他们, . . . (後略)

もし規則を作って禁止したら, (後略) ㊦

(2) <S 語名詞>+<D 語動詞>

中国語文で<S 語名詞>に<D 語動詞>を併用しているものに対応する日本語作文内の機能動詞結合には、スル動詞結合のものと、支援動詞結合のものがある。

① 対応する日本語がスル動詞結合の例

下記<8-87>の中国語「受・・尊敬」では、<S 語名詞>「尊敬」に「受」が併用されているが、対応する日本語は「尊敬される」で、中国語文とは異なる動詞スルが用いられている。また、<8-88>の中国語「有汚染」では、<S 語名詞>「汚染」に「有」が併用されているが、対応する日本語は「汚染される」で、中国語文とは異なる動詞スルが用いられている。

<8-87> 他很受百姓尊敬。

彼は百姓に尊敬されました。 ㊦

<8-88> 空气有汚染。

空気が汚染されます。 ㊦

② 対応する日本語が支援動詞結合の例

下記<8-89>の中国語は「展开了讨论」とされているが、日本語の「討論」に対応する中国語の<S 語名詞>「讨论」には、<D 語動詞>「展开」（「展開する」：繰り広げる）と、日本語文の「討論がある」の動詞「ある」とは全く別の動詞が結びつけられている。

<8-89> 日本社会就此展开了激烈的讨论。

この問題についての激しい討論があります。 ㊦

<8-90> 对社会产生了不良影响

また社会に悪い影響を与えました。 ㊦

<8-91> 对人体有直接的危害呢

(たばこは)他人の生命に危害を及ぼさない。 ㊦

以上の分類枠で中国語作文と日本語作文を対照して分析した結果を、表 8.14 にまとめた。

<8-79>の「賛成」、<8-83>の「说明」のように、中国語で<S 語名詞>を単独使用していた事例は 137 あったが、その内 134、98%が日本語作文でスル動詞を用いていた。正用のものだけでも、日本語作文でスル動詞を用いていたのは 108、79%を占めている。即ち、CLJ は中国語文で<S 語名詞>が単独で用いられている時、日本語文でその<S 語名詞>を動詞として用いる際には、98%と、ほとんどの場合スルを結合させており、そのようにすると 79%が日本語として正しい用法になっている。

次に、<8-86>の「作(了)规则」のように中国語で<S 語名詞>に動詞が併用されている場合を見ると、<S 語動詞>併用 19 と <D 語動詞>併用 43 を合わせて、62 の事例が見られた。その内、<S 語動詞>を用いていたのは、19 で 31%である。<S 語名詞>に動詞が併用されている中で正用のものは 13 で 21%である。即ち、中国語で<S 語名詞>に動詞が併用されている場合、19 例、31%で、CLJ は中国語の動詞で使われている漢字が含まれている<S 語

動詞〉を日本語文で〈S 語名詞〉に結びつけており、その内、13 例、21%は日本語として正しい用法となっている。

表 8.14 〈S 語名詞〉への併用動詞別「対訳中国語文」

対訳中国語		日本語作文						合計
		スル動詞結合			支援動詞結合			
		正	誤	計	正	誤	計	
〈S 語名詞〉を単独使用		108	26	134 (98%)	3	0	3 (2%)	137 (100%)
動詞 併用	〈S 語名詞〉+〈S 語動詞〉	/	/	/	13	6	19 (31%)	62 (100%)
	〈S 語名詞〉+〈D 語動詞〉	24	6	30 (48%)	11	12	13 (21%)	
計		132	32	164	27	18	35	199

以上の分析結果を、CLJ の母語知識活用との関係で述べると、中国語で〈S 語名詞〉を単独使用している場合は、〈S 語名詞〉にスルを接続させて日本語で用いればよい確率は 79% になる。一方、中国語で〈S 語名詞〉に動詞が併用されているものは、1/5 の場合、中国語の動詞で使われている漢字が含まれている支援動詞を日本語の〈S 語〉の事態性名詞に結びつけて用いると正用となる。しかし、4/5 の場合は、中国語の動詞で使われている漢字が含まれている支援動詞を、そのまま日本語文で用いることはできないので注意が必要である。

したがって、CLJ は、日本語と同形同義の漢語事態性名詞を日本語の文中で動詞として用いる時に、スル動詞を用いるか、支援動詞を用いるかを、母語の中国語を手掛かりにして、判別することができる。さらに、支援動詞を用いようとする場合、どの語を用いるべきかにおいても、中国語の母語知識を手掛かりにすることができる。CLJ は名詞と動詞の組み合わせという文レベルでも、意味・形式（表記）の両面で、母語知識を利用することができ、実際に活用している。

中国語母語話者は、単に日中で共通する漢語があるという語彙的な利点だけではなく、名詞と動詞の共起性という文構造上でも、非漢字学習者に比べ、日本語習得において著しく有利なのである。そもそも、CLJ が日本語と同形同義の中国語の漢語を、日本語文でそのまま事態性名詞とし、動詞として用いることが可能なのは、機能動詞結合の存在があるからである。さらに、機能動詞結合は、「名詞+動詞」という文レベルでまでも、CLJ の母語知識の活用を可能にさせている。

中国語を母語とする日本語学習者は、漢語知識を用いるために、日本語の習得において極めて有利であることは、体験的に広く言われていることではあるが、それは語彙、表記

レベルのことであった。しかし、本研究の調査では、日本語と中国語では SOV 型、SVO 型と言語類型の違いがあるにも関わらず、中国語母語話者は構文的にも、母語知識を利用して日本語を習得することが可能であることを、データ解析によって示すことができた。

第二言語習得において、学習者が L1 概念を用いることは広く認められている (Jiang, 2000 : Jiang, 2002 : Wolter, 2006 : 岡嶋, 2010)。しかし、CLJ の場合、一般的な L1 概念の利用に止まらない日本語と中国語の語彙及び文構成の形態的・意味的共通性に助けられて、日本語の機能動詞結合を極めて有利に産出している。

8.5 まとめ

CLJ と非漢字学習者の作文データは同数だったが、CLJ が産出した機能動詞は延べ数で 776、異なり数で 357、非漢字学習者は 489、242 で、CLJ は著しく多くの機能動詞結合を作文で用いていた。これは、CLJ が母語の漢語知識を、語のみならず名詞と動詞の組み合わせという構文レベルでもフル活用できるためである。

CLJ が母語知識を活用していることは、事態性名詞の中で日中同形同義語が 72.3% を占めていたこと、また、CLJ が事態性名詞に漢語を多く用いるために、スル動詞を多用していたことなどから明らかである。更に、本調査で用いた作文で、対訳のある CLJ の日本語作文とその母語訳とを照らし合わせた結果、日中同形同義語で「する」以外の機能動詞(「与える」「受ける」など)を用いた結合の 1/3 が、両作文で、同形同義の名詞と動詞のペアを用いていた。

誤用を見ると、日本語にない母語の借用、動詞抜きの手態性名詞の直接活用、心理表現における不適切な受け身形は、CLJ にしかみられず、これらは母語の影響によるものと考えられる。一方、日本語にない事態性名詞と機能動詞の組み合わせ、機能動詞結合への不適切な修飾は両者に共通しており、これらは日本語学習者一般に引き起こされる誤用とみられる。

第9章 [調査 4]日本語母語話者と中級 CLJ の産出使用

これまで、6章で行った中級 CLJ の作文分析の結果を用い、7章では上級 CLJ、8章では非漢字学習者それぞれの作文と比較対照し、CLJ の機能動詞結合の産出使用がどのようなものであるかを探ってきた。本章では、さらに、中級 CLJ の作文を日本語母語話者の作文と比較し、分析を深める。

前章で見てきたように、CLJ は非漢字学習者に比べ、極めて多くの機能動詞結合を用いていたが、日本語母語話者と比較した場合はどうだろうか。さすがに日本語母語話者は、学習者に比べ格段に多くの機能動詞結合を使いこなしているのではないだろうか。しかし、これまでの調査で示されたように、CLJ の場合、日中同形同義語を日本語文の中に取り入れる手段として機能動詞結合を用いるなど、日本語文を産出するために母語の漢語知識を用いている。したがって、日本語母語話者と機能動詞結合の使用量はあまり変わらないということも考えられる。

また、6章で見てきたように、中級 CLJ は、やさしい結合を繰り返し使用するので、母語話者に比べ、異なり数は少ないと思われる。更に CLJ は、母語の漢語知識を用いて機能動詞結合を産出するので、日本語母語話者に比べ、機能動詞結合総数に占めるスル動詞の割合が高いのではないかということも考えられる。

9.1 調査対象

作文数は中級 CLJ 23、母語話者 24 で、中級 CLJ の平均学習月は 12.6 か月である。中級 CLJ の作文は、6章と同じものを用いた。しかし、日本語母語話者の作文は、中級 CLJ に比べ作文文字数が多いので、文字数を等しくして両者を比較するため、中級 CLJ の作文データを取捨選択した。以下では、6章のデータを中級 CLJ_①、本章のデータを中級 CLJ_②として区別する。

その結果、母語話者が 1 作文で使用した平均文字数 571 に対し、データとして用いた中級 CLJ_②の作文文字数は平均 574 になった。コルゴモロフ・スミルノフ検定で、正規性の検定を行ったところ、母語話者は有意確率 .148、中級 CLJ_②は有意確率 .200 で共に正規分布していたので、文字数を従属変数としてウィルコクソンの順位和検定を行った。その結果、 $W=537.5$ 、有意確率 .758 となり、有意差が認められなかったので、以下の分析では、中級 CLJ_②と母語話者の作文の文字数は等しいものとして分析を行った。

9.2 調査結果

調査結果は、表 9-1 のようになった。

表 9.1 中級 CLJ₂と日本語母語話者の作文調査結果

		母語話者	中級 CLJ ₂
	(学習歴)		10~18 か月
	執筆者数	24	23
	作文数	24	23
	平均文字数	571	574
機能動詞結合数	延べ	155	123
	異なり	92	92
	1 作文平均 延べ	6.5	5.3
	異なり	3.8	4.0
正誤別 機能動詞結合数 (延べ)	正用数 (正用割合)		100 (81.3%)
	誤用数 (誤用割合)		23 (18.7%)
種類別 機能動詞の 使用延べ数	スル	124 (80.0%)	107 (87.0%)
	支援	31 (20.0%)	14 (11.4%)
	欠如		2 (1.6%)

II 多用された機能動詞結合

表 9.2 多用された機能動詞結合

日本語母語話者	中級 CLJ ₂
規制する 30 / 喫煙する 9	影響する 4 / お祝いする 4
禁止する 7 / 迷惑をかける 4	放送する 4

9.3 結果の分析

ここでは、表 9.1 で提示した使用延べ数などの個々の項目に、母語話者と中級 CLJ₂とで有意差が見られるかを統計的に分析する。

(1) 機能動詞結合の産出使用量 (表 9.3)

日本語母語話者は、作文で機能動詞結合を延べで 155、中級 CLJ₂は 123 用いていた。中級 CLJ₂は、有意確率 .101 で正規分布していたが、母語話者は .026 で正規分布していなかったので、機能動詞結合数を従属変数として、ウィルコクソンの順位和検定を行った。その結果、 $W=509.5$ 、有意確率 .363 で、中級 CLJ₂と母語話者の作文で使用された機能動詞結合の延べ数に、有意差は認められなかった。

中級 CLJ₂の異なり数は 92 で、延べ数 123 の中で 74.8%を占めていた。母語話者の異なり数は 92 で、延べ数 155 の中に占める割合は 59.4%だった。異なり数が延べ数に占める割合に、日本語母語話者と中級 CLJ₂で違いがあるかを見るために 2つの母比率の差の検定を行った。その結果、 $\chi^2(1, N=278) = 7.307$ 、有意確率 .007 で 1%水準の違いが見られ、中級 CLJ₂の方が母語話者より産出された機能動詞結合全体に占める異なり数の比率が高かった。

表 9.3 使用機能動詞結合の異なり数と延べ数

	異なり	[延べ-異なり]	計 (延べ数)
日本語母語話者	92	63	155
中級 CLJ ₂	92	31	123
計	184	94	278

(2) スル動詞と支援動詞の使用割合 (表 9.4)

日本語母語話者と中級 CLJ₂とで、スル動詞と支援動詞を用いる比率が異なっているかどうかを見るため、機能動詞結合数を従属変数として 2つの母比率の差の検定を行った（「機能動詞欠如」は除く）。日本語母語話者が産出した機能動詞結合総数 155 のうちスル動詞は 124 で 80.0%を占めているの対し、中級 CLJ₂は機能動詞結合総数 121 のうちスル動詞は 107 で、88.4%だった。分析の結果、 $\chi^2(1, N=276) = 3.539$ 、 $p=.06$ となり、統計的有意差は見られなかったが、中級 CLJ₂の方が母語話者よりスル動詞を多用しているという有意傾向が見られた。

表 9.4 機能動詞の種類 (延べ数)

	スル	支援	合計
日本語母語話者	124	31	155
中級CLJ _②	107	14	121
	231	45	276

<結果のまとめ> (表 9.5)

中級 CLJ_②は日本語母語話者と比べ、作文で使用された機能動詞結合の延べ数に、違いは見られなかった。また、スル動詞が機能動詞結合全体の中で占める割合にも有意差は示されなかったが、中級 CLJ_②の方が母語話者よりもスル動詞を多用する傾向が見られた。機能動詞結合の延べ数と異なり数の比については、有意差が見られ、中級 CLJ_②の方が母語話者より異なり数の使用が多かった。

表 9.5 中級 CLJ と母語話者の作文分析結果のまとめ

延べ機能動詞結合数	母語話者＝中級 CLJ	<i>n.s.</i>
異なり機能動詞結合	母語話者<中級 CLJ	<i>p**</i>
スル動詞の占める割合	母語話者＝中級 CLJ	<i>n.s.</i>

9.4 考察

調査の結果、中級 CLJ_②は日本語母語話者と比べ、作文での機能動詞結合の産出使用量に違いは見られなかった。また、機能動詞結合の延べ数に対する異なり数の占める割合は、中級 CLJ_②の方が母語話者より高くさえあった。

しかし、中級 CLJ_②が母語話者と同じように日本語の機能動詞結合を自由に使いこなしているとは言えない。中級 CLJ_②は、母語話者の犯さない誤用を犯す。6章の作文分析での中級 CLJ_①の正用割合は、80%を超えているが、11章で報告する機能動詞結合の産出を強制的に促す実験では、正用割合と誤用割合が逆転し、誤用が70%以上を占めていた。作文では、学習者は既習知識だけを用い、自信の持てない機能動詞結合の使用を回避するからである。

また、以下で分析するように、母語話者は1つの事態性名詞に様々な機能動詞を結びつけて文脈に応じて機能動詞結合を使い分けて豊かな表現をしている。それに対し中級 CLJ_②の場合、概ねワンパターンで1つの事態性名詞には1つの決まった機能動詞を結びつけ、どんな文脈でもそれを用いている。(表 9.8)

母語話者と CLJ_②との違いは、誤用の有無以外にどのようなものであるのかを以下で考察する。

9.4.1 中級 CLJ₂が母語話者より異なり数が多かったのはなぜか

中級 CLJ₂の方が母語話者より多くの異なり機能動詞結合を用いていた理由として、本稿でデータとして用いた作文の課題提示の仕方が影響したことがあげられる。

母語話者と中級 CLJ₂を比較した調査データの中には、「喫煙規制」のテーマで書かれたものが、中級 CLJ₂は 6 作文だったが、母語話者には倍以上の 13 作文が含まれていた。さらに、作文を書く前に、「喫煙規制」のテーマには、母語話者と CLJ₂で異なった提示が与えられていた。

母語話者に与えられた提示は以下のとおりである。

<日本人学生に対する提示>

(国立国語研究所作文コーパス：下線は筆者)

作文課題 2

喫煙を規制するかどうかには賛否両論があります。喫煙は百害あって一利ないものであるから、公共の場所ではたばこを吸えないよう法律で規制すべきだ、またたばこのコマーシャルは子どもに悪影響を与えるから、テレビ等での放送も厳しく制限すべきだ、という意見がある一方、喫煙者にも喫煙の権利があるはずだから、規則で一律に禁止するのは不当である、という意見もあります。

この件に関するあなた自身の考えを、規制反対か賛成か必ずどちらかの立場に立ったうえで、日本語で論じてください。

母語話者の作文には、この提示に含まれていた「(喫煙を) 規制する」が 30 回、「喫煙する」が 9 回、「禁止する」が 7 回使用されていた。これらの語を用いることは、課題に即した内容で作文を書くために不可避であるので、母語話者の作文の機能動詞結合の多様性が失われたと考えられる。

一方、日本語学習者には、テーマは同じでも、次のような異なった提示がなされていた。

<日本語学習者に対する提示>

(国立国語研究所作文コーパス：下線は筆者)

作文課題 2

次の文を読んで、自分の意見を 800 字くらいの日本語で書いてください(この作文は日本人の学生や大学の先生が読みます)。

今、日本ではたばこのことが問題になっています。ある人は言います。「会社やレストラン、バスや電車など公共の場所ではたばこを吸えないよう規則を作るべきだ。また、たばこのコマーシャルは子どもに悪い影響を与えるから、テレビで放送できないようにするべきだ」。

一方、次のように言う人もいます。「規則を作って禁止するのはおかしい。だれにもたばこを吸う権利があるはずだ」。

あなたはどのように思いますか。たばこについてあなたの意見を書いてください。

中級 CLJ_②の作文では、提示文に含まれていた「禁止する」は3回みられたが、提示文に含まれていなかった「喫煙する」「規制する」は全く使用されていなかった。したがって、母語話者がこれらの語を多用したのは、テーマが「喫煙規制」であるためというより、課題提示文が大きな影響を及ぼしていたのである。

本調査の統計分析で、母語話者の方が中級 CLJ_②よりも、延べ機能動詞結合に対する異なり数の占める割合が低かったのは、上述のとおり、データの採取方法が異なることが影響したからだった。

しかし、母語話者と中級 CLJ_②の異なり数に違いが見られなかったのは、課題文の提示のし方が影響したためだけだったのだろうか。日本語母語話者と比較した中級 CLJ_②の作文は、6章で使用した中級 CLJ_①の作文から文字数の多いものだけを選んだ。前者の中級 CLJ_①の作文の平均文字数は574だったが、後者の6章で使用した作文の平均文字数は485と89文字少なかった。したがって、日本語母語話者と比較した作文を書いた中級 CLJ_②は、本調査で対象とした全中級 CLJ_①の中で比較的日本語能力が高い者が多かったと考えられる。そのため、母語話者と比較した中級 CLJ_②の調査結果と6章の全中級 CLJ_①を対象にした結果に、違いが生じたのではないだろうか。

また、日本語母語話者と比較した中級 CLJ_②の作文数は23しかなかったが、6章で使用した中級 CLJ_①の作文数は136と大きく違ったので、6章のデータの方が中級 CLJの実情をよく反映していると思われる。母語話者と比較した中級 CLJ_②の作文数と6章の作文数との差は113もあった。ということは、113の作文は母語話者の作文と同じ長さに達していなかったのである。初中級の段階では、作文文字数は学習者の日本語能力をかなりの程度で反映するので、母語話者と比較した作文の中級 CLJ_②の日本語能力は、調査対象とした全中級 CLJ_①の上位6分の1以上だったと推測される。

以上から、中級 CLJ_②と母語話者で用いられた機能動詞結合の異なり数に違いが見られなかったのは、課題文の影響もあるが、そもそも平均的な中級 CLJは母語話者のように長い文章を書くのは困難であるため、比較対象にならなかったことが考えられる。

文字数が異なるので、6章の中級 CLJ_①と母語話者の結果を統計的に比較はできないので、1作文平均の機能動詞結合使用数の延べ数と異なり数を比較してみた(表9.6)。機能動詞結合の使用数は延べでは母語話者6.5、CLJ_①5.7と、若干CLJ_①が少ないだけだが、異なり数は母語話者3.8、CLJ_①2.6と違いが大きい。

表 9.6 1作文あたり平均機能動詞結合使用数

	母語話者	中級 CLJ _①	中級 CLJ _②
延べ	6.5	5.7	5.3
異なり	3.8	2.6	4.0

これは、CLJ_①が同じ機能動詞結合を繰り返し使用していることを意味する。実際、6章で中級 CLJ_①が多用した機能動詞結合を見ると、「勉強する」は 29 回、「練習する」は 24 回、「利用する」は 16 回など初級語彙を頻用している。母語話者と比較したこの章でのデータより、6章のこの結果の方が中級 CLJ の現実をよりよく反映している。これで見ると、中級 CLJ はやさしい機能動詞結合を繰り返しており、母語話者と同じようにさまざまな機能動詞結合を使いこなしているとは言えない。

以下で母語話者との比較で用いるのは、中級 CLJ_②なので、中級の中では日本語能力が上位の者である。

9.4.2 支援動詞の多様性

機能動詞結合全体の中でスル動詞と支援動詞の占める比率が、中級 CLJ_②と母語話者とは有意差がないことが、9.3 (2)の結果分析で分かった。では、用いられた支援動詞の多様性も両方で違いがないのだろうか。

作文の中で用いられた機能動詞結合の内、支援動詞結合は中級 CLJ_②14 (正用 9、誤用 5)、母語話者は 31 だった。その中で異なった結合が用いられていたのは、中級 CLJ_②は 11 で 78.6%、母語話者は 22 で 71.0%だった (表 9.6)。異なり支援動詞結合が産出された支援動詞結合全体の中で占める比率が同じかどうかを見るため、2つの母比率の差の検定を行った。その結果、 $\chi^2 (1, N=45) = .285, p > .05$ で、こちらにも違いは見られなかった。

9.7 異なり支援動詞結合が延べ支援結合に占める割合

	異なり	[延べー異なり]	計 (延べ)
中級 CLJ _②	11	3	14
日本語母語話者	22	9	31
計	33	12	45

そこで、データ作文全体の中で、1つの事態性名詞にいくつの機能動詞を用いているかという「複 V 結合」を調べ、文脈に応じて用いる機能動詞を使い分けているかどうかを調べた。

表 9.8 に示した複 V 結合の具体例を見ると、母語話者は、一つの事態性名詞に多様な機能動詞を用いて、機能動詞結合を使い分けていることが分かる。母語話者は 5 つの異なり複 V 結合名詞を使用していたが、中級 CLJ_②は「影響」と「経験」2 つだけだった。さらに、母語話者は、事態性名詞「害」には 6 種、「悪影響」には 4 種と、さまざまな機能動詞を用い、使い分けていた。

表 9.8 「作文内複 V 結合」 で用いられた動詞

母語話者			中級 CLJ ^②				
悪影響	を与える	3	<正>		<誤>		
	が及ぶ	1	影響	する	3	を残す	1
	を及ぼす	1		を与える	4		
	が起こる	1	経験	する	2	を持つ	1
影響	がある	1					
	を与える	2					
害	を及ぼす	2					
	になる	2					
	を与える	1					
	をなす	1					
	がある	1					
	する	1					
	危害	1					
危害	を加える	1					
	迷惑	4					
迷惑	をかける	4					
	になる	1					
計 24			計 11				

9.4.3 機能動詞結合の過剰使用

CLJ が母語の漢語知識を利用することは、多くの機能動詞結合の産出使用を促すというプラスの反面、過剰使用というマイナスを生み出している。次に示す例は、誤用とは言えないが、日本語としては、和語動詞を用いた方が自然であるものである。下の例の（ ）内は、筆者が自然な日本語と思われるように書き換えたものである。<9-3>の「会うことを阻止する」は日本語として誤りではなく、意味が通じるが、日米首脳の会談とでもいうのならともかく、普通の人と人が会うことを「阻止する」というのは大げさに響く。

<9-1>? よるは、天安門広場で文芸晩会が挙行しました

(「芸能の夕べ」が催されました。) ㊦

<9-2>? インターネットでニュースと TV まで現場の放送で見えることはできる。コンピュータは TV のように採用させる。(コンピュータを TV のように取り入れる) ㊦

<9-3>? 王母娘娘は牛郎と織女は会うことを阻止するために、……(後略)

(会わせないようにするために) ㊦

<9-4>? (アルバイトは) 正式契約を締結することではなく、給料がタイムリーに計算されている非正式社員……(後略) (正式な契約を結ばず) ㊦

<9-5> ?新しいキャラクターがある時、私はきっと〈コスプレを〉一生懸命完成します。
 (一生懸命仕上げます)㊤

<9-6> ?私たちはインターネットを利用して、かたわらに自分を保護することも学びなさい。
 (自分を守る)㊦

和語動詞を用いた方が自然な場合でも、CLJは事態性名詞が漢語である機能動詞結合を過剰に使用しているということを確認するために、機能動詞結合に用いられた和語の事態性名詞の割合が母語話者とCLJで違いがあるかを調べてみた。中級CLJ_㊤は、次の10の和語を使用していた。

おしゃべりをする (2回) / お祝いする (4回) / *楽しみをあげる /
 年始回りをする / *おいのりをあげる / *働きを果たす

一方、母語話者は、次に示す17語の和語事態性名詞を使用していた。

歩きたばこをする (2回) / お祝いする / お供えする / お願いする / 声をかける
 お祭り騒ぎをする / 飾りつけをする / 楽しみにする (2回) / 夏祭りを行う /
 寝たばこをする / 墓参りをする (2回) / ポイ捨てをする / 真似する /
 仕込みを始める

用いられた機能動詞結合総数の中で、事態性名詞が和語のものとそれ以外のものが占める割合に、母語話者とCLJ_㊤とで違いがあるかを調べた。表9.9は、母語話者と中級CLJ_㊤の使用した機能動詞結合に用いられた事態性名詞の中で和語の占める割合を示したものである。母語話者が使用した機能動詞結合総数155の内、和語の事態性名詞は17で、10.9%を占めているのに対し、中級CLJの場合、機能動詞結合総数123の内、和語の事態性名詞は10で8.1%だった。「2つの母比率の差の検定」を行ったところ、 $\chi^2(1, N=278) = .630$ 、 $p > .05$ で、有意差は認められなかった。

表 9.9 事態性名詞の中で和語の占める割合 (延べ数) 中級 vs. JNS

	語種		計
	和語	その他	
母語話者	17	138	155
中級 CLJ _㊤	10	113	123
計	27	251	278

この結果によると、中級CLJ_㊤は母語話者と量的に同じぐらいの和語の事態性名詞を使いこなしていることになる。しかし、日本語習熟度がアップした上級CLJでは、どうなのだろうか。漢語事態性名詞を含む機能動詞結合の過剰使用という問題は、文法上の誤用のように、日本語能力が向上すると共に解消されていくのだろうか。

そこで、上級 CLJ の作文と母語話者の作文を比較分析してみた。分析に用いた上級 CLJ の作文は、7 章と同じものを用いた。しかし、母語話者の作文と文字数条件を等しくするために、文字数の多い作文を取捨選択した¹。

その中には、次のような例があり、上級 CLJ の方が中級 CLJ よりもかえって漢語事態性名詞を過剰使用する傾向が見られた。

<9-7> ? 除夜に徹夜する伝統もある (大みそかには寝ないで過ごす習慣がある) ㊦

<9-8> * 人間の体はタバコに含まれる物を需要するようになる
(人間の体はたばこに含まれるものを求めるようになる) ㊦

<9-9> * 大勢の人々はタバコを吸うことを停止しますがりますけれども・・・(後略)
(多くの人々はタバコを吸うのをやめたいと思います・・・) ㊦

<9-10> ? 吸うことを中止したら、不安になります。 (吸うのをやめたら) ㊦

<9-11> * たばこは・・・(中略)・・・人間の健康を破壊する。 (健康を損ねる) ㊦

<9-12> * 大量のたばこを吸ったら、致死する。
(大量のたばこを吸ったら、死んでしまう) ㊦

<9-13> * 権利というものはかつてなことはないと思います。権利は人間の合理的な
要求を合致するため出てきたものです
(人間の正当な要求に応えるために・・・) ㊦

<9-14> * どちらの家庭にも自分の子供がたばこを吸うのは見たくないです。未来の希望
を浄化するため、私たち成人は努力をつける (未来に希望を持てるように) ㊦

<9-15> * 人々の身体は仕事の疲労を受けるほかに、汚染された空気を・・・(後略)
(人々は仕事で疲れた上に) ㊦

<9-16> * タバコはずっと人間の生命安全を脅威してきています。
(生命を脅かしてきて・・・) ㊦

<9-17> ? 死んだ人はほかの世界へ行く途中で、しばらく休憩して、お粥を食べて、疲
れをいやすことができるからだ。 (休んで) ㊦

<9-18> ? 私は子供の時、一番期待するのも春節でした。新しい服も着られるし、おい
しいおふくろ料理も食べられるし・・・(後略) (待ち遠しかったのは) ㊦

<9-19> * うちはいつも自家製するのは一番おいしいと思っていますから、二か月前か
ら作り始めました。 (自分の家で作るのが) ㊦

上級 CLJ と母語話者で、和語の事態性名詞の使用の違いがあるかを調べた。上級 CLJ の作文には次の 9 語の和語事態性名詞を用いた機能動詞結合が使われていた。

お祈りする (2 回) / * お祈りがもらえる / お祈りをいただく / 買い物をする /
話しをする / * 苦しみを受けさせる / 音がする / お祝いをする

¹ 母語話者が 1 作文で使用した文字数は平均 571 であるのに対し、データとして用いた上級 CLJ の作文文字数は平均 567 になった。有意確率 .029 で正規分布していたので、文字数を従属変数としてウィルコクソンの順位和検定を行った。その結果、 $W = 660.0$ 、 $p > .05$ となり、有意差が認められなかったため、上級 CLJ と母語話者の作文の文字数は等しいものとして分析を行った。作文数は上級 26、母語話者 24、上級 CLJ の平均学習月は 21.5 か月である。

用いられた全ての機能動詞結合の中で、事態性名詞が和語のものとそれ以外のものが占める割合に母語話者と上級 CLJ とで違いがあるかをみるために「2つ母比率の差の検定」を行った。母語話者が用いた総機能動詞結合 155 のうち、事態性名詞が和語のものは 17 で 10.9% を占めていた。一方、上級 CLJ が用いた機能動詞結合総数は 191 で、その内事態性名詞が和語のものは 9 で 4.7% だった (表 9.10)。分析の結果、 $\chi^2(1, N=346) = 4.818$ 、 $p^* < .05$ で有意差が見られた。

表 9.10 事態性名詞の中で和語の占める割合 (延べ数) [上級 vs. 母語話者]

	語種		計
	和語	その他	
母語話者	17	138	155
上級 CLJ	9	182	191
計	26	320	346

以上から、中級段階では、事態性名詞の中で和語の占める割合は、母語話者と比べ有意差がなかったのに、上級になると和語の占める割合が母語話者よりも有意に少なくなっている²ことが分かった。なぜ日本語能力がアップすると、かえって日本語らしさが減少するような傾向が現れて来るのだろうか。

このように、上級の方が中級よりも和語の使用割合が少なくなる理由は、3つ考えられる。1つには、初中級の段階では、学習した機能動詞結合だけをそのまま忠実に用い、学習しなかった事項は避けるので、母語の中国語からの漢語の借用はしないからだと思われる。また1つには、初級段階では日常会話レベルの学習なので和語が多いが、上級になると学習内容が変わり、小説、新聞などの漢語が多く含まれた読解教材が増えるためである。また、日本語能力の向上とともに表現対象領域が広がり、多くの語彙が必要となるので、母語の助けを借りようとする傾向が強くなり、和語の使用が少なくなることが考えられる。第7章の上級 CLJ の作文分析では、中国語の動詞と名詞のペアをそのまま用いる、ないしは逐語訳する誤用が見られた。

和語と「同義」の漢語であっても、両者では言い換えができないものがある。たとえば、〈9-7〉の学習者は「朝まで寝ないで過ごす」を意味するために、「徹夜する」としているが、前者と後者では意味合いが異なる。「徹夜する」の場合は、「徹夜で勉強する」「麻雀をして徹夜した」のように、寝ずに没頭して何かをする場合に用い、〈9-7〉例のように、ただ夜を

² この結果は、上級 CLJ の作文分析で、上級と中級では母語の影響の占める割合に有意差がないとしたことと矛盾するように思える。母語の影響には、事態性名詞の直接活用が含まれるが、中級の場合、この直接活用が 21 で母語の影響 39 の内の 61.5% をも占めている。一方、上級の直接活用は 1 例しかない。このため、中級の和語使用が上級より多くても、母語の影響による誤用は上級と違いが出ないのである。

明かすというだけの時には用いない。したがって、たとえ意味が近似していても、和語には、漢語で言い換えが困難なものがある。

以上見てきたように、用法上の誤用だけでなく（7章参照）、機能動詞結合の過剰使用もまた日本語能力がアップした上級になるとかえって顕著になってくる。このように、初中級よりも上級の方がかえって問題となる誤用がある³ことは、先行研究で取り上げた Howarth (1998)、Miyakoshi (2009)、Laufer & Waldman (2011)、Satake (2015) でも報告されている。機能動詞結合の問題は、さまざまな事態性名詞をさまざまな文脈の中で使い分けることが求められる上級レベルになって問題が顕在化してくるのであり、文法などの他の学習項目とは異なり、機能動詞結合の学習は上級レベルが焦点となると考えられる。

9.5 まとめ

中級 CLJ と日本語母語話者では、機能動詞結合の使用量、スル動詞の使用割合に違いはなく、CLJ は、漢語知識を活用し、機能動詞結合の習得が非常に進んでいるように見える。

しかし、CLJ は母語話者の犯さない誤用を犯す。誤用割合は 18.7% と高いとは言えないが、後述する実験で明らかになったように、自信のある機能動詞結合のみを用い、使用困難なものは回避している。また、機能動詞結合を過剰使用する傾向があり、次のように、和語の一語動詞を用いるべきところでも漢語の機能動詞結合を用いていた。

<9-1：再掲>？よるは、天安門広場で文芸晩会が挙行しました。

(文芸の夕べが催された)

<9-3：再掲>？王母娘娘は牛郎と織女は会うことを阻止するために、・・・(後略)

(会わせないようにする)

また、母語話者に比べ、「お祝いする」「飾りつけをする」などの和語連用形の機能動詞結合の使用が少なかった。

³ 上級になると初中級よりも問題になるというのは、あくまでも用法上の誤用と、漢語を事態性名詞とする機能動詞結合の過剰使用のことであって、機能動詞結合全般のことではない。

第 10 章 作文調査結果総まとめ

6~9 章で行った中級 CLJ、上級 CLJ、非漢字学習者、日本語母語話者の作文調査の結果を表 10.1 に一覧で示した。表 10.2 に誤用タイプの分析結果 (除母語話者作文) を、表 10.3 に各誤用タイプの占める割合をまとめた。また、表 10.4 には、上級 CLJ、非漢字学習者、日本語母語話者それぞれの調査結果を、中級 CLJ の調査結果と対比し、一覧で提示した。

I 調査結果

表 10.1 作文調査結果総まとめ

		中級 CLJ ^①	上級 CLJ	中級非漢字 学習者	中級 CLJ ^②	日本語 母語話者
執筆者数		91 人	43 人	112 人	23 人	24 人
作文数		136	49	136	23	14
平均文字数		485	473	561	574	571
1 機能動詞結 合数	延べ	776	273	489	123	155
	異なり	357	170	242	92	92
2 正誤別機能 動詞結合数 (延べ)	正用数	637 (82.1%)	220 (80.6%)	376 (76.9%)	100 (81.3%)	
	誤用数	139 (17.9%)	53 (19.4%)	113 (23.1%)	23 (18.7%)	
3 事態性名詞 の語種 (延べ)	漢語	674 (86.9%)	249 (91.2%)	435 (89.0%)	103 (83.7%)	136 (87.5%)
	和語	30 (3.9%)	14 (5.1%)	23 (4.7%)	10 (8.1%)	17 (11.0%)
	外来語	53 (6.8%)	6 (2.2%)	23 (4.7%)	9 (7.3%)	2 (1.2%)
	混種語	7 (0.9%)	0	7 (1.4%)	1 (0.8%)	0
	非 日本語	12 (1.6%)	4 (1.5%)	1 (0.2%)	0	0
4 機能動詞 の種類 (延べ)	スル	683 (88.0%)	214 (78.0%)	39 (81.4%)	107 (87.0%)	124 (80.0%)
	支援	76 (9.8%)	57 (21.2%)	90 (18.4%)	14 (11.4%)	31 (20.0%)
	欠如	17 (2.2%)	2 (0.7%)	1 (0.2%)	2 (1.6%)	—

1 作文平均機能動詞結合使用数 (延べ)		5.7	5.6	3.6	5.3	6.5
----------------------	--	-----	-----	-----	-----	-----

注)「文字数調整」: 中級 CLJ_②は、日本語母語話者と比較対照するために、中級 CLJ_①の中から文字数の多い作文だけを選別して分析したものである。

表 10.2 誤用タイプ総内訳

[誤用総数: CLJ 中級_① 143 / CLJ 上級 54 / 非漢字中級 113]

A 日本語にない組み合わせ

	非結合語の使用				理由不明	計
	名詞の誤り		動詞の誤り			
	非日本語	非事態性名詞	非慣用動詞	機能動詞欠如 (文法上の誤用 I)		
中級 CLJ _①	18 (12.6%)	15 (10.5%)	29 (20.3%)	21 (14.7%)	4 (2.8%)	87 (60.8%)
上級 CLJ	6 (11.1%)	8 (14.8%)	15 (27.8%)	2 (3.7%)	0	31 (57.4%)
中級 非漢字	1 (0.9%)	30 (26.5%)	36 (31.9%)	1 (0.9%)	0	68 (60.2%)

B 日本語にある組み合わせだが不適切 9

	文法上の誤用 II					用法の誤り		計
	修飾	ヴォイス	項	「を」	間に語	名詞	動詞	
中級 CLJ _①	13 (9.1%)	8 (5.6%)	7 (4.9%)	2 (1.4%)	0 (0%)	13 (9.1%)	13 (9.1%)	56 (39.2%)
上級 CLJ	1 (1.9%)	3 (5.5%)	0 (0%)	1 (1.9%)	0 (0%)	13 (24.0%)	5 (9.3%)	23 (42.6%)
中級 非漢字	10 (8.8%)	5 (4.4%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (0.9%)	28 (24.8%)	1 (0.9%)	45 (39.8%)

表 10.3 誤用タイプの占める割合

	非結合語	文法 (I + II)	用法	理由不明	計
中級 CLJ _①	43.4%	35.7%	18.2%	2.8%	100%
上級 CLJ	53.7%	13.0%	33.3%	0	100%
中級非漢字	59.3%	15.0%	25.7%	0	100%

注) 「機能動詞欠如」は「非結合語」の中から除き、「文法上の誤用」として分析

II 分析結果 : 中級 CLJ_①との対比

中級 CLJ_①の調査結果を上級 CLJ 及び非漢字学習者と、また中級 CLJ_②の結果を日本語母語話者と対比し、中級 CLJ とどのような違いがあるか分析したものを、表 10.4 に一覧で提示した。

表中の「有」「無」は、統計分析で中級 CLJ_①と比べ有意差があったもの及びなかったものを示す。また、有意差のあったものについては、1%水準のものを p^{**} 、5%水準のものを p^* で示した。

表 10.4 中級 CLJ_①との対比分析結果

		vs.上級 CLJ	vs.中級非漢字 学習者	vs.日本語母語話者
1 機能動詞結合数	延べ	無 $n.s.$	有 p^{**} (CLJ > 非漢字)	無 $n.s.$
	異なり	有 p^{**} (上級 > 中級)	無 $n.s.$	有 p^{**} (中級 > 母語話者)
2 誤用割合 (延べ数)		無 $n.s.$	有 p^* (CLJ < 非漢字)	
3 事態性名詞の語種 (漢語・和語・外来語・混 種語・日本語) (延べ数)			無 $n.s.$	(無 $n.s.$)
4 スル動詞の占める割合 (延べ数)		有 p^{**} (中級 > 上級)	有 p^{**} (CLJ > 非漢字)	無 $n.s.$

注 1) 母語話者と対比したのは中級 CLJ_②

2) 「3. 事態性名詞の語種」は、“vs.日本語母語話者”の場合、和語の使用数のみで漢語、外来語、混種語との割合は調べていない。

これまで日本語学習者の作文における機能動詞結合の産出状況について、調査結果を報告してきた。まず、中級 CLJ の作文を分析し、その結果と上級 CLJ 及び中級非漢字学習者の作文、さらに日本語母語話者の作文における機能動詞結合の産出との違いを調査分析した。それぞれの分析において、以下のような異なった特質が浮かび上がってきた。

《中級 CLJ₀の作文での機能動詞結合産出》

学習者の正用率は 82.1% と非常に高かったが、頻度の高いやさしい結合を繰り返し用いており、作文では使用に自信の持てない機能動詞結合を使用回避している可能性があった。また、機能動詞の使用割合を見ると、スル動詞が 88% で、支援動詞の使用が非常に少なかった。

一方、どのような誤用を犯しているかを見ると、「非結合語の使用」が 43.4%、「文法上の誤用」が 35.7%、「用法上の誤り」が 18.2%、だった（表 10.3）。

「非結合語」には、名詞の誤りと動詞の誤りがある（表 10.2）。名詞の誤りでは「*思念する」「*暢談する」などの日本語にない中国語の漢語をそのまま用いた「非日本語」、及び「*不合格する」「*娯楽をする」など、事態性名詞でないものを事態性名詞として用いた「非事態性名詞」の使用がある。「*高度発展する」「*日本語学習する」などの中国語の文脈からそのまま抜き出したと思われる複合語(?)を事態性名詞に取った誤用例は、中級だけでなく上級にも見られた。

「非結合語」の動詞の誤りには、「非慣用動詞」の使用及び「機能動詞の欠如」があった。「非慣用動詞」は、名詞の選択は文脈から考えて正しいが、「*失敗を起こす」「〈先生が〉*授業をやる」など、学習者の伝達意図は伝わるが、結びつけられた動詞が慣用的でないものである。その中には、中国語の名詞と動詞の組み合わせをそのまま日本語に持ち込んだ例（「*失敗を受ける」《受到失敗》／*「経験が取れる」《吸取经验》など）が多数見られ、語彙レベルだけでなく、文構造レベルで母語知識が利用されていた。

「機能動詞の欠如」による誤用は、文法上の誤用に分類され、「*破壊られる」「*禁止られる」など、事態性名詞をスル動詞抜きで直接活用させたものである。これは、「破壊」「禁止」などの語は、日中で同形同義であるが、中国語では動詞として用いられるために日本語でも動詞として扱ったために生じた誤用と考えられる。

文法上の誤用としては、今述べた機能動詞の欠如の他に、一語の複合動詞への連体修飾、ヴォイスの誤用、取る項の誤りなどがあった。文法上の誤用の内、機能動詞の欠如、心理動詞のヴォイスの誤用は非漢字学習者の作文には見られなかったもので、CLJ 特有の誤用である。

一語の複合動詞への連体修飾は、「VN をする」（例；「掃除をする」「料理をする」）と、事態性名詞と機能動詞の間に助詞「を」が入った場合と異なり、事態性名詞が「VN する」と「を」なしで直接スル動詞と結びついた時には（例；「掃除する」「料理する」）、一語の

複合動詞となるにも関わらず、「*きれいな掃除する」「*魚貝類の料理する」などと、名詞扱いして連体修飾してしまうものである。

心理動詞のヴォイスの誤用は、「*感動された」「*感心された」など、心理動詞を受身形や使役形にして用いるもので、中国語の心理動詞が使役形を伴って表現されることが多い（吉永、2011）ことによる。

取る項の誤りは、「*絵画を練習する」「*バドミントンを練習する」など、単なる修飾語に過ぎない「絵画」「バドミントン」などの語に「を」格を取って、項とする誤りである。

「*部屋を掃除をする」などの二重ヲ格制約違反や、「*蒸発をする」などの「を」が付かないスル結合への「を」の挿入などの助詞「を」の過剰使用による誤用は各 1 例ずつしか見られず、極めて少なかった。

用法上の誤用は、事態性名詞と機能動詞の組み合わせ自体は、日本語に存在するが、文脈から考えて他の機能動詞結合を用いるべきもので、名詞が不適切なもの動詞が不適切なもの二種類があった。

〈名詞が不適切〉〈6-33：再掲〉*旅行の時、・・・(中略)・・・いろいろ新鮮なことを発生します。 (新鮮な出来事が起きます) ㊤

〈動詞が不適切〉〈6-43：再掲〉*日本語学科を読みたいですから、私は再び試験しようと思います。 (試験を受けよう) ㊤

《中級 CLJ_①と上級 CLJ との対比》

7 章では、中級 CLJ_①の作文分析の結果を上級 CLJ の作文と比較して分析した。作文での機能動詞結合の使用延べ数は上級 273 (1 作文平均 5.6)、中級_①776 (1 作文平均 5.7) で (表 10.1)、統計分析した結果、上級と中級_①に有意差はなかった (表 10.4)。しかし、異なり数は上級 170、中級_①357 (表 10.1)で、延べ数に対する異なり数の比率は、中級_①46.0% に対し上級 62.3%となり、著しい有意差が見られ (表 10.4)、上級になると中級よりさまざまな機能動詞結合を多様に用いるようになっていた。また、上級は産出した総機能動詞結合の内、21.2%で支援動詞を用いていたが、中級_①は 9.8%で、これにも著しい有意差があった (表 10.1)。上級は、機能動詞に一律にスル動詞だけを用いるのではなく、支援動詞を多様に用いるようになってきている。

しかし、これは中級と比較すればということである。漢語にスルが接続するもの (サ変動詞) は「掃除する」「発展する」などと、一律にスルと共に用い、「電話をかける」「迷惑をかける」など、よく用いられる支援動詞結合はワンセットで固定的に記憶し、ルーチン化した使用をするという傾向は、上級になっても変わらない。たとえば事態性名詞「影響」の場合、「する」「与える」「受ける」などの機能動詞を、文脈に応じて使い分けなければならないことがあっても、一律に「する」を用いていた。

機能動詞結合総数の中で正用が占める割合 (表 10.1) は、上級 80.6%、中級_①82.1%で有意差はなく、ともに高い正用率を示していた。しかし、学習者の習得が進んでいるから正

用率が高いのではなく、作文では自信のある機能動詞結合だけを用い、そうでない場合は使用回避しているからである。このことは、11章の上級 CLJ を対象とした実験で、機能動詞結合を強制的に産出させると、誤用率が 70.5%に上ったことから明らかである（表 11.2）。

中級_①と上級で大きな違いがみられたのは、誤用の内容である（表 10.3）。中級_①も上級も、「非結合語」による誤用が最も大きな割合を占めていることは同じだが、中級_①で次に多かったのは、事態性名詞への誤った修飾、事態性名詞の直接活用、機能動詞の欠如などの文法的誤用で、35.7%を占めていた。しかし、上級になるとそのような文法的誤用はほとんどなくなり、機能動詞結合産出に必要な文法的スキルは習得されていた。しかし、文脈上不適切な機能動詞結合を用いた用法の誤りは、上級は中級_①よりも有意に増えていた。

中級 CLJ_①と上級 CLJ の対比によって、明らかになった両者の異同を表 10.5 にまとめた。

表 10.5 中級と上級の比較に見る CLJ の機能動詞結合習得状況

		中級 _①	上級
量的知識	延べ結合数	中級 _① =上級	
	異なり結合数	中級 _① <上級	
質的知識	正誤割合	中級 _① =上級	
	誤用タイプ順位	1 非結合語 2 文法の誤り 3 用法の誤り	1 非結合語 2 用法の誤り 3 文法の誤り

《中級 CLJ_①と中級非漢字学習者との対比》

8章では、中級 CLJ_①と母語で漢字を用いない非漢字学習者（中級）の作文を比較分析した。CLJ_①は非漢字学習者に比べ、機能動詞結合を多様に、数多く用いていた。作文の平均文字数は、非漢字学習者の方が 76 字多いにも関わらず、産出した機能動詞結合総数は、延べ数で CLJ_①は非漢字学習者よりも著しく多かった。しかし、延べ数に対する異なり数の比率には、両者に違いは見られなかった。（表 10.1、表 10.4）

正用と誤用を見ると、CLJ_①は非漢字学習者と比べ、正用も多かったが誤用も多かった。これは、CLJ_①が日本語を使用する際に、母語の漢語知識を活用することが、プラスにもマイナスにも働くためである。CLJ が母語知識を活用していることは、事態性名詞総数の中で母語と同形同義の S 語が 72.3%を占めていたこと（表 8.13）、また CLJ_①が日本語にない中国語の漢語を事態性名詞として借用していたことなどから明らかである。用いられた機能動詞の種類を見ると、CLJ_①は非漢字学習者と比べ支援動詞よりスル動詞を著しく多く使用していたが（表 10.1、表 10.4）、これも、CLJ が事態性名詞に母語の漢語を多く用いようとするためである。

本調査の結果、母語で漢字を使用する CLJ は、語レベルだけでなく文構造レベルでも非漢字学習より極めて有利なことが示された。CLJ は機能動詞結合を構成する名詞と動詞の組み合わせにまで母語知識を活用していた。このことは、学習者自身が作成した日本語作文に対応する母語の中国語訳文から明らかである。

〈8-77：再掲〉*年長者はみなさんに次の一年の要求を出してくれます。

《长辈向大家提出来年的要求》^⑩

上の例では、日本語作文で「要求を出して」という機能動詞結合を用いているが、本人が書いた中国語の対訳でも同じ「出・・・要求」が見られる。

さらに、CLJ の日本語作文で中国語対訳があるものについて、両者を比較分析すると、日本語の作文中の機能動詞結合に対応する中国語で、日本語と同形同義の事態性名詞に、日本語の機能動詞に用いられたのと同じ漢字を含む動詞を結びつけていた事例は 31% あった。

このように、CLJ は母語の漢語知識を利用できるという利点を生かすことによって、非漢字学習者に比べ、機能動詞結合習得が著しく進んでいる。しかし、母語の漢語知識を利用するがゆえに、非漢字学習者には見られない CLJ 特有の誤用があった。その第 1 は母語の借用で、CLJ は母語の漢語をそのまま日本語に持ち込む誤用が多く見られたが、今回の調査では、非漢字学習者による母語借用はなかった。

第 2 に機能動詞を欠如させる誤用は CLJ だけで、これも非漢字学習者には、見られなかった。これは、日中で同形同義の漢語でも、品詞は日中で異なることがあるために生じるもので、日本語の事態性名詞を動詞として扱い、機能動詞スルを抜かして「*非難られる」のように直接活用させ、また、事態性名詞を形容詞として扱い、「*私は自立です」のようにして、機能動詞スルを欠落させてしまうものである。

CLJ だけに見られた誤用として第 3 に、「感動される」などの心理表現の受け身化がある。これも中国語では「感動」などを用いた心理表現が受け身で用いられることが多いという母語の影響によるものであった。

しかし、「受付が終了する」「受付を終了する」の「終了」のように、自他両用の働きをする漢語事態性名詞で、自動詞と他動詞を取り違えるヴォイスの誤用は、非漢字学習者だけで、CLJ には見られなかった。CLJ にこのような誤用が見られなかったのは、日本語の漢語の自他の判別に、母語の中国語の漢語知識が利用できるためと考えられる。

一方、同じ日本語を学ぶ学習者として共通する誤用も見られた。1 つは、CLJ も非漢字学習者も、誤用タイプで最も多かったのは、日本語にない名詞と動詞のペアを用いた「非結合語」であったことである（表 10.3）。

第 2 に、CLJ も非漢字学習者も、機能動詞の選択において、支援動詞の場合は、その語の持つ意味が文脈に合っているものを選び、スル動詞の場合はスル・ストラテジーをとっ

たと思われる誤用が見られた¹。支援動詞を用いたものは、次の例のように、CLJ も非漢字学習者も意味的に妥当であるかどうかには目を向けているが、慣用的な使用制約があるということには、注意を払っていないことによる。

〈CLJ〉 〈8-48：再掲〉 *いいアドバイスをあげて・・・(後略)
 (いいアドバイスをして) ㊤

〈非漢字〉 〈8-50〉 *がいこくからえんじょをもらう (援助を受ける) ㊤

一方、スル動詞の場合は、意味的に「空疎」であるため、あらゆるものに接続可能と思うのか、名詞が日本語でなかったり、事態性名詞でなかったりする場合に使用している。

〈CLJ〉 〈8-51：再掲〉 *男の人たちは女の人たちとおどって、対歌します。
 (デュエットします) ㊤

〈非漢字〉 〈8-3：再掲〉 *彼女はいつも笑顔をしていて・・・(後略) (笑顔で) ㊤

第3は、機能動詞結合への修飾の誤りで、事態性名詞に直接、助詞の「を」なしでスルが付いたときには一語動詞となるのに名詞として扱い、連体修飾してしまうものである。

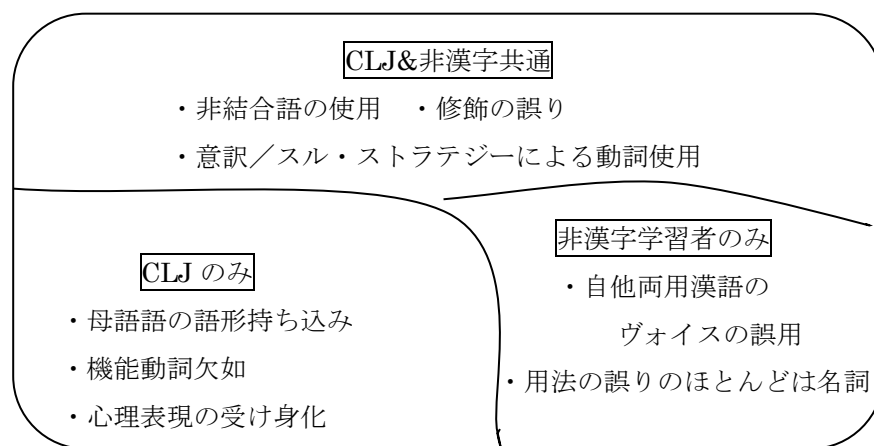
〈CLJ〉 〈8-60：再掲〉 *おじいさんは長生きで、幸福な生活していきますよ
 (幸福に生活して) ㊤

〈非漢字〉 〈8-62：再掲〉 *個人的な世話しなければ・・・(後略)
 (個人的な世話をしなければ・・・) ㊤

いずれも、機能動詞結合というものについて、明示的知識が欠けていることによる。

第4に、助詞「を」の誤用と、事態性名詞と機能動詞の間に語句を挿入してしまう誤用は、CLJでも非漢字学習者でも極めて少なかったことがあげられる。前者の二重ヲ格制約違反、及び「VNをする」の「を」が使えないところで「を」を使ってしまう誤用は、CLJでは各1例ずつで、非漢字学習者には全く見られなかった。また、後者の名詞と動詞の間に語句を挿入する誤用は、非漢字学習者に1例見られただけで、CLJでは全くなかった。

表 8.12 CLJ と非漢字学習者に共通する誤用と独自の誤用 (再掲)



¹ 8.4.4 で考察したように、CLJ の場合は、未知の機能動詞結合を用いる際にスル動詞を用いるのは、スル・ストラテジーによるだけでなく、母語知識を援用することにもよる。

《中級 CLJ_②と日本語母語話者との対比》

作文での使用文字数をそろえた中級 CLJ_②は日本語母語話者と比べ、作文での機能動詞結合の産出量、スル動詞の使用割合のいずれにおいても違いは見られなかった。また、機能動詞結合の延べ数に対する異なり数の占める割合は、中級 CLJ_②の方が母語話者より大きくさえあった（表 10.1、表 10.4）。CLJ は、漢語知識を活用して、日本語母語話者と変わらない程度にまで、機能動詞結合の習得が進んでいるように見える。

しかし、CLJ は、母語話者とは異なり、誤用を犯すのみならず、機能動詞結合を過剰使用する傾向がある。「王母娘娘は牛郎と織女は会うことを阻止するために、(会わせないようにするために)」など、和語の一語動詞を用いた方が自然なところに漢語の機能動詞結合を用いている。上級になり日本語能力が高くなると、中級の時よりも逆に、この機能動詞結合の過剰使用は強まる傾向があった。

また、この漢語の機能動詞結合の過剰使用と裏表の関係にある和語連用形を事態性名詞に用いた機能動詞結合（「お祝いする」「飾りつけをする」など）の使用数は、中級段階では母語話者と違いが見られなかったのに、上級になると反対に母語話者に比べ、著しく少なくなっていた（表 9.9、表 9.10）。

第 11 章 [調査 5] 機能動詞結合産出実験

6~10 章では、作文を対象に、学習者が機能動詞結合をどのように用いているかを見てきた。正用率は中級、上級とも 80%以上と高く、また、産出使用量も、中級学習者と母語話者の作文で変わらなかった。しかし、学習者は、ある事態性名詞を文の中で使用しようと思っても、それをどの機能動詞と結びつけたらいいのかわからない、あるいは、ある機能動詞を使用するのに自信が持てないという場合は、言い換えなどで、その事態性名詞の使用を回避している可能性がある。そこで、作文では現れなかった側面を見るために、学習者に機能動詞結合の産出を強制的に促す実験を行った。本章は、その実験の報告である。

11.1 リサーチ・クエスチョン (RQ)

リサーチ・クエスチョンは次の 2 つである。

RQ I CLJ は、どのように機能動詞結合を習得しているか

- i CLJ は文脈に応じて適切な機能動詞結合を使用することができるか
- ii CLJ の誤用にはどのようなものがあるか

RQ II どのような機能動詞結合が CLJ にとって習得に容易か、または困難か

- i 習得難易に関わる機能動詞結合の属性は何か
- ii 動詞が多義である場合、意味の各側面によって習得が異なるか

RQ I では、学習者を調査対象とするが、RQ II では、機能動詞結合そのものを調査対象とする。

11.2 実験協力者

日本国内の日本語学校に所属する中国語を母語とする日本語学習者 58 名。内、日本語能力試験 N1 合格者は 28 名、N2 合格者は 30 名で、日本語学習歴は平均 2 年 4 か月である。

11.3 調査方法

11.3.1 調査材料

[事態性名詞]

事態性名詞は実験協力者の既知語を使用する。学習者が事態性名詞を知っていても、それを文中で使用できるか否かを見るのが実験目的であるからである。事態性名詞を知らなかったために答えられなかったのか、結びつく動詞がわからなかったために答えられなかったのか判別できなくなることを避けるため、日中で共通の意味と形式 (表記)¹を持つ漢

¹ 簡体字の場合は、元の漢字が同じものであれば、表記が同じものであるとした。

語事態性名詞、及び、初中級レベル（旧『日本語能力試験出題基準』3、4級）の漢語事態性名詞を実験材料とした。

和語連用形、カタカナ外来語は対象としない。和語連用形、カタカナ外来語も含めると調査範囲が広がりすぎてしまうので、今回は漢語事態性名詞のみを対象とした。また、日中同形同義の漢字語を用いて実験を行うと、日中で共通する漢字語が、中国語を母語とする日本語学習者の機能動詞結合習得にどのような影響を与えるのかを見ることもできるからである。

[機能動詞結合]

実験で用いる機能動詞結合として、使用頻度が高く、一般的に用いられているものを選び出すため、村木（1991）に基づいて、以下の方法で選出した。

村木は、機能動詞結合として、ヴォイス的表現とアスペクト的表現、ムード的表現を挙げており、872の具体的機能動詞結合の事例を挙げているが、ヴォイス的表現は763で87.5%と、その大部分を占めている。本調査では、このヴォイス的表現だけを対象とした（本項末補足1参照）。村木がリストアップしたヴォイス的表現の機能動詞結合をBCCWJで検索し、その中で200例以上の頻度があるものを選んだ。BCCWJ内には、「サ変動詞（事態性名詞）＋動詞」であっても機能動詞結合でないものが、多数含まれていたが、藤井・上垣（2008b）の判別基準を用いて、手作業で選別した。

ただし、BCCWJに200例以上あったものでも、次のものは除外した。

◇機能動詞が次のもの

①スル動詞

スルを用いて正答であった場合、正しい知識があつてそうしたのか、スル・ストラテジーを用いたのか、区別がつかないため。（したがって、実験に用いるのは支援動詞のみとなる。）

②旧日本語能力試験で用いられていた『出題基準』に掲載されていない動詞

実験は既知語を対象とするので、『出題基準』に掲載されている動詞のみを用いる。

③本研究で用いた機能動詞結合判別基準で機能動詞と判別されない動詞

◇事態性名詞が以下のもの

① 和語連用形、カタカナ外来語

② 日本語と中国語で意味・表記が異なるもの

使用すべき機能動詞が分からなかったためにできなかったのではなく、事態性名詞の語の意味が正確に取れないためできなかった可能性があるため。

ただし、初中級レベル（旧『日本語能力試験出題基準』3、4級）の漢語事態性名詞は、日中で、意味・表記が異なったものでも採用した。

③ 日中で、意味・表記が同じ事態性名詞であるが、旧『日本語能力試験出題基準』に掲載されていないもの

BCCWJ からの具体的な選出方法は本項末補足 2 を参照されたい。上記処理の結果、187 の機能動詞結合を実験材料の候補とした。表 11.1 に、BCCWJ 内でのそれらの出現頻度を示した。

表 11.1 実験材料のために BCCWJ で検索した機能動詞結合の頻度

BCCWJ での出現頻度	出現した機能動詞数	
1～99 回	122	(内、10 例未満のものは 21)
100～199 回	24	
200 回以上	41	(→ 実験に採用)
計	187	

村木がリストアップした機能動詞結合は高頻度のものが多いと思われるが、出現頻度が 100 未満のものが 122 と 65%以上を占めていた。その内、10 例にも満たないものが 21 あり、実験材料候補とした 187 の結合の 1 割以上を占めていた。

実験で学習者に問題として問うためには、日本語として一般的で日本語学習者が当然知っていることを求められるような機能動詞結合であることが必要なので、頻度の高いものだけを選んだ。候補とした 187 の機能動詞結合の中で、200 回以上の頻度のものだけを実験の実験材料として選んだ結果、41 の機能動詞結合が残った。BCCWJ 内には、村木がリストアップした機能動詞結合の他にも、大量の機能動詞結合があると考えられる。したがって、本実験の材料とした機能動詞結合は、非常に高頻度のものだけである。

実験材料とした 41 の機能動詞結合は次のとおりである。

注目を集める／注目を浴びる／保護を受ける／承認を受ける／訓練を受ける／報告を受ける／攻撃を受ける／評価を受ける／相談を受ける／処分を受ける／説明を受ける／評価を得る／協力を得る／同意を得る／許可を得る／理解を得る／支持を得る／承認を得る／負担をかける／契約を結ぶ／変化が起こる／変化を生じる（生ずる）／行動を起こす／刺激を与える／影響が出る／影響を与える／影響を受ける／影響を及ぼす／電話を入れる／生活を送る／電話をかける／迷惑をかける／結論を出す／結論が出る／計画をたてる／連絡をとる／措置をとる／指揮をとる／食事をとる／注意を払う／考慮に入れる

しかし、次のものは、意味的にほとんど違いがないので、実験文は 1 つで、どちらで答えても正しいことにした。

評価を受ける ≡ 評価を得る

変化が起こる ≡ 変化を生じる

承認を受ける ≡ 承認を得る

その結果、調査課題文は 38 となった。

課題文は、抽出された機能動詞結合を用いて、ターゲットとする動詞以外のものを用いると不適切になるよう、以下のように作成した。調査では、括弧内は空欄にした。

<11-1> 幼い子供は、親の保護を（ 受け ）ないと生きていくことができない。

<11-2> 話し合いの結果、結論が（ 出 ）たら、すぐご報告します。

<11-1>、<11-2>の事態性名詞「保護」「結論」に「する」を用いた「保護する」「結論する」という機能動詞結合は存在するが、上の文脈で「*親の保護をされないと」「*結論がされたら」とすると非文になる。

[質問紙] 資料 9

対象とする機能動詞結合には、支援動詞結合のみで、スル結合は含めなかった。先述のように、被験者がスルを用いた時、その事態性名詞にスルを用いることができるという認識を持っていたのか、単に、どの動詞を結びつけていいかわからず「Do ストラテジー」(=スル・ストラテジー)を用いたのか、判別できないからである。

前述の方法で選出した機能動詞結合を含んだ単文 38 の機能動詞部分を空所にし、そこに適切な動詞を 1 つ記入してもらった。空所に書き入れてもらいたい機能動詞結合の中国語訳を質問文の右側に示した。この中国語訳には、空所に補充されることが期待される日本語の機能動詞に含まれている漢字が使用されていないものを、選んだ。中国語訳に含まれた漢字の影響によって回答が導き出されることがないようにするためである。その結果、指示内容が伝われば、中国語として不自然なものもいくつか採用することになった。

実験に用いた問題は次の通りである。

クラス [] 氏名 []
下線部が右側の中国語と同じ意味になるように、() の中に適切な動詞を 1 つ入れて、文を完成させてください。
() に語を記入する時は、下線部だけでなく、文全体が自然な日本語になるように注意してください。
1 昼間は仕事なので、 <u>電話は</u> () ないでください。 [打电话]
2 敵の激しい <u>攻撃を</u> ()、ローマ軍は多くの兵を失った。 [被攻击了]

<パイロット・テスト>

実験に先立ち、実験材料（資料 9）のパイロット・テストを中国語母語話者 2 名、日本語母語話者 2 名に対して行い、その結果、不備のあったものを改めた。主な修正点は、2

点である。1つは、期待していた機能動詞ではなく、他の動詞でも正解になってしまう質問文を、期待する機能動詞しか取れないように変えたこと、そしてもう1つは、空欄に書き入れるべき語の対訳中国語をより適切なものに変えたことである。

例) ターゲット機能動詞結合が「食事をとる」の場合

〈パイロット・テストでの修正前の質問文〉

〈11-3〉彼は食事を () 時間も惜しんで勉強をしたおかげで、希望の大学に見事合格した。 [就餐]

〈実験で用いた修正後の質問文〉

〈11-4〉高血圧なので、食事の () 方には、いつも気を付けています。 [吃饭]

パイロット・テストでは、〈11-3〉文で中国語母語話者は2名共、空欄箇所にスル動詞を記入し、「食事を(する)時間も惜しんで」としていた。そこで、〈11-4〉文のように、文脈から判断して「食事の(とり)方」しか取れないように変えた。「食事のし方」という日本語もあるが、その場合は、〈フォークで食べるか、箸で食べるか〉とか〈肘をつけて食べる〉などの食べる動作の様態をさすが、〈11-4〉の文脈では、塩分を摂らないようにする等、〈食べ物を摂取する〉方法を意味する必要があるので、正答としては「とる」しかない。

また、中国語での指示語も「就餐」という語より、「吃饭」の方が自然だという中国語母語話者のコメントがあったので、「吃饭」に変えた。

11.3.2 調査の流れ

調査の前に、結果を公表することに同意を求め、用紙(資料8)を配り、年齢、母語、日本語学習歴、日本語能力試験の取得レベルと取得年月について質問した。そのあと、これは日本語の能力を調査するものであるので、最大限の力を発揮して取り組むよう教示し、調査紙の右側にある中国語と同じ意味になるように空欄に動詞を1つ書き入れるよう伝えた。その際、指示された箇所だけでなく、文全体が自然な日本語になるよう注意した。時間は、20分は必ず取り組むように指示したが、それ以上かかっても構わないので、全問答えるように告げた。実際には、3分の1程の者が規定時間以上に真剣に取り組んでいた。

11.3.3 正誤判定

文脈から正しい動詞を選択していれば、表記、動詞の活用が間違っても正解とした。課題文は、ターゲットとする動詞以外のものを挿入すると非文になるように作成したので、原則としてターゲット機能動詞を書き入れたものを正答とした。しかし、他の動詞でも文が成立すると思われるものについては、国研のBCCWJをチェックして、記載されているものは正答とした。実験結果は資料10に掲載した。

補足1 [村木(1991)における機能動詞結合のヴォイス的表現の取り扱い]

ヴォイスとは何かについて、寺村(1982)は、「コトの中の名詞の役割(つまり日本語では格助詞の使い方)と相関関係にある動詞の形態(p.59)」であるとし、また国立国語研究所(1978)は「格と相関関係にある動詞の形(p.86)」として、ほぼ同様の定義づけをしている。

また、寺村と国立国語研究所はともに、ヴォイスとして、受身/可能/自発/使役/自・他動詞を挙げ、同じ分類をしており、両者ともに能動態は含んでいない。さらに寺村は、相互作用と、語結合(村木の「機能動詞結合」を指す)の2つは、ヴォイスに含まれないと述べている。「花子ガ太郎ト結婚シタ」⇔「太郎ガ花子ト結婚シタ」のような相互作用は、「格は移動しても述語の形は変らない(p.209)」からである。また、「小津ガ篠田ニ影響ヲ与エタ」⇔「篠田ガ小津ニ影響ヲ受ケタ」のような機能動詞結合表現は「格の移動に伴う述語の変化が全く異なる2つの動詞として現れる(p.209)」ので、ヴォイスではないとする。

しかし、村木(1991)では、機能動詞結合の「ヴォイス的な意味」を持つものを、受動態、他動詞使役態、使役の受動態、相互態、「ヴォイスの基本となる形で、『……する』と交替するもの(p.256)」に分類している。

最後の「ヴォイスの基本となる形で、『……する』と交替するもの」は、村木特有の分類になっているが、一般的には「能動態」に該当するものである。本研究の実験材料は、村木がヴォイスとして列挙した機能動詞結合の具体的事例をデータとして用いたので、実験材料の機能動詞結合には、能動態と、相互態も含まれている。

補足2 [実験材料とする機能動詞結合のBCCWJからの抽出方法]

村木(1991)に収録された機能動詞結合のうち、ヴォイス的な意味を持つものを対象とし、国立国語研究所のBCCWJの中で200以上の頻度があったものを選んだ。

《BCCWJでの抽出方法》

事態性名詞(サ変動詞)をキー・ワードとし、共起条件を助詞及び「とる」「起きる」など個々の機能動詞にし、BCCWJにかけた。

BCCWJでヒットしたものの中には、和語連用形とカタカナ外来語の事態性名詞が含まれていたもので、手作業で廃棄した。

また、次のような、機能動詞結合とは判定されないデータが多数含まれていたもので、それも手作業で廃棄した。判定に当たっては、先行研究で紹介した藤井・上垣(2008)の判別テストを用いた。

例:「株主は持ち分に応じた配当を与えられる」

「校内で強引に署名を集めさせる」

「大学の夏期講座に出席、ようやく高校就学証明を得ることができた。」

この文脈での「配当」「署名」「高校就学証明」はいずれも一般名詞で、事態性名詞ではない。

(1) 500 例前後、及び以下のもの

上述の手作業での廃棄処理後、実際に残った数を探った。

(2) 500 例を大幅に超える場合

「受ける」(23804 例)、「持つ」(10743 例)のように、機能動詞に膨大な事例が抽出されたものについては、500 例だけ、調査対象となる機能動詞結合を抽出し、そのデータを基に次の方法で計算し、実数を推測した。このような計算をしたのは、上述したように、BCCWJ でヒットしたデータには、廃棄すべきものがかなり含まれていたからである。

i. 「与える」「受ける」など、個々の機能動詞ごとの機能動詞結合データ総数の推測方法

$$a \times \{ 500 / (b+500) \}$$

a : BCCWJ で表示された総データ数

b : 対象機能動詞結合 500 を抽出した際に生じた廃棄データ数

例：「受ける」の推測による機能動詞結合 BCCWJ 内総数 18802 例

$$a=23804 \quad b=133$$

$$23804 \times \{ 500 / (133+500) \} = 18802$$

この 18802 には「相談を受ける」「試験を受ける」など、「受ける」を機能動詞に取る BCCWJ 内のすべての事態性名詞が含まれる。

ii. 「感動を与える」「影響を受ける」など、個別機能動詞結合のデータ数の推測方法

$$c \times d$$

c : i で計算された機能動詞結合 500 例の内に含まれた個別機能動詞結合数

d : i で計算された機能動詞結合数を 500 で割った数

例：「影響を受ける」の推測による BCCWJ 内機能動詞結合総数 1880 例

$$c=50 \quad d=18802 \div 500 \doteq 37.6$$

(18802 : i で出された「受ける」の推測による機能動詞結合 BCCWJ 内総数)

$$50 \times 37.6 = 1880$$

なお、「与える」「かける」「生じる」「とる」については、村木は、ヴォイスのタイプによって分けて分類していたので、本研究でもそれぞれの用法ごとに分けてデータ処理した。たとえば、「与える」は「感動を与える」「動揺を与える」の場合は、他動詞使役態であり、「与える」は「～させる」と言い換え可能であるが、「注意を与える」「刺激を与える」の場合は、「与える」は「～する」と言い換えできるが、「～させる」と言い換えはできない。

11.4 調査結果と考察

実験の結果は、課題に応じて大きく2つに分けて分析した。11.4.1では、RQ IのCLJがどのように機能動詞結合を使用しているかについて、11.4.2ではRQ IIのどのような機能動詞結合が習得に容易かまた困難かについて、それぞれ分析し考察した。

なお、調査材料とした機能動詞結合の内、下記の「変化が生じる」の問題文には、「変化が起こる」を用いても正答となるが、中国語で「起」という語を問題文に添付してしまったので分析対象から除外した。

<11-5> 火山活動に新たな変化が(起き／生じ)た時は、危険ですから避難してください。

[引起変化]

したがって、分析材料は37となった。

11.4.1 RQ I: CLJはどのように機能動詞結合を習得しているか

CLJがどのように機能動詞結合を習得しているかというRQ Iは、次の二つに分けて分析し考察する。

RQ I CLJはどのように機能動詞結合を習得しているか

- － i 機能動詞結合を適切に使用できるか
- － ii 誤用にはどのようなタイプがあるか

11.4.1.1 RQ I-i 機能動詞結合を適切に使用できるか

CLJが課題文の文脈に合わせて機能動詞を選び、適切な機能動詞結合を産出しているかどうかを見るために、正答率を調べた。実験協力者58名が37問の課題に答えた回答総数2146の内、正答は632、誤答は1514だった。正答数を総数で割った正答率は29.5%である(表11.2)。7章の上級CLJの作文分析では、上級は80.6%と高い正用率を示したが、実験では、正答率は29.5%と正誤割合がほぼ逆転していた(表11.3)。

また、実験協力者の内、日本語能力試験N1取得者とN2取得者では大きな差があり、N1の正答率は39.5%であるのに対し、N2は20.1%で、N1の約半分しかなかった。作文分析では、中級も上級も共に正用率80%程度と有意差が認められなかったが、実験ではこのように異なった結果が出た(表11.3)。

表 11.2 産出された機能動詞結合の正誤割合

	正答	誤答	計
N1	409 (39.5%)	627 (60.5%)	1036 (100%)
N2	223 (20.1%)	887 (79.9%)	1110 (100%)
計	632 (29.5%)	1514 (70.5%)	2146 (100%)

表 11.3 作文と実験における正用率の対比

	作文分析	実験
上級 CLJ	80.6%	29.5% (N1 : 39.5% N2 : 20.1%)
中級 CLJ ^①	82.1%	

作文で正用率が非常に高かったのは、その事態性名詞と共にどの機能動詞を用いたらよいかかわからない場合、使用回避または言い換えをしたため、習得の実態が表面化しなかったのだと考えられる。また、作文で中級と上級で正用率に差がなかったのは、上級は上級なりに、中級は中級なりに、自分の日本語力の範囲内で、適切さに自信のない用語の使用を避けた結果と思われる。

作文と実験では、調査対象とした CLJ も、またそのレベル区分も異なり、単純に比較はできない。しかし、先行研究を見ると、スル動詞結合のみを対象とした鈴木 (2009) は本調査と同じ学習者の作文分析をしており、また、機能動詞結合を対象とした黄 (2017) は本調査と同じ動詞部分を空欄にした空所補充テストで実験を行なっている (3.1.1 参照)。鈴木の前記での正用率は 75.7%¹であるのに対し、黄の実験での正用率は 24.8%²で、実験では作文より著しく正用率が落ち、本研究の結果と同じ傾向が見られる。

なお、本実験で用いた事態性名詞は、すべて中国語と同形同義か、中国語にない場合でも初中級レベルのやさしい語だけだったので、事態性名詞の意味は分かっていることを前提として実験を行った。したがって、誤用の場合、名詞の意味が分からなかったのではなく、それと結びつけるべき動詞が分からなかったのだと解釈される。

11.4.1.2 RQ I - ii 誤用にはどのようなタイプがあるか

11.4.1.2.1 分析方法

作文分析で見られた高い正用率とは対照的に、実験では誤用が 70%以上を占めていた。CLJ はどのようにして動詞を選択し、回答したのだろうか。機能動詞結合の習得困難要因を探るため、実験問題で誤答だったものを分析した。5章の誤用判定の枠組みを基に、誤答を大きく A、B 二つに分け、さらに A を 3 種に分けて分析した。

- A 回答された動詞と問題文に提示された事態性名詞の組み合わせは、日本語に存在しない。それらは、次の 3 つに分類される。 1) L1 ペア 2) 非慣用 3) その他
- B 回答された動詞と、問題文に提示された事態性名詞の組み合わせは、日本語に存在するが、問題文の文脈から考えて不適切である。 4) 用法の誤り

¹ 鈴木の前記論文では誤用率として 24.3%と記載されている。

² 黄の前記論文では、実験で用いられたテストが 30 点満点で平均は 7.44 とされていたので、そこから正用率を計算した。

1) 「L1 ペア」は、名詞と動詞の組み合わせが日本語にないものの内、母語の影響によって生じた誤用で、次の2つがある。

①問題文中の中国語訳で使われていた漢字語に含まれていた漢字を含む語を動詞として用いた回答。

<11-6> 最近、新型の携帯電話が発売され、若者の注目を (*起っ)ている。

[引起注目]

<11-6>例では、期待される回答「注目を(集め)て」に対し、回答者は「注目を(*起っ)て」と記入したが、これは、この質問文に付された中国語訳「引起注目」に含まれている「起」を用いたものである。

②講談社の『日中辞典』『中日辞典』及び中国語の『中央研究院現代漢語語料庫』に、当該事態性名詞と共に回答に記入された日本語の動詞に含まれる漢字語が用いられていたもの。

<11-7> オバマ氏は、圧倒的な国民の支持を(*取っ)て、大統領に選出された。

〔漢語語料庫〕 美國致力爭取強大的支持

(強力な支持を勝ち取るために、米国は力を尽くした)

注) 中国語文の下線及び和訳は筆者付加、以下同様

期待される回答「支持を(得)て」に対し、回答者は「取る」を記載しているが、『漢語語料庫』では「爭取支持」と「取」を含んだ例が見られる。しかし、日本語には「*支持を取る」という組み合わせはないのでL1を転用したものとする。

2) 「非慣用」は、作文分析の際に用いた誤用区分と同じで、<11-8>例のように当該事態性名詞とその動詞を共に用いると、意味的には文脈と合っており、理解可能だが機能動詞結合としての慣用性に抵触するものである。

<11-8> 高校生がアルバイトをするには、父母の同意を (*持つ) が必要です。

[父母同意他]

<11-8>の期待される回答は「同意を(得る)」であり、回答された「同意を(*持つ)」から、同様の意味を推測することが可能だが、日本語では慣用的にそのような名詞と動詞の組み合わせはないので、誤用となる。

3) 「その他」には、「解釈不能動詞」と「非回答」が含まれる。

①「解釈不能動詞」は、<11-9>例のように、正答ではない動詞が指示箇所に入力されているが、「非慣用動詞」とは異なり、その文脈から回答者が何を伝えようとしているのか意味が取れず、また問題文で指示された中国語の意味に該当しない語を書き入れているものである。

<11-9> 工場では、食品に異物が入らないように細心の注意を(*知っ)ている。

[要注意]

②「非回答」は、全く動詞を書き入れていないものである。その中には、無記入のもの他に、動詞でない語を書き入れていたものも含む。

4) 「用法の誤り」も作文分析の時と同じで、その事態性名詞と機能動詞の結合は日本語に存在するが、文脈上、他の機能動詞を用いるべきものである。

<11-10> 悪かったのは自分なので、どのような処分でも（*され）るつもりです。

[被处罚]

上の例の「処分する」という機能動詞結合は日本語にあるが、この文脈では「どのような処分でも（受け）る」と「受ける」を用いなければならない。

11.4.1.2.2 分析結果と考察

分析結果を、表 11.4 に示した。

表 11.4 誤答のタイプ別分類

実験協力者の 日本語能力 試験取得級	A 日本語にない組み合わせ			B 日本語にあるが不適切	計
	L1 ペア	非慣用	その他	用法の誤り	
N1	130 (20.7%)	223 (35.6%)	13 (2.1%)	261 (41.6%)	627 (100%)
N2	173 (19.5%)	277 (31.2%)	19 (2.1%)	418 (47.1%)	887 (100%)
計	303 (20.0%)	500 (33.0%)	32 (2.1%)	679 (44.8%)	1514 (100%)

誤答タイプで最も多かったのは、「用法の誤り」で 679 あり、誤答全体の 44.8% を占めていた。次に多かったのは「非慣用」の 500 で、33.0% を占めていた。母語で用いられる語と同じ語を用いた「L1 ペア」は 303 で 20.0% だった。

1) 「用法の誤り」が最多

「用法の誤り」は 679 で、全誤答の 45% と半分近くを占めていた。「用法の誤り」は日本語にその機能動詞結合は存在するが、文脈から判断すると別の機能動詞結合を用いるべきものである。作文分析の際にも述べたように、学習者は、事態性名詞を用いる時、「電話をかける」「迷惑をかける」など頻繁に用いられるものはワンパターンで記憶し、そうでないものは、スルと結合するかしないか（「サ変動詞」であるかないか）で主に処理しているようである。そのため、学習者の機能動詞結合の産出はルーチン化し、文脈による違いによって機能動詞結合を使い分けることができないのだと考えられる。教師も学生に、漢語にスルが付くかどうかには注意を払うよう促しても、それだけで終わってしまい、どのよう

な場合にその結合を用いることができるのか、どのような場合には用いることができないのかまで、掘り下げて取り上げることは少ない。

作文や発話で見られるように、普段、学習者は、自信のもてない機能動詞結合は、使用回避ないし言い換えをしている。そのため、今回の実験のように強制的に産出を促されるまで、ワンパターンの結合では、あてはめられない文脈があることに、気づきがないのだと思われる。表 11.5 に、用法の誤りでは、どのような機能動詞が用いられていたかを示した。用法の違いによる誤用 679 の内、スル動詞を用いていたものは 550 で、81%を占めていた。ほとんどの結合を、スルでワンパターンで覚えれば楽なこともあり、学習者は漢語事態性名詞を「サ変動詞」として、スルで固定的に記憶していると思われる。

表 11.5 「用法の誤り」で使用されていた動詞

実験協力者の日本語 能力試験取得級	スル動詞	スル以外の 他の動詞	計
N1	193 (73.9%)	68 (26.1%)	261 (100%)
N2	357 (85.4%)	61 (14.6%)	418 (100%)
計	550 (81.0%)	129 (19.0%)	679 (100%)

2) 「非慣用」の誤用も多い

誤答で、「用法の誤り」の次に多かったのは「非慣用」で 500 例あった。実験協力者は、無作為に動詞を書き入れたのではなく、文脈を考慮して当該事態性名詞に対して意味的に妥当だと考える動詞を選択している。〈11-11〉～〈11-16〉がその事例である。

〈11-11〉 多くの人々の協力を（*受け）て、大会は成功の内に終わった。 [有了协助]

〈11-12〉 今回、ある大手スーパーと販売の契約を（*作る）ことができた。 [訂立契約]

〈11-13〉 幼い子供は、親の保護を（*もらわ）ないと生きていくことができない。

[父母保护儿子]

〈11-11〉の期待される回答は「協力を（得）て」、〈11-12〉は「契約を（結ぶ）」、〈11-13〉は「保護を（受け）」であるが、それぞれ文脈に沿った授受、コトの成立という意味の動詞を選択している。

なぜ、その動詞を選択したのか理解できない〈11-14〉～〈11-16〉例のような「解釈不能動詞」は、19 例しかなかった。

〈11-14〉 高血圧なので、食事の（*いき）方にはいつも気を付けています。

〈11-15〉 不合格の場合も考慮に（*つい）て、他の学校も受験しようと思っています。

〈11-16〉 工場では、食品に異物が入らないように細心の注意を（*知っ）ている。

したがって、上級 CLJ は、1) で述べたようにワンパターンで機能動詞結合を記憶してはいるが、事例を提示されれば、適不適に気づき、文脈の意味に合った動詞を選択しよう

と努めるのであり、スル・ストラテジーをとってスルをむやみに用いているわけではないことがわかる。

3) 「L1 ペア」による誤用は最少

実験では、問題文の中国語訳の語または中国語で用いる動詞をそのまま使うという母語の影響を示す「L1 ペア」による誤答は少なく 303 例、誤答全体に占める割合は 20.0%と、誤答タイプの中では最も少なかった。これは、次の「日本語能力による違い」で論じるように、学習者は安易に母語に頼ることなく、日本語らしい表現をしようと試みているからである³。

作文での誤用のうち母語の影響によるものが誤用全体に占める割合は、中級 CLJ_①は 28.0%、上級 CLJ は 25.9%で (7.4.3 参照)、実験結果とほぼ近い割合ではあるが、作文の方が実験より母語の影響の占める割合が高かった。その理由として、実験そのものの性質が考えられる。実験で用いた質問用紙では、あらかじめ事態性名詞は提示してあり、それに適する機能動詞を空所に補充するものだったからである。母語の影響が強く表れるのは動詞に比べ名詞が多く、日本語にない中国語の借用や、日中同形 S 語で中国語と日本語で意味・品詞が異なる場合、誤用が生じるのである。

また、作文での調査対象が、日本国外で外国語として日本語を学ぶ CLJ であったのに対し、実験の調査対象の CLJ は日本に留学し、第二言語として日本語を学んでいる学習者であったことも、母語の影響を少なくした可能性がある。留学生として日本語を学ぶ場合は、日本社会の中で Native の日本語に日常的に触れながら、生活の中で日本語を学習しているので、日本語として自然かどうかという感覚が自然に身についているので、母語干渉が起こりにくいと思われる。

4) 実験調査での日本語能力による違い

今回の実験は、日本語学習歴 18 か月以上の上級 CLJ が対象だったが、その中には日本語能力試験 N1 合格者と N2 合格者が含まれていた。N1 合格者は 28 名、N2 合格者は 30 名だったが、誤用割合が、N2 は 79.9%なのに対し、N1 は 60.5%と大きな違いを見せた (表 11.2)。また、動詞を書き入れるようにという指示にも関わらず、次の<11-17>例のように、助動詞を書き入れ、事態性名詞を直接活用させるという作文と同じ誤用も 4 例見られたが、これは N2 のみだった。

<11-17> 最近、新型の携帯電話が発売され、若者の注目を(られ)ている。

表 11.4 で、誤用内容を見ていくと、N1 は、誤用総数 627 の中で、用法の誤りが一番多く 261 (41.6%)、次が非慣用で 223 (35.6%)、L1 ペアが最も少なく 130 (20.7%) だっ

³ 母語に依存しないのは、母語に依存して産出しているかどうか自信が持てない時のことである。正答では、名詞と動詞の組み合わせが類似している S 結合が多く、CLJ は機能動詞結合の習得に母語知識をフル活用している (11.4.2.12)。8.4.4 も参照。

た。N2 の場合も、誤用総数 887 の中で、用法の誤りが 418 (47.1%)、次が非慣用で 277 (31.2%)、最も少ないのは L1 ペアの 173 (19.5%) で、N1 も N2 も誤用タイプは、多い順に用法の誤り、非慣用、L1 ペアであることは同じだった。

では、N2 から N1 へと日本語能力が向上しても誤用内容に違いはないのだろうか。表 11.6 に無回答の 23 を除いた総誤用の中で、N1 と N2 それぞれがスル動詞と支援動詞をどのような割合で用いていたかを示した⁴。N1 はスル動詞が 193 (31.2%)、支援動詞が 426 (68.8%)、N2 はスル動詞が 357 (40.9%)、支援動詞が 515 (59.1%) だった。スル動詞と支援動詞が誤用全体の中で占める割合に N1 と N2 で違いがあるかを見るため、2 つの母比率の差の検定を行ったところ、著しい有意差が認められた ($\chi^2(1, N=1491) = 14.816$ $p^{**} < .01$)。

したがって、N1 は N2 に比べ、誤用の中でスル動詞の使用が少なく、支援動詞を多く用いているのに対し、N2 は N1 に比べ、誤用の中でスル動詞を用いることが多く、支援動詞の使用が少ないことになる。

表 11.6 スル動詞使用が誤答全体の中で占める割合

実験協力者の 日本語能力試験取得級	スル動詞	支援動詞使用	総誤用数
N1	193	426	619
N2	357	515	872
計	550	941	1491

注) 総誤用数から「無回答」の N1-8、N2-15、計 23 を除いた。

このことから、N1 と N2 は、事態性名詞に結びつけるべき機能動詞がわからない時に、とる方策が異なることがわかる。すなわち、N2 は事態性名詞に結びつけるべき機能動詞がわからない時には、スル・ストラテジーをとり、スル動詞を用いる傾向があるのに対し、N1 は、意味的に妥当と思われる実質動詞、またはその事態性名詞とセットで記憶している支援動詞を用いようとしている。

N1 は明示的にではないにせよ、どんな時にでも事態性名詞にスルをつけて用いることはできないことに気づいているので、むやみにスルを用いたりしないのであろう。また、「影響を与える」「刺激を受ける」など、特定の事態性名詞に特定の機能動詞が結びついた機

⁴ 「用法の誤り」の中で用いられたスル動詞数 (N1 : 193、N2 : 357)がそのまま誤用全体で用いられたスル動詞の使用数になる (表 11.6)。なぜなら「L1 ペア」というのは中国語で用いられる漢字を含んだ動詞を、そして「非慣用」というのは授受、コトの成立などを意味する動詞を用いた誤用であるので、いずれにもスル動詞は含まれておらず、すべて支援動詞である。したがって、「用法の誤り」の中で用いられたスル動詞が、今回の実験の誤答全体で用いられていたスル動詞ということになる。

能動詞結合についての知識の蓄積があるので、それを適用しようとするのだと思われる。誤用タイプ順位は同じでも、N2 から N1 へと日本語の習得レベルが上がるにつれて、機能動詞結合の習得も進んでいることがわかる。

N1 も N2 も誤用の中で L1 ペアの占める割合は最も少なく、安易に L1 知識に頼ることなく、日本語らしい表現をとろうと努めている。しかし、その際の対応が N1 と N2 では異なっており、N2 は N1 に比べ、スル・ストラテジーをとることが多く、スル動詞を過剰使用する傾向が強い。N1 もスル・ストラテジーをとらないわけではないが、N2 に比べスル以外のさまざまな動詞を用いようとしている。そこから、N1 は、既知の名詞と動詞の組み合わせをできるだけ用いようとして用法の誤用を犯す、あるいは事態性名詞に意味的に妥当と思われる動詞を用いようとして非慣用の誤用を生じるなどするのである。

11.4.1.3 まとめ

以上の調査分析は、次のリサーチ・クエスチョンに答えるものだった。

RQ I CLJ はどのように機能動詞結合を習得しているか

- － i 機能動詞結合を適切に使用できるか
- － ii 誤用にはどのようなタイプがあるか

実験調査での正答率は 29.5% と低く、上級学習者でも機能動詞結合を産出使用するのには困難であることが示された。しかし、日本語能力試験 N2 合格者の正答率は 20.1% であったが、N1 合格者になると 39.5% と正答率が 2 倍近くに上がり、日本語能力が上がると共に機能動詞結合の習得も進んでいることがわかった。

誤用タイプを見ると、「用法の誤り」が最多で、「非慣用」がそれに次いでいる。「用法の誤り」と「非慣用」はどちらも、日本語を学習する過程で機能動詞結合に注意を払うことがなく、その結果、事態性名詞と機能動詞の慣用的な結合（＝機能動詞結合）の蓄積が貧困であることが要因である。

普段は、言い換え、使用回避などをする結果、学習者は機能動詞結合の知識が貧困であることに無自覚である。母語と同形同義でよく知っていると思いついでいる事態性名詞も、日本語の文脈で使いこなすためには、その名詞がどの動詞と結びつきうるかを学ばなければならぬことに学習者は気づいていない。

11.4.2 RQⅡ：どのような機能動詞結合が習得に容易 or 困難か

11.4.1 では、学習者を対象にして、どのように機能動詞結合を習得しているかを実験結果から見てきたが、ここでは、個々の機能動詞結合そのものを対象にして、どのような機能動詞結合が CLJ にとって、習得が容易か、または困難かを以下の RQ で、分析調査する。

RQⅡ どのような機能動詞結合が CLJ にとって、習得が容易か、または困難か

- － i 習得難易に関わる機能動詞結合の属性は何か
- － ii 動詞が多義である場合、意味の各側面によって習得が異なるか

11.4.2.1 RQⅡ-i 習得難易に関わる機能動詞結合の属性

Altenberg & Granger (2001) は、学習者の L2 運用は、1 つではなくいくつかの要素によって説明されるべきだとする (p.184)。3 章で見てきた先行研究で「V+N」コロケーションの属性が習得に及ぼす影響として取り上げているのは、頻度、L1 と L2 における名詞と動詞の組み合わせの類似性、コロケーションが含まれる文の項構造、ある動詞にいくつ名詞が結びつきうるのかであった。

最後のある動詞にいくつ名詞が結びつきうるのかというのは、Nesselhauf (2003) が一般的な「名詞+動詞」のコロケーションで調査を行った際のものである。しかし、本研究の対象は機能動詞結合であり、動詞ではなく名詞が主要な意味を担うので、ある名詞にいくつの機能動詞が結びつきうるのかが問題になる。

上記先行研究を踏まえ、本研究では、頻度、L1 と L2 における名詞と動詞の組み合わせの類似性、機能動詞結合が含まれる文の項構造、ある事態性名詞にいくつの機能動詞が結びつけられるかという結びつく機能動詞数の多寡の 4 つを独立変数として実験結果を分析し、どの要因が機能動詞結合の習得難易に及ぼす影響が大きいかを調査する。

11.4.2.1.1 分析方法

RQⅠ では、学習者を対象として、どのように機能動詞結合を習得しているかを見ることを目的に実験結果を分析し、考察した。ここでの課題 RQⅡ では、それぞれの機能動詞結合自体が持つ属性を対象にし、どのような結合が CLJ の習得にとって容易であるのか、また困難であるのかについて分析し考察する。本来、習得の難易は正誤数だけで測れるものではないが、今回の実験では 1 つの指標として、正誤数の面から見ていく。

機能動詞結合の習得に影響を及ぼす要因は、1 つではなく様々なものがある。そこで、どのような性質を持つ機能動詞結合がより多く習得されているかを見るために、先行研究で取り上げた習得に影響を与える要因に基づいて、本実験で用いた個々の機能動詞結合を、次の 4 側面で分類し、それぞれの正答数の分布を見る。

- (1) 頻度
- (2) L1 (母語) の名詞と動詞の組み合わせとの類似性、
- (3) 項構造
- (4) 事態性名詞と結びつく機能動詞数の多寡

実験材料をその 4 側面で分類したものが、表 11.7 である。

表 11.7 実験材料とした機能動詞結合

機能動詞結合		高頻度・度	L1 : L2 関係	実験文 項構造	BCCWJ 内 複 V 結合
1	注目を集める	②	D	B②	少
2	注目を浴びる	③	D/N	B②	少
3	影響を受ける	①	S	B②	少
4	保護を受ける	③	S	B②	少
5	承認を受ける	③	D	B②	少
6	訓練を受ける	③	S	B②	少
7	報告を受ける	③	D	B②	多
8	攻撃を受ける	③	S	B②	中
9	評価を受ける	③	S	B②	中
10	相談を受ける	③	N	B②	中
11	説明を受ける	③	N	B②	多
12	処分を受ける	③	S	B②	中
13	協力を得る	②	S	B②	多
14	同意を得る	③	S	B②	中
15	許可を得る	③	S	B②	中
16	理解を得る	③	S	B②	多
17	支持を得る	③	S	B②	少
18	負担をかける	③	D	B①	多
19	迷惑をかける	②	D	B①	少
20	契約を結ぶ	③	S	A	中
21	影響が出る	③	S	一項	少
22	結論が出る	③	S	一項	多
23	影響を与える	①	D	A	少
24	刺激を与える	③	N	A	多
25	電話を入れる	③	N	A	中
26	生活を送る	③	D	A	少
27	行動を起こす	③	D	A	中
28	影響を及ぼす	①	D/N	A	少
29	電話をかける	①	D	A	中
30	結論を出す	③	D	A	多
31	計画をたてる	②	D	A	多

32	連絡をとる	②	N	A	多
33	措置をとる	②	S	A	中
34	指揮をとる	③	N	A	中
35	食事をとる	③	D	A	少
36	注意を払う	②	N	A	多
37	考慮に入れる	③	D	A	少

以下で、表 11.7 の分類について説明する。

(1) 頻度

本実験の材料として選んだ 37 の機能動詞結合は、11.3.1 で述べたように、すべて、非常に高頻度のものばかりだった。そこで、習得への影響を調査するための頻度の違いは、高頻度同士の間で分析した。BCCWJ にかけて、1000 以上ヒットしたものを高頻度①、500~1000 を高頻度②、200~500 を高頻度③とした。

実験材料とした各機能動詞結合の頻度分布を表した図 11-1 を見ると、1000 以上のもの、500~1000 のもの、200~500 のものの 3 つのグループに分かれていることが、明らかである。

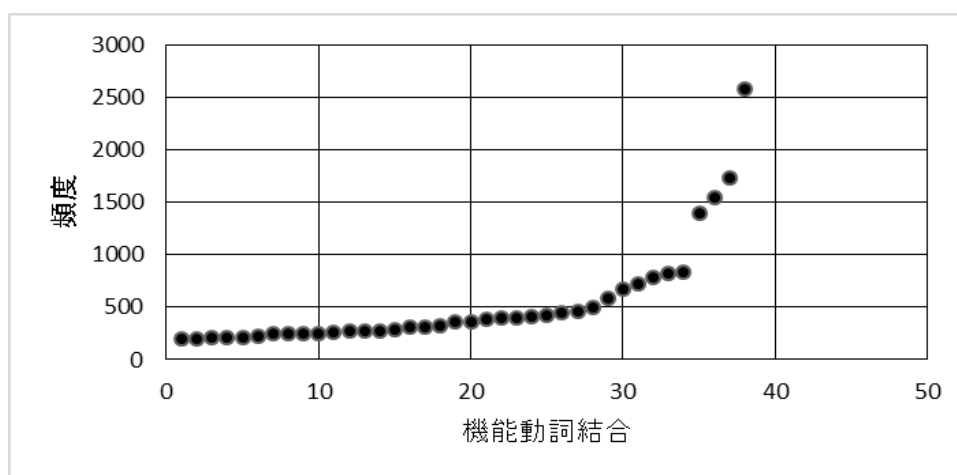


図 11-1 実験材料とした各機能動詞結合の頻度分布

コーパスと統計により日本語教育のための語彙リストを作成した本田 (2019) は、「語彙のレベル分けを考える場合、高頻度語彙の集まる部分ではランクが異なれば頻度も散布度も大きな差が生じるのでレベル分けも意味のある区分になりえるが、低頻度になるほど頻度も散布度も近い値に集中するので、意味のあるレベル分けが難しくなる (p.124)」と述べている。図 11-1 と符合するものであり、高頻度結合だけを調査材料としたことの妥当性が方法論的に裏付けられる。

(2) L1 (母語) の名詞と動詞の組み合わせとの類似性

名詞と動詞の組み合わせにおける日本語と L1(中国語) の類似度は、実験に用いた機能動詞結合の動詞によって、次の S、D、N¹の 3 種の結合に分けた。判別に当たっては、日本語能力試験 N1 を保持する中国語母語話者 3 名に協力してもらった。

S 結合 Same [日中同形同義事態性名詞+日中同形同義機能動詞]

日本語の機能動詞結合の動詞と同形同義の漢字を、該当する中国語でも用いることが一般的であり、したがって、その機能動詞結合が、日中で同じ組み合わせであるもの。

例) [日] 攻撃を受ける [中] 受到攻撃了

([日]: 日本語、[中]: 中国語)

日本語の動詞「受ける」で用いられた漢字「受」が中国語でも用いられている。

D 結合 Different [日中同形同義事態性名詞+日中異形動詞]

機能動詞結合の事態性名詞は、中国語でも動詞と一緒に用いることが一般的だが、その動詞は日本語と中国語では同形ではないもの。

例) [日] 注目を浴びる [中] 受到注目

日本語では動詞「浴びる」が、用いられているが中国語では「受到」で、日中で共通する漢字がない。

N 結合 Nothing [①「日中同形同義事態性名詞」単独使用 ②中国訳語無し]

これには 2 種類ある。

①中国語では日本語の事態性名詞に該当する漢字語を、動詞と一緒に用いず、単独で用いることが普通であるもの

例) [日] 連絡をとる [中] 联络 (連絡)

日本語で「電話で連絡してください」という文を中国語に翻訳すると「请用电电话联络」(講談社「日中辞典」より)となる。「请用电电话・・・」が「電話で・・・お願いします」に該当するので、中国語の「联络 (連絡)」1 語が日本語の「連絡する」の訳語となる。

②日本語の意味に該当する中国語の訳語動詞がないもの

例) [日] 電話を入れる² [中] 該当訳語なし

¹ 文化庁 (1978)、陳 (2009) を参考にした。

² BCCWJ で 306 件と出現頻度が高かった。「電話をかける」は通話するために相手の電話に接続 (卓上電話の場合、ダイヤル) する行為に視点があるのに対し、「電話を入れる」は用件があって連絡をとることにウェイトがある。「電話をかけに立つ」とは言えるが、「*電話を入れに立つ」とは言えないなど、「電話を入れる」には独自の役割がある。

(3) 項構造

作文の調査結果から、機能動詞結合では、取る項の誤用も多く、機能動詞結合を文中で逸脱なく用いるためには、取る項に基づいて構文を形成することは重要である。

課題文の項構造は、2.3.1.4で紹介した藤井・上垣（2008b）に従い、以下のように分類した。ただし、藤井・上垣は、「受ける」は特殊であるとして、「受ける」の非主語一致型を1-Aに含めたが、本稿ではB②として、非主語一致型にまとめた。藤井・上垣はまた、「受ける」の主語一致型を、1-Bタイプに分類しているが（2.3.1.4参照）、本調査にこのタイプのもの含まれていなかった。

- 主語一致型 A 事態性名詞の主語が主動詞の主語と一致するタイプ
非主語一致型 B① 事態性名詞の主語が主動詞の主語以外の項と一致するタイプ
 B② 事態性名詞の主語以外の項が主動詞の主語と一致するタイプ

本調査の課題文での事例は次のようであった。注) ()内は、課題文で空欄であった箇所

- A あまり辛いものは、胃に刺激を(与える)ので食べないようにしている。
 「辛いものが胃を刺激する」ので、事態性名詞「刺激」の意味上の主語は「辛いもの」で、主動詞の統語上の主語と一致する。
- B① 留学するとなると、また親に負担を(かける)ことになるので、決心がつかない。
 「親が負担する」ので、事態性名詞「負担」の主語は「親」で、主動詞の統語上の斜格と一致する。
- B② 幼い子供は、親の保護を(受け)ないと、生きていくことができない。
 「親が子供を保護する」ので、事態性名詞「保護」の目的語は「子供」で、主動詞の統語上の主語と一致する。

なお、上記以外に、事態性名詞自体が本文の主語となっている一項構文(自動詞)型が、次の2文見られた。

<11-18> 放射能汚染の影響が(出る)のは、10年後、20年後で、すぐにはわからない。

<11-19> 話し合いの結果、結論が(出た)ら、すぐご報告します。

(4) 事態性名詞と結びつく機能動詞数の多寡

事態性名詞に結合可能な機能動詞が多いか少ないかは、BCCWJで、検索した結果³で判別した。そこでヒットした500データの中で、当該事態性名詞が異なり数でいくつの機能動詞と共起しているかを調べ、少ないものから1～11番目までを「BCCWJ内少V結合名詞」、12～22番目までを「BCCWJ内中V結合名詞」、23～33番目までを「BCCWJ内多V結合名詞」とした⁴。

³ 語彙素として、個別の事態性名詞を「キーワード」に入れ、共起条件として品詞：「動詞」を設定して検索した。

例) 事態性名詞「迷惑」に共起する機能動詞数 13 → 「少結合」に分類

(する／なる／被る／受ける／かける／かかる／降りかかる／
思う／考える／覚える／感じる／及ぼす／及ぶ)

作文分析では、中級 CLJ、上級 CLJ などの作文データ全体の中で用いられていた機能動詞結合の中で、1つの事態性名詞に複数の機能動詞を結びつけているものを「複 V 結合名詞」としたが、本章の産出実験では、データとした BCCWJ 全体の中で抽出された複 V 結合名詞を「BCCWJ 内複 V 結合名詞」として区別する。

⁴ 実験結果を分析した機能動詞結合は 37 だが、同じ事態性名詞のものがあるので 33 となる。

11.4.2.1.2 分析結果と考察

(1) 頻度 (表 11.8)

機能動詞結合の頻度と正誤数の間に関連があるかどうかを分析した。高頻度①の機能動詞結合群の正答は 92、誤答は 140 で正答率は 39.6%、高頻度②群の正答は 128、誤答は 278 で正答率は 31.5%、高頻度③群の正答は 412、誤答は 1096 で正答率は 27.3%だった。 χ^2 検定を行ったところ、 $\chi^2 (2, N=2146) = 15.762$ 、 $p^{**} < .001$ となり、著しい有意差が見られた。

残差分析を行ったところ、正答数が多いのは、高頻度①、②、③の順だった。本調査の材料とした機能動詞結合はすべて高頻度のものだったが、その中でも頻度の高いものほど正答が多く、頻度と正誤数との間には関連があることが示された。

表 11.8 頻度別正誤数

	高頻度① 機能動詞結合	高頻度② 機能動詞結合	高頻度③ 機能動詞結合	計
正答	92	128	412	632
誤答	140	278	1096	1514
計	232	406	1508	2146

(2) L1「機能動詞結合」との類似性 (表 11.9)

実験材料とした日本語の機能動詞結合と、それに相当する中国語 (L1) の名詞と動詞の組み合わせとの間で類似性があるかないかが、機能動詞結合の習得に影響するかを分析した。分析に当たっては、日中で異なった動詞を用いる D 結合と「事態性名詞単独使用 or 中国訳語無し」の N 結合を一緒にして DN 結合群とし、日中で同形同義の動詞を用いるものを S 結合群とした。S 結合群の正答は 298、誤答は 572 で正答率は 34.3%、DN 結合群の正答は 334、誤答は 942 で正答率は 26.2%だった。正誤数を従属変数として χ^2 検定を行った結果、 $\chi^2 (1, N=2146) = 16.244$ $p^{**} < .01$ で 1%水準の有意差があり、日中の名詞と動詞の組み合わせに類似性がある S 結合の方が DN 結合より正答が多かった。

表 11.9 L1「機能動詞結合」との類似性別正誤数

	S 結合	DN 結合	計
正答	298	334	632
誤答	572	942	1514
計	870	1276	2146

母語の類似性は習得に役立つ反面、誤用も招いていた。

<11-20> 最近、新型の携帯電話が発売され、若者の注目を（ ）ている。

[引起注目]

<11-20>は、実験で用いた問題で、期待される回答は「注目を（浴び）ている」だが、18名が「*注目を（受け）ている」と書き入れていた。講談社の『日中辞典』には「受到人間的注目」（世間から注目されている）とあり、中国語に含まれている「受」を含んだ日本語の動詞「受ける」を組み合わせている。

また、次のような例もある。

<11-21>私たちは、2,3分話し合って、すぐに結論を（ ）た。 [有结论]

<11-21>の期待される回答は「結論を（出し）た」であるが、11名が「*結論を（作）た」と回答している。『現代漢語語料庫』には、「媽媽作了結論」（母は、結論を出した：筆者訳）という例が出ていた。中国語に含まれている漢字「作」を用いて「作る」としたのである。

<11-22>不合格の場合も考慮に（ ）て、他の学校も受験しようと思います。

[考慮在内～]

この問題の回答には「考慮に（入れ）て」が期待されていたが、14名が「*考慮に（含め）て」と回答していた。「*考慮に含める」は上の2つの例と少し性質が異なり、該当する中国語は「在内考慮」となり、「含める」には中国語の漢字は用いられていない。しかし、「在内」という語を講談社の『中日辞典』で引くと「含める」とあり、学習者は中国語の「在内考慮」を直訳したものとわかる。

CLJは、日中で同形同義の漢字語を事態性名詞にも機能動詞にも用いることが、習得に役立つと同時に、誤用も招いていることが、以上の分析から明らかである。

(3) 項構造

調査用紙の課題文を項構造タイプごとに分類すると、Aタイプは16文、B①は2文、B②は17文、一項構文（自動詞）が2文であった。

タイプ別に分類したそれぞれの課題文の正答数、誤答数を調べた結果、Aの正答数は237、誤答数は691、B①はそれぞれ63、53、B②は300、686、一項構文は32、84だった（表11.10）。

表 11.10 項構造タイプごとの正誤数

項構造タイプ	A	B①	B②	一項構文	計
質問紙の問題数	16	2	17	2	
正答数	237	63	300	32	632
誤答数	691	53	686	84	1514
計	928	116	986	116	2146

一項構文タイプは、藤井・上垣の構文の分類外である上に 2 例しかなく、B①タイプも 2 文と事例が少なかったので省き、A と B②を対象に、項構造タイプと正誤数との間に関連があるかを調べた。A は総回答 928 の中で正答は 237、正答率は 25.5%、B②は総回答 986 の中で正答は 300、正答率は 30.4%だった (表 11.11)。正誤数を従属変数として χ^2 検定を行った結果、 $\chi^2 (1, N=1914)=5.657$ 、 $p^* < .05$ と有意差があり、B②タイプの方が A タイプよりも正答が有意に多かった。

表 11.11 項構造タイプ A と B②の正誤数のクロス集計表

項構造タイプ	A	B②	計
正答	237	300	537
誤答	691	686	1377
計	928	986	1914

当初、主動詞の主語と事態性名詞の主語とが一致するシンプルな A タイプの方が、事態性名詞の主語以外の項と主動詞の主語が一致する B②タイプよりも、習得が容易ではないかと予想された。しかし、結果は反対だった。どうしてこのような結果が生じたのであろうか。

実験材料とした機能動詞結合 (表 11.7) を見てみると、B②タイプの 17 文は全て受動文であるのに対し、A タイプの 16 文は全て能動文 (相互文 1 を含む) であった。受け身構文の場合、主語となるのは動作主ではなく、動作の対象 (受け手) である。したがって、漢語事態性名詞を含む受動文では、その述部を担う事態性名詞の主語以外の項 (対象) が主動詞の主語と一致する B②タイプとなるのである。上記分析方法で挙げた B②タイプの例でいえば、「幼い子供は、親の保護を (受け) ないと、生きていくことができない。」は受け身構文であるので、事態性名詞「保護」の対象「子供」が本文の主語となっている。

漢語事態性名詞を含む受け身構文は、機能動詞に「受」「得」が用いられることが多く、中国語学習者は母語知識を利用することができる。本調査で用いた B②タイプである受け身文 17 のうち、15 文で「受ける」「得る」が正答として期待されていた。「受」「得」などの語は、中国語でも、日本語の漢語事態性名詞と同形同義の語と共に、受け身文で用いられる。そのため、CLJ は受け身文に母語知識を活用できるので、正答が多かったのだと考えられる。

現代中国語の受け身表現は、「被」などの受け身マーカ―を用いたものと、受け身マーカ―を用いないものがある (王 ; 1990、楊 ; 1989、中島 ; 2007、村松 ; 2007、杜 ; 2015)。前者は「被」「叫」「让」のような前置詞を伴う典型的な受け身文で、中島は「被」受け身文と呼んでいる。後者は、「意味上の受け身文」と言われるもので、他動詞表現や自動詞表現があり、村木 (1991) の「迂言的な受動形式」に相当するものも含まれる。この内、「迂

言的な受動形式」に相当するものが本調査の対象としたもので、中国語では、「受」「得」「挨」「帶」などを用いて受動表現を行うものである（中島、2007；68）。

王（1990）は、「受到」「得到」を用いた中国語の「受け身」文とそれに対応する日本語文の例を提示している。

山田老师，受到多数学生尊敬。 山田先生は、多くの学生から尊敬されている。
筹集到的资金，应该得到合理的运用。

集まった資金は、合理的に運用されるべきである。
(pp.132-133 より)

本調査で B②タイプの正答が多かったのは、B②タイプの多くは受け身文¹で、受け身文では日本語と中国語で同じ動詞「受」「得」が用いられるからである。

先述のように、本調査で用いた機能動詞結合は、BCCWJ で使用頻度が最も高かったものの中から抽出した。したがって、日本語の機能動詞結合の受け身表現では、機能動詞に「受」「得」が用いられることが多く、受け身文では、本調査の課題文に限らず、CLJ は母語知識を活用しやすい²と一般的化することができる。

さらに、「受ける」「得る」を動詞とする機能動詞結合は、受け身表現の中だけでなく日本語の機能動詞結合総体の中でも、多くを占めると考えられる。本実験の材料とした国研の BCCWJ から抽出した 37 の機能動詞結合を構成する機能動詞の中で、「受ける」は 10 結合、「得る」は 5 結合と多い順に一番目と二番目を占めている（表 11.7）が、これは大竹（2005）の調査結果と一致する。

大竹は、自然言語処理の立場から、毎日新聞の 91 年 CD-ROM 版を構造解析し、22,939 件の機能動詞結合候補を抽出し、そこで用いられている機能動詞の使用頻度が高かったものの上位 10 種を報告している（表 11.12）。大竹の調査では「する」の頻度が最も高かったが、本研究の実験対象に入っておらず、また「する」は特殊な機能動詞であるので、ここでは考察外とする。次は、「受ける（うける）」で、3739 と、支援動詞の中で抜群の高頻度を示している。3 番目は、「行う（おこなう）」であるが、これはスル動詞同様、実質的な意味が希薄で、広範囲の事態性名詞と結びつくので、特別である³。次に続くのが「得る（える）」で頻度 1087 だった。

なお、大竹は「機能動詞結合の換言」を研究テーマとしているが、「連絡を受ける」を「連絡される」と交代可能かどうかをあげ、「これらの受動態を表現するために、機能動詞結合の形式を取らざるを得なかった（p.339）」とし、「動詞によっては、受動態を構成する手段として機能動詞結合を好んで用いるものも（p.340）」あると述べている。

¹ B②タイプで、受動構文でないものとして、次のような例がある。

例) ・私は、課長から外出の許可を取った。 ・彼は、部長から新企画の了承を取った

² ただし、受動態が能動態より習得が容易であるのは、あくまでも漢語事態性名詞を述部を含む機能動詞結合構文の受け身であって、日本語学習における受動態一般が、能動態より習得しやすいということではない。

³ 国立国語研究所（1997）によると、「行う」は「する」と同様、「代動詞的な働きをする（p.5）」

表 11.12 機能動詞結合候補内の動詞上位 10 種とその頻度

する	4854	とる	558
		取る	286
受ける	3692	与える	812
うける	47	あたえる	2
行う	2169	持つ	707
おこなう	1	もつ	107
得る	1085	出す	806
える	2	だす	4
出る	974	かける	507
でる	23	掛ける	7

大竹 (2005 ; 339)

以上から、日本語の機能動詞結合で用いられる機能動詞は、「受」「得」の漢字を含むものが大きな割合を占めるが、「受」「得」を用いた機能動詞結合は、対応する中国語の名詞と動詞のペアと同形同義であるものが多く、CLJ の機能動詞結合習得に非常に有利な環境を与えている。

漢語事態性名詞を含む受け身構文は、B②タイプなので、B②の正答が多かったのである。本調査で課題文に用いた事例が、たまたま B②タイプは受動文で、Aタイプは全て能動文であったということも考えられる。しかし、本稿の調査では、コーパスの中で出現頻度の高い機能動詞結合を上位から順に、調査材料として用いている。したがって、本稿の調査の結果は日本語一般に当てはまるので、日本語でよく用いられる頻度の高い機能動詞結合の場合、B②タイプは受動文、Aタイプは能動文のものが多く考えられる。

以上をまとめると、中国語を母語とする日本語学習者の場合、漢語事態性名詞を含む機能動詞構文がどのような項構造を持つかが習得に影響を与え、B②タイプの項構造を持つ機能動詞構文は、Aタイプの項構造を持つ機能動詞構文よりも習得が促進される。それは、B②タイプの項構造を持つ機能動詞構文は、受動の意味を持つものが多く、日中で同じ動詞「受」「得」が用いられているからである。したがって、項構造の違いによる習得の違いは、母語の名詞と動詞の組み合わせとの類似性によるものに帰着される。

今回の実験では、中国語を母語とする学習者だったので、日中の受け身構文が同一の項構造を持ち、かつ同形同義の名詞と動詞の組み合わせであったことから、B②タイプの正用が多かった。しかし、非漢字学習者で実験を行った場合には、漢字の手がかりがないので、よりシンプルな形のAタイプの方が正解が多いという反対の結果になる可能性もある。今後の課題としたい。

(4) 結合する機能動詞の多寡 (表 11.13)

ここでは、「BCCWJ 内複 V 結合名詞」を対象に、事態性名詞に結合可能な機能動詞が多いか少ないかが習得に影響を与えるかを分析した。実験で用いた質問紙には 37 の問題があり、その内、多くの機能動詞と結合する「BCCWJ 内多 V 結合名詞」の問題は 11 問、結合する機能動詞数が中程度の「BCCWJ 内中 V 結合名詞」の問題は 12 問、結合する機能動詞があまり多くない「BCCWJ 内少 V 結合名詞」の問題は 14 問だった。

多 V 結合名詞群の正答は 172、誤答は 466 で、回答数に占める正答数の割合は 27.0% だった。中 V 結合名詞群の正答は 231、誤答は 465 で正答率は 33.2%、少 V 結合名詞群の正答は 229、誤答は 583 で正答率は 28.2% だった。正誤数を従属変数として χ^2 検定を行った結果、 $\chi^2 (2, N=2146)=7.199$ $p^* < .05$ で有意差があった。

残差分析を行ったところ、中 V 結合名詞群である場合は正答数が多くなるが、多 V 結合と少 V 結合では、正答数との関連はなかった。

表 11.13 BCCWJ 内複 V 結合名詞の正誤数

	多 V 結合	中 V 結合	少 V 結合	計
正答	172	231	229	632
誤答	466	465	583	1514
計	638	696	812	2146

$p^* < .05$

◆ 分析結果の下位分析

これまで、頻度、L1 類似性、項構造、結びつく動詞の多寡の 4 つの要因それぞれについて、機能動詞結合の習得に関わりがあるかどうかを調べてきた。しかし、それぞれの要因は相互にどのような関係にあるのだろうか。

機能動詞結合の習得に大きな影響を及ぼすと考えられるのは、頻度であるが、本実験で実験材料とした機能動詞結合はすべて高頻度のもので、高頻度内部での頻度の違いが習得に影響を与えることは確かめられたが、高頻度のものと低頻度のものとが習得に与える影響については、調べていない。また、項構造に関しては、結びつく機能動詞が日中で同形同義であることが習得を促す要因であったことから、これは母語との類似性に帰された。したがって、機能動詞結合の習得に影響を与える要因として、本実験で明らかにしたのは、母語 (L1) との類似性及び事態性名詞に結びつきうる機能動詞の多寡 (以下、「機能動詞の多寡」) の 2 つであった。両者のどちらが、機能動詞結合の習得により多く貢献しているかを見るために、L1 類似性と機能動詞の多寡それぞれの正誤数との相関を調べた。

L1 類似性の相関係数 φ^4 は .087 ($p^{**} < .001$) であるのに対し、機能動詞の多寡の相関係数 φ は .057 ($p^{**} < .01$) で、L1 類似性の方が正誤数との相関が強かった。したが

⁴ φ : 2×2 クロス集計表の相関係数

って、事態性名詞に結びつく機能動詞が多いか少ないかに比べ、母語の中国語の名詞と動詞の組み合わせが日本語の機能動詞結合と類似しているかどうかのほうが、習得に影響を及ぼしていることになる。これは、先行研究 3.2.4.3 で紹介した Nesselhauhf (2003) と同じ結果である。Nesselhauhf は、英語学習者のエッセイで [動詞-名詞] コロケーション産出に制約程度が与える影響を調査したが、その結果、制約程度が与える影響に比べ、学習者の母語の類似性の方が適切なコロケーション産出にはるかに大きな影響を与えていると述べている。

しかし、本実験では、L1 類似性と機能動詞の多寡に関し、同じ材料で分析を行ったので、L1 類似性及び機能動詞の多寡が交互作用を起こし、結果に影響を与えている可能性がある。そこで、エラボレーションを行って、交互作用の有無を検証した。

なお、機能動詞の多寡の分析で、多 V 結合と少 V 結合は、いずれも残差分析で正誤数との関連が見られなかったため、以下では、両者をまとめて「多少 V 結合」として、分析を行う。

表 11.9 は、L1 類似性別に正誤数との関連を見たクロス集計表を再掲したものである。表 11.14 は、その表 11.9 のクロス集計表を複 V 結合群で統制して 2 つに分割した下位表で、2 つの周辺度数を加えると、元の表 11.9 の各度数と一致する。

中 V 結合で統制した下位分析では、 $\phi = .249$ で、S 結合か DN 結合かということと、正誤数とで有意な関係がみられた。しかし、多少 V 結合で統制した下位分析では、 $\phi = -.018$ で、正誤数との有意な関係はみられなかった。

中 V 結合で統制した下位分析と多少 V 結合で統制した下位分析とで正誤数との関係が異なっていたことから、L1 類似性と複 V 結合は交互作用を起こしていることが分かった。下位分析する前の表 11.9 の L1 類似性の相関係数 ϕ は .087 であるが、中 V 結合で統制した後では $\phi = .249$ となったことから、S 結合でかつ中 V 結合である機能動詞結合は習得がやさしい。しかし、S 結合でかつ多少 V 結合である機能動詞結合では、 $\phi = -.018$ となり、S 結合の影響がマイナスされてしまう。

L1 類似性と機能動詞結合の習得との関連は、 $\phi = .087$ とあまり高くないように見えるが、それは他の要因と交互作用を起こしているため、実際はそれよりも高いと考えられる。

表 11.9 (再掲) L1 「機能動詞結合」との類似性別正誤数

	S 結合	DN 結合	計
正答	298 (34.3%)	334 (26.2%)	632 (29.5%)
誤答	572 (65.7%)	942 (73.8%)	1514 (70.5%)
計	870 (100%)	1276 (100%)	2146 (100%)

$$\phi = .087 \quad p^{**} < .001$$

表 11.14 複V結合群で統制した L1 類似性別クロス集計表：(表 11.9) の下位分析表

		L1 類似性		
		S 結合	DN 結合	計
中 V 結合	正答	175 (43.1%)	56 (19.3%)	231 (33.2%)
	誤答	231 (56.9%)	234 (80.7%)	465 (66.8%)
	計	406 (100%)	290 (100%)	696 (100%)
$\phi = .249$				
$p^{**} < .001$				
多少 V 結合	正答	123 (26.5%)	278 (28.2%)	401 (27.7%)
	誤答	341 (73.5%)	708 (71.8%)	104 (72.3%)
	計	464 (100%)	986 (100%)	1450 (100%)
$\phi = -.018$				
<i>n.s.</i>				

11.4.2.1.3 習得が容易な結合、困難な結合

以上の結果をまとめると、機能動詞結合の頻度、日本語と中国語の名詞と動詞の結びつきの類似性、項構造、及び事態性名詞に結びつきうる機能動詞数が多いか少ないかというすべての分析項目が CLJ の習得に関わっていた (表 11.15)。

頻度では、調査材料が高頻度のものだけだったので、低頻度のものと高頻度のものとの関連は明らかにすることはできなかったが、高頻度内で相対的に頻度の高いものは相対的に低いものよりも、習得が容易であることがわかり、頻度が習得に影響を与えていることを確かめることができた。

母語との類似性では、日本語の機能動詞結合と中国語の名詞・動詞の結びつきとが類似している S 結合は、中国語では当該名詞に日本語とは異なった動詞を結びつける D 結合、及び、中国語の文中では当該名詞が単独で使用される N 結合よりも習得が容易であった。項構造に関しては、非主語一致型の B②タイプの構文の方が、主語一致型の A タイプのものよりも、習得が促進されていた。事態性名詞に結びつく機能動詞の多寡に関しては、結びつく動詞の数が中程度のものが、多くの動詞と結びつくものや反対に少しの動詞としか結びつかないものに比べ、習得が進んでいた。

ただし、項構造に関しては、結びつけられる機能動詞が日中で同形同義であることが要因であるので、これは母語との類似性に帰された。したがって、中国語母語話者の機能動詞結合習得に関わる要因として本研究で明らかにすることができたのは、頻度、母語の名詞と動詞の類似性、結びつく機能動詞の多寡の 3 つである。L1 類似性、結びつく機能動詞の多寡の 2 つを比べると、前者の L1 類似性の方が後者の機能動詞の多寡よりも習得に与える影響が大きかった。頻度に関しては、高頻度のものしか調査していなかったため、L1 類似性、結びつく機能動詞の多寡と比べることはできなかった。

要因間の関わりを見ると、「S 結合+中 V 結合」であるものは習得が容易だが、S 結合であるものが「多/少 V 結合」であると S 結合の影響がマイナスになる。

母語の中国語の名詞と動詞の結びつきと日本語の機能動詞結合との類似性は、単に語彙レベルだけではなく、文構成、ヴォイス、項構造にまで関わっていた。このように、日本

語と中国語の類似性が機能動詞結合の習得促進に大きく関わっていることから、中国語を母語とする日本語学習者は、非漢字学習者と比べ、日本語習得において圧倒的に有利であることが、作文調査だけでなく、実験でも明らかになった。

表 11.15 機能動詞結合の習得に関わる属性分析の結果まとめ

	属性	調査結果	
		有意差	正答率
1	頻度	p^{**}	高頻度①>高頻度②>高頻度③
2	L1「機能動詞結合」との類似性	p^{**}	S結合>DN結合
3	項構造	p^*	B②タイプ>Aタイプ (非主語一致型>主語一致型)
4	結びつく動詞の多寡	p^*	中V結合 > 多V結合 ≒ 少V結合

11.4.2.2 RQII - ii 動詞の意味の役割

右の表は、産出実験の結果を正答数の多い順に並べたものである。実験に用いた機能動詞結合に結びつけられた動詞で最も多いのは「受ける」で10あった。

実験に用いた調査材料の説明(11.3.1)で述べたように、用いた機能動詞結合はBCCWJで出現した機能動詞結合の中から出現頻度の高いものを上位から順に選んだ。したがって、実験で用いた機能動詞結合の中に含まれた動詞の中で「受ける」が多かったのは、データ元としたBCCWJ全体の中に含まれる機能動詞の中で「受ける」の出現頻度が上位を占めているからである。

右の表で太字のものが動詞に「受ける」を持つ機能動詞結合である。それを見ると、同じ動詞「受ける」を持つ機能動詞結合でも「処分を受ける」「攻撃を受ける」「影響を受ける」などの正答数は30以上あり正答数が多いのに、「説明を受ける」の正答数は5しかないなど、ばらつきがある。なぜ、このような結果が出るのだろうか。

河村(2017)は、台湾からの留学生を対象に、日中同形語18語と日本語の授受動詞とのコロケーションについて正誤判断テストを行った。動詞「受ける」の結果だけを、正答率が高い順に抜き出すと次のようになる。

治療を受ける 83%

訓練を受ける 75%

迫害を受ける 75%

命令を受ける 71%

援助を受ける 63%

干渉を受ける 38%

印象を受ける 21%

説明を受ける 21%

(河村、p.38の表による)

表 11.16 正答数順機能動詞結合

	機能動詞結合	正答数
1	処分を受ける	46
2	迷惑をかける	46
3	許可を得る	45
4	攻撃を受ける	34
5	計画をたてる	33
6	影響を受ける	30
7	電話をかける	30
8	影響を与える	25
9	連絡をとる	25
10	訓練を受ける	24
11	評価を受ける	24
12	結論が出る	22
13	刺激を与える	21
14	結論を出す	21
15	負担をかける	17
16	保護を受ける	16
17	相談を受ける	15
18	生活を送る	15
19	食事をとる	14
20	考慮に入れる	12
21	報告を受ける	11
22	契約を結ぶ	11
23	承認を受ける	10
24	支持を得る	10
25	影響が出る	10
26	同意を得る	9
27	影響を及ぼす	7
28	注目を集める	6
29	協力を得る	6
30	措置をとる	6
31	指揮をとる	6
32	注意を払う	6
33	説明を受ける	5
34	理解を得る	5
35	行動を起こす	5
36	注目を浴びる	4
37	電話を入れる	0

やはり、同じ「受ける」という動詞と共起しても事態性名詞によって正答率にばらつきが見られる。本調査と重なるのは、「訓練を受ける」と「説明を受ける」であるが、「訓練を受ける」の正答率が高いのに対し、「説明を受ける」の正答は著しく低く、河村と本調査で共通点が見られる。

以下では、日本語の「受ける」と中国語の「受」の多義性を分析し対照する中で、同じ「受ける」を動詞とする機能動詞結合になぜ難易の差が出るのかを探り、動詞が機能動詞結合習得に与える影響を考察する。

《日中での名詞と動詞の組み合わせの類似性》

同じ機能動詞「受ける」を用いた機能動詞結合なのに、実験で正答数にばらつきが見られた理由を探るため、実験で用いられた機能動詞と L1（中国語）の名詞と動詞の組み合わせとの類似性を調べた。

11.4.2.1.1 で述べた名詞と動詞の組み合わせにおける日本語と L1 の類似性による S、D、N の機能動詞結合の 3 分類を用いて、「受ける」を機能動詞とする結合にあてはめたものが表 11.17 である。

すると、上位 6 つまでが S 結合であり、中国語の L1 知識を利用できるものが正答に結びついており、RQII-i と同じ結果を示している。以下で、実験で使用した機能動詞結合に沿って具体的にみていきたい。

「攻撃を受ける」は中国語で「受到攻击」、「影響を受ける」は「受影响」となり、中国語と日本語で同じ「受」が用いられている。この例のように S 結合では「受/受到」が中国語の事態性名詞と共起し、L1 知識をそのまま利用できる。

例) ・ 计算机受到了病毒的攻击

・ 许多人都深受他的影响

コンピューターがウイルスの攻撃を受ける。

多くの人が彼から深い影響を受けた。

(講談社「日中辞典」; 下線筆者)

N 結合を見ると、日中で同形同義の事態性名詞「説明」について、中国語の授受動詞に調べた河村 (2017) が次のように述べている。

「説明」については、中国語では「给/给予」コロケーションのみで「受説明」とはいえない。「先生から説明を受ける」という日本語は中国語に直訳できず、「先生が私に説明をあげる/くれる」と表現することになる。」 (p.41)

表 11.17 日中類似性タイプ別

実験で用いた機能動詞結合

	正答数	結合
処分を受ける	46	S
攻撃を受ける	34	S
影響を受ける	30	S
評価を受ける	24	S
訓練を受ける	24	S
保護を受ける	16	S
相談を受ける	15	D
報告を受ける	11	D
承認を受ける	10	D
説明を受ける	5	N

D 結合¹には「報告を受ける」と「承認を受ける」があり、『中央研究所現代漢語語料庫』で事例を検索した。そこでは、「報告」と「受」が共起する例は見られず、「聴」と共起する例がいくつかあった。「聽了報告」は日本語で「報告を聞く」となり、これが日本語の「報告を受ける」に該当すると思われる。

例) 省長宋楚瑜在聽了報告後指出, . . .

省長の宋楚瑜が報告を聞いた後で指摘し,

(『中央研究所現代漢語語料庫』; 筆者翻訳&下線)

「承認を受ける」の場合も、「受」が共起する例は見られず、「得/得到承認」(「承認を得る」という事例が『漢語語料庫』で多数見られ、これが日本語で「承認を受ける」に該当すると思われる。「日中辞典」にも次の事例があった。

例) 多年的努力终于得到了社会的承认 長年の努力がついに社会的承認を得た

(講談社「日中辞典」; 筆者下線)

以上をまとめると、S 結合では日本語の「受ける」と同じ漢字「受」が中国語で共起するため、L1 知識を活用できるので正答が多いが、D/N 結合では「受ける」と同じ漢字「受」が中国語で共起しないため、L1 知識を活用できず習得が困難であるという RQII-i の結果を具体的な意味に沿って確認した。

表 11.17 に示した産出実験の結果を見ると、同じ機能動詞「受ける」と共起しているにも関わらず、正答が多いものもあれば著しく少ないものもあり、ばらつきが見られた。正答数が多いか少ないかには、S 結合か否かというだけで、動詞「受ける」の意味は関わっていないのだろうか。あるいは多義語「受ける」の特定の意味によって、S 結合か、D、N 結合かに分かれるのだろうか。

Altenberg & Granger (2001) は、高頻度動詞は多義であることが多く、上級学習者でも習得に困難があるとして、MAKE の異なった意味用法がどのように使用されているかを調べた (3.2.4.2 参照)。Altenberg & Granger にならい、産出実験で用いた機能動詞結合「受ける」の意味を分析してみた (表 11.18 参照)。

まず、辞書で動詞「受ける」にはどのような意味があるのかを調べた。『大辞林』『広辞苑』などいくつかの辞書に当たったが、それらのカテゴリーでは調査対象である 10 の機能動詞結合の「受ける」の意味をうまく分類することができなかった。『新明解国語辞典』は、「受ける」の意味を他動詞用法と、自動詞用法とに分けて記載しており、比較的、調査対象の 10 の機能動詞結合の「受ける」の意味を割り当てることができたので、『新明解国語辞典』を用いて意味分析を行った。『新明解国語辞典』では、「受ける」は次のように記載されている。

¹ 「相談を受ける」の正解が少なかったのは、日本語の「相談」は、中国語では「商量/諮詢」となり、日中で同形語ではないためと考えられる。

[他動詞用法]

- ① [他から向かって来るもの、出されたものを] 取 (って収め) る。
 例) 手当 (歓迎・援助) を受ける / 学位を受ける (=与えられる)
- ② 他から向かって来るものに応じられる構えを取る。
 例) 友人から相談を受ける / 注文を受ける (=引き受ける) / 挑戦を受けて立つ / 質問を受ける / 試験 (健康診断) を受ける
- ③ 前の者の影響の下に存在・活動する。 例) 先代の事業を受けて、発展させる
- ④ 他からの働きかけが、そのものに及ぶ。
 例) 影響 (ショック・被害・感化・教え・おしかり) を受ける (=こうむる)
 制約を受ける (=制約される) / 南を受けた (=南に向いた) 部屋
- ⑤ 受け止める。 例) もろ (まとも・真) に受ける
- ⑥ 与えられる。 例) 強烈な印象を受ける (=持つ) / 生を受ける

[自動詞用法]

- ⑦ [芝居などで] 人気 (好評) を得る。
 例) ミーちゃん、ハーちゃんに受けるタレント教授

(『新明解国語辞典』より抜粋)

次の表は、『新明解国語辞典』の分類に沿って、調査対象の10の機能動詞結合の「受ける」の意味を割り当てたものである。

表 11.18 実験で用いた機能動詞「受ける」の意味

	正答数	結合	新明解 「受ける」
処分を受ける	46	s	④他からの働きかけが、そのものに及ぶ
攻撃を受ける	34	s	④他からの働きかけが、そのものに及ぶ
影響を受ける	30	s	④他からの働きかけが、そのものに及ぶ
評価を受ける ²	24	s	① [他から向かって来るもの、出されたものを] 取 (って収め) る ④他からの働きかけがそのものに及ぶ。
訓練を受ける	24	s	②他から向かって来るものに応じられる構えを取る。
保護を受ける ³	16	s	① [他から向かって来るもの、出されたものを] 取 (って収め) る

² 文脈によって、意味分類が異なる。「評価」をされた当人に何も影響がないのなら①「[他から向かって来るもの、出されたものを] 取 (って収め) る」になるが、評価が落第または昇進などの結果に結びついた場合は④に属する。

³ 文脈によって意味区分が異なる。山や海で遭難し保護されたのなら、受け身で、意志性がなく、①「[他から向かって来るもの、出されたものを] 取 (って収め) る」になるが、「生活保護を受ける」のような場合は、申請などによって積極的に受ける側が働きかけるので②「他から向かって来るものに応じられる構えを取る。」に属する。

			②他から向かって来るものに応じられる構えを取る。
相談を受ける	15	D	②他から向かって来るものに応じられる構えを取る。
報告を受ける	11	D	① [他から向かって来るもの、出されたものを] 取 (つて収め) る
承認を受ける	10	D	① [他から向かって来るもの、出されたものを] 取 (つて収め) る
説明を受ける	5	N	① [他から向かって来るもの、出されたものを] 取 (つて収め) る

表からわかることは、正答率が高いものから順に、およそ3層に分かれ、それぞれに日本語の「受ける」の意味区分が振り分けられていることである。即ち、正答数上位を占める「処分」「攻撃」「影響」を事態性名詞に取るS結合の場合、動詞「受ける」の意味は、すべて④の「他からの働きかけが、そのものに及ぶ」である。正答数が中位の「訓練」「保護」「相談」が事態性名詞である場合、「受ける」の意味は、②「他から向かって来るものに応じられる構えを取る」で、正答数が下位の「報告」「承認」「説明」の場合、「受ける」の意味は、①「[他から向かって来るもの、出されたものを] 取 (つて収め) る」となっている。

正答数から見る限りでは、「VN+を+受ける」構文では、「受ける」の意味が④で、動作を受ける者が、自分の意志に関係なく、他からの働きかけをこうむる場合には、習得が進んでいる。しかし、「受ける」の意味が②で他から向けられた行為などに積極的に対処する場合は、習得がそれほど進んでいるとは言えない。そして、「受ける」の意味が①で、差し出されたものを受け取る場合には、学習者は動詞に「受ける」をほとんど結びつけることがなく、習得が遅れている。

事例が少なく一般化できないが、本実験の結果では、中国語で「[受/受到]+事態性名詞」で、「処分」「攻撃」「影響」など動作を受ける側に意志性がなく、一方的に他から働きかけがある場合には、日本語と中国語で形式だけでなく意味も共通しているので、L1知識を利用して日本語文で「受ける」を用いればよい。

しかし、「訓練」「試験」「手術」など、②「他から向かって来るものに応じられる構えを取る」場合で、動作の受け手が意志的に外からの行為や働きかけに応じる時にも、日本語では「受ける」が用いられると認識していない学習者が多いと思われる。

「報告」「承認」「説明」など、①「[他から向かって来るもの、出されたものを] 取 (つて収め) る」という意味を表す場合、動作者の「報告」「承認」「説明」によって受動者は変化を受けず、中国語で「受」と共には用いられないので、正答が少なかったのではないだろうか。

では、中国語では「受」はどのような意味を持っているのだろうか。講談社の『中日辞典』での「受」の記載は次のようである。

「受」

- 1 受ける、受け取る
例) 受表扬 (表彰される) / 受优待 (優遇される) / 受賄賂 (賄賂を受けとる)
受教育 (教育を受ける)
- 2 (損害を) 被る、(不幸に) 遭う
例) 受批評 (批判される) / 受虐待 (虐待を受ける) / 受約束 (束縛される)
- 3 我慢する、耐え忍ぶ
例) 忍受 (耐え忍ぶ)
- 4 [方] ~するに耐える、・・・に適する
例) 受吃 (口に合う) / 受看 (講談社「中日辞典」より抜粋)

日本語の辞書『新明解国語辞典』での「受ける」の意味カテゴリーと、中国語の辞書『中日辞典』(講談社)での意味カテゴリーの分類との対応を下の表に示した。

表 11.19 日本語「受ける」と中国語「受」の意味の対応

日本語 「受ける」	中国語「受」
① [他から向かって来るもの、出されたものを] 取 (って収め) る	1 受ける、受け取る
②他から向かって来るものに応じられる構えを取る。	
③前の者の影響の下に存在・活動する。	
④他からの働きかけが、そのものに及ぶ。	2 (損害を) 被る、(不幸に) 遭う
⑤受け止める。	
⑥与えられる	
⑦人気 (好評) を得る。	
	3 我慢する、耐え忍ぶ
	4 [方] ~するに耐える、・・・に適する

意味分類は辞書によって異なり、また個々の具体的事例がどの分類に属すのかを厳密に定めることは難しい(「評価を受ける」の“注“参照)。多義語の意味区分、分類は絶対的なものではない。したがって、表 11.19 のように個別の辞書同士の意味区分を対応させることには無理があるが、日本語の「受ける」と中国語の「受」との大まかな関係は浮かび上がってくる。

この表を見ると、日本語の「受ける」と中国語の「受」では、意味が重なるところもあるが、日本語の独自義、中国語の独自義もあり、ズレも見られる。したがって「受ける」と「受」は **Same** でも **Different** でも **Nothing** でもなく、**Overlap** している。

学習者にこのすべてを教える必要はないが、日本語と中国語の動詞がどのような対応をしているのかの概念を把握しておけば、学習が効率よく進むと思われる。「受ける」の場合は、受動的、受け身的な印象があるが、日本語では「試験を受ける」「授業を受ける」「手術を受ける」など、②「他から向かって来るものに応じられる構えを取る」と、動作の受け手が意志的に外からの行為に応じる意味での「受ける」の使用が多いことは学生に教示する必要がある。

11.4.2.3 まとめ

ここでのリサーチ・クエスチョンは次のようであった。

RQII どのような機能動詞結合が **CLJ** にとって、習得が容易か、または困難か

- i 習得難易に関わる機能動詞結合の属性は何か
- ii 動詞が多義である場合、意味の各側面によって習得が異なるか

機能動詞結合の頻度、日本語と中国語の名詞と動詞の結びつきの類似性、項構造、及び事態性名詞に結びつきうる機能動詞数が多いか少ないかというすべてが **CLJ** の習得に関わっていた。高頻度の結合は低頻度のものより、また、結びつく名詞と動詞の組み合わせが日中で類似しているものの方が異なるものより習得が容易である。項構造に関しては、事態性名詞の主語が主動詞の主語以外の項と一致するタイプの方が、事態性名詞の主語が主動詞の主語と一致するものより、また、事態性名詞に結びつく機能動詞の数は中程度のもののほうが習得が容易である。

しかし、項構造に関しては、結びつけられる機能動詞が日中で同形同義であることが要因であるので、これは母語との類似性に帰された。また、頻度に関しては、本調査では、高頻度のものしか調査していなかったため、どの程度の影響を及ぼしているかは明らかにできなかった。

L1 類似性、結びつく機能動詞の多寡の2つを比べると、前者の **L1** 類似性の方が後者の機能動詞の多寡よりも習得に与える影響が大きかった。**L1** 類似性は、単に語彙レベルだけではなく、文構成、項構造にまで関わっていたことから、母語の中国語の名詞と動詞の結びつきと日本語の機能動詞結合との類似性が、**CLJ** の機能動詞結合の習得に最も大きな影響を及ぼす要因であったと結論される。

また、機能動詞だけを取り上げてみていくと、機能動詞は頻度の高い基本的な動詞で多義語である場合が多く、事態性名詞に多義動詞のどの意味が結びつくかによって、習得が異なることが示唆された。

第 12 章 総括的論議と結論

本稿の研究課題は次のとおりであった。

[研究課題]

- I 中国語を母語とする学習者の場合、日本語能力が上がると共に機能動詞結合の習得も進むのか
- II 機能動詞結合の特殊性は、中国語を母語とする学習者が日本語を学ぶ際に、どのような影響を及ぼしているのか

これまで、作文分析と産出実験によって中国語を母語とする日本語学習者がどのように機能動詞結合を習得しているのか、どこに問題があるのかを見てきた。その結果に基づき、本稿の研究課題について、以下で論議し結論を述べる。

12.1 機能動詞結合の習得と日本語能力

作文及び実験調査では中級 CLJ と上級 CLJ の機能動詞結合の産出を調査分析してきた。ここでは、これまでのデータを用いて総合的に考察し、日本語能力が中級から上級へと上がるにつれて機能動詞結合の習得も進んでいるのかを明らかにしたい。

12.1.1 先行研究での L2 能力と習得との関係

考察に当たり、先行研究ではどのような結果が出ているかを見ていく（表 12.1 参照）。L2 能力によって習得の違いが生ずるかを見た研究で、機能動詞結合を対象としているのは、管見の限り黄（2017）だけである。黄は空所補充テストで誤用を調べ、全体的には日本語習熟度が上がるにつれて誤用が減るが、習熟度と関係がある誤用と関係がない誤用があったという。習熟度と関係がなかった誤用は、「習得したコロケーションから和語動詞を借用してそのまま産出したことによる誤用」（例：*抵抗に買う）と「自他動詞の混同による誤用」（例：*考慮に入る）である。一方、習熟度が上がると減少していた誤用は、「S 語ヲ格名詞と結合する中国語の動詞から漢字の一部を転用したことによる誤用」（例：*成功を取る；取得成功）である。（p.39）

機能動詞結合ではないが「名詞＋動詞」コロケーションを対象とした調査¹で、L2 能力との関係を調査した研究に、劉（2017）、Satake（2015）、Laufer & Waldman（2011）、Nesselhauf（2005）がある。それらの研究では、「名詞＋動詞」コロケーションの習得をはかる指標として、使用頻度（使用延べ数）及び誤用、L1 の影響を取り上げている。

使用頻度（使用延べ数）を取り上げているのは、Satake、劉、Laufer & Waldman、Nesselhauf である。Laufer & Waldman では、「上級学習者のコーパスと、初級、中級の

¹ 機能動詞結合も「名詞＋動詞」コロケーションの一種である。

コーパスとを比べた時にだけ『動詞-名詞』コロケーションの産出に著しい成長が見られた（筆者翻訳；p.664）。」として、「コロケーションの使用における進歩は、遅く不均等である（p.664）。」と述べている。劉でも、同じ結果で、次のように報告している。

コロケーションの使用頻度は、全体から見ると学習者の L2 能力が上がるにつれ、高くなるが、L2 能力の差が大きい下位群と上位群の間にしか有意差が見られず、Laufer & Waldman (2011)と同様の結果である。この結果は、コロケーションの使用頻度が L2 能力とともに増えるが、急速に増えるのではなく、徐々に増えていくということを示している。（p.70）

日本人英語学習者を調査対象とした Satake でも同じような結果で、大学生の使用頻度が中学生、高校生よりも少なく、『動詞-名詞』の組み合わせにおいて『動詞-名詞』コロケーションが占める割合は、学習者の能力レベルとともに増えない（筆者翻訳；p.121）」としている。

誤用の観点から、「名詞+動詞」コロケーションと L2 能力との関連を見たのは、黄、劉、Laufer & Waldman であるが、それぞれの調査で異なった結果を報告している。黄の場合には、「全体的には、（中略）、日本語習熟度が上がるにつれて、誤用が減っていく（p.38）」のに対し、劉では「誤用数は下位群から中位群では増えていき、上位群になるとコロケーションの習得が進んだことにより、大幅に減った（p.71）」。

一方、Laufer & Waldman では、黄、劉とは大きく異なり「上級学習者と中級学習者は初級学習者よりも著しく多くの逸脱したコロケーションを産出した。したがって、能力が上がると共に誤用数が減ることはまったくないばかりでなく、能力と正しいコロケーションとは、反比例する（筆者翻訳；p.663）」という。

使用と逸脱の頻度を調査した Nesselhauf は「習熟度が増すことは、コロケーション使用の増加を導かない。さらに、各群（筆者註：学習歴別）が産出したすべてのコロケーションに対する逸脱コロケーションの割合もまた英語の学習年数とは無関係である（p.235）」と結論している。

Laufer & Waldman は L1 の影響についても調査し、「すべての能力レベルにおいて、L1 の影響はコロケーションの誤用の約半分に見られ、時とともに減少しない。さらに、繰り返される誤用の多くは言語間のもものとみられる。（筆者翻訳；p.665）」と報告している。

表 12.1 「V+N コロケーション」習得と L2 能力との関係を調べた先行研究

	調査対象	方法	分析項目	結果
黄 (2017)	中国語を母語とする日本語学習者	空所補充テスト	誤用	全体的には、日本語習熟度が上がるにつれて、誤用が減っていったが、習熟度と関係あるものもないものがある。
劉 (2017)	韓国語、中国語を母語とする日本語学習者	コーパス	使用頻度	全体的には L2 能力が上がるにつれて高くなるが、下位群と上位群の間にしか有意差は見られなかった。
			誤用	誤用数は下位群から中位群までは増えていき、上位群になると大幅に減る。L2 能力が上がるにつれ、誤用が一時的に増えるが、その後習得が進み、誤用が減っていく。
Satake (2015)	日本人英語学習者	コーパス	すべての「V+N 結合」に占める「V+N コロケーション」の割合	中学 26.7% / 高校 30.8% / 大学 24.2% 学習者の能力レベルと共には、コロケーションの割合は増えない。
Laufer & Waldman (2011)	ヘブライ語とアラビア語を母語とする英語学習者	コーパス	使用頻度	初級、中級レベルと上級とを比べた時にだけ、成長が見られた。上級は初級よりも多くのコロケーションを産出。
			誤用	すべてのレベルで誤用が多く、1/3 を占める。上級と中級は初級よりも著しく多くの誤用を産出。
			誤用に占める L1 の影響	すべてのレベルで、誤用の半分は L1 の影響で、レベルが上がっても減少しない。さらに誤用のうち、頻発するものの大部分は言語間エラー
Nesselhauf (2005)	ドイツ人英語学習者	コーパス	使用 & 逸脱頻度	習熟度とコロケーションの適切使用とは無関係

12.1.2 本調査での機能動詞結合習得と日本語能力との関係

以下では、作文分析で得られた結果と実験で得られた結果をまとめた表 12.2 を参照しながら、両者を比較分析し、CLJ の機能動詞結合の習得と日本語能力との関連を考察していきたい。但し、実験では空所補充問題を用いたので、産出数については、作文分析の結果だけを用いる。

表 12.2 日本語能力別に見た機能動詞結合の習得： 本研究の結果

	作文		実験	
産出数	1 作文平均延べ数 上級 5.6 中級 5.7	上級≒中級 <i>ns.</i>	/	
	1 作文平均異なり数 上級 3.5 中級 2.6	上級>中級 <i>p**</i>		
	異なり数÷延べ数 上級 62.3% 中級 46.0%	上級>中級		
動詞の種類	>産出された機能動詞結合全体の中で支援動詞が占める割合 上級 20.9% 中級 9.8%	上級>中級 <i>p**</i>	>誤答の中で支援動詞が占める割合 N1 68.8% N2 59.1%	N1> N2 <i>p**</i>
正用割合	上級 80.6% 中級 82.1% 全体 81.4%	上級≒中級 <i>ns.</i>	N1 39.5% N2 20.1% 全体 29.5%	N1 > N2
使用状態	>BCCWJ 内複 V 結合 中級は、NS に比べ多様な動詞を使いこなせず、また「自由に」動詞を名詞に結びつけ、誤用が多い。 >和語事態性名詞の使用 NS と比べ、中級は違いが見られないが、上級は過少使用	NS > 中級 NS≒中級 <i>ns.</i> NS>上級 <i>p*</i>	>回答で動詞を書き入れなければならないところに助動詞を書き、また事態性名詞を直接活用などさせていたのは、N2 のみ。	

	▶漢語事態性名詞の使用 NS と比べると、上級も 中級も違いはない。 しかし、上級と中級を比 べると有意差があり、上 級の方が漢語が多い。	NS≒上級 ns. NS≒中級 ns. 上級>中級 <i>p</i> [*]		
誤 用	▶産出された機能動詞結 合全体の中で各誤用タ イプが占める割合 中級 1 非結合語 7.9% 2 文法 6.5% 3 用法 3.3% 4 理由不明 0.5% 上級 1 非結合語 10.6% 2 用法 6.6% 3 文法 2.6% 4 理由不明 0%	▶非結合語 上級≒中級 ns. ▶文法 上級<中級 <i>p</i> ^{**} ▶用法 上級>中級 <i>p</i> [*]	▶全回答内で各誤用タ イプが占める割合 N1 非慣用 21.5% 用法の誤り 25.2% L1 ペア 12.6% N2 非慣用 25.0% 用法の誤り 37.7% L1 ペア 15.6%	▶非慣用 N1< N2 ▶用法 N1< N2 ▶L1 ペア N1< N2
	▶産出された機能動詞結 合全体の中で L1 転移の 誤用が占める割合 中級 5.0% 上級 5.5%	上級≒中級 ns.	▶全誤答内で L1 転移 が占める割合 N1 20.7% N2 19.5% 全体 20.0%	N1≒N2 ns.

12.1.2.1 産出数

調査に用いた作文数は、中級 CLJ₀は 136、上級 CLJ は 49、だった (表 7.1)。その中で用いていた機能動詞結合の延べ数は、中級 CLJ₀が 776、上級 CLJ は 273、1 作文平均延べ数は、中級 5.7、上級 5.6 で有意差はなく、日本語能力が上がっても、作文内で用いる機能動詞結合の数に違いはなかった。使用数については、進歩が遅いとした Satake(2015)、劉 (2017)、Laufer & Waldman (2011) と同じ結果であった。

異なり数を見ると、中級 CLJ₀は 357 で、延べ数に占める異なり数の割合は 46.0%だった。それに対し、上級 CLJ の異なり数は 170、延べ数に占める異なり数の割合は 62.3%だった。中級と上級では異なり数が延べ数に占める割合に有意差があり、日本語能力レベルが上がると共に、CLJ は機能動詞結合を多様に豊かに使用していた。

機能動詞結合使用が、日本語能力レベルが上がると共に豊富になることは、産出された機能動詞結合全体の中で、支援動詞が占める割合にも見られる。作文では、産出された機能動詞結合全体の中で支援動詞が占める割合は、上級 20.9%、中級 9.8%で、著しい有意差

があった。実験では、求められた回答が全て支援動詞のため、正答は支援動詞のみであるにも関わらず、スルで答えた学習者が多かった。誤答を見ると、支援動詞が占める割合は N1 が 68.8%、N2 が 59.1% で有意差があった (表 11.6)。たとえ、該当する機能動詞を知らなくても、N1 は N2 に比べ、単純にスル動詞を用いるのではなく、多くの支援動詞を用いようとしていた。

12.1.2.2 正用割合

作文での正用割合は、上級 80.6%、中級 82.1% で両方とも正用が 80% 以上を占め、有意差は見られなかった (表 7.1)。一方、実験の結果を見ると、作文とは正反対の結果だった。実験全体での正答率は 29.5% で、正誤割合がほぼ逆転していた。また、N1 と N2 では、大きな能力差が見られ、N1 の正答率は 39.5%、N2 は 20.1% で、N1 の正答率は N2 の 2 倍近くになっていた (表 11.3)。

このような違いが出たのは、作文では自信のないものは使用回避ないし言い換えをしたために誤用が少なくなったのであり、また上級は上級の、中級は中級の既習、既知の知識の範囲内で執筆したために能力差が出なかったのだと思われる。したがって、実験での結果が実際の習得状況を表していると考えられるので、正誤割合で見ると範囲では、日本語能力が上がると共に機能動詞結合の習得も進んでいると言える。

本研究は作文と実験では異なった結果になったが、両者を合わせて考察すると、全体的には日本語能力が上がると共に誤用が減っているとする黄、劉の結果とほぼ同じものである。しかし、次の Laufer & Waldman (2011) とは正反対の結果になった。

上級学習者と中級学習者は初級学習者よりも著しく多くの逸脱したコロケーションを産出した。したがって、能力が上がると共に誤用数が減ることはまったくないばかりでなく、能力と正しいコロケーションとは、反比例する。 (筆者翻訳 ; p.663)

Laufer & Waldman は、学習者のエッセイを調査したものであるためこのような結果になったと考えられる。本稿の作文調査でも、用法の誤用割合は上級になると中級よりもかえって増えていた。しかし、後述するようにこれは習得を進めるための発展過程であって、後退を意味するものではない。

12.1.2.3 使用状況

日本語能力が上がると共に、機能動詞結合の使用に違いがあるかを、量的にだけではなく、内容的にも見ていくために、用いる事態性名詞の語種に違いがあるかを比べてみる。

[和語事態性名詞の占める割合]

次の表は、日本語母語話者と、CLJ の作文で用いられた機能動詞結合の中で、和語事態

性名詞のものとそれ以外のものの数を示している。母語話者の用いた機能動詞結合の内、事態性名詞が和語であるものは 11.0%、中級 CLJ_② は 8.1%、上級 CLJ は 4.7% だった。

第 9 章で、事態性名詞の中で和語の占める割合を、中級 CLJ_② と日本語母語話者で比べると有意差は見られなかったが、上級 CLJ (4.7%) と母語話者では有意差があり、上級 CLJ は母語話者に比べ、和語事態性名詞を過少使用していることがわかった。

表 12.3 事態性名詞の中で和語の占める割合 (延べ数)

	語種		計
	和語	その他	
母語話者	17 (11.0%)	138 (89.0%)	155 (100%)
中級 CLJ _②	10 (8.1%)	113 (91.9%)	123 (100%)
上級 CLJ	9 (4.7%)	182 (95.3%)	191 (100%)
計	36	433	469 (100%)

さらに中級 CLJ_② と上級 CLJ が機能動詞結合の中で、和語事態性名詞が占める割合に違いがあるかを分析したが、 $X^2 (1, N=314) = 1.538, p > .05$ で違いはなかった。

[漢語事態性名詞の占める割合]

次に、事態性名詞に漢語を用いたものを調べた。母語話者では、使用された漢語事態性名詞は 136、それ以外の名詞は 19、中級 CLJ_② では、漢語が 103、その他は 20、上級 CLJ は漢語が 174、その他 17 だった (表 12.4)。

表 12.4 事態性名詞の中で漢語の占める割合 (延べ数)

	語種		計
	漢語	その他	
母語話者	136 (87.7%)	19	155 (100%)
中級 CLJ _②	103 (83.7%)	20	123 (100%)
上級 CLJ	174 (91.1%)	17	191 (100%)
計	413	46	469 (100%)

用いられた機能動詞結合の中で事態性名詞が漢語のものとそれ以外のものが占める割合に、母語話者と中級 CLJ_② で違いがあるかを見るために、「2つの母比率の差の検定」を行った。その結果、 $X^2 (1, N=278) = .911, p > .05$ で、有意差はなかった (表 12.5)。

表 12.5 事態性名詞の中で漢語の占める割合（延べ数） 母語話者 vs. 中級

	漢語	その他	計
母語話者	136 (87.7%)	19	155 (100%)
中級 CLJ _②	103 (83.7%)	20	123 (100%)
計	239	39	278 (100%)

また、事態性名詞が漢語のものとその他の名詞が占める割合を、上級 CLJ と母語話者で比較分析すると、 $X^2 (1, N=346) = 1.035$ 、 $p > .05$ で、こちらにも有意差はなかった²（表 12.6）。

表 12.6 事態性名詞の中で漢語の占める割合（延べ数） 母語話者 vs. 上級

	漢語	その他	
母語話者	136 (87.7%)	19	155 (100%)
上級 CLJ	174 (91.1%)	17	191 (100%)
	310	36	346 (100%)

さらに、中級 CLJ_②と上級 CLJ の事態性名詞が漢語のものとその他の名詞が占める割合を分析した。すると、 $X^2 (1, N=314) = 3.899$ 、 $p < .05$ で、中級 CLJ_②と上級 CLJ には有意差があった（表 12.7）。

表 12.7 事態性名詞の中で漢語の占める割合（延べ数） 中級 vs. 上級

	漢語	その他	
中級 CLJ _②	103 (83.7%)	20	123
上級 CLJ	174 (91.1%)	17	191
	310	36	346

以上の結果を、図 12.1 で表した。上級になり日本語能力が上がっても、和語を事態性名詞とする機能動詞結合の使用に中級との有意差は見られない。しかし、和語事態性名詞の使用割合を日本語母語話者と比較すると、上級にだけ過少使用が見られたことから、上級になると和語事態性名詞の使用が減っていく傾向がある。そして、事態性名詞が漢語の機

² この結果は、上級 CLJ の漢語事態性名詞の過剰使用に言及した 9 章と食い違うようだが、9 章では誤用とは必ずしも言えないが、意味的、文脈的に過剰使用である点を問題にしたが、ここでは数量的に取り上げている。

能動詞結合とその他の名詞のものが占める割合では、中級 CLJ^②と上級 CLJ とで有意差があったことから、日本語能力が上がると共に漢語事態性名詞の使用が増えていることがわかる。

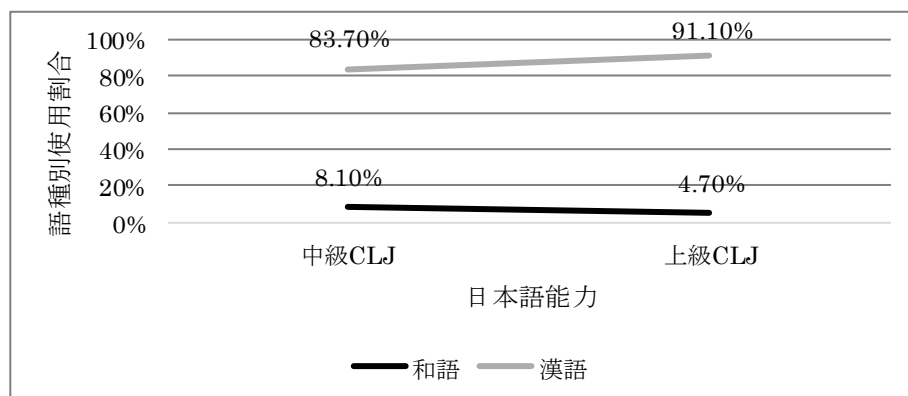


図 12-1 上級対中級 事態性名詞の和語・漢語別使用割合

初級では日常会話で使われる語彙が学習対象であるので和語が多いのに対し、上級になると新聞記事や科学的読み物などを教材にするので漢語の語彙学習が増えてくる。また、日本語能力が上がると共に、多くの機能動詞結合を用い、豊かに日本語を表現しようとして L1 知識に頼るようになるためもあり、上級になると漢語事態性名詞の使用が増える。

12.1.2.4 誤用

日本語能力の違いによって、誤用タイプにも違いが見られるかを見ていく。

<作文分析の結果>

まず、作文では産出された機能動詞結合全体の中で各誤用タイプが占める割合は、中級 CLJ^①では、非結合語が最も多く 7.9%、次が文法の誤り 6.5%、用法の誤用は 3.3%、理由不明 0.5%で、誤用は全体で 18.3%、正用は 81.7%だった。上級 CLJ でも一番多かった誤用は非結合語で 10.6%、用法の誤用 6.6%、文法の誤り 2.6%、理由不明は 0%で、誤用は全体で 19.8%、正用は 80.2%だった。図 12.2 は、中級、上級ごとに正用と誤用タイプが占める割合をグラフに示したものである。

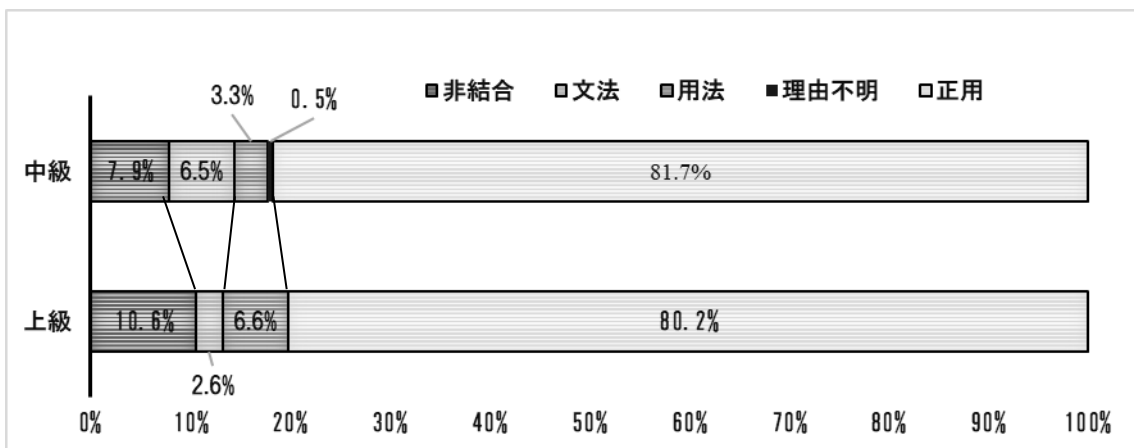


図 12.2 作文での正用&誤用タイプの割合

7.4.2 での統計分析の結果、作文の中で非結合語が占める比率に上級と中級では有意差が認められなかった。一方、文法の誤りが占める割合には、有意差が認められ、上級は中級より著しく少なくなっていた。用法の誤用が占める比率にも有意差が認められたが、用法の場合は逆に中級に比べ上級の比率が大きかった。

表 7.16 上級と中級の誤用タイプごとの比較 (再掲)

誤用タイプ	総機能動詞結合に占める誤用割合	
非結合語	上級＝中級	$p > 0.5$
文法	上級 < 中級	** $p < 0.1$
用法の誤り	上級 > 中級	* $p < 0.5$

<実験の結果>

実験では空所補充問題を用い、文中の事態性名詞と結びつく適切な動詞を書き入れても

らった。全回答内で各誤答タイプが占める割合はN2では、非慣用が25.0%、用法の誤り37.7%、L1ペア15.6%だった。一方、N1では、非慣用の誤りが21.5%、用法の誤り25.2%、L1ペア12.6%だった。図12.3に、N1、N2ごとの正答と誤答タイプが占める割合をグラフに示した。

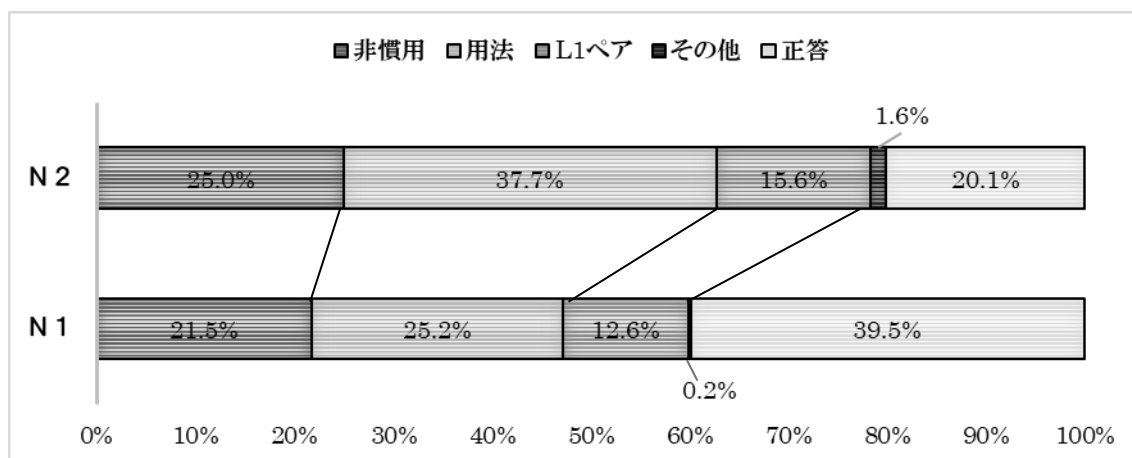


図 12.3 実験での正答&誤答タイプの占める割合

実験結果を表した図12.3でN2とN1を比べると、全回答に誤答全体が占める比率は、N2が79.9%、N1が60.5%と、N1の誤答はN2に比べ全般的に20%近く減っており、日本語能力が上がると共に、誤答が減少している。さらに個別の誤答内容を比べると、非結合語は25%から21.5%に、用法の誤りは37.7%から25.5%に、L1ペアは15.6%から12.6%と、N2からN1へと日本語能力が上がると共に、個々の誤答内容も減少し、機能動詞結合の各側面も習得されている。特に、用法の誤答は、N1はN2より12.5%も少なく、上級になるとかえって中級より用法の誤りが占める割合が増えたという作文の結果と逆になっている。

作文は各自がそれぞれに産出を行っているが、実験は全員が同じ問題に同じ数だけ答えている。作文では、中級でも上級でも誤用割合は20%程度で変わりがなかったが、それは中級は中級の、上級は上級の既習既知の範囲内で機能動詞結合を産出しているためだった。したがって、日本語能力による機能動詞結合の量的蓄積の違いを比べるには、作文ではなく実験を見なければならない。

以上から、日本語能力が上がると共に機能動詞結合の習得も大きく進んでいるにも関わらず、作文での誤用割合が中級CLJと上級CLJで変わらないということは、上級CLJが様々な機能動詞結合を実際の文脈で試み、習得しようとしていることを意味している。

表12.1の先行研究では、黄(2017)のみが本研究と同じ空所補充テストを行っているが、その結果は本研究と同じで、日本語習熟度が上がるにつれて、誤用が減っていた。Laufer & Waldman(2011)では、先述のように、L2能力が上がると共に誤用が増えると反対の報告をしているが、これは彼らの調査が実験ではなく学習者のエッセイを対象としたものであつ

たからだと考えられる。また、L2 能力の進歩段階のどの側面を捉えた調査であるかも影響しているのかもしれない。

ただ、日本語能力が上がると共に機能動詞結合の習得が進んでいると言っても、実験での誤答率は N1 でも 60%以上あり、「V+N」のコロケーションを調査した先行研究同様、上級になっても機能動詞結合の習得は困難で問題がある。

作文分析の結果では、上級になっても誤用割合が中級と変わらないが、その誤用構造が変化していることがわかる。中級では大きな割合を占めていた文法上の誤用が上級になると減少し、代わって上級では用法の誤用の占める割合が増えてくる。また、実験での回答を見ると、動詞を書き入れなければならないところに助動詞を書き、さらに事態性名詞を直接活用などさせていたのは、N2 のみであった。

以上から言えることは、上級と中級では機能動詞結合の中で何を学ぶべきかの学習内容の比重が異なるということである。機能動詞結合に関わる文法事項は日本語能力が上がると共に習得されているので、中級の段階では文法の学習が重要であるが、上級の段階では代わって用法の習得に比重を移すべきである。しかし、上級になっても中級の時と同様に事態性名詞と機能動詞の結合を地道にコツコツと蓄積していかなければならないことには変わりはない。

<L1 の影響>

機能動詞結合を含んだ「名詞+動詞」コロケーションを対象とした先行研究では、L1 転移の誤用を調べた研究が多い (Wang, 2001 ; Nesselhauf, 2003 ; Wang.& Shaw, 2008; Laufer & Waldman, 2011; 黄, 2017)。Laufer & Waldman (2011) はすべてのレベルで、誤用の半分は L1 の影響で、レベルが上がっても減少しないとする。機能動詞結合の習得に及ぼす L1 の影響は、日本語能力のレベルが上がっても違いはないのだろうか。

作文で L1 転移の誤用を見ると、中級 CLJ₀ では 40、上級では 14 だった (7.4.3 参照)。この L1 転移の誤用は、中級の誤用全体の中で 28.0%、作文の中で使用された機能動詞結合全体の中 (延べ数) では、5.2%を占めていた。また上級 CLJ の L1 転移の誤用は、上級の誤用全体の中で 25.9%、使用された機能動詞結合全体の中では、5.1%だった (表 12.8)。したがって、作文では、L1 転移の誤用が占める割合は中級と上級でほぼ変わらなかった。

表 12.8 作文の中で、L1 転移の誤用が占める割合

	誤用全体の中		産出された機能動詞結合全体の中	
中級	40 / 143	28.0%	40 / 776	5.2%
上級	14 / 54	25.9%	14 / 273	5.1%

一方、実験での空所補充テストの結果では、N2 の誤答の内、L1 転移だったのは 173、N1 では 130 だった。この誤答は、N2 では、誤答全体の 19.5%、全回答の 15.6%を占めている。N1 では、誤答全体の 20.7%、全回答の 12.5%である (表 12.9)。

表 12.9 実験で、L1 転移の誤答が占める割合

	誤答全体の中		回答全体の中	
N2	173/887	19.5%	173/1110	15.6%
N1	130/627	20.7%	130/1036	12.5%

誤答全体の中で L1 転移が占める割合は N1 と N2 でほぼ同じだが、回答全体の中で L1 転移が占める割合は N1 と N2 で違いが見られるので 2 つの母比率の差の検定を行ってみた。すると $\chi^2(1, N=2146) = 4.077$ $p^* < .05$ で、有意差が見られ、N1 は N2 よりも L1 転移の誤答が占める割合が減っていた (表 12.10)。

表 12.10 実験回答全体で、L1 転移の誤答が占める割合 クロス集計表

	L1 転移	非 L1 転移	計
N2	173	937	1110
N1	130	906	1036
計	303	1843	2146

以上の作文と実験での結果を合わせて考えると、L1 転移の誤答が占める割合は、中級と上級であまり変化が見られず、上級になると若干減少傾向が見られるということになる。この結果は、L1 の影響による誤用はレベルが上がっても減少しないという Laufer & Waldman の調査とは、少々異なった結果となった。また、Laufer & Waldman では誤用の半分は L1 転移だとされ、本調査の結果よりかなり多い。しかし、本調査では確実に L1 転移だと判断されるものだけを L1 転移としているので、実際にはこの結果より多いと思われる。

12.1.3 L2 能力と機能動詞結合の習得 (研究課題 I 結論)

以上の考察から、「中国語を母語とする日本語学習者の場合、日本語能力の向上と共に機能動詞結合の習得も進むのか」という研究課題 I に対し、本研究では次のように結論する。

日本語能力が上がると共に、CLJ の機能動詞結合の習得は着実に進んでいる。実験で産出された機能動詞結合の正答率は、N1 は N2 の 2 倍近くに上る (図 12.3)。実験では、取る戦略の違いにも進歩が見られた。誤答全体の中で、N1 は N2 に比べ、有意に多くの支援動詞を用い、反対に、N2 は N1 に比べ、有意に多くのスル動詞を用いていた (表 11.6)。N1 と N2 では、事態性名詞に結びつけるべき機能動詞がわからない時に、N2 はスル・ストラテジーをとるのに対し、N1 は安易にスルを用いるのではなく文脈に合った動詞を用いようと模索している。

実験では、文法知識を見ることができなかったが、作文では、上級になると、機能動詞結合に関わる文法的知識もマスターされていたことが明らかになった（図 12.2）。作文で用いられた機能動詞結合の延べ数は、中級と上級で違いはないが、異なり数の占める比率は、上級は中級より有意に高かった。また、作文で産出された機能動詞結合の中で支援動詞が占める割合が、上級は中級よりも有意に高く、日本語能力が上がると共に多様な結合を豊かに使いこなしていおり、実験と同じ結果を示していた。

作文では、上級になると中級よりも、用法の誤用が占める割合が増えていたが、それは習得の後退を意味するのではない。上級学習者の機能動詞結合の蓄積が増え、獲得した結合を実際の日本語の文脈で使おうと試みた結果であり、その結合の使用を学ぶために必要な発展過程である。

「N+V」の使用頻度については、進歩が遅いとした Satake (2015)、劉 (2017)、Laufer & Waldman (2011) と同じ結果であった。しかし、Satake、Laufer & Waldman では延べ数だけで、異なり数は見ていない。Laufer & Waldman の調査も劉の調査もコーパスだけで行っている。本調査でも作文での誤用割合は、中級と上級で変わりがなかったが、実験で強制的に産出を促すと、中級と上級で著しい差が出た。Laufer & Waldman は、「上級学習者と、中級学習者は、初級学習者よりも著しく多くの逸脱コロケーションを産出する。… (中略) …能力とコロケーションの正確さとは反比例する。(p.663、筆者翻訳)」とまで述べているが、Laufer & Waldman も劉も誤用数だけで、誤用の内容までは見ていない。

12.2 機能動詞結合の特殊性が習得に及ぼす影響

本稿の研究課題Ⅱは、日本語学習者の習得に役立てることを目的に、機能動詞結合の持つ特殊な性質が機能動詞結合の習得にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることだった。

研究課題Ⅱ

機能動詞結合の特殊性は、中国語を母語とする学習者が日本語を学ぶ際に、どのような影響を及ぼしているのか

1～11章のこれまでのすべての調査、考察の結果を本章でまとめ、結論とする。

結論を述べる前に、機能動詞結合の産出的知識があるとはどういうことであるかの全体像を提示する。

12.2.1 機能動詞結合の産出知識があるとはどういうことか

機能動詞結合についての知識には、他の L2 語彙知識と同様、理解知識と産出知識があるが、本研究では、産出知識を対象としてきた。本調査の結果から、学習者に機能動詞結合についての産出知識があるとはどういうことかについて、次の様に考える。

機能動詞結合の産出知識には、量的側面と質的側面がある。量的知識には、2つの面がある。1つは、どれだけ多くの異なった事態性名詞と機能動詞の組み合わせを知っているかということであり、もう1つは、ある事態性名詞に複数の機能動詞が結びつく複 V 結合をどのくらい知っているかということである。

一方、機能動詞結合の質的知識があるとは、共起、文法、用法の3つの知識を有することである。

- A 共起：この事態性名詞は、どの機能動詞とともに使わなければならないか
- B 文法：事態性名詞と機能動詞の構成法則についての知識があるか
- C 用法：具体的な事態性名詞と機能動詞の組み合わせ（個々の機能動詞結合）を、その使用制約と意味を踏まえて、文脈に応じた使い分けをすることができるか

A 事態性名詞と機能動詞の共起

「*関心する」「*重視を受ける」「*利益を持つ」などの日本語に存在しない事態性名詞と動詞を組み合わせる誤用は、上級になり日本語能力が向上しても続いていく機能動詞結合習得における大きな問題である。機能動詞結合もコロケーションの問題である限り、膨大な量の事態性名詞と機能動詞の組み合わせを、地道に長い時間をかけて習得していかなければならない。

B 文法

事態性名詞と機能動詞の構成法則についての知識には、次のようなものが含まれる。

- ・この語は機能動詞結合に用いることができるか
即ち、名詞なのか、名詞だとしたら事態性を有するか（事態性名詞か）。
- ・事態性名詞への適切な修飾ができるか
スル動詞結合の場合、事態性名詞に助詞「を」が付いたときは、連体修飾（例；「詳しい説明をする」）と連用修飾（例；「詳しく説明をする」）が、可能である。しかし、助詞「を」なしで直接スルが付いたときには、連用修飾（例；「詳しく説明する」）しかとれない。さらに、「VNをする」と事態性名詞と機能動詞の間に助詞「を」を挟めない事態性名詞が非対格（？）¹の機能動詞結合の場合は、常に連体修飾を取ることはできない。
- ・機能動詞結合のヴォイスを判別し、適切に使用できるか
- ・機能動詞を事態性名詞に接続する際、形態的に適切であるか
機能動詞の欠落（例；「*私は自立です」）や事態性名詞の直接活用（例；「*非難られる」）をしていないか
- ・「を」格の二重使用制約違反を犯していないか
事態性名詞と機能動詞の間に助詞「を」が入った場合、目的語はノ格になる
例) 「*部屋を掃除をする」 「部屋を掃除する」
「部屋の掃除をする」
- ・「を」のつかない機能動詞結合へ「を」を用いていないか 例) 「*蒸発をする」
- ・機能動詞結合の項でないものを、項に取っていないか 例) 「*テニスを練習する」
- ・事態性名詞と機能動詞の間に語句を挿入していないか
例) 「*訓練をよくしなかったら… (略)」

C 用法

機能動詞結合を日本語で用いるためには、ある事態性名詞にはどの機能動詞が結びつくかという単なる形態上の問題だけでなく、その機能動詞結合の意味と使用制約を知らねばならない。その知識が欠けていると、日本語に存在する機能動詞結合を用いたにも関わらず、文脈から考えると非文となる用法上の誤用が生じる。

用法上の知識は、複V結合と深い関係がある。事態性名詞は、複数の機能動詞が結びつき、多様な結合を作り出すのが一般的であるが、それらの結合を文脈に応じて使い分けるためには、各結合間の意味・用法の違いについての知識が必要である。

12.2.2 機能動詞結合の特殊性が習得に及ぼす影響（研究課題Ⅱ 結論）

研究課題Ⅱの機能動詞結合の特殊性が習得に及ぼす影響には、プラスのものとマイナスのものがある。はじめに、プラスの影響について述べ、次にマイナスの影響について述べる。プラスの影響はCLJにとってのものである。マイナスの影響については、はじめに日

¹ 2.3.4.1で述べたように、事態性名詞と機能動詞の間に助詞「を」挿入できるのは、どのような機能動詞結合であるのかについては諸説がある。

本語学習者一般に与える影響について提示し、次に、機能動詞結合の特殊性が CLJ だけに与える影響について提示する。

◆**プラスの影響**： CLJ に対して

CLJ が機能動詞結合を習得する際に、プラスに役立つ機能動詞結合の特徴として、第 1 に、名詞として取り入れた母語からの借用語を、動詞として日本語で用いることを可能にすることが挙げられる。この機能動詞結合の機能を利用して、CLJ は母語の中国語と同形同義の漢語名詞を日本語の文中で動詞としても用いることができ、語彙学習の負担を軽減し、日本語習得に役立てることができる。

第 2 に、機能動詞結合の事態性名詞と機能動詞の組み合わせは、母語の中国語の名詞と動詞のペアに類似したものが多くという特徴がある。機能動詞結合は、語彙のみならず、母語の中国語の名詞と動詞の結びつきまでも、日本語文で利用することを可能にしている。名詞と動詞の結びつきとは、即ち構文であるから、機能動詞結合は文レベルで CLJ の日本語習得を助ける働きをしている。

第 3 に、機能動詞スルがあることにより、事態性名詞と機能動詞の組み合わせに、母語の中国語の名詞と動詞のペアに類似したものがない場合でも、日中同形同義語にスル動詞をつけさえすれば容易に日本語の文中でも中国語の語彙項目を日本語の文中で動詞として用いることができる。さらに、事態性名詞にスルを接続できるかどうかの判別にも、CLJ は母語知識を活用できる。本稿の調査では、日中同形の〈S 語名詞〉が中国語の文中で単独に用いられる場合にスルをつければ 79% の確率で日本語として正しい用法になっていた (8.4.4)。

非漢字学習者の場合、こうした手がかりがないので、二字漢語にスル動詞を接続可能かどうかをひとつひとつ辞書で確認しなければならないが、その辞書の情報さえ確実に信頼できるものはない。

第 4 に、この名詞と動詞の組み合わせにおける日中での類似性は、日本語文でのヴォイス、項構造の判別にも役立つことから (8.4.3、11.4.2.1.2 参照)、文法面でも、CLJ の日本語習得に大きな役割を果たしている。一語動詞「書く」の場合、「書かれる」「書かせる」「書かされる」と活用があり、学習者はその形式を習得するのも困難だが、それを文中で用いる際、何が主語で何が目的語であるのかの判別に非常に困難がある。日本語学習者の作文では、しばしば主語や目的語の割りふりに混乱が見られる。しかし、CLJ の場合は、機能動詞結合で「与える」「受ける」を用い「注意を受ける」「注意を与える」などとすれば、漢字の意味から、「注意する」のは誰であり、「注意される」のは誰であるかを把握するのは容易であり、構文の透明性が高くなる。

◆**マイナスの影響** (表 12.11 参照)

[日本語学習者一般に及ぼす影響]

機能動詞結合の特徴の第 1 は、第一義的な意味は事態性名詞にあり、動詞は「事象名詞を『支持』('support')する役割を果たす (藤井・上垣、2008a ; 943)」ことである。機能動

詞の最も典型的な例である動詞「スル」は、「動詞の構文への意味的寄与が最少であり軽微である（藤井・上垣、2008a；944）」ため、極めて生産性が高く、多くの事態性名詞と結びつく。そのため、学習者は、動詞「スル」は、「空疎」でどんな事態性名詞にでも結びつけて動詞として用いることができる便利な動詞ととらえ、スルと結びつきえない名詞とも安易に結びつけて用いてしまう誤用が生まれる。例) *自家製する／*致死する

また、スルとの結合が可能な事態性名詞の場合でも、「スル」を「空疎」であると捉え、その「VN+スル」をどんな文脈でも用いてしまう。

例) <7-30:再掲> *女性の父母に婚約してもらう (婚約を認めてもらう) ㊦

機能動詞結合の持つ第2の特徴としてイディオム性があり、「本動詞と名詞の組み合わせは自由ではなく、選別性を示す（藤井・上垣、2008b；433）」ほとんどの学習者はこのイディオム性に気づいておらず、学習対象と認識していないために、機能動詞結合の蓄積がされていない。そのため、文を書く、発話するなどで、ある事態性名詞を産出的に用いようとする段になると、結びつけるべき動詞がわからず、使用回避や言い換えをしてしまう。あるいは、意味的に妥当と思われるが非慣用的な動詞を結びつける誤用を犯す（例；*お祈りをあげる／*疲労を受ける）。

スル動詞の場合、多くの二字漢語と結びついてサ変動詞を構成するが、スルと結びつけることができるものとできないものがある。その結びつきは慣用的で、規則性がないので、どの事態性名詞がスルと結合できるかの判別が、学習者には困難である。サ変動詞か否かを記述した辞書もあるが、信頼できるものはない。それも1つの要因となり、先述のようなスルと結びつきえない名詞と結びつけて用いてしまう誤用が生じる。

第3の特徴として、名詞と動詞の結びつきが正しく、日本語に存在する機能動詞結合でも、文中での使用には制約があることが挙げられる。事態性名詞「影響」には、「影響する」「影響を及ぼす」「影響を与える」「影響がある」「影響を残す」など、似通った意味を持つ結合がある。このように1つの事態性名詞には複数の機能動詞が結びつくので、文脈での使い分けが難しい。学習者は類似の機能動詞結合を不適切な文脈で用いて「用法の誤り」を犯してしまう。

例) <6-40；再掲> *一人でたばこを吸ってほかの人を影響しないとほままだ。

(ほかの人に影響を与えないなら自由だ) ㊦

<6-43:再掲> *日本語学科を読みたいですから、私は再び試験しようと思います。

(試験を受けよう) ㊦

機能動詞結合の第一義的な意味は事態性名詞にあると言っても、機能動詞結合は「事態性名詞+機能動詞」で成り立っているので、どの機能動詞が結びつくかで、取る項、ヴォイスが異なる。

事態性名詞が「試験」である上記<6-43>では、機能動詞「する」を取って「試験する」とする場合の主語項は、「先生」でなければならないが、機能動詞が「受ける」の場合の主語項は「私=生徒」となる。

また、6.3.3.3 で述べたように、事態性名詞が「影響」の場合、動作対象となる項が人間活動の主体である場合には機能動詞として「する」を取ることができない。〈6-40〉の場合は、対象項が人であるので、機能動詞は「与える」としなければならない。

第4に、機能動詞結合は、以下で示す特殊な文法を持っている。

①機能動詞結合の構成要素となることのできる名詞は事態性名詞のみである。しかし、事態性名詞であるか否かを構うことなく、機能動詞を結びつけてしまう事例が、学習者に見られる。

例) *素敵なヘア・スタイルする / *笑顔をする

②スル動詞結合の場合、事態性名詞と機能動詞の間に助詞「を」が入った時は連体修飾も連用修飾も可能だが、「を」なしで名詞と動詞が直接結びついた一語動詞の時には連体修飾は取れず、連用修飾となる。学習者は「VN する」と「VN をする」を区別せず、一語動詞「VN する」へ連体修飾してしまうことがある。

例) *きれいな掃除する / *詳しい説明する

したがって、連体修飾する場合には、事態性名詞と機能動詞の間に助詞「を」を挿入する必要がある。しかし、次の③で述べるように、事態性名詞と機能動詞の間に「を」が挿入できない結合があり、その場合は、連体修飾は取れないので注意が必要である。学習者がこの違いを知らないと、「*早い蒸発をする」「*健やかな誕生をする」などの誤用を生じてしまう。

③スル動詞結合では、名詞と動詞の間に助詞「を」を挿入できるものとできないものがある。どのスル動詞結合に「を」が挿入できるのか否かの判別は難しく、学習者の中には名詞と動詞の間に助詞「を」を取れないものにも「を」を挿入してしまうことがある。

例) *発熱をする / *感動をする

④機能動詞結合は結びつきが強いので、「名詞句と動詞の間に他の語句がはいりにくい(村木、1991 ; 231)」。しかし、事態性名詞と動詞の間に語句を挿入してしまう学習者がいる。

例) 〈8-17:再掲〉 *訓練をよくしなかつたら分かる漢字をおぼえていません。㊦

⑤「N の VN をする」構文には「N を VN する」と言い換えられるものもあるが、言い換えられないものもある。「N の VN をする」と助詞「を」を用いて、事態性名詞 VN を名詞のままで用いた場合は、N 部分には修飾語と目的語の両方がとれる。しかし、「VN をする」を「VN する」と言い換え、事態性名詞を「を」抜きでスルと結合させると一語動詞となるので、ヲ格に目的語を要求するようになり、N には、修飾語は取れず、制約が生じる。

例) 照明器具の準備をする ⇔ 照明器具を準備する

春節の準備をする ⇔ *春節を準備する

バドミントンの練習をする ⇔ *バドミントンを練習する

しかし、どの名詞が「N を VN する」の N となることができ、どの名詞がなれないかの判別は、学習者には困難である。また、そもそも「N の VN をする」構文に「N を VN する」と言い換えられるものと言えられないものがあるということ自体に学習者

は気づいておらず、「NをVNする」という形の機能動詞結合の目的語Nに修飾語を用いてしまう誤用が生じる。

- ⑥漢語の事態性名詞には他動詞、自動詞の区別がある。しかし、学習者は自他の判別を誤り、次のような誤用を生ずる。例) *乾燥された枝 / *国が復興させられる
「乾燥」も「復興」もは自他両用であるが、この例の場合には、「乾燥した枝」「国が復興する」と自動詞で用いなければならない。

機能動詞結合の第5の特徴として、機能動詞結合は、事態性名詞の意味さえ分かっているならば、書かれたものを見る、会話の中で聞くなどして、受動的に機能動詞結合に接するぶんには、理解がたやすいことがある。そのため、学習者は機能動詞結合を学習の対象とは気づかず、上級になっても、機能動詞結合を用いて書く、話すなどの産出的知識の蓄積が乏しい。

[CLJ だけに特殊に見られる影響]

中国語を母語とする CLJ だけに見られる影響を引き起こす機能動詞結合の特徴として、第1に、機能動詞結合を構成する事態性名詞に、日中で同形同義の漢語が多いことが挙げられる。それは、母語知識を活用させて習得を促進させる反面、次のような CLJ に特有の誤用を生じる要因ともなる。

- ①母語の漢字語を意味のみならず、形式までもそのまま日本語文に持ち込む。

例) 〈事態性名詞〉 *暢談する
(機能動詞) *重視を受ける

- ②日本語と同形同義の事態性名詞が中国語で動詞である場合、機能動詞を付加せずに直接活用させてしまうことがある。例) *応用られる

- ③日中で同形同義の漢字語の品詞にズレがあるために、事態性名詞を形容詞扱いするなどして、機能動詞を欠如させる誤用が生じる。

例) *私の気持ちは緊張で、怖いです。

- ④「中国語の心理動詞は具体的な使役形などを伴って表現されることが多い(吉永：2011)」ため、日本語文で心理動詞のヴォイスの誤用を生じる。

例) *ほんとに感動されました。
*粘り強い意志に感心された。

- ⑤漢語を事態性名詞とする機能動詞結合を過剰使用し、日本語として不自然な文を作る。

(9.4.3 参照)

第2に、機能動詞結合は、事態性名詞のみならず、名詞と動詞の組み合わせにも日中で共通するものが多いため、それを利用して、CLJ は機能動詞結合の習得を促進させられるが、同時に日本語にない中国語の組み合わせを日本語の文中で用いてしまう危険性がある。

次の例は、国研の対訳付コーパスで日本語作文作成者自身が書いた中国語文を対照したものである。

<8-86 : 再掲>もし規則を作って禁止したら、・・・・・・(後略)

如果真的作了规则禁止他们,・・・・(後略)㊸

<9-15 : 再掲> *人々の身体は仕事の疲労を受けるほかに、・・・・(後略)

人们的身体除了要承受工作的疲劳以外,・・・・(後略)㊸

<8-86>のように、中国語の名詞と動詞の組み合わせをそのまま用いて、「規則を作る」とすれば日本語として正しいこともある。しかし、<9-15>のように中国語の組み合わせを用いて「疲労を受ける」とすると、誤用になってしまう。

第3に四字漢語のほとんどは、機能動詞結合を構成する事態性名詞にはなれないことが、CLJに特有の影響を引き起こしている。野村(1974)の調査では、4字漢語でサ変動詞となるものは、1%しかなく、ほとんどの4字漢語は事態性名詞でもスル動詞結合となることはできない。しかし、CLJの作文等では、中国語を直接持ち込み、「*高度発展する」「*環境汚染をする」などとした誤用がしばしばみられる。

以上の結果を表12.11にまとめた。

表 12.11 機能動詞結合の特殊性が習得に及ぼす影響

	機能動詞結合の特性	習得に与える影響
日 本 語 学 習 者 一 般	【1】第一義的な意味は事態性名詞にあり、動詞は名詞を『支持』('support')する役割を果たす(藤井・上垣;2008a)。	動詞「スル」は、「空疎」なので、学習者は、どんなVNにでも「スル」を結びつけることができると誤ってしまう。 また、「VN+スル」が可能な事態性名詞の場合でも、どんな文脈にでもそれを用いることができると学習者に受け取られ、用法上の誤用を生じる。
	【2】名詞と動詞の結びつきにイディオム性がある。 ・スルと結びついてサ変動詞を構成できるものとできないものがあるが、それには規則性がない。	名詞と動詞の組み合わせが、日本語として意味的に理解可能でも慣用性がないと誤用となるため、誤った名詞と動詞を結びつける「非結合語」を生じる。 その事態性名詞がスルと結合できるかどうかの判別は、学習者には困難。
	【3】類似の機能動詞結合でも、機能動詞によって文中での使用制約が異なる。	学習者は、類似の機能動詞結合を不適切な文脈で使用してしまう。 (「用法」の誤り)
	・1つの事態性名詞に複数の機能動詞が接続する。	文脈による使い分けが困難。

<p>結びつく機能動詞によって、取る項や ヴォイスが異なる。</p>	<p>同じ事態性名詞でも取る項が変われば、 結びつける機能動詞を変えなければなら ないのに、動詞を一律に用いてしまう。</p>
<p>【4】 特殊な文法</p>	
<p>①機能動詞結合の構成要素となること ができる名詞は事態性名詞のみ。</p> <p>②スル動詞結合の場合、事態性名詞と機 能動詞の間に助詞「を」が入った時は連 体修飾も連用修飾も可能だが、「を」な しで名詞と動詞が直接結びついた一語 動詞の時には、連体修飾は取れず、連用 修飾となる。</p> <p>③スル動詞結合では、名詞と動詞の間に 助詞「を」が取れるものと取れないもの がある。</p> <p>④機能動詞結合は結びつきが強いので、 「名詞句と動詞の間に他の語句がはい りにくい (村木 ; 1991)」。</p> <p>⑤「NのVNをする」構文には「Nを VNする」と言い換えられるものもある が、言い換えられないものもある。 「NのVNをする」と助詞「を」を用い て、事態性名詞VNを名詞のままで用い た場合は、N部分には修飾語と目的語の 両方がとれる。しかし、「VNをする」を 「VNする」と言い換え、事態性名詞を 「を」抜きでスルと結合させると一語動 詞となるので、ヲ格に目的語を要求する ようになり、Nには、修飾語は取れず、 制約が生じる。</p> <p>⑥漢語の事態性名詞には他動詞、自動詞 の区別がある。</p>	<p>学習者は事態性名詞ではないものに機能 動詞を結びつけてしまう。</p> <p>学習者は、一語動詞へ連体修飾してしま う。</p> <p>名詞と動詞の間に助詞「を」が取れない スル動詞結合にも「を」を挿入してしま う。</p> <p>事態性名詞と動詞の間に語句を挿入して しまう学習者がいる。</p> <p>「NをVNする」という形の機能動詞結 合の目的語Nに項ではなく修飾語を用い てしまう誤用が生じる。</p> <p>自他の判別を誤った誤用が生ずる。</p>
<p>【5】 文字で見たり耳で聞いたりして 受動的に接する場合、理解がたやすい。</p>	<p>学習者は機能動詞結合を学習の対象とは 気づかないため、書く、話すなどの産出 的知識の習得が進まない。</p>

C L J 特 有	【1】 機能動詞結合を構成する事態性名詞には、日中で同形同義の漢語が多い。	母語知識を活用させて習得を促進させる反面、 CLJ 特有の誤用を引き起こす。 誤用例 ① 母語の漢字語を意味のみならず形式までも、そのまま日本語文に持ち込む。 ② 日本語の事態性名詞が中国語では動詞である時、機能動詞を付加せずに直接活用してしまう。 ③ 日中で品詞にズレがあるために、事態性名詞を形容詞扱いして、機能動詞を欠如させて用いてしまうなどする。 ④ 「中国語の心理動詞は具体的な使役形などを伴って表現されることが多い（吉永：2011）」ため、日本語文で心理動詞のヴォイスの誤用を生じる。 ⑤ 漢語を事態性名詞とする機能動詞結合を過剰使用し、日本語として不自然な文を作る。
	【2】 名詞と動詞の組み合わせが日中で共通するものが多い。	CLJ は母語知識を活用して機能動詞結合の習得を促進させられるが、同時に日本語にない中国語の組み合わせを日本語の文中で用いてしまうことが多い。
	【3】 ほとんどの4字漢語は事態性名詞でもスル動詞結合となることはできない。	中国語を直接持ち込み、「*高度発展する」「*環境汚染をする」などの誤用を生む。

第13章 習得に向けての提言

本調査の結果、CLJは日本語能力が上がると共に機能動詞結合の習得が進んではいるが、産出実験での誤答率はN1でも60%強と、進歩は遅々としている。それは、学習者が機能動詞結合というものに気づきがなく、機能動詞結合を学習対象と認識していないことが主要な要因である。学習者に気づきがないのは、機能動詞結合は、見る、聞くなど受容的に接する場合は理解がたやすいからであり、外からの気づきの促しが必要不可欠である。

外からの気づきを促すのは、教授指導におけるインプット強化であるが、現在の日本語教育には機能動詞結合という観点が皆無である。機能動詞結合の習得研究を進め、教育現場でも気づきを促す指導を行い、各種教材で機能動詞結合を取り扱わなければ、習得は進まない。

以上を踏まえ、本章では機能動詞結合の学習プランと、『機能動詞結合用法辞典』の作成を提言する。

13.1. 機能動詞結合の学習プラン

本研究では中国語を母語とする学習者の機能動詞結合習得促進に向けて、次のようなプランを提言する。このプランは、前章の結論での事項を実際に運用していくためのものである。

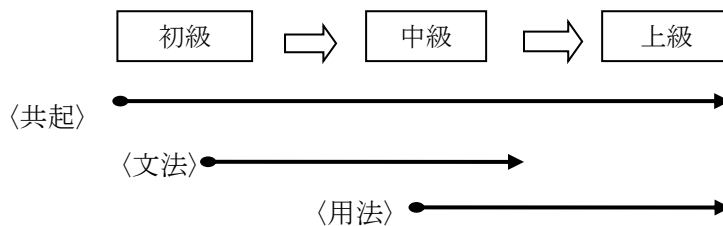


図 13.1 機能動詞結合の学習プラン

<共起の学習>

初級から上級に至るまで、日本語学習の過程で一貫して求められるのは、大量の機能動詞結合をこつこつと地道に蓄積していくことである。事態性名詞と機能動詞の結びつきは、語彙習得と同様、法則性があるわけではないので、膨大な量を個別に長い時間をかけて学んでいかなければならない。しかし、中国語を母語とする学習者は、8.4.4で論じた中国語と日本語の名詞と動詞の組み合わせにおける共通性を利用することができる。中国語を母語とする学習者は、日中の名詞と動詞の組み合わせの異同を念頭に置きつつ、日中での共通性を有効に活用することによって習得促進を図るべきである。

機能動詞結合を語彙的に蓄積する学習では、CLJの場合、とりわけ和語の機能動詞結合に注意を向け、意識的に学んでいくことを忘れてはならない。

その際には、単語帳のような一覧を提示して暗記させたりするのではなく、読解教材などで、学習すべき機能動詞結合の箇所に下線を引く、網掛けをするなどして注意を喚起するのがよい。これは、偶発的学習¹の観点からだけでなく、これまで何度も強調してきたように、機能動詞結合をそれが用いられている文脈の中で習得するためである。

その教材には、学習者の母語でその機能動詞結合に対応する脚注をつけ、母語の名詞と動詞の組み合わせとの異同を意識させる必要がある。したがって、日本語にそのまま用いることのできる母語の組み合わせを示すだけでなく、そのまま用いると不適切な事例も提示しなければならない。

<文法の学習>

初級の段階では、まだ導入される機能動詞結合の数もわずかなので、機能動詞結合に関わる文法的規則を明示的に学ぶには早すぎる。機能動詞結合の文法面における知識を与えるのは、中級段階に入る前後が適切である。機能動詞結合に関わる文法知識とは、事態性名詞に助詞の「を」なしに直接スルが結びついた「VNする」は動詞であるが、助詞「を」が間に入った「VNをする」のVNは、語形は同じでも名詞になること、したがってそれぞれの修飾も、後者は連用修飾も連体修飾も取れるが、前者は連用修飾しか取れないこと、機能動詞結合に目的語がある時には、二重ヲ格制約があることなどである。とりわけ、中国語と同形同義の漢語事態性名詞は、日中で品詞が異なることがあり、誤用が起りやすいので、次のようなことに注意を促さなければならない。即ち、中国語で動詞であっても日本語では名詞なので「*変化られる」のように活用させることはできない。また、中国語では名詞でも、日本語では形容詞になり、機能動詞結合に用いることができないものがある。日中で自他の異なるものにも気を付けなければならないことなどである。

<用法の学習>

上級になると文法的誤用は少なくなってくるので、代わって用法の習得に重点をおかなければならない。この用法の学習は、ある程度機能動詞結合が量的に蓄積され、個々の機能動詞結合を比較対照できるようになった中級以降に行うのがよいと考える。

機能動詞結合は読む、聞くなどで受容的に接する場合には理解がたやすいので、用法の学習は、書く、話すなどの産出に重点をおくべきである。事態性名詞に結びつく動詞は複数あり、結びつく機能動詞によって固有の意味用法があるので、それらを文脈に応じて使い分けできるようにすることをめざす。しかし、現在は、そのために参考とすべき資料がない。以下でどのような内容を持った資料が望まれるかについて提言を行う。

¹ 語彙学習において、読解などを目的としながら付随的に語彙を学ぶ方法。語彙学習を直接目的として行う学習は意図的学習とされる。

13.2 『機能動詞結合用法辞典』の作成

前項のプランに沿って機能動詞結合の学習を進めるとしても、学習者に必要なそのための情報を与える資料が現在はない。学習者が機能動詞結合を実際に文中で用いようとする時に、いつでも利用できる『機能動詞結合用法辞典』のようなものが望まれる。学習者だけでなく、教師にも役立つものである。教師は学習者の作文などを添削する際、名詞と動詞の組み合わせが日本語として逸脱していると思われ、それに対し適切と思われる日本語を提示することができても、何が問題であるかを学習者に示すことができないことが、往々にしてあるからである。

しかし、「機能動詞」という用語は学習者だけでなく教師にも馴染のないものであるから、実際には『サ変動詞用法辞典』というような名称になると思われる。

藤井（2001）によると、「構文理論では、言語を構成する基本単位を“construction”であると考え、constructionは、形式と意味（機能）とが対応して形成する単位である（Fillmore 1985, 1988 etc.）。（p.13）」「文法構造の知識やその習得が意味の理解や習得から切り離されているということを前提とし各々を別個に研究すればよいとするのではなく、両者の相互関係を探求し、構造習得の機能的動機付けを探求することが課題となる。（p.14）」

藤井は、また、子供の言語習得に言及し、「語彙的に特化された具体的な構文の使用とその蓄積が、生産的な構文構造の習得に繋がる（p.539）」と述べている。本研究は、個々の機能動詞結合は「語彙的に特化された具体的な構文」を有すると捉え、日本語の機能動詞結合の習得には、個々の機能動詞結合に特化された具体的な構文を、形式（項構造）と意味の相互関係で解明していくことが必要であると考え。それに基づいた機能動詞構文を、本稿では「サ変動詞構文」とし、例文と共に提示することをめざし、以下でその解明を試みる。

これまでの調査で、学習者が機能動詞結合を文脈で用いる時に問題となるのは、その機能動詞が取ることができるのはどのような項かということと、事態性名詞と結びつく様々な機能動詞がある時、その文脈ではどの機能動詞を用いるのが適切であるかの使用制約だった。ここでは、はじめに『機能動詞結合用法辞典』の作成の際に留意すべき事項として、機能動詞結合の取る項と使用制約をどのように提示すべきかについて考察し、それに基づいて用法辞典での個々の機能動詞結合の提示パターン案を提起する。

13.2.1 事態性名詞の取る項の統語及び意味内容の表示

本研究の作文調査では、機能動詞結合の取る項の誤りが数多く見られた。機能動詞結合は、既に何度も述べているように、動詞ではなく、事態性名詞が項構造を持っているので、取る項の問題は、各事態性名詞がどのような項をとるのかの問題になる。しかし、統語論の範疇だけで、たとえば、「ある事態性名詞の取る項は、動作主と対象である」と規定しても、日本語学習者には、必要十分な情報とはならない。以下で、日本語学習者は事態性名詞の取る項に関してどのような困難を持っているのかを見ていきたい。

解明に当たっては、本研究の作文調査で見られた事態性名詞が取る項の誤用例の分析を土台にした。取り上げた例文は6章と7章の再掲であるが、6章、7章では、必ずしも「取る項の誤り」として分析していない。例えば、「*お寺や神社をお祝いをして、・・・」という上級の例は、7章では、文脈から判断して、名詞の選択を誤った「用法の誤り」として分類した。作文のテーマが正月であることから、「お参り」という行為内容を表すことが筆者の意図であり、「お祝いをする」という機能動詞結合がまずあって、その項を選択したものとは考えられないからである。しかし、以下の分析では、個々の機能動詞結合の構文解明の材料として取り上げるため、取り上げた誤用例は、個々の機能動詞結合がどんな項をとっているかに着目し、「取る項の誤り」とする。「サ変動詞構文」の分析に当たっては、岡山大学の「述語項構造シソーラス²」及び『基本動詞用法辞典』に基づき、日本語学習者用に手を加えた。

中級 CLJ の作文文分析を行った6章では、「取る項の誤り」として次の例を取り上げた。

<6-15：再掲> *バドミントを練習する時、まだ技法が悪かった。㉞

<6-18：再掲> *毎日ひとびとはたいへんいそがしくて*春節を準備しています。㉟

「準備する」に「春節」、「練習する」に「バドミントン」を対象として取ることは不適切である。「準備する」の場合、対象には、例えば「ドレス」「花」のようなモノだけで、「結婚式」というようなコトは取れないが、逆に「練習する」の場合には、対象に「ドリブル」「シュート」のようなコトだけで、「ボール」のようなモノは取れない。

- ・サッカーの ドリブル／シュート／パス (のやり方) を練習する
*サッカーボールを練習する
- ・結婚式の ドレス／花 を準備する
*結婚式を準備する

要求される目的語がコトであるか、モノであるかというような内容は、辞書で調べてもわからないことが多い。日本語の機能動詞結合を文脈の中で使いこなすためには、動作主、対象、着点などの統語上の記述を事態性名詞の説明に加えるだけではなく、それらの項がどのような内容を持ったものであるのかという意味記述も同時に必要である。このような問題をどのようにとらえ、どのように解決したらよいのだろうか。

以下で、作文に見られた機能動詞結合と項とのミスマッチ例を参照し、それに基づき試案した「サ変動詞構文」を提示する。

なお、誤用例は全て再掲であり、() 内は、誤用部分を筆者が訂正したものである。

² <http://pth.cl.cs.okayama-u.ac.jp/pth/Vths>

(1) 動作主の誤用

誤用例	〈上級〉〈7-30〉*女性の <u>父母に婚約</u> してもらⒺ (婚約を認めてもらう)
サ変動詞構文 (例文)	<u>婚約する</u> ： 〈人1〉と 〈人2〉が、結婚する約束を結んでいる状態になる 《春男は、明子と 婚約した。》

〈7-30〉は、「婚約する」動作主が「父母」になっているが、「父母」は「婚約」の主体にはなれず、「婚約する」のは結婚する当事者同士であることを「サ変動詞構文」で示した。
《上記以外の例》

〈中級〉

〈6-36〉*東洋は・・・(中略)・・・子供の教育はもっと科学的な応用力を養うことを注
意する。(応用力を養うことに注意を向ける)Ⓔ

〈6-43〉*日本語学科を読みたいですから、私は再び試験しようと思います。
(試験を受けよう)Ⓔ

(2) 対象の誤用

誤用例 1	〈中級〉〈6-20〉*高校時代に <u>試験を勉強</u> しなかった、Ⓔ (試験のための勉強をしなかった)
サ変動詞構文 (例文)	<u>勉強する</u> ：〈人〉が 〈物・事〉を身につける為に動作を行う 《受験生が 英語を 勉強する》

〈6-20〉では、「勉強する」対象が「試験」になっているが、「勉強する」対象は「身につける」「習得する」ものであることが「サ変動詞構文」で示されるので、「試験」は「勉強する」の対象とならないことが示唆される。

誤用例 2	〈上級〉〈7-21〉*テレビでたばこの <u>コマーシャルをキャンセル</u> したり、・・・(後略) (中止したり)Ⓔ
サ変動詞構文 (例文)	<u>キャンセルする</u> ：(〈人1〉の働きかけで) 〈人1〉の 〈人2〉に対する約束 が取り消され、約束を結んでいない状態になる 《私は 飛行機の予約を キャンセルした》

〈7-21〉では、「キャンセルする」対象が「コマーシャル」になっているが、「キャンセル」の対象は「約束」であることが「サ変動詞構文」で記述されているので、「コマーシャル」を「キャンセルする」の対象とすることはできないことがわかる。

《上記以外の例》

〈中級〉

- 〈6-7〉 *他人の観点を参考すると、 (参考にすると) ㊦
- 〈6-14〉 *私は時々絵画を練習するかわりに、毎日遊びました。(絵画の練習をする) ㊦
- 〈6-15〉 *バドミントを練習する時、まだ技法が悪かった。
(バドミントンの練習をする) ㊦
- 〈6-17〉 *先生に出し宿題とテストを準備して、全部完成してしまいます。
(テストの準備をして) ㊦
- 〈6-18〉 *毎日ひとびとはたいへんいそがしくて春節を準備しています。
(春節の準備をして) ㊦
- 〈6-19〉 *テストや宿題が全然準備しませんでした。(テストや宿題の準備をする) ㊦
- 〈6-20〉 *高校時代に試験を勉強しなかった、 (試験のために勉強しなかった) ㊦
- 〈6-25〉 *私はきっと自信を育成しなければなりません。
(自信を 育てる/持つようになる) ㊦
- 〈6-31〉 *人はインターネットの安全を心配する。(安全性を疑う) ㊦
- 〈6-32〉 *いろいろな用事を発生します。(いろいろな用事ができます) ㊦
- 〈6-33〉 *旅行の時、・・・(中略)・・・いろいろな新鮮なことを発生します。
(新鮮な出来事が起きます) ㊦

〈上級〉

- 〈7-17〉 *お寺や神社をお祝いをして、・・・(後略) (お寺や神社にお参りして) ㊦
- 〈7-20〉 *中国人を了解する (理解する) ㊦
- 〈7-24〉 *人はたばこを依頼する。(たばこに依存する) ㊦
- 〈7-25〉 *人間の健康を破壊する。(健康を損ねる) ㊦
- 〈7-26〉 *タバコを吸うことを停止しがります (吸うのをやめたがり) ㊦
- 〈7-27〉 *先決条件はここで本当に合意したいの目標です。
(大切なのは、本当に心から納得できる目標だ) ㊦
- 〈7-28〉 *人間の合理的な要求を合致するため・・・(後略) (??) ㊦

(3) 着点の誤用

誤用例	〈中級〉〈6-16〉 *コンテストのために先輩達は <u>私達に練習</u> を行いました。㊦ (練習させました)
サ変動詞構文 (例文)	<u>練習する</u> : <人>が<事・方法>を身につける為 動作を行う 《私は ドリブルを 練習した》

〈6-16〉では、「私たちに」という〔着点〕をとっているが、「練習」の項は〔対象〕だけで、〔着点〕は取らないことが「サ変動詞構文」で示される。

《上記以外の例》

〈中級〉

〈6-23〉 * 父は私に高校の美術クラスの入学試験に参加させられました。
(入学試験を受けさせました)㊦

〈6-24〉 * 試験に参加する (3例) (試験を受ける)㊦

〈6-35〉. * 中国人は誕生日にだんだん注意をします。(注意を払うようになった)㊦

〈上級〉

〈7-19〉 * 学歴程度のあがりなどに感動しなければならない
(~などを喜ばなければ／に感謝しなければ)㊦

〈7-22〉 * (結婚式に) 両方の親は出場すべきだ。(出席すべき)㊦

以上の「サ変動詞構文」は、調査した作文に見られたいくつかの機能動詞結合のミスマッチ例に基づいて行った試作に過ぎない。そのミスマッチのほとんどがスル動詞結合であったため、「サ変動詞構文」の事例がスル動詞結合のみになってしまった。以下で、支援動詞構文も含めた場合、「サ変動詞構文」の記述がどのようになるのかを検討する。

13.2.2 『機能動詞結合用法辞典』 テンプレート

前項では、個々のスルを取る事態性名詞の項表示をどのように行うべきかについて考察した。しかし、それだけで、日本語学習者の機能動詞結合の使用がうまくいくわけではない。大部分の事態性名詞には、複数の機能動詞が結びつくが、学習者を「サ変動詞構文」の正しい理解に導くためには、当該事態性名詞に異なった動詞が結びついた機能動詞結合同士の対比が必要となる。例えば、事態性名詞「試験」の場合を見てみよう。

〈6-43 ; 再掲〉 * 日本語学科を読みたいですから、私は再び試験しようと思います。
(試験を受けよう)

「試験」をする主体は、「教師」であるので、「試験する」の「サ変動詞構文」は次のようになる。

[人・組織] が [人・能力] についての情報を得ようと、調査を行う
《先生が 生徒に 試験を行う (する) 》

〈6-43〉を執筆した学習者が、この「サ変動詞構文」を見て、自分の書いた〈6-43〉文を書き改めると、「?私は再び試験されようと思います」としてしまいう可能性もある。人が「試験される」のは、その人の能力や性質に問題があるなどの良くない場合であり、生徒が主語の場合には「試験を受ける」としなければならない。事態性名詞「試験」を使いこなすためには、「試験する」と「試験を受ける」と、ふたつの機能動詞結合を対比して提示する必要がある。

また、異なった動詞が結びついた機能動詞結合の違いを明らかにすることは、機能動詞結合の正しい構文理解のためだけではなく、事態性名詞に複数の機能動詞が結びついた機

能動詞結合を、文脈に応じて使い分けするためにも必要である。では、事態性名詞に異なる複数の機能動詞が結びついた機能動詞結合の場合、学習者はどのようにして文脈に応じた使い分けを学べばよいのだろうか。辞書には、個々の語彙についてしか記載されておらず、名詞と動詞が結びついた機能動詞結合についての具体的な資料は、現時点ではない。まして、同じ名詞に異なった動詞が結びついた場合の各々の違いを記載した資料など皆無である。

本稿では、前述の取る項についての考察を踏まえ、複数の機能動詞と結びつく機能動詞結合の使い分けに言及し、実際の「機能動詞結合用法辞典」での記述パターン試案を提起したい。

「用法辞典」を作成する際に、はじめに問題になるのは掲載する機能動詞結合の選抜方法である。

選抜は2通りで行う。1つは旧「日本語能力試験出題基準」に掲載されている漢語サ変動詞を抜き出し、それに結びつく機能動詞を洗い出す方法である。この機能動詞の洗い出しには、BCCWJを用いる。もう1つは、村木(1991)に掲載されている機能動詞結合を用いる方法である。その2つから抽出された機能動詞結合を、BCCWJで検索し、頻度の高いものを選抜する。

そうして選抜された機能動詞結合を、岡山大の「述語項構造シソーラス」と「日本語基本用法辞典」を参考にして分析し、記載する。「述語項構造シソーラス」と「日本語基本用法辞典」は、いずれも一語動詞だけを対象としているが、それを「事態性名詞+機能動詞」の結合へと応用する。個々の機能動詞結合の分析には、村木に従い、ヴォイス、アスペクト、ムードの3つの観点で行う。

一番問題となるのは、ある事態性名詞に複数の機能動詞が結びついた場合の使い分けである。Hoey(2005)は多義語のコロケーションについて、1つの意味でのコロケーションや意味連鎖は、他の意味のコロケーションや意味連鎖とは異なると述べている。

Hoeyは多義語のコロケーションについて次の仮説をたて、立証している。

- 1 多義語の一般的な意味が、あるコロケーション、意味連鎖、コリゲーション³を好むとプライム⁴されたら、その語のまれにしか使われない意味はそれらのコロケーション、意味連鎖 and/or コリゲーションを避けるようプライムされる。その語をより広く用いると、まれにしか使われない意味のコロケーション、意味連鎖、コリゲーションを用いることになるだろうが、相対的にその頻度は少ない。
- 2 ある語の2つの意味の一般性がおよそ変わらない時は、互いに相手のコロケーション、意味連鎖 and/or コリゲーションを避けるだろう。
- 3 1や2が該当しない時は、ユーモアになるか、(一時的または永久的に)曖昧になる

³ 語彙項目と文法カテゴリーとの関係

⁴ 先行の語が後続する語の認識に無意識的に影響を与えること

か、2つの意味を結びつけた新しい意味になるかという効果が生まれる。

(p.82; 筆者翻訳)

Hoey は仮説 1 の例として、consequence を挙げている。consequence には「結果」と「重要性」という 2 つの意味があるが、前者の意味が一般的でコーパスの用例の 91% を占め、後者の意味はまれにしか見られない。「重要性」という意味では、of と any が共に用いられるが、「結果」の意味では、それらは共起しない。Hoey が挙げた、of と共起した「重要性」という意味で用いられた consequence の文例は次のようである。

- Some were people of **no great consequence**.
- Shareholders have a right to expect that **nothing** of consequence is missing from the prospectus.

この Hoey の仮説にもとづいて『機能動詞結合用法』辞典における機能動詞結合の用法分析が可能なのではないだろうか。「V+N」のコロケーションを調査した Nesselhauf (2003) もコロケーションを定義し、「用いられている意味での動詞はいくつかの名詞とだけ結びつくことができる p.226」としている。

以下は、実際に事態性名詞「注意」をとりあげ「機能動詞結合用法辞典」での記載パターンを試みた⁵ものである。

注意

〔能動〕

「注意する」

- ① [人]が [人・物・事]に 用心する
《登山者が がけ崩れに 注意する》
- ② [人]が [人・物・事]に 気をつける
《ディーラーが 株の動きに 注意する》
- ③ [人(1)]が [人(2)]に [人(2)の動作]について 忠告する
《上司が 部下に 遅刻を 注意する》

「注意を払う」

- [人]が [人・物・事]に 用心する
《ドライバーが 安全運転に 注意を払う》

「注意を向ける」

- [人]が [人・物・事]に 知覚を集中する
《乗客は 車内アナウンスに 注意を向けた》

「注意を与える」

- [人(1)]が [人(2)]に [人(2)の動作]について 忠告する
《教師が 生徒に 授業中の私語について 注意を与える》

⁵ [人] [物] [事] などの意味特性は、『基本動詞用法辞典』を参考にした。

[受動]

「注意を受ける」

[人(1)]が [人(2)]に 忠告される
《生徒が 先生に 注意を 受ける》

[使役]

「注意を促す」

[人(1)]が [人(2)]に [人(2)の動作]に 気をつけさせる
《警察が 高齢者に 振り込め詐欺に騙されないように 注意を促す》

「注意」を記述するために、実際に分析してみると Hoey の仮説どおりになった。スル結合の「注意する」は多義で、3つの意味があるが、そのそれぞれが「注意」の支援動詞結合に振り分けられる。「注意する」の意味①「用心する」は「注意を払う」へ、②「気をつける」は「注意を向ける」へ、③「忠告する」は「注意を与える」「注意を受ける」「注意を促す」へと、それぞれ役割分担されている。

問題になるのはスル結合である。多くの場合、「注意を払う」「注意を向ける」「注意を与える」などの支援動詞を用いた表現は、「注意する」と置き換え可能であるが、支援動詞を用いたほうが意味を特定し、明らかにする働きがある。しかし、文脈によっては、置き換えができない場合がある。

下の例はいずれも国立国語研究所の BCCWJ からのものである。〈13-1〉〈13-2〉では、a. 「注意を向ける」を b. 「注意する」に置き換え可能である。

〈13-1〉 a. 人びとはこのような日本語の特質によりかかって句読点にあまり注意を向けずに文章を書き、そして読んできた。

b. 人びとはこのような日本語の特質によりかかって句読点にあまり注意せずに文章を書き、そして読んできた。

〈13-2〉 a. あたりは、大勢の隊員が忙しそうに行き来している。しかし、こちらに注意を向ける者はほとんどいない。

b. あたりは、大勢の隊員が忙しそうに行き来している。しかし、こちらに注意する者はほとんどいない。

しかし、〈13-3〉〈13-4〉では、置き換えできない。

〈13-3〉 a. 白人文化もまた所有物や社会的地位に注意を向ける文化である。

b. *白人文化もまた所有物や社会的地位に注意する文化である。

〈13-4〉 a. 娘がニック以外のことに注意を向け始め・・・(略)

b. *娘がニック以外のことに注意し始め・・・(略)

なぜ、このような違いが出るのだろうか。

神田 (2002) は、ある名詞に複数の動詞が交替することによって「微細な意味」の違いが生じるのは、「機能動詞結合においても、それを構成する動詞にそれぞれに固有の元の意

味の残存が見られるためであり、語結合によって動詞の意味が変化するものではない

(p.58)」と述べている。「注意を向ける」の場合も、「向ける」が「注意」と語結合しても、動詞の意味は変化しないので、「向ける」の多義性によって、上述のような違いが出るのだと思われる。

「向ける」を『大辞林』で調べると7つの意味が記載されているが、その内、次の2つが「注意を向ける」の「向ける」の意味に該当するようである。

①ある方向・対象に面するように、体や物の角度を変える。

②ある方面・事柄を行為の対象とする。

スルと置き換えが可能な〈13-1〉〈13-2〉の「向ける」は①の意味に適合し、置き換えができない〈13-3〉〈13-4〉は②の意味が適合するようである。

「注意を向ける」の場合の「注意」の意味は、「気をつける」なので、「注意を向ける」の2つの意味は次のようになる。

A「注意」+「向ける①」

→「気をつける」+「ある方向・対象に面するように、『注意』の角度を変える」

B「注意」+「向ける②」→「気をつける」+「『注意』を行為の対象とする」

B類の〈13-3〉〈13-4〉の場合は、「行為の対象」なので、ある程度、長期間の事柄について用いられるのに対し、A類の〈13-1〉〈13-2〉では、その場面のことを述べている。したがって、「注意を向ける」の「用法辞典」での記述は以下のように分けられることになる。

「注意を向ける」A

[人]が [人・物・事]に 知覚を集中する

≪乗客は 車内アナウンスに 注意を向けた≫

「注意を向ける」B

[人]が [人・物・事]に 関心を持つ

≪世界中の人々が 大統領選挙に 注意を向けている≫

したがって、機能動詞結合の用法を分析する際には、事態性名詞だけでなく、結びつく機能動詞の多義性も考慮しなければならない。

以上、「注意」を例に、『機能動詞結合用法辞典』を記述する際のテンプレートを考えてみた。他の機能動詞結合でもこのような記述が可能なかどうかは、今後の課題である。

第 14 章 今後の課題

差し迫った課題は、前章で述べたように事態性名詞と機能動詞の共起及び機能動詞結合の用法の学習のために、事態性名詞とそれに結びつける機能動詞を示した一覧を作成することである。13.1 で述べたように、読解教材に含まれる機能動詞結合に網掛けをするためにも、また、学習者自身が日本語の文章を産出する際に利用する『機能動詞結合用法辞典』を作成するためにも、学習項目とする機能動詞結合を選抜しなければならない。

その選抜された機能動詞結合を用いて、先に提示した試案に基づき「機能動詞結合用法辞典」の編纂につなげることが目標である。

今回の研究では、「事態性名詞+機能動詞」のセットでの調査分析を行った。しかし、学習者、特に CLJ の場合、まず名詞を念頭に置いて、それを文中で用いるためにはどの動詞を結びつけたらよいのかというプロセスをたどることが多いと思われる。したがって、基本的には、機能動詞結合はコロケーションとして、[名詞+動詞] のセットで学ぶべきではあるが、動詞サイドから個々の機能動詞がどのような意味を持ち、どの事態性名詞に結びつくのかということも明らかにする必要がある。本稿では機能動詞の多義性について「受ける」のみしか考察しなかったが(11.4.2.2)、よく用いられる頻度の高い動詞についても、どのような意味があり、どのような事態性名詞と結びつくのかという調査が必要である。

また、機能動詞結合の習得について、更なる研究を進めなければならない。本稿では、中国語を母語とする日本語学習者のみを対象として調査分析した。今後は、中国語だけでなく、他の言語を母語とする学習者についても調査し、日本語の機能動詞結合習得の全体像を明らかにする必要がある。今回の調査では 12 ケ国語を母語とする学習者を「非漢字学習者」とひとくくりにして論じてしまったが、それぞれの母語で機能動詞結合がどのように用いられているかとの関係でも分析を深めたい。

また、今回の調査ではライティングにおける産出だけを対象としたが、発話における産出も調査する必要がある。作文を対象とした調査では、80%前後の高い正用率を示したが、同じ産出でも会話の場合はどうだろうか。作文では学習者はじっくりと吟味して日本語を使用することができるので、自信の持てない表現は回避や言い換えをすることができるが、会話ではそうはいかない。したがって、会話の場合、かなり誤用が多いと思われる。事実、筆者が担当する日本語学校のクラスの学生たちのスピーチでは、かなりの日本語力を持った者が、用いようとした事態性名詞にとっさに誤った機能動詞を結びつけて発話するのを、しばしば体験している。

今回の実験調査は、空所補充問題で、文中の事態性名詞と結びつく機能動詞を知っているかどうかをみるものだった。作文で正用率が高いのは、言い換えや使用回避をしているためであると論じてきたが、学習者は実際に言い換え、使用回避をしているのか、本論文

では実証していない。機能動詞結合を含んだ母国語の文を日本語に翻訳してもらうなどして、明らかにしたい。

機能動詞については、今回は「受ける」だけしか分析できなかったが、他のさまざまな動詞についても、その多義性との関連で事態性名詞とどのように関わっているのかを明らかにしたい。CLJと非漢字学習者を対照した8章の調査で用法の誤りを見ると、非漢字学習者は名詞の誤りがほとんどであるのに、CLJの場合は動詞の誤りが半分を占め、同じ用法の誤りでもCLJと非漢字学習者では、内容に違いがあった。CLJは日中での同音同義語を事態性名詞に用いることができるので、その事態性名詞にどのように動詞を結びつけるのかに主な関心が向くと思われる。どのような機能動詞がどのような事態性名詞に結びつくのかの調査は、特にCLJの習得にとって重要である。

謝辞

本研究を遂行し学位論文をまとめるに当たり、多くのご支援とご指導を賜りました。指導教員である藤井聖子教授には、深く感謝いたします。支援動詞構文研究の草分けである藤井先生のご指導を受け、機能動詞結合の習得研究へと本研究をつなげることができました。長期の論文作成過程で、時に行き詰まり、方向性を見失った時に、道筋をつけ、導いてくださいました。また、機能動詞結合の特殊性の本質に「項共有」がある事を気づかせていただき、本研究の理論的支柱とすることができました。藤井・上垣（2008）の「支援動詞構文の判別テスト」がなければ、本調査の作文分析を行うことはできませんでした。

副査をしていただいた3人の先生方にも、多大なご指導とご支援をいただき心より感謝いたします。伊藤たかね教授からは、主に統語論的な観点からアドバイスを受け、分析を深めることができました。楊凱榮教授からは、分析での不十分な点、付け加えるべき点についてご指摘を受け、研究を広げることができました。岩月純一教授は、日本語教育はご専門外の分野であることから、異なった視点でのアドバイスをいただき、新たな考察に導いてくださいました。宇佐美洋教授からは、この研究の後、何をするのかとのご指摘をいただいたことにより、今後の課題について具体的に考察することができました。また、私の作文調査では、宇佐美先生がお作りになった作文コーパスをデータとして使用させていただきました。このコーパスがなければ私の論文はなく、深く感謝いたします。さらに、このコーパスを使用させていただいた国立国語研究所に感謝いたします。

実験調査では、私が所属しておりました翰林日本語学院の方々に温かいご支援、ご協力をいただきました。長岡博司校長、岸根彩子教務主任は、実験調査に多大な便宜を図って下さいました。学院の先生の中には、データの正誤判定に参加して下さった方もいました。また、学院の留学生は、快く実験調査に協力してくださいました。心より感謝いたします。

最後に、自分の思う道を進むことに対し、温かく見守り、長い執筆期間を支えてくれた家族に対して、感謝の意を表して謝辞といたします。

参考文献

- 相澤正夫 (1993) 『日本語教育のための基本語彙調査』と複合サ変動詞」国立国語研究所報告 105 研究報告集 14, 281-332.
- 相原茂 (編) (2006) 『日中辞典』講談社
- 相原茂 (編) (2010) 『中日辞典』講談社
- 秋元美晴 (1993) 「語彙教育における連語指導の意義について」 *Proceedings of the conference on second language research in Japan* ; 28-51.
- 庵功雄、高梨信乃、中西久実子、山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄 (2010) 「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因—非対格自動詞の場合を中心に—」『日本語教育』146、174-181.
- 稲垣俊史 (2009) 「第二言語習得理論から見た中国語母語話者の自他の習得」2009 年度日本語教育学会秋季大会予稿集、88-90.
- 岩崎英二郎 (1974) 『ドイツ語と日本語の機能動詞』慶応義塾大学言語文化研究所紀要 (6)、79-93.
- 王亜新 (1990) 「日本語と中国語のヴォイス-受身の意味を中心にして」『(国文学)解釈と鑑賞』55 (1)、129-135.
- 大竹清敬 (2005) 「機能動詞結合の換言に伴う連体修飾表現の変換」『言語処理学会第 11 回年次大会発表論文集』、337-340.
- 岡嶋裕子 (2010) 「L1 語彙知識が上級日本語学習者のコロケーション産出に及ぼす影響」東京大学総合文化研究科言語情報科学紀要『言語情報科学』8、85-100.
- 岡嶋裕子 (2012) 「機能動詞結合における動詞の選択制約—「影響を与える」と「影響する」—」『国立国語研究所第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、307-314.
- 奥津敬一郎 (2007) 『連体即連用?—日本語の基本構造と諸相』ひつじ書房
- 何龍 (2015) 「日中同形語の品詞の違いによる誤用について—中国人の日本語学習者を対象として—」『国立国語研究所第 8 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、1-10.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- 河村静枝 (2017) 「日中同形語と授受動詞のコロケーションに関する誤用について」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』17、35-48.
- 神田靖子 (2002) 「機能動詞結合とその他動性をめぐる覚書」『同志社大学留学生別科紀要』2、55-73.
- 木村裕章 (2010) 「日本語と中国語における自・他動詞の対応と分類」『東亜大学紀要』11、1-21.
- 金田一京介、山田忠雄、柴田武、酒井憲二、倉持保男、山田明雄 (1972) 『新明解国語辞典』三省堂

- 黒田航 (2008) 「事態性名詞の項構造と動詞の項構造の統合：PMA を使った日本語の支援動詞構文とその含意」『言語処理学会第 14 回年次大会発表論文集第 5 巻』言語処理学会、1128-1131.
- 黄叢叢 (2017) 「中国語を母語とする日本語学習者の同形語と機能動詞の連語形式の習得に関する研究」『国際日本学研究論集』6、19-41.
- 国際交流基金 (1994) 『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』凡人社
- 国立国語研究所 (1978) 『日本語の文法 (上)』国立国語研究所
- 国立国語研究所 (1984) 『日本語教育のための基本語彙調査』(国立国語研究所報告 78) 秀英出版
- 国立国語研究所 (1997) 『日本語における表層格と深層格の対応関係』国立国語研究所報告 113、三省堂
- 國廣哲彌 (1970) 「昭和 43・44 年における国語学界の展望 語彙・意味 (理論・現代語)」『国語学』81、68-78.
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹 (編) (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 小林英樹 (1998) 「「VN をする」構文で使えない動名詞について」『現代日本語研究』5、大阪大学日本語学講座 (現代日本語学)、101-110.
- 小町守・飯田龍・乾健太郎・松本裕治 (2010) 「名詞句の語彙統語パターンを用いた事態性名詞の項構造解析」『自然言語処理』17-1、141-159.
- 五味政信・今村和宏・石黒圭 (2006) 「日中語の品詞のズレ：二字漢語の動作性をめぐって」『一橋大学留学生センター紀要』9、3-13.
- 小森和子・三國順子・徐一平・近藤安月子 (2012) 「中国語を第一言語とする日本語学習者の漢語連語と和語連語の習得」『小出記念 日本語教育研究会』20、49-60.
- 小森和子 (2013) 「日本語学習者の語彙知識の習得に及ぼす第一言語の影響 — 中国語を第一言語とする日本語学習者の和語習得を通して—」『明治大学国際日本学研究』6 (1)、91-115.
- 佐藤佑 (2011a) 「現代日本語の事態描写に関わる動詞性名詞と名詞化節の諸相」東京外国語大学学位取得論文
- 佐藤佑 (2011b) 「現代日本語の動詞性名詞の研究 (要旨)」
www.tufs.ac.jp/blog/st/p/satoyou/m_summary_j.pdf (2015 年)
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 朱薇娜 (2018) 「能動及び受動的意味を表す日本語の機能動詞結合の研究」名古屋大学博士学位論文
- 鈴木綾乃 (2009) 「上級日本語学習者の動詞のコロケーションに関わる誤用—「する」を中心に—」『日本語教育学研究への展望：柏崎雅世教授退職記念論集』ひつじ書房、61-77.
- 鈴木綾乃 (2014) 「日本語学習者のコロケーション習得に関する研究 — 動詞「する」を中心に —」東京外国語大学博士学位論文

- 石堅・王健康（1983）「日中同形語における文法的ズレ」『日本語と中国語の対照研究別冊 一 日文中訳の諸問題一』日中語対照研究会、56-82.
- 曹紅荃・仁科喜久子（2006）「中国人学習者の作文誤用例から見る共起表現の習得—名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について—」『日本語教育』130、70-79.
- 田窪行則（1986）「一化」『日本語学』5:3、81-84.
- 中国社会科学院語言研究所詞典編集室（編）（1983）『現代漢語詞典』商務印書館
- 陳毓敏（2009）「中国語母語の日本語学習者における漢字語の習得研究」お茶の水女子大学 博士学位論文
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 杜暉（2015）「中国語無マーカー受身文の意味分析と形式上の特徴」『現代社会文化研究』61、49-66.
- 中右実、影山太郎、由本陽子（1997）『日英語比較選書 8 語形成と概念構造』研究社出版
- 中島悦子（2007）『日中対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受け身・使役・可能・自発—』おうふう
- 新村出（編）（1998）『広辞苑』第 5 版、岩波書店
- 野村雅昭（1974）「四字漢語の構造」『電子計算機による国語研究 VII』秀英出版、36-80.
- 長谷川信子（1999）『生成日本語学入門』大修館書店
- 藤井聖子（2001）「構文理論と言語習得」『英語青年』12月号 1、12-16.
- 藤井聖子・上垣渉（2008a）「支援動詞構文の分析：コーパスに基づく構文理論的アプローチ」『言語処理学会第 14 回年次大会発表論文集』、943-946.
- 藤井聖子・上垣渉（2008b）「支援動詞構文における事態性名詞と動詞との項共有と連結性：『日本語コーパス』を用いた分析」『日本言語学会第 136 大会予稿集』、432-437.
- 藤田篤・降播建太郎・乾健太郎・松本裕治（2006）「語彙概念構造に基づく言い換え生成—機能動詞構文の言い換えを例題に一」『情報処理学会論文誌』47/6、1-14.
- 船田逸夫（1969）「モノとコト」『言語生活』218.
- 文化庁（1978）『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 本田ゆかり（2019）「コーパスに基づく「読解基本語彙 1 万語」の選定」『日本語教育』172、118-133.
- 松村明（編）（1989）『大辞林』三省堂
- 三喜田光次（2007）「名詞と動詞の共起関係に見られる日中両国語間の相違について」『外国語教育：理論と実践』33、1-17.
- 村木新次郎（1985）「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』4/1、15-27.
- 村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 村松由紀子（2007）「中国語「意味上の受身文」と日本語の受身文」*Bulletin of the School of Humanities, Toyohashi University of Technology* 29, 1-10.

- 森岡健二「日本文法形態論」『月刊文法』に43年から45年にかけて連載（野村：1974による）
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- 谷部弘子（2002）「日本語中級段階の漢語運用に関する一考察—漢語動名詞の機能動詞結合を中心に—」『東京学芸大学紀要2部門』53、147-155.
- 楊凱榮（1989）「文法の対照的研究—日本語と中国語—」『講座 日本語と日本語教育』5、312-340.
- 吉永尚（2011）「中国語話者における心理表現上の母語干渉について」『園田学園女子大学論文集』45、167-180.
- 李恵（2012）「中国人日本語学習者による日本語作文における二字漢語サ変動詞の誤用について」『日本語教育研究』32、117-129.
- 劉瑞利（2017）「日本語学習者の「名詞+動詞」コロケーションの使用と日本語能力との関係—「YNU 書き言葉コーパス」の分析を通して—」『日本語教育』166、62-76.
- Altenberg, B. and Granger, S. (2001) The Grammatical and Lexical Patterning of MAKE in Native and Non-native Student Writing. *Applied Linguistics* 22/2; 173-195.
- Atkins, S. Fillmore, C. and Johnson, C.H. (2003) Lexicographic Relevance: Selecting Information from Corpuse Evidence. *International Journal of Lexicography* 16(3), 251-280.
- Atkins, S. Rundell, M. and Sato, H. (2003) The contribution of FrameNet to practical Lexicography. *International Journal of Lexicography* 16(3), 333-361.
- Bahns, J. (1993) Lexical collocations: A contrastive view. *ELT Journal* 47 (1): 56-63.
- Bahns, J. and Eldaw, M. (1993) Should we teach EFL student collocations? *System* 21(1), 101-114.
- Biskup, D. (1992) L1 influence on learners' renderings of English collocations: A Polish/German empirical study. In P. J. L. Arnaud and H. Béjoint (eds.). *Vocabulary and applied linguistics*, 85-93. Basingstoke: Macmillan.
- Bresnan, J. and Zaenen, A. (1990) Deep Unaccusativity in LFG, in K. Dziwirek, P. Farrell, and E. Mejías-Bikandi (eds.) *Grammatical Relations*, 47-57. CSLI.
- Burzio, L. (1986) *Italian Syntax*. D. Reidel. *Collins Cobuild English Grammar*. 1990. Collins: London and Glasgow.
- Fillmore, C. J. (1985) Syntactic Intrusions and the Notion of Grammatical Construction. *BLS* 11, 73-86.
- Gabry's-Biskup, D. (1990) Some remarks on combinability: lexical collocations. In Arabski, J. (ed.), *Foreign Language Acquisition Papers*, 31-44. Katowice: Uniwersytet Slaski.

- Granger, S. (1998 b) Prefabricated patterns in advanced EFL writing: Collocations and formulae. In A. P. Cowie (ed.). *Phraseology: Theory, analysis, and applications*, 145-160. Oxford: Oxford University Press.
- Grimshaw, J. and Mester, A. (1988) Light verbs and θ -Marking, *Linguistic Inquiry* 19, 205-232.
- Hasselgren, A. (1994) Lexical teddy bears and advanced learners: a study into the ways Norwegian students cope with English vocabulary, *International Journal of Applied Linguistics* 4: 237-60.
- Hatch, E. (1974) Second language learning — universals? *Working Papers on Bilingualism* 3, 1-17.
- Hoey, M. (2005) *Lexical priming: A new theory of words and language*, London: Routledge
- Howarth, P. (1996) *Phraseology in English Academic Writing*. Max Niemeyer Verlag: Tübingen.
- Howarth, P. (1998) *The phraseology of learners' academic writing*. Cowie, A.P. (ed.), *Phraseology*, (南出康世・石川慎一郎 (2009) 『慣用連語とコロケーション - コーパス・辞書・言語教育への応用』くろしお出版), pp.161-186, Oxford: Clarendon Press.
- Irujo, S. (1986) Don't put your leg in your mouth: Transfer in the acquisition of idioms in a second language, *Tesol* 20 (2), 287-304.
- Jacobsen, W. M. (1992) *The Transitive Structure of Events in Japanese*, Kurosiso Publishers.
- Jiang, N. (2000) Lexical representation and development in a second language. *Applied Linguistics* 21, 47-77.
- Jiang, N. (2002) Form-meaning mapping in vocabulary acquisition in a second language. *Studies in Second Language Acquisition* 24, 617-637.
- Kageyama, T. (1999) Word Formation, *The book of Japanese Linguistics*, Blackwell Publishing Ltd. 297-325.
- Kellerman, E. & Jordens, P. (1977). Towards a characterization of the strategy of transfer in second- language learning. *Interlanguage studies bulletin* 2(1), 58-145.
- Källkvist, M. (1999) *Form-Class and Task-Type Effects in Learner English : A study of Advanced Swedish Learners*. Lund University Press: Lund.
- Keyser, S. and Roeper, T. (1984) On the Middle and Ergative Constructions in English, *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.

- Laufer, B. and Girsai, N. (2008) Form-focused instruction in second language vocabulary learning: A case for contrastive analysis and translation, *Applied Linguistics* 29 (4), 694-716.
- Laufer, B. and Waldman, T. (2011) Verb-Noun Collocations in Second Language Writing: A Corpus Analysis of Learners' English. *Language Learning* 61: 2, 647-672.
- Levin, L. (1986) *Operations on Lexical Forms*. Ph.D. dissertation, MIT. (Garland, 1988)
- Matsumoto, Y. (1996) A syntactic account of light verb phenomena in Japanese, *Journal of East Asian Linguistics* 5, 107-149.
- McLaughlin, B. (1990) Restructuring. *Applied linguistics*, 11(2), 113-128.
- Miyagawa, S. (1989 a) *Structure and Case Marking in Japanese* (Syntax and Semantics 22). Academic Press.
- Miyagawa, S. (1989 b) Light Verbs and the ergative Hypothesis. *Linguistic Inquiry* 20-4, 659-668.
- Miyamoto, T. (1999) *The light verb in Japanese: The role of the verbal noun*, John Benjamins B V.
- Miyakoshi, T. (2004) Collocations and second language acquisition: The acquisition of English adjectival constructions, *Working papers in linguistics*, University of Hawai'i at Mānoa, 35(1), 1-21.
- Miyakoshi, T. (2009) *Investigating ESL learners' lexical collocations: The acquisition of VERB + NOUN collocations by Japanese learners of English*. A dissertation submitted to The graduate division of The University of Hawai'i in partial fulfillment of The requirements for The degree of doctor of philosophy.
- Mohmoud, A. (2005) Collocation errors made by Arab learners of English. *Asian FFL journal*, volume teachers' articles, August.
http://www.asian-efl-journal.com/pta_August_05_ma.php
- Moravcsik, E. (1975) Borrowed verbs, *Wiener Linguistische Gazette* 8, 3-30.
- Nation, I.S.P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*, Cambridge University Press.
- Nesselhauf, N. (2003) The use of collocations by advanced learners of English and some implications for teaching, *Applied Linguistics* 24 (2), 223-242.
- Nesselhauf, N. (2004) How learner corpus analysis can contribute to language teaching: A study of support verb constructions. *Studies in Corpus Linguistics* 17, 109-124.
- Nesselhauf, N. (2005) *Collocation in a learner Corpus*, John Benjamins Publishing.
- Oshita, H. (2000) What is happened may not be what appears to be happening: a corpus study of 'passive' unaccusatives in L2 English, *Second Language Research* 16 : 4, 293-324.

- Perlmutter, D. (1978) Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis, *BLS* 4, 157-89.
- Perlmutter, D. and Paul, P. (1984) The 1-Advancement Exclusiveness Law, in D. Perlmutter and C. Rosen (eds.), *Studies in Relational Grammar* 2, 81-125. University of Chicago Press.
- Rosen, C. (1984) The Interface between Sematic Roles and Initial Grammatical Relations, in D. Perlmutter and C. Rosen (eds.), *Studies in Relational Grammar* 2, 38-77. University of Chicago Press.
- Satake, Y. (2015) Verb-Noun Collocations and Combination in the Corpora of Japanese English Learners. *情報学研究* 1;4, 118-125.
- Schmidt, R. W. (1990) The role of consciousness in second language learning, *Applied Linguistics* 11(2), 129-158.
- Sinclair, J. (1991) *Corpus, Concordance, Collocation*. Oxford University Press: Oxford
- Siyanova, A. and Schmitt, N. (2008) L2 learner production and processing of collocation: A multi-study perspective. *Canadian Modern Language Review*, 64 (3), 429-458.
- Terada, M. (1990) *Incorporation and Argument Structure in Japanese*, Ph. D. dissertation, University of Massachusetts at Amherst.
- Tsujimura, N. (1990a) Ergativity of nouns and case assignment. *Linguistic Inquiry* 21, 277-287.
- Tsujimura, N. (1990b) The unaccusative hypothesis and noun classification. *Linguistics* 28, 929-957.
- Uchida, Y. and Nakayama, M. (1993) Japanese verbal noun constructions. *Linguistics* 31, 623-666.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- Wang, D. (2001) Language Transfer and the Acquisition of English Light Verb + Noun Collocations by Chinese Learners. *Chinese Journal of Applied Linguistics (Quarterly)*, 34/2, 107-125.
- Wang, Y. and Shaw, P. (2008) Transfer and universality: Collocation use in advanced Chinese and Swedish learner English. *ICAME journal*, 32, 201-232.
- Wichmann, S. and Wohlgemuth, J. (2008) Loan verbs in a typological perspective. In Stolz, Th.; Bakker, D.; Palomo, R. (ed.), *New Theoretical, Methodological and Empirical Findings with Special Focus on Romancisation Processes*, Berlin, New York (Mouton de Gruyter), 89-122.
- Wolter, B. (2006) Lexical network structure and L2 vocabulary acquisition: The role of L1 lexical/ conceptual knowledge, *Applied Linguistics* 27 (4), 741-747.

Wray, A. (2002) *Formulaic language and the lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.

参考 URL

華東法政大学『華東法政大学作文コーパス』

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~sugimura/class/corpus/zhengfa.html> (2012年)

国立国語研究所 KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』 「少納言」

<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/> (2012年)

国立国語研究所 KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』 「中納言」

<https://chunagon.ninjal.ac.jp> (2015年)

国立国語研究所『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース オンライン版』 http://jpforlife.jp/contents_db (2010～13年)

東京外国語大学『日本語学習者言語コーパス』

<http://cblle.tufs.ac.jp/llc/ja/index...php?menulang=ja> (2012年)

中央研究院資訊科學研究所『中央研究所現代漢語語料庫』

<http://app.sinica.edu.tw/cgi-bin/kiwi/mkiwi/kiwi.sh> (2016年12月)

資料

資料1 中級 CLJ の作文 (第6章) で使用された機能動詞結合

- 注 1) 〈 〉 内及び下線は当論文執筆者付加
2) 作成者番号の右の数字は作文のタイトルを示す。

《国立国語研究所作文データベース》

- 作文テーマ： 1 「あなたの国の行事について」
2 「たばこについてのあなたの意見」

執筆者	機能動詞結合が含まれた文
SG 50-1	家庭でいろいろな <u>行事</u> をします。
	<u>大そうじ</u> をしたり
	新年の食べ物を <u>準備</u> します。
	毎新年か <u>充実</u> していた。
	ほうきは <u>家</u> を掃除をします。
52-1	日本とは大きく違った国に <u>変貌</u> し、その意味では・・・(後略)
	<u>一家団らん</u> すると、中秋のような
	月餅や果物類を <u>贈答</u> し合う。
	<u>観月</u> をするのばかりではなく
	<u>月見</u> したりする
53-1	親戚と友達の家 <u>に年始回り</u> をする
54-2	<u>妊娠</u> する女性はもしタバコを吸いすぎると、
	子供に <u>悪い影響</u> を与える
	たばこを吸う人より人体を <u>侵害</u> することが深刻だ
	テレビで <u>放送</u> できない
	大気汚染も <u>深刻化</u> になりました。
55-1	舟で <u>競そう</u> します。
	悪人に <u>迫害</u> されて、
	百姓は <u>龍舟競渡</u> をもって彼を <u>記念</u> します。
	毎年の端午節に、・・・(中略)・・・みんな <u>活動</u> を行います。
	彼は百姓に <u>尊敬</u> されました。
	五十人ぐらいはこのしあいに <u>参加</u> します。
	ほかの人は <u>応援</u> します。
	中国の伝統文化の一面を <u>具現</u> しています。

	はくしゅ喝采したり、
	氣勢をあげます
	汨羅江に <u>投江自殺</u> しなければなりませんでした。
56-2	子どもに <u>悪い影響を与える</u>
	テレビで <u>放送</u> できないようにするべき
	規則を作って <u>禁止</u> する
	たばこを吸われない権利を <u>邪魔</u> してはいけない
	個人権利を <u>重視</u> する世界
57-1	人人は <u>仕事</u> をしないで一家で
	若者は自分の好きな式で <u>旅行</u> したり
58-1	ラフースと他の支配者はこの漁村から、 <u>繁栄</u> しているしになります。
	シンガポールは1819年1月29日にスタフォード・ラフース郷を <u>創立</u> しました。
	シンガポールは <u>創立</u> するとき
	日本軍隊は・・・(中略)・・・それから三年まで <u>占領</u> しました
	シンガポールはいくつかの困難な政治の状況を <u>経験</u> しました。
	独立を <u>宣言</u> した。
	市役所の前の野で <u>パレード</u> をして終わりました。
	大統領は国民と本国の部分を行進して、
58-2	<u>生活</u> する人の健康もこわせます。
	規則には <u>賛成</u> します。
	自分の権利だけ <u>重視</u> したら、
	吸ったら、体の <u>損傷</u> ができます。
	他人の権利を悪く影響したら、
	<u>禁止</u> られるべきです。
59-1	それでは、私が <u>説明</u> しましょう。
	いろいろな <u>工夫</u> を凝してやっと一つの名案がありました。
	楚国は・・・(中略)・・・とうとう <u>滅滅</u> してしまいました。
60-1	毎年冬祭りを <u>行い</u> ます。
	中央通りで <u>行進</u> をします。
	川にのんびり <u>水泳</u> しています。
61-2	私にとって禁煙運動が全力で <u>支持</u> します。
	悩みが <u>解消</u> します。

	空気が <u>汚染</u> されます。
	<u>試験</u> をすると毎日スモッグの内の・・・(後略)
	いらいらするの気も持が <u>解消</u> します、
	専門家から <u>是正</u> します。
	<u>禁煙運動</u> がするの必要が十分にあります。
	<u>禁煙運動</u> しなければならない
	一件一件の事実は私たちにいろいろ <u>警戒</u> されます。
	環境、自然は私たちにいろいろ <u>警告</u> されます
	私は禁煙運動が全力で <u>支持</u> します。
	凶悪犯罪が <u>増加</u> します。
	〈犯罪が〉まさに <u>並行</u> して生じてきている
	世界は一人の世界ではなく、自本の感覚が <u>注意</u> するばかりでなく、みんなの ことと生存環境のことを <u>注意</u> しなければなりません。
62-1	親戚に <u>新年のあいさつ</u> をします。
63-2	<u>悪い影響</u> がある。
	全然 <u>禁止</u> できない。
	人の自由な権力を <u>保障</u> する
	人の自由な権力を保障するのを <u>強調</u> して・・・(後略)
	人権は「他の人の利益」に <u>制限</u> されなければならない。
	特別区」も <u>設置</u> する
	人々はすべて正常に <u>生活</u> できる。
	たばこを吸う人は <u>生殖</u> できない
	いつも絶対に <u>確定</u> する方がよい。つまり、万物は二つに分けられる。
	<u>宣伝</u> をすべきで、できるだけ
	一家は遅くまで <u>暢談</u> したりします。
	他の人に <u>悪い影響</u> しないうち・・・(後略)
64-1	花婿が <u>到着</u> した時・・・(後略)
	花婿はたくさんのお <u>辞儀</u> をして・・・(後略)
	両親にお <u>辞儀</u> をしてからお互いにお <u>辞儀</u> をします。
	三度の <u>御辞儀</u> をしていくつかのお金を包んで・・・(後略)
	彼女は <u>整理</u> する時ベットの・・・(後略)
	女性はベットを <u>整理</u> します。

	みんないっしょに <u>幹杯</u> します。
65-2	大人は子供に深く <u>悪い影響を残</u> しました。
66-2	テレビで <u>放送</u> できないように・・・(後略)
	ゲームを <u>選択</u> しますか？
	他人の生命に <u>危害を及ば</u> さない。
	まわりの人に <u>危害</u> を持ってくる
67-1	休みを <u>利用</u> して、家庭の成員・・・(後略)
68-1	政府が <u>許可</u> してから、・・・(後略)
	<u>割引</u> をすることを・・・(後略)
	漫才師、司会者は <u>出席</u> する。
	歌謡番組に <u>参加</u> する、
	指導者は <u>スピーチ</u> をする。
	テレビで <u>広告</u> する。
	<u>割引</u> することを紹介する。
	一番忙しいところは・・・(中略)・・・ <u>消費</u> をする所かもしれない。
	親戚は互に <u>訪問</u> する
	<u>食事</u> をする、
	自分の立派な <u>番組</u> をする。
	<u>割引</u> することを紹介する。
	記念日は・・・(中略)・・・正月よりずっと <u>重視</u> られる。
	一日中 <u>娯楽</u> をして、食事をする
69-1	織女は牛郎と <u>結婚</u> しました。
	愛いしている人にお祝いをします。
	王母娘娘は牛郎と織女は会うことを <u>阻止</u> するために、
70-2	自分を <u>制御</u> する
	例をあげて <u>説明</u> します。
	テレビで <u>放送</u> できない
	<u>禁止</u> する
	たばこが <u>燃焼</u> をする
	<u>公共行為</u> を行わなければなりません。
	犯罪の行為と言う言い方は <u>接受</u> できますか。
	権利を <u>強調</u> すぎです。

71-2	吸うことを <u>反対</u> する。
	気持ちを悪く影響して、・・・・(後略)
	一人でたばこを吸ってほかの <u>人</u> に影響しないのはまだ。
	健康に <u>有害</u> があって、公共の場所で・・・・(後略)
72-1	部屋を大掃除します。
	春節を準備しています。
JP 72-2	たばこの問題が解決できるかな
	子どもか青少年に悪い影響を与えるから
	テレビで放送できないように規則を作るべきです。
73-1	「春節聯歡晩会」と言う番組を <u>して</u> います。
	すばらしい番組を <u>して</u> くれます。
	赤旗がひらひらと翻る時、みなさん中国の強くに自分の <u>努力</u> をするはずでしょう。
JP 73-2	ストレスを <u>解消</u> したり、・・・・(後略)
	日本に住んで二年になってだんだん <u>理解</u> してきます。
74-1	閲兵儀式を <u>挙</u> 行しました。
	旗手は国旗を <u>けい</u> ようしました。
	歌と踊りで <u>おい</u> わいしました。
	国の独立記念日をお <u>い</u> わいしました。
	中国がさらに <u>繁</u> 栄するなります。
	最大な努力で中国を <u>建</u> 設して、・・・・(後略)
	軍隊と人民代表は天安門をあるいて国家領導に <u>検</u> 閲することをもらいました。
	よるは、天安門広場で文芸晩会が <u>挙</u> 行しました。
	儀仗隊はすばらしい <u>表</u> 演をしました。
75-1	<u>仕</u> 事などことを <u>し</u> ています。
	人々は春節の準備を <u>し</u> ています。
	全部の部屋は掃除して・・・・(後略)
	春節に送る <u>お</u> 礼を準備する。
	職業が特殊から、 <u>一</u> 家だんらんできない。
76-1	神様に <u>お</u> 願ひするにいきます。
	人人が <u>工</u> 作を <u>し</u> ないで、親戚や友達のところにお年始回りに出かけます。
	どう春節を過ごす <u>と</u> 紹介します。
77-1	人々は祝日を <u>重</u> 視してきます。

	皆さんに <u>紹介</u> しましょう。
	元宵節を <u>紹介</u> します。
	大人は庭で <u>月見</u> をします。
	経済が <u>発達</u> になる
78-1	大学生はこの <u>遊行</u> を <u>参加</u> しました、
	おいわいの <u>儀式</u> をおこなう
	30万群兵が <u>参加</u> しました。
	私は初めて <u>参加</u> したと思いました。
	天安門広場で <u>閱兵儀式</u> と <u>遊行</u> をおこないました、
	強い解放軍があると、私たちの国の <u>安定</u> がある
79-2	<u>意見</u> がすこし <u>あ</u> つてので、・・・(後略)
	では <u>発表</u> します。
	辺の人に <u>禁止</u> して吸いません。
	この問題について、いろいろな <u>建白</u> があります。
80-1	客たちにどのようなことをするのが <u>尊敬</u> してと思っています。
	自分で <u>醸造</u> するお酒・・・(後略)
	一家 <u>団らん</u> するのが象徴します。
	月を <u>観賞</u> しながら・・・(後略)
	中国人の感情を <u>表現</u> しています。
	〈中秋節の月が丸いのは〉一家 <u>団らん</u> するのが象徴します。
	男の人たちは女の人たちとおどって、 <u>対歌</u> します。
81-1	レストランを <u>連絡</u> したり、・・・(後略)
	<u>お祝い</u> する
	お祝いに多く <u>パーティ</u> をします。
	誕生日の人々は <u>パーティ</u> をするように・・・(後略)
	<u>パーティ</u> をすることは中国人の習慣になりました。
	<u>パーティ</u> に <u>参加</u> する人々は・・・(後略)
	<u>買物</u> をしたりします。
	中国人は誕生日にだんだん <u>注意</u> をします。
	中国人の誕生日を見ると・・・(中略)・・・中国人は大変形式を <u>注重</u> します
82-2	また社会に悪い <u>影響</u> を与えました。
	だんだん <u>多く</u> 生産しました。

	毒品のように <u>蔓延</u> してきました。
	毎日テレビで <u>放送</u> して、・・・・(後略)
	たばこを <u>禁止</u> する
	ちちは <u>感動</u> しました。
	ははもどうも <u>感動</u> しました。
83-1	<u>色色な準備</u> をします。
	人々に <u>たくさんの楽しみ</u> をあげます。
	<u>食事やおしゃべり</u> などをします。
	<u>食事をする</u> 前に・・・・(後略)
	<u>麻雀</u> をやります。
	自分の <u>おいのり</u> を友達に <u>あげ</u> ます。
84-1	お祭りを <u>ちょっとご紹介</u> いたします。
	<u>実現</u> したい夢を神様に頼んで・・・・(後略)
	お祭りについて <u>おしゃべり</u> をしたいと思います。
	「来年 <u>ご健康</u> いたします」
85-2	気体は環境に <u>汚染</u> しています。
	たばこを <u>禁止</u> するはずだと・・・・(後略)
	たばこを吸うことを <u>禁止</u> したほうがいい
	たばこを <u>禁止</u> するのは必要ですか。
	タバコを <u>禁止</u> することは・・・・(後略)
	<u>放送</u> を <u>禁止</u> する
	私は一番目の意見を <u>支持</u> しています。
	体は <u>生長</u> していて・・・・(後略)
	<u>放送</u> などの <u>影響</u> を受けやすいです。
	おとなの <u>影響</u> を受けして・・・・(後略)
	地球で <u>生活</u> をしていて・・・・(後略)
	この問題についての <u>激しい討論</u> があります。
	早く <u>解決</u> した方がいい
	今はよく <u>解決</u> していません。
	たばこは彼たちの肺に <u>悪い影響</u> を <u>酷く</u> しています。
86-2	社会にいろいろな <u>悪い影響</u> を与える
	たばこを <u>禁止</u> する

	女の人と子どもは男の人より <u>悪い影響</u> をうける
	たばこのコマーシャルはこどもに <u>わるい影響</u> を与える。
	こどもたちは、 <u>勉強</u> をしないし、
87-1	年長者はみなさんに次の一年の <u>要求を出</u> してくれます。
88-1	<u>掃除</u> をする
	<u>買い物</u> をするとか・・・(後略)
	ご飯を <u>準備</u> しています。
89-1	<u>掃除</u> をしたり、・・・(後略)
	<u>一家だんらん</u> します、
	春になることを <u>暗示</u> します。
	<u>お年しまわり</u> します
	みなさんは感情を <u>こうりゅう</u> します。

《華東政法大学》

- 作文タイトル：3 「アルバイトについて」
5 「私の好きな○○」
6 「インターネットと私の生活」
7 「友達への手紙」
8 「心を打たれたこと」
14 「学習到達度調査について」
15 「読書の方法」

執筆者	機能動詞結合が含まれた文
A-5	中国より、ここは・・・(中略)・・・ <u>ずっと</u> はやく <u>発展</u> していた。
A-6	私はすべてインターネットに <u>征服</u> された。
	インターネットを <u>利用</u> して、かたわらに自分を <u>保護</u> することも学びなさい。
	たぶん親人をお思いし友達を <u>思念</u> するし、あるいは自分の国の <u>おいがなつかしい</u>
	もっともっとコンピュータウイルスは生じられる。深刻的にインターネットの利用者の合法権利を <u>影響</u> する。
B-5	このドラマは <u>真実な物語</u> を <u>改作</u> して、小説や映画などの出版物がある。
	彼女を追い求めて、最後の <u>最後成功</u> する。
	あるひ、彼は電車で <u>邪魔</u> されている美人をたすけて、・・・(後略)
	友達の <u>激励</u> のもとに <u>勇気</u> を <u>かけ</u> て、彼女を追い求めて、・・・(後略)

	『電車男』の女主役も電車男の精神を <u>感動される</u> 。彼を愛するようになる。
B-6	ほとんど毎日インターネットを利用して、国内外のニュースを見る
	私はインターネットを利用して、売り買いをする
	私はよくインターネットで資源を <u>ダウンロードする</u> 。
	試験のモデルテストを <u>ダウンロードして復習した</u> こともある。
	いままで、私は何千圓の商品を <u>取り引きした</u> 。
	インターネットは私にこの世界の <u>ことをもっと了解させた</u> 。
C-5	原因といえば、私もはっきり <u>説明できない</u> 。
	バンドのことをいつも命に <u>して</u> いて、本当に <u>感動させられる</u> 。
	バンドのことをいつも命に <u>して</u> いて、本当に <u>感動させられる</u> 。 (注：同一作文に上の例と全く同じ文が書かれていた)
C-6	ソフトやドラマを <u>ダウンロードする</u>
	パソコンのスイッチをつけて、 <u>リンクをして</u> メールを書いたり、・・・・(後略)
	メールを書いたり、友達たちと <u>チャット</u> したりします。
	インターネットでさまざまな情報を <u>アクセス</u> できます。
D-5	歌で自分を <u>リラックスさせるのは大事だ</u>
	動画の内に、「 <u>暁の車</u> 」は特色があつて、そかの歌と異なる。これは自分の心を <u>浄化れる</u> と言える。
D-6	インターネットは、・・・・(中略)・・・・、 <u>情報を発信</u> できる。
	私はいつもインターネットをして、・・・・(後略)
	ほしいものを速く <u>ダウンロードする</u> のは一番の利点である。
	歌やアニメなどを <u>ダウンロード</u> したりする。
	もし、ウイルスがあれば、システムを <u>影響</u> する。
	パスワードを盗まれるのは心配である。・・・・(中略)・・・・私もインターネットにおいて <u>問題を注意</u> すべきである。
E-5	彼女らは努力を <u>通</u> って <u>成功</u> しました。
	大きな目標に向かって果敢に <u>チャレンジ</u> する
	いくら <u>失敗</u> しても <u>勇気</u> を失りません。
	困難を向かって <u>努力</u> しています。
	彼女らは <u>努力</u> を <u>通</u> って <u>成功</u> しました。
	私はふたりがいつでも力を入れることを強く <u>感じ</u> があります。
E-6	電子メールや <u>ダウンロード</u> した時・・・・(後略)

	資料などを <u>ダウンロード</u> する
	プライバシーの侵害が <u>問題</u> になる。
	音楽を聞きながら <u>ゲーム</u> をする。
	<u>リラックス</u> して気分がいい
	インターネットは・・・(中略)・・・よく <u>処理</u> さえすれば、
	コンピュータウイルスを <u>感染</u> するのは可能性がある。
	インターネットでニュースと TV まで現場の放送で見ることができる。コンピュータは TV のように <u>採用</u> させる。
	人はインターネットの安全を <u>心配</u> する。
	インターネットは・・・(中略)・・・よく処理さえすれば、 <u>安全の確保</u> して大きい収穫がある。
	これ〈インターネット〉は私の生活に大きい <u>働き</u> を果たす。
G-5	生徒たちは先生の手伝いとおりに、 <u>卒業</u> してしまいました。
G-6	<u>インターネット</u> をすることは私の趣味である。
	<u>インターネット</u> をしたら、世界の情報にアクセスできる
	私はいつもインターネットをして・・・(後略)
	世界中の情報に <u>アクセス</u> できる
	インターネットがあつたら、友達と <u>連絡</u> することができる。
H-5	文章は長くないが、 <u>洗練</u> された文章ですから、・・・(後略)
	人生の中に可能性が満ちていて、誰でも <u>成功</u> できます。
	私は・・・(中略)・・・この本を読んだあと、 <u>大きな変化</u> を起しました。
H-6	インターネットは、個人が世界中の情報に <u>アクセス</u> できたり・・・(後略)
	インターネットは・・・(中略)・・・容易に世界へ情報を <u>発信</u> できたりして、大きな意義がある。
	家を出ずに <u>購入</u> する事が出来る
	この道具をうまく <u>利用</u> する同時に・・・(後略)
	コンピューターの画面でマウスを <u>移動</u> すると、・・・(後略)
	インターネットサービスも <u>高度発展</u> しているのである。
I-5	〈機能動詞結合使用無〉
I-6	インターネットで <u>ダウンロード</u> できる。
	中国人の生活レベルが <u>アップ</u> しているにつれて、・・・(後略)
	インターネットは、新しい生活方式として、われわれの生活に非常に <u>影響</u> した。

J-5	タイタニックは海の底に <u>沈没</u> してしまいました。
J-6	インターネットというのはパソコンで世界中の情報を発信できる手段だと思う。
	新しい映画を <u>ダウンロード</u> することができる。
	ウェブ友達と <u>チャット</u> をしたりします。
	インターネットが <u>発展</u> するにつれて、・・・・(後略)
	ウイルスやクラッカーに <u>侵入</u> されたことがある。
	法律が <u>施行</u> されべきである
	私は <u>心配</u> なく、喜んでインターネットをうまく <u>利用</u> できる
	この映画は悲しくて、 <u>感動</u> された故事を描かれています。
K-5	この時期で <u>成長</u> した若い人・・・・(後略)
	革命運動に <u>参加</u> した時・・・・(後略)
	この本は・・・・(中略)・・・・ロシアの社会主義革命時期の社会状態を <u>摘写</u> られました。
	後で <u>革命</u> していた長い時間に、・・・・(後略)
	いろいろなことをわかるようになってきて、とても <u>感心</u> でした。
K-6	私たちはいつも <u>注意</u> するように〈コンピュータを〉使うべきである。
	インターネットは私たちに便利をくれると同時に、さまざまな <u>問題</u> を起させる
	その <u>便利</u> な利用するにつれて、・・・・(後略)
	たくさん問題が出てくるので、ときどき <u>悩む</u> 感じが出きる。
	大変なのはコンピューターウイルスだと思う。その時に、コンピューターのシステムを <u>破壊</u> られで、・・・・(後略)
	その問題に対して、私は <u>措施</u> をつかわなければならない。
M-5	この本はクイルの一生を <u>紹介</u> した。
	クイルのもど主人が <u>入院</u> したから、・・・・(後略)
	三年前、一匹の犬は <u>感動</u> された。彼の名前は「クイル」、本の名前と同じようだ。
	最後、七年ぶりに彼らは <u>会</u> した。
M-6	インターネットで <u>登録</u> する時 <u>連絡</u> 先を書いた
	好きな音楽を <u>ダウンロード</u> したりした。
	私はインターネット上で個人情報を書かなくて、とても <u>注意</u> する。
	インターネットで <u>おしゃべり</u> たり、・・・・(後略)
	インターネットは本当に便利だと言う <u>感覚</u> を持っていた。
N-5	死ぬまで自分の信念を <u>堅持</u> するのは大事なこと

	彼〈映画の中の武士〉の信念はやっと天皇陛下に <u>感動</u> させて、・・・・（後略）
	私はずいぶん <u>感心</u> している
	とんな社会になるのがとても <u>心配</u> している。
N-6	以前と比べると、半分以上の時間を <u>節約</u> して、とても速く、・・・・（後略）
	今はインターネットで <u>検索</u> して・・・・（後略）
	最新事柄に対する他人と <u>交流</u> して、・・・・（後略）
	短所をさけて、長所を <u>発揮</u> する
	以前、資料など <u>需用</u> する時、本屋や図書館に行かなければならなかった。
	他人の <u>観点</u> を <u>参考</u> すると、・・・・（後略）
	人間に巨大な <u>発展</u> を <u>あげ</u> られると思う。
O-5	同年齢の子供とくらべると、ずっと <u>不幸な生活</u> をしています。
	ドラマを見るとおして、人生の百味を <u>体得</u> することができる
	このドラマは悲劇ですが、ほんとに <u>感動</u> されました。
O-6	電子メールやファイルの <u>転送</u> ができる
	ウェブというサービスも <u>利用</u> できる。
	<u>インターネット</u> を <u>する</u> と、資料はすぐ山のように・・・・（後略）
	又は両親は <u>出張</u> する時に、・・・・（後略）
	インターネットがあれば、両親と <u>おしゃべり</u> することができる。
P-5	〈この本は・・・・〉いろいろなことを <u>描写</u> して・・・・（後略）
	作者の想像力を <u>感心</u> します。
	でも <u>成長</u> につれて、本の内容をよく <u>理解</u> になりました。
P-6	私は世の中で <u>生活</u> していて、・・・・（後略）
Q-5	『SD』のアニメは上海で <u>放送</u> されているうちに・・・・（後略）
	この作品はどんな働きがあるか、どんな <u>流行</u> したかがはっきり見える。
	過去の優勝者に向けても絶対にあきらめない粘り強い意志に <u>感心</u> された。
Q-6	インターネットは情報を <u>伝播</u> する手段として、・・・・（後略）
	見たいアニメがそれから <u>ダウンロード</u> できる。
	でもゲームオンラインはほとんど <u>しない</u> 。
	コンピュータを何度も <u>修理</u> させられた。
	ウイルスも知らないうちに <u>感染</u> する。
	〈インターネットを利用すれば〉CDや本の <u>発売</u> することを待つ必要はない。
R-5	この歌を聞くたびに、私は人生や生活に自信を持って勇気がみちている。 <u>生活</u> を

	するにつれて、この歌の影響はもっと大きくなった。
R-6	よく利用すれば、きっとたくさんの知識を受けて、・・・・(後略)
	インターネットをしているのうちに・・・・(後略)
	科学技術が <u>進歩する</u> につれて・・・・(後略)
	インターネットで <u>ショッピング</u> をする
	いい先生がやっている <u>授業</u> を受ける
S-5	物語の世界を <u>暗示する</u> ような「桐壺」、「夕顔」などという名前がつけられています。
	近代の作家に <u>大きな影響</u> を与えてきました。
	<u>平安時代の宮廷貴族の生活する時</u> 、私たちの頭の中に先ず浮かぶのは、「源氏物語」の世界・・・・(後略)
S-3	社内での仕事を <u>経験</u> してもらう・・・・(後略)
	会社に必要な社会経験もある程度 <u>把握</u> できる
	勉強に <u>影響</u> を与えないことを前提として、適当なアルバイトで・・・・(後略)
	将来のために <u>応用</u> できる経験を積み重ねる
	(アルバイトは)正式契約を締結することではなく、給料がタイムリーに計算されている非正式社員・・・・(後略)
	バイトで生活も <u>自立</u> できるし、ご両親のお疲れさも分かってくる、
	<u>経験</u> を持っていない新卒に対しての就職難が実情です。
T-15	作品の持つ意味をよく <u>深く理解</u> していた。
	一文ごとに <u>分析</u> するとおりに、読書の感じも次第に・・・・(後略)
	速くたくさん読むほうがいいのよみかたに <u>賛成</u> する。
	他人の経験を <u>吸収</u> して、自分のものとするのは値打ち・・・・(後略)
	この読み方がもっと私達に <u>適合</u> する。
U-5	勉強を続けると <u>決心</u> する。
	彼女の勇氣と品質に非常に <u>感動</u> させられる。
	私ももっと真面目な態度で勉強したり、 <u>生活</u> したりしている。
U-6	社会はずいぶん <u>発展</u> するにつれて・・・・(後略)
	小学校の時、始めてインターネットと <u>接触</u> したから、ずっと・・・・(後略)
	メディアを <u>利用</u> している。
	大事なのは <u>適当</u> に <u>利用</u> することで、これからもっと <u>注意</u> しようと思う。
	インターネットも広く <u>応用</u> られている。

V-5	彼の <u>生活</u> した時代において、変な人だと思われた。
	これはわたしは一番 <u>感動</u> させられたところである。
	まわりの人に <u>理解</u> されなかったであろう
	自分にふさわしい道を賢明に <u>選択</u> するのはもっとも重要である
V-3	ひまな時間を <u>利用</u> して家庭教師をする
	アルバイトが <u>勉強</u> する時間を占めたり、・・・(後略)
	<u>アルバイト</u> をすれば、いろいろな <u>社会経験</u> が取れます。
	アルバイトは学習に <u>不良な影響</u> があると思っている人もあります。
	〈アルバイトは〉時間をよく <u>安排</u> すれば、学生の成長にいい
	アルバイトが <u>勉強</u> する時間を占めたり、疲れたりすることを <u>心配</u> しています。
	学生を <u>教え</u> しながら、 <u>交流</u> の能力があがっています。
W-11	宿題が <u>終わった</u> あとの時間とか、 <u>読書</u> によく <u>利用</u> された。
	〈読書は〉 <u>間接的に</u> 別の人の人生を <u>体験</u> して、・・・(後略)
	〈読書は〉さまざまで、 <u>多くの示唆</u> をもらうことである
W-14	経済開発協力機構は、・・・(中略)・・・ <u>学習到達度調査</u> の結果を公表した。
	西洋は現代化のプロセスが東洋より早かったから、子供の教育は全面的な <u>の</u> を <u>注</u> 意したり、 <u>重視</u> したりする
	科学的応用力には第一位の <u>位置</u> するのはフィランド、日本、韓国である
	東洋は・・・(中略)・・・子供の教育はもっと科学的な応用力を養うことを <u>注</u> 意する。
X-5	張さんと奥さんが山頂で <u>見物</u> している時・・・(後略)
	目標に向けて、果敢に <u>チェンレンジ</u> しよう。
	『感動の一刻』という文章が印象に残り、とても <u>感動</u> させられた。
	なんと <u>感動</u> させられるだろう。
X-6	インターネットを使うと、世界中の大事であろうと、小事であろうと、みな <u>了解</u> できる。
	さまざまな研究が <u>発展</u> し、時代が移り変わっている。
	人間により <u>便利</u> な生活を送らせている。
	インターネットに <u>注文</u> することができるようになった。
	<u>注文</u> したら、本や雑誌など住宅に届けてくれる。
	友達と <u>チャット</u> するとか・・・(後略)
	ストレスが <u>解消</u> できて・・・(後略)

	私はうまく <u>利用</u> しなくてはならない。
Y-4	日本語専攻している私たちにとって・・・(後略)
	英語は必修科目として、特に <u>関心</u> されています。
	就業問題がどんどん <u>深刻化</u> になってくるので、・・・(後略)
Y-6	インターネットを <u>利用</u> し、一番新しい出来事、・・・(後略)
	確に生活に役立っているから、広く <u>利用</u> されている。
	<u>工夫</u> して考えなければならない。
	インターネットは私の生活に役だつとともに <u>悪い影響</u> をかけてくる。
Z-6	この豊さや便利さは必ずしもよいこととは限らない。 <u>依頼</u> しすぎるようになるであらう。小説もインターネットで読むとか、人との交流もこれですとか、
	<u>恋い</u> をする人もいる。
	人との <u>交流</u> もこれです
Z-7	〈おじいちゃんは〉うれしくて、 <u>緊張</u> したそうです。
	<u>結婚</u> することは姉さんの一生の中大切なこと・・・(後略)
	姉さんの結婚式に <u>参加</u> するために、・・・(後略)
	おじいさんはちゃんと顔を洗ったり、 <u>ヘアスタイル</u> をしたり、西服を <u>整理</u> したりして・・・(後略)
	私はこの様子を見て、 <u>感動</u> しました。
	おじいさんは長生きで、 <u>幸福な生活</u> していきますよ。

《東京外国語大学》

- 作文のタイトル： 1 私の失敗談
2 私の長所と短所
3 日本語学習の理由

執筆者	機能動詞結合が含まれている文
1-1	李さんのご家族を <u>紹介</u> したりしました。
	ご両親が <u>準備</u> しておいた料理を食べました。
	<u>おしゃべり</u> をしながら <u>食事</u> をしました
	周りの人に <u>迷惑</u> を掛けないし、・・・(後略)
	私は高校生のとき、一つ <u>失敗</u> した
	北海道へ行って撮った写真を見ながらその時の <u>感じ</u> がしました。
	日本関連の仕事をする <u>希望</u> を <u>頑張</u> っています。

	<u>日本語会話の練習</u> しながら、話の技巧も習います
1-3	ふだんは日本によって <u>製造される</u> ものが注意します。ただ上に日本語を書いているものさえ気にします。
	学校のテストのために、 <u>日本語の勉強</u> をする
	なぜ <u>日本語の勉強</u> をするのか・・・(後略)
	一番好きな日本語を <u>勉強</u> しています。
	日本に興味があっているからと答えます。
	ふだんは日本によって製造されるものが <u>注意</u> します。ただ上に日本語を書いているものさえ気にします。
	専門家になって、日本関連の <u>仕事</u> をする
2-1	友達と喫茶店でおしゃべりしました。
	真剣ではなければ、 <u>成功</u> することができません。
	<u>努力</u> でさえすれば、・・・(中略)・・・何でもできる
2-2	<u>アルバイト</u> するのは日本語料理屋で助手をしています。
	私は日本に <u>留学</u> したいです。
	私は日本語が上手ではありませんから、お客さんに意思を疎通するのはちょっと難しいです。よく <u>挫折</u> させられます。
	学校のおしゃべりコーナーに <u>参加</u> します。
	私は日本語が上手ではありませんから、お客さんに意思を <u>疎通</u> するのはちょっと難しいです。
	もっと <u>進歩</u> することを目指して・・・(後略)
	会話の技巧を <u>進歩</u> したいです。
	料理を <u>紹介</u> するは必要です。
4-1	毎日、皆さんは <u>練習</u> しています。
	よく各地の試合に <u>参加</u> しました。
	一回 <u>失敗</u> するのがすべて一回 <u>成長</u> するのです。
	<u>成長</u> すれば、 <u>成功</u> します。
	決勝戦の時に手が <u>怪我</u> したにも関わらず、
	その失敗から学んだことは自分を <u>無理</u> しないことです。
	<u>無理</u> して <u>出場</u> をして試合に負けた。
	一生懸命バレーボールを <u>練習</u> しました。
4-3	私は <u>休学</u> することにしました。

	日本で一週間 <u>旅行</u> しました。
	日本語学科に合格して結びますから、
	もう一年日本語を勉強しました。
	私は日本語を勉強する道を歩んでしまったのです。
	これが自身の選択する道なためです。
	私はあれ〈理工科専攻〉が私の興味のありかではないことを発見します
	毎日でとに満ち溢れて性を挑戦します。
	休学の時、毎日はずちでテレビを見ましたから、
	私は日本語学科を読みたいですから、私は再び試験しようと思います。
6-1	失敗に直面する
	英語のスピーチに出場することを決めました。
	ぜんぜん出場しないと思います。
	しかたがない、私は参加しました。
	毎日、スピーチのために練習しました。
	私は緊張して、何も話しなかった。
	私は一つ大失敗をやりました。
	高校時代に試験を勉強しなかった、
6-2	初めて国へ旅行するのは英国です。
	あまり家事をしたくありません。
	父は私を外国へ短期留学します。
	私は自分の長所を増進して、自分の短所を変えたいです。
	私の気持は緊張で、怖いです。
	私は勤勉につけることができ、・・・・(後略)
7-1	うちの近くの塾でアルバイトをしました。
	お客様に電話をかけること・・・・(後略)
	もし仕事をする前に、もう一回内容を確認したらミスがすくなくなります。
	もっと注意すれば、間違えないでしょう。
	とでも簡単なことさえも失敗しました。
	上司にお迷惑をかけました。
7-3	日本語を勉強すればするほどおもしろかったと・・・・(後略)
	いくら練習してもよく間違えます、
	私は将来日本へ留学するつもりです

	もっと頑張ります、 <u>努力</u> さえできれば、何でもできるでしょう。
8-1	いろいろなことを <u>経験</u> しなければなりません。
	今までの人生で <u>経験</u> した一番大きな失敗・・・(後略)
	去年 <u>ダイエット</u> しました。
	でも <u>運動</u> しないし、 <u>飲食</u> を <u>制御</u> しないし、結局私の体重は <u>変化</u> していませんでした
	失敗から学んだことは、 <u>努力</u> さえすれば、きっと <u>収穫</u> があります。
	日本語の朗読コンテストに <u>参加</u> して、・・・(後略)
	週に2回を <u>練習</u> しました。
	第5位を <u>獲得</u> しました。
	失敗はあなたが敗者なことを <u>意味</u> しない
	失敗はあなたがまだ <u>成功</u> していません。
	努力が足りないから、 <u>失敗</u> しまいました。
8-2	知らない人と話をするのは <u>緊張</u> していることができます
	「あなたはきっとこの短所を <u>克服</u> します」
	この目標のために、私は一生懸命 <u>頑張</u> っています。
9-1	できるだけ <u>練習</u> しました。
	毎日一生懸命 <u>練習</u> しました。
	毎日 <u>練習</u> していました
	<u>練習</u> すればするほど自信が持っていなかった。
	<u>努力</u> しなければ、何もできない
	<u>自慢</u> しない方がいい
	これからも <u>自慢</u> しないように、 <u>注意</u> しています。
9-3	クラブに <u>入部</u> しました。
	あのドラマを見たり、 <u>発音</u> をまねしたりするです
	繰り返し <u>練習</u> して、・・・(後略)
	今もつづけて <u>勉強</u> しています。
	日本語を <u>勉強</u> すること <u>後悔</u> しないで、・・・(後略)
	物語を <u>ディスカッション</u> をしたりするです。
	話す時発音がすごくきれいし、クリアし、 <u>感心</u> られました。
10-1	買っての <u>後</u> で、私が <u>後悔</u> しました。
	<u>節約</u> しなければ、 <u>失敗</u> します。母はいつも「自分金銭の管理は大変です」と言い

	ました。
	<u>仕事をする時</u> 、お金を使いすぎますと <u>儲金</u> しません
	私はお風呂に入って、水を <u>浪費</u> します
	私は冬休みに <u>アルバイト</u> をしようと思います。
	私はいろいろ物が好きですか <u>買いません</u> しようと思います。
	それは、 <u>私の失敗</u> ことです。
10-3	そして日本語の <u>学習</u> をした決めました。
	その関係の <u>仕事</u> をしたいです
	アニメ関係の <u>仕事をする</u> 実現ために、日本語は頑張ると思っています。
	日本の漫画「ワンピース」はとてもぬっけつと <u>感動</u> します。
11-1	ずっと <u>下宿</u> しています
	<u>宿題</u> をするため、私が専用のコンピューターも・・・(後略)
	「気を付けるかどうか、物事の成敗に <u>大きく影響</u> してます」
	私の不注意である <u>失敗</u> を起こしました。
11-3	日本語に <u>興味</u> を持つようになりました
	何のために日本語を <u>勉強</u> するのが全然わかりませんでした。
	なぜ日本語を <u>勉強</u> するのか。
	<u>卒業</u> したら、何かやりたいですか。
	この思いを <u>実現</u> するために日本語は欠かせない
	日本文化の <u>うつくしさ</u> をみんなに <u>紹介</u> したいですから、・・・(後略)
	日本へ <u>留学</u> するですか。
12-1	家族と <u>相談</u> しました。
	<u>後悔</u> しました。
	今から <u>後悔</u> しないように
	<u>後悔</u> するのを <u>ぜったい</u> にしません。
	私の <u>失敗</u> したことは興味がない学科を選びました。
12-3	日本語を <u>勉強</u> することにしました。
	もう一年間に日本語を <u>勉強</u> しました。
	読めるために、日本語を <u>勉強</u> します。
	暇な時、よく <u>テレビゲーム</u> をします。
	歌の内容の意味が分りませんから、 <u>感動</u> できません。
	自分で <u>翻訳</u> することと・・・(後略)

	日本へ <u>留学しよう</u> と思います。
	<u>努力</u> さえすれば、 <u>実現</u> できるだろう
13-1	そして、 <u>怪我</u> をしました。
	でも、 <u>試合</u> をしたかった
	人は新しい <u>経験</u> をするたびに、何かを学びます。
	一度や二度 <u>失敗</u> したからといって、あきらめては・・・・(後略)
	いろいろな事を <u>注意</u> したかどうかにより、結果も違う
	バドミントを <u>練習</u> する時、・・・・(後略)
13-2	気持ち悪い時、一人で <u>散歩</u> して・・・・(後略)
	とても <u>充実</u> しています。
	<u>宿題</u> をして、 <u>部屋</u> を <u>掃除</u> して、本を読みます。
	長所は現状を <u>維持</u> しますが短處は <u>改善</u> します。皆さん、一緒に頑張ってください。
	いろいろな用事を <u>発生</u> します。
	旅行の時、・・(中略)・・いろいろな新鮮なことを <u>発生</u> します。
14-1	その失敗経験は本当に <u>大きな影響</u> をあたえました。
	結局は多分 <u>失敗</u> することになります。
	成績を見たとき、すぐ <u>後悔</u> しました。
	いくら <u>後悔</u> しても、 <u>挽回</u> できませんでした。
	試験があるたびに、 <u>真剣</u> に <u>勉強</u> しました。
	何を <u>獲取</u> する前に、 <u>努力</u> することが必要です
	一生懸命 <u>勉強</u> することです。
	子供のときから <u>いろいろな失敗</u> したことがありました。
	このことから <u>失敗</u> したことが分ります。
	私は時々 <u>絵画</u> を <u>練習</u> するかわりに、毎日遊びました。
	何を <u>獲取</u> する前に、 <u>努力</u> することが必要です
	父は私に高校の美術クラスの <u>入学試験</u> に参加させられました。
14-2	私は <u>ダイエット</u> を <u>する</u> と思っていました。
	私はいつも熱やすく冷たやすい。ダイエットを三日後で、私はやっぱり <u>放棄</u> しました。
15-1	<u>努力</u> しなければ、 <u>失敗</u> するかもしれないでしょう。
	<u>失敗</u> しても気にしないで、・・・・(後略)
	コーラスの活動に <u>参加</u> しました。

	授業の時も先生に <u>注意</u> しても気にしませんでした。
	授業の後で <u>練習</u> しました
	私は一生懸命 <u>勉強</u> することにしました
	グループとレポートを <u>相談</u> する時、・・・・(後略)
	資料を探したも <u>努力</u> しませんでした
	<u>成功</u> するためには努力は必要です。
	テストや宿題が全然 <u>準備</u> しませんでした
	今度もっと <u>頑張り</u> しようと思っています。
15-3	ドラマは私が日本語を <u>勉強</u> するの持ったきっかけです。
	日本語好きなので、日本語を <u>勉強</u> しようにします。
	日本語を聞いて、 <u>勉強</u> します。
	私は <u>感心</u> しています。
	その時、私は日本語の <u>勉強</u> に <u>決心</u> がついています。
16-2	日本語学科で <u>勉強</u> するつもりで
	一年間 <u>浪人</u> して予備校に通う
	日本語を <u>専攻</u> するしかありませんでした。
	自主的な学習態度が <u>要求</u> され、・・・・(後略)
	先先に <u>質問</u> されることが多く、生きた心地が・・・・(後略)
	先生に <u>質問</u> されるのが嫌で・・・・(後略)
	自分の内向的で消極的な性格を <u>改善</u> します。
17-1	話す時、大変 <u>緊張</u> しました。
	家族と日本へ旅行に行きました。専攻は日本語だから、みんなは <u>依頼</u> されました。
	間違いが犯さないために、大変 <u>プレッシャー</u> をかけました。
17-2	よくお酒を飲むに <u>デート</u> へ行きます。
	最後に、 <u>いい</u> アドバイスをあげてから、彼女を気になっていきます。
19-1	<u>成功</u> する前に、みんなぜひ失敗があります。
	私は一度 <u>成功</u> しました。
	成功なら、私たちも中で <u>成長</u> できると思います。
	自分で <u>練習</u> しました。
	<u>練習</u> する時、私は一度成功しました。
	いい <u>経験</u> を覚えられました。
	私は <u>成功</u> しようにと思いました

19-2	〈私は〉 <u>自立</u> していく長所があると思っています
	目標が <u>達成</u> できたら、それが自信になる
	目標が是非 <u>達成</u> できます。
	時々一人は <u>ショッピング</u> ができます。
	そして時々 <u>迷惑</u> が掛けます。
	私は <u>自立</u> です。
20-1	毎日 <u>真面目</u> な練習したり、一生懸命 <u>準備</u> しました。
	<u>暗記</u> しなければなりませんので・・・(後略)
	試験中は <u>緊張</u> するんです
	<u>失敗</u> したので、もう一つ <u>経験</u> を習ったと思っています。
	<u>成功</u> したければ、 <u>努力</u> が唯一の方法だと・・・(後略)
	毎年9月も <u>試験</u> に参加しました。
	6級数の <u>試験</u> に参加するために・・・(後略)
	もう一度同じの <u>試験</u> に参加した、
	メロディーは難しうえに暗記しなければなりませんので、時々 <u>放棄</u> だと思っています
	試験中は緊張するんですから、 <u>不合格</u> してしまいました
	根気がなければ、 <u>失敗</u> してしまいました
20-2	毎日 <u>練習</u> しています。
	学校の水泳試合が <u>参加</u> しました、
	〈水泳の〉全国大会への出場のために、頑張っています。お母さんはよく、好きことをあくまで <u>主張</u> してくださいと言います。
	成績も段々悪くなる。時々 <u>放棄</u> すると思いますの時、お母さんの言葉を思い付く。
22-1	プールで <u>アルバイト</u> しました。
	<u>怪我</u> もしてしまいました。
	<u>怪我</u> をしたので、アルバイトをしばらく・・・(後略)
	バイクも <u>修理</u> して送られました。
	気を付けて <u>運転</u> しなければならない
	今では、速く <u>運転</u> するのをしていません
	今、思い出して本当に <u>後悔</u> してました。
23-3	先生は皆に間違い所を一つ一つ <u>解説</u> しました
	まず、 <u>予習</u> して、単語も事前に覚えます。

	新しい文型を <u>学習し</u> やすくなる
	授業の後、 <u>復習</u> します。
	目標があり、 <u>だんだん実現</u> したら、自信もあるし・・・(後略)
	先生は講義の進捗のために、学生たちに自分で <u>訂正</u> させました。
	いつかの発音を <u>練習</u> して、できれば本文を覚えます。
	先生に出し宿題とテストを準備して、 <u>全部完成</u> してしまいます
	人々は自分の学習方法があります。ちゃんと <u>遵守</u> したら、成績が絶対・・・(後略)
	<u>勉強</u> することは面目になる
	<u>テストを準備</u> して・・・(後略)
24-1	よく <u>気</u> をつけなかったので <u>失敗</u> した。
	私はバスの番号を <u>確認</u> しませんでした
	番号を <u>確認</u> して覚えます。
	教室も <u>きっと確認</u> します。
	他の学科の学生と一緒にしばらく <u>練習</u> した
	コーラスコンテストのために先輩達は私達に <u>練習</u> を行いました。
24-2	やる <u>気</u> があれば、一つのことに <u>集中</u> できます。
	たとえば <u>スポーツ</u> をする。
	私は昔から <u>家事</u> をあまり <u>し</u> ません
	勉強は大切ですか、一番のは <u>楽しいに生活</u> をすることです。
25-1	高校三年生の時、 <u>アルバイト</u> を <u>し</u> ました。
	経験を取るために、 <u>アルバイト</u> を <u>し</u> ました。
	塾で <u>アルバイト</u> を <u>し</u> ました。
	でもその <u>仕事</u> はあまり <u>でき</u> なかったです。
	始めに <u>電話</u> を <u>掛</u> けた時、お客さんと話す
	人に <u>迷惑</u> をかけないように、・・・(後略)
	お客さんに <u>電話</u> を <u>し</u> ました。
	お客さんに <u>電話</u> を <u>する</u> ことは・・・(後略)
	何回も練習して、 <u>勇気</u> を <u>出</u> して、・・・(後略)
	締めないで <u>努力</u> する <u>こと</u> は大切なことです。
	難しい問題や興味がないことがあった時、 <u>解決</u> する <u>勇気</u> がなくて・・・(後略)
	あまり <u>成功</u> したことがないです。
	締めなければ、 <u>きっと克服</u> して、 <u>完成</u> できると思います。

	<u>勇気を出して</u> 、やっとお客さんと少しずつ話す
25-3	台詞の意味を <u>理解</u> するために・・・・(後略)
	私は日本に <u>興味</u> を持ってから・・・・(後略)
	自分で日本語を <u>勉強</u> します。
	上手にたいと思いますから、日本語を <u>勉強</u> します。
	日本人と <u>いい交流</u> ができるために、一生懸命 <u>勉強</u> しなければなりません。
	日本語をちゃんと <u>勉強</u> しなければならない
	日本語は <u>勉強</u> すればするほど難しい
26-1	ある日当直として <u>掃除</u> した時、・・・・(後略)
	昼寝に一度 <u>掃除</u> しなければなりません。
	誰でも <u>掃除</u> しない時、・・・・(後略)
	掃具を持って <u>掃除</u> しました。
	私は早速 <u>掃除</u> して早く寝ようと思います。
	黒板を <u>掃除</u> 初めます。
26-2	私の短所は <u>緊張</u> しやすいとちょっと固いです
	<u>緊張</u> しやすいの私はとても <u>心配</u> しやすくなります。
	友達が <u>遅刻</u> したら、私はふんぷんしました。
	友達に <u>注意</u> して忘れなければならない宿題を書きます。
	一緒に <u>卒業</u> しよう。
	私は <u>自信</u> が持っているのこともその原因で、・・・・(後略)
	最後、短所を <u>束縛</u> なくて、積極的な態度で自分自身だけ持っている長所を <u>捜</u> し まってください。
	友達に <u>注意</u> して忘れなければならない宿題を書きます。そして、彼らの生活の近 況も <u>関心</u> します。
	〈友達と〉一緒に四年の <u>大学の生活</u> を過ぎ終わることを望みます
27-1	「 <u>準備</u> しなければ <u>成功</u> することはできません」
	なるべく <u>準備</u> したほうがいい
	歌コンテストに <u>参加</u> したか、 <u>練習</u> しなかったから、すぐ負けてしまいました。
	作文コンテストに <u>参加</u> しました。
	毎日作文を書いて <u>練習</u> しました。
	「 <u>練習</u> しなくても自分は絶対大丈夫」
	「 <u>失敗</u> したくないなら、なるべく <u>準備</u> した方がいい」

	あれこれ <u>後悔</u> しても、しかたないです。
27-2	心の中でとても <u>緊張</u> して、困っています。
	いろいろな情境を <u>想像</u> しても、声が全然出ませんでした。
	いつも真剣に <u>練習</u> します。
	〈コスプレを〉新しいキャラクターがある時、私はきっと一生懸命 <u>完成</u> します。
28-1	準備が足りませんと <u>関係</u> があります
	中間テストの一週間前に、 <u>勉強</u> する
	私はもう十八年ぐらい生きました。いろいろな <u>失敗</u> を受けました、たびに失敗時「根気が足りません」と <u>関係</u> があります。
28-2	タバコを吸うことも弱い人を苛めることも、何でも責任を <u>回避</u> しました。
	私の人と付き合いの問題は <u>解決</u> しました。
	いつもクラスの中で少なくとも人と <u>交流</u> しています。
	苦手なことは人と <u>交流</u> します。
	人と <u>交流</u> するのは私の長所です。
29-1	声は小さくて、すぐ <u>返事</u> するも遅いです。
	あの性格を目指して、 <u>努力</u> したいと思います。
	今少し <u>熟練</u> していたことがあります。新しい学期で、私は彼らにどのようにお茶を入れるように教えることができます
	〈茶道の〉ティーパーティーの中で <u>出演</u> します。
	私はこの目標に向かうことができ、引き続き <u>前進</u> します。
	無口な個性を <u>改善</u> するため
	私はきっと <u>自信</u> 心を育成しなければなりません。
29-2	人前で話をするにはできません。でも、今時はしだ <u>改善</u> しています。
	無口な個性を <u>改善</u> するため、私は・・・(後略)
	声は小さくて、すぐ <u>返事</u> するも遅いです。
	<u>努力</u> したいと思います。
	持続的な努力の練習を経ますから、今少し <u>熟練</u> していたことがあります。

資料2 上級 CLJ の作文（第7章）で使用された機能動詞結合

- 注 1) 〈 〉 内及び下線は当論文筆者付加
 2) 作成者番号の右の数字は作文のタイトルを示す。

《国立国語研究所作文データベース》

- 作文のタイトル：1 「あなたの国の行事について」
 2 「たばこについてのあなたの意見」

執筆者	機能動詞結合が含まれた文
11-1	除夜に <u>徹夜する</u> 伝統もある。
	環境汚染をしないために政府から <u>禁止</u> されている。
	テレビ祝い番組を見たり、 <u>カラオケ</u> を <u>したり</u> <u>楽しみ</u> している。
	爆竹をつける <u>習慣</u> があった。
	環境汚染をしないために政府から <u>禁止</u> されている。
12-2	その人を <u>興奮</u> させます。
	タバコを吸う人の体はニコチンに <u>適性</u> がある
	その <u>適性</u> があるので・・・(後略)
	吸うことを中止したら、・・・(後略)
	人によって差があるから、 <u>実施</u> することは難しい
	意見に <u>賛成</u> します。
	テレビで <u>放送</u> できないようにする
	タバコが本当に <u>害</u> をもたらす
	タバコを <u>製造</u> しています。
	タバコを吸えないよう <u>規則</u> を作るべきだ
	人間の体はタバコに含まれる物を <u>需要</u> するようになる
	タバコを吸うことを <u>停止</u> したがります
	生産者も <u>利益</u> を持つ
13-2	テレビで <u>放送</u> できないようにするべきだ。
	もし <u>禁止</u> したら社会の治安までに・・・(後略)
	もし <u>規則</u> を作って <u>禁止</u> したら・・・(後略)
	厳しくて全部 <u>禁止</u> したら・・・(後略)
	社会の治安までも <u>悪い影響</u> がある
	たばこを吸えないよう <u>規則</u> を作る。
	もし <u>規則</u> を作って <u>禁止</u> したら、社会に治安までも・・・(後略)

	他人に <u>迷惑を</u> かけている。
	宣伝広告も <u>放送</u> する
	という考え方が <u>賛成</u> する。
	たばこの売上の広告も <u>放送</u> し、たばこは自分の健康に・・・・(後略)
14-2	<u>悪いものを禁止</u> しなければならない
	ニコチンを <u>摂取</u> したら・・・・(後略)
	たばこを吸わない人を被害者としての <u>調査</u> を行なった
	たばこを <u>禁止</u> する
	たばこを <u>宣伝</u> する行為は社会に・・・・(後略)
	たばこを禁止する <u>規則</u> を作る必要もある
	たばこを吸う <u>試合</u> を行なわれた
	たばこがきれいな人に <u>悪い損</u> を与えて、・・・・(後略)
	人間の健康を <u>破壊</u> する。
	大量のたばこを吸ったら、 <u>致死</u> する。
	人はたばこを <u>依頼</u> する。
	たばこの <u>コマーシャル</u> を <u>制限</u> する必要もある
	もっと <u>大損害</u> を受ける。
	社会に <u>批判</u> られるべきだと考えている。
15-2	<u>規則</u> を作って <u>制限</u> する
	私は前の方が <u>賛成</u> します
	それ〈権利〉を <u>曲解</u> します。
	話しを <u>強調</u> するに分けています。
	彼に <u>自由</u> を与えます
	<u>私利</u> をはかることではないですか。
	たばこを <u>禁止</u> する
	他人に <u>めいわく</u> をかけないよう・・・・(後略)
	化学の域で <u>確定</u> しました
	権利は人間の合理的な要求を <u>合致</u> するために出てきた
	成人は <u>努力</u> をつけるのは吝嗇ですか。
	たばこは人に <u>有害</u> するのは化学の域で・・・・(後略)
	未来の希望を <u>浄化</u> するため、・・・・(後略)
16-2	<u>解決</u> するのはそんなに簡単にできない

	<u>利益をえる</u> ためて・・・(後略)
	<u>放送</u> している時、・・・(後略)
	<u>悪い影響を与えない</u>
	問題にならないと <u>予想</u> します。
17-1	いろいろな物を <u>用意</u> しなければならない。
	衣服とか赤い枕も <u>用意</u> する。
	何に使うのか、後で <u>説明</u> する。
	元気に育てられるように <u>お祈り</u> する
	子どもの生長を <u>お祈り</u> する。
	赤ちゃんに <u>お祈り</u> をいただきたい
	<u>愛と希望</u> をこめて子供に・・・(後略)
	<u>皆さんに紹介</u> したい。
	子供がたくさんの <u>お祈り</u> がもらえる。
18-2	<u>規則を作</u> って <u>禁止</u> する
	誰にも <u>自殺</u> する権利がある
	タバコを吸うかぎり <u>靈感</u> を受ける
	子どもに <u>悪い影響</u> を与えるから、・・・(後略)
	子どもに <u>悪い影響</u> を与えるけど、・・・(後略)
	テレビで <u>放送</u> できないように・・・(後略)
	こういうようなところに <u>注意</u> しなければ・・・(後略)
	自分が自分に <u>害</u> をあたえた
19-1	知っていることを少し <u>紹介</u> する。
	<u>婚約</u> することは普段男性から・・・(後略)
	<u>婚約</u> が決まったら、 <u>結婚式</u> の日まで・・・(後略)
	「天地に」「親に」「互いに」 <u>おじぎ</u> を三回して・・・(後略)
	両方の親は <u>出場</u> すべきだ。
	女性の父母に <u>婚約</u> してもらう
20-2	自分自身に <u>害</u> を与えるだけでなく・・・(後略)
	回りの人々の健康に <u>害</u> も与えます。
	<u>汚染</u> された空気を呼吸せざるをえない。
	空気を <u>呼吸</u> せざるをえない。
	国家の繁栄も <u>実現</u> できません。

	回りの人のほうが <u>受けた毒害</u> が多いです。
	人々の身体は <u>仕事の疲労</u> を受ける
	タバコはずっと人間の生命安全を <u>脅威</u> してきています。
21-1	しばらく <u>休憩</u> して、・・・・(後略)
	机の前に行って、 <u>お辞儀</u> をする。
	次の日の <u>準備</u> したりする。
	元気よく <u>生活</u> するように神さまに祈る。
	今お寺が <u>破壊</u> されたので、・・・・(後略)
	夜中息子さんは <u>通夜</u> するが、・・・・(後略)
22-2	積極的に吸わせること、また、 <u>禁止</u> すること、両方とも・・・・(後略)
23-1	春節の一ヶ月まえも <u>準備</u> しはじめます。
	たくさん <u>買い物</u> をします。
	爆竹の <u>音</u> がして、新春の賑かさです。
	大気を <u>汚染</u> するので、主要な都市では・・・・(後略)
	テレビでたばこのコマーシャルを <u>キャンセル</u> したり、・・・・(後略)
	みんな帰って <u>家団</u> できます。
	中国人を <u>了解</u> するには、春節は・・・・(後略)
24-1	結婚の順調で <u>紹介</u> しましょう。
	会うことが <u>禁止</u> されている
	家でしばらく <u>休憩</u> して・・・・(後略)
	花婿さんは人々に <u>礼</u> をしてお祝いのプレゼントを受け取り・・・・(後略)
	一人で <u>生活</u> する意味を・・・・(後略)
	花婿さんの家の到着したらみんなすぐレストランにいきます。
25-1	一番 <u>期待</u> するのも春節でした。
	一緒に <u>爆竹</u> をすること・・・・(後略)
	ふとんとかも <u>洗濯</u> して、・・・・(後略)
	部屋も先に <u>大掃除</u> する
	春節の日掃除することはきんしです
	<u>掃除</u> すると、運も持ち離れる
	テレビで <u>放送</u> されている”春節パーティ”という番組・・・・(後略)
	あちこちで爆竹もやり始める
	互いに <u>あいさつ</u> をします。

	<u>自家製する</u> のは一番おいしいと・・・(後略)
	家を出て、お寺や神社をお祝いをして、・・・(後略)
26-1	日本とかに常に <u>侵略</u> されました。
	新な中国は <u>誕生</u> しました。
	一家そろってどこかに <u>旅行</u> します
	学生たちはパレードもう <u>参加</u> しました。
	中華人民共和国は五十年ぐらい前に <u>建立</u> されました
	国民はいろいろな <u>苦しみ</u> をうけさせました。
	学歴程度のあがりなどに <u>感動</u> しなければならない
	旅行しますとか、みんなが平和安定、繁栄 <u>幸福な生活</u> をすごしています。
27-2	子供にとってもっと <u>悪い影響</u> を与える。
	<u>環境を汚染</u> して、別のたばこ吸わない人に <u>損害</u> する。
	たばこは <u>ぜったい禁止</u> されるべきか？
	タバコを <u>禁止</u> するしかないか・・・(後略)
	禁止することはぜんぜんだめだ。
	政府から吸わないことを <u>提唱</u> するべきだ、
	たばこという物は誕生から、多くの <u>争論</u> が出した。
	他人に <u>影響</u> しなところに吸う
29-2	人が <u>自殺</u> しても他人に関係ないこと。
	コマーシャルを <u>禁止</u> するべきだ。
	放送するのを <u>禁止</u> したほうが・・・(後略)
	規則を作って <u>禁止</u> するのは・・・(後略)
	禁止するために作ったものだ
	回りの人に <u>悪いえいきょう</u> を与えるという・・・(後略)
	テレビで <u>放送</u> するのを・・・(後略)
	子供の将来に <u>影響</u> する一つの・・・(後略)
	でも別の人に <u>えいきょう</u> しないはずだ。
	人権というのは人の行動が回りに <u>影響</u> しないだけで・・・(後略)
30-2	長い間には <u>解決</u> できないこと・・・(後略)
	まわりの人の方が <u>害</u> を受ける
	おとうさんが <u>禁煙</u> しました。
	家庭以内では <u>解決</u> しやすい

	禁煙の <u>命令</u> を政府が <u>出した</u> ら・・・(後略)
	暴動でも <u>起し</u> そうと思います。
	この問題を <u>解決する</u> べきなら・・・(後略)
	公共の場合では、 <u>禁煙する</u> べきです

《華東政法大学》

- 作文タイトル： 3 「アルバイトについて」
5 「私の好きな○○」
6 「インターネットと私の生活」
7 「友達への手紙」
8 「心を打たれたこと」
10 「現代若者のファッション」
13 「私の友人」
14 「学習到達度調査について」
15 「読書の方法」

執筆者	機能動詞結合が含まれた文
B-14	学習到達度調査の結果を <u>公表</u> した。
	一位や二位に <u>達</u> する。
	学校は理数科を <u>重視</u> する
	日本語は欧米語より難しく、 <u>制限</u> することが多い、
C-15	暇を有効に <u>利用</u> して、できるだけ早くたくさんの本を読む。
	スピートを <u>追求</u> するばかりに、疑問などを放っておいて
	作者の言いたいことをちゃんと <u>理解</u> できるこそ、・・・(後略)
D-15	知識を広め、自分を <u>向上</u> させる
	<u>深い印象</u> が <u>残</u> れない。
	じっくり味わうほうが <u>いい</u> と <u>同意</u> する。
	<u>深い印象</u> が <u>残</u> って、忘れにくい。
	本の魅力を感じることを通して、鑑賞力が <u>向上</u> できる。
E-15	読書の能率を <u>考慮</u> に入れて、私は本がゆっくり読んでじっくり味わうほうが <u>いい</u>
F-13	紹介したい友人は高校三年生の時・・・(後略)
	大学に <u>合格</u> するための塾に通う時・・・(後略)
	大学に <u>合格</u> したのは紹さんのおかげだろう。

	自分のことだけ考えて、あまり他人のことを <u>関心</u> したくない時だった。
	私に <u>関心</u> を送った人は紹さんのほかにいなかった。
G-15	名著の魅力は細かいところから <u>体现</u> する。
H-15	〈機能動詞結合使用無〉
I-15	われわれは今知識の時代に <u>生活</u> している。
	この世に <u>生活</u> できないだろう。
	ほかの学生にも <u>迷惑</u> をかけるかもしれない。
J-14	学習到達度調査の結果を <u>公表</u> した。
	2位に <u>ランク</u> される。
	経済や科学がますます <u>発達</u> していく。
	数学と科学の応用力を <u>重視</u> することになった。
	日本の生徒は <u>読解</u> の能力を <u>軽視</u> しない。
	日本は世界一流の国の方向に <u>向上</u> している。
K-15	作家がいろいろ <u>工夫</u> して書いたもので、
L-15	一字ずつ <u>検討</u> してもっと深い意味を <u>理解</u> するかもしれない。
	その深い意味を自分の精神的な物に <u>転化</u> して人生に役立つ。
	もっとたくさんの本を読みたい <u>意欲</u> も出る。
M-14	学習到達度調査の結果を <u>公表</u> した。
	本など <u>理解</u> する能力がとても強い。
	日本では日常生活できる子供の <u>発見力</u> や <u>考え力</u> などに大事にして、育てる
N-14	調査の結果を <u>公表</u> した
	真面目に <u>勉強</u> する気がない
	大部の精力は理科に <u>投入</u> し、・・・・(後略)
	小説や新聞など <u>読解力</u> の <u>向上</u> できる物を読む
	この局面を <u>改善</u> したいなら、・・・・(後略)
	読むことは他人の考えを <u>理解</u> し取るために大事な手段である。
	できるだけいろいろなものを読み、自分の <u>考え力</u> を <u>向上</u> する
O-10	若者は物質的な享受を <u>追求</u> すると同時に、精神的享受も <u>追求</u> している。
	人々の生活はだんだん <u>充実</u> になっている。
P-15	本というものは、作者の考えを <u>表現</u> する所である。
	本を読むことの目的はたぶん、知らない物や違う観点を習うことである。 <u>考え</u> をしなければ、見てもすぐ忘れる。

Q-15	学習達成度調査の結果を公表した。
	科学的な応用力は第一、二位に位置する
	文科と理科のバランスを取るべきだ
U-15	ゆっくり本を読むことは人間のストレス解消に働きを果たしている
V-15	十分に理解することができる
	自分の読んだ本はすごく少ないという感じがしている。
	本を速く読めば、まる覚えするだけ
	深く理解しようとしな
W-15	宿題をする時も、・・・(後略)
	資料を集めるのに大きな役割を果たしている。
Z-14	学習到達度調査の結果を公表した。
	数学や科学、外国語などの科目がどんどん注目されてきた。
	数が人間の一生を左右するという考え方・・・(後略)
	塾や学校にかよってそれを勉強してばかりいて・・・(後略)
	その点数が人間の一生を左右するという考え方は子供まで大きく影響してしまう。
	いずれにせよ重要な能力として、読解力は重視を受けるべきだ。

《東京外国語大学》

- 作文タイトル： 1 私の失敗談
2 私の長所と短所
3 日本語学習の理由

執筆者	機能動詞結合が含まれる文
3-2	こつこつ努力すると目標が達成できなければ、悲しくて悔しいでしょう。
3-1	誰でも失敗したことがあるでしょう。
	私も失敗したことは何回もあります。
	一番後悔したのは小学校の時・・・(後略)
	何回もダイエットしたが、やせられないです。
	計画的にしなければ、後悔することはいっぱいある
	授業に遅刻するとか、・・・(後略)
5-1	宿題やテストなどがよくできれば、パスできると思っていました。
	人生に予期せぬことがあります。

	返却された英語の小論文という宿題の点数を見て・・・(後略)
	驚きすぎて話しができなくなりました。
	時間を守っていなかった私はそれを <u>納得</u> しかできませんでした。
	<u>油断</u> した私は先生の話しをちゃんと聞きませんでしたから・・・(後略)
5-2	自分に <u>関心</u> を持っていないことに全然勉強したくないです。
	全然勉強したくないです。
	自分の長所と短所をわかったのを通して、 <u>成長</u> するものです。
5-3	日本語を <u>勉強</u> することは全然考えませんでした。
	嵐のことを全部 <u>フォロ</u> したかったですから、・・・(後略)
	日本語を勉強し始めました、
	夏休を利用して、勉強していました。
	あれ以来、日本のことに <u>興味</u> が生じました、
	日本のことに <u>幅広く</u> 接触によって、・・・(後略)
18-2	私は母の言葉に <u>影響</u> されたかもしれません。
	どうして、人は <u>ケンカ</u> をしなければならぬだろう。
18-3	日本語を勉強している人は日本のアイドルが好きです
	日本語を勉強するきっかけは、日本語の漫画が読みたい
	中学三年生の私には初めて日本語を勉強しようと思いました。
	日本語を勉強すれば勉強するほど面白くて・・・(後略)
	日本に <u>関</u> すること何もかも知りたい
	日本に <u>関</u> すること何も教えてくれた、
	日本に住んで日本の文化を身に <u>体験</u> してみたい
	ちゃんと日本語を勉強している
21-1	今まで、 <u>失敗</u> したことがいっぱいあります。
	大学に入りますから、毎晩母とインターネットに <u>連絡</u> しています。家のことや学校のことや面白いことなど、何んでも話します。
	実は私はそう思います。それに、 <u>感動</u> します。
	母は怒りました。「じゃ、明日からインターネットに <u>連絡</u> することをやめます。
	その時、私は大変 <u>緊張</u> しました。
	今、親の前に、口振りを <u>注意</u> しています。
21-2	こつこつ <u>努力</u> していく長所がある
	私の夢は日本語の <u>関係</u> の <u>仕事</u> を <u>する</u> と自分で日本へ行きます。

	その夢は <u>実現</u> したいです
	日本語は面白いですが、 <u>勉強</u> すれば <u>勉強</u> する <u>難</u> しいです。
	いま日本語は <u>すこ</u> し <u>つ</u> づ <u>進</u> 歩します。
	一生懸命日本語を <u>勉強</u> します。
	先決条件はここで本当に <u>合意</u> したいの目標です。
21-3	よくアニメの歌を聞きました。それは初めて日本語を <u>接</u> 触しました。
	高校時代は日本語のクラブを <u>参</u> 加しました。
	この夢を <u>実現</u> するために、もっと <u>頑</u> 張ります。

資料3 非漢字学習者の作文（第8章）で使用された機能動詞結合

- 注 1) 表中の「国」は作文採取国
 2) 作成者番号の右の数字は作文のタイトルを示す。
 3) 非漢字学習者の作文との比較に用いた中級 CIJ の作文は資料1を使用。
 4) 〈 〉 内及び下線は当論文執筆者付加

《国立国語研究所作文データベース》

- 作文タイトル：1 「あなたの国の行事について」
 2 「たばこについてのあなたの意見」
 3 外国からの援助について
 4 外国語の学習について
 5 あなたの国の料理について
 6 学校の教育について
 7 大学受験についてのあなたの意見
 8 あなたの国の歴史の大きな事件
 9 その他

国	執筆者	機能動詞結合が含まれた文
オランダ	BE 11-1	〈機能動詞結合使用無〉
	BE 12-1	司さいが人を <u>かんげい</u> する。
	BE 33-1	スワルテピートは悪い子供を <u>罰</u> する
ブラジル	BR 5-1	〈機能動詞結合使用無〉
	BR 9-1	家で大きい <u>パーティ</u> を <u>しま</u> す
		プレゼントを <u>こうかん</u> したり <u>しま</u> す。
	BR 29-1	休みで、みんな <u>旅行</u> しま <u>す</u> 。
		〈サンバ〉 たくさんの人の前で <u>縦隊</u> しま <u>す</u> 。
		二番を受た学校とまた <u>縦隊</u> しま <u>す</u> 。
	BR 35-1	クリストがお生まれになった日をおい <u>わい</u> を <u>しま</u> す。
		世界中の人が <u>おいわい</u> を <u>しま</u> す。
		大きい <u>おいわい</u> を <u>しま</u> す。
		プルゼントを <u>こうかん</u> しま <u>す</u> 。
		<u>買いもの</u> を <u>す</u> る
	BR 36-1	火曜日まで <u>りょう行</u> しま <u>す</u> 。
		<u>ゆうしょう</u> する <u>ため</u> に <u>がんば</u> りま <u>す</u> 。

	BR 37-1	〈機能動詞結合使用無〉
	BR 38-1	〈機能動詞結合使用無〉
	BR 39-1	そつぎょうのパーティの <u>じゅんぴ</u> をしました。
	BR 40-1	さんねんだけ <u>べんきょう</u> している。
	BR 48-1	先生たちに <u>挨拶</u> して、 <u>写真</u> をとって・・・(後略)
		いっしょけんめい <u>勉強</u> したり、夢を見たりします。
		<u>卒業</u> をすれば、うれしい
		もし家で <u>パーティー</u> したら・・・(後略)
		友だちから <u>電話</u> をかけてもらう
	BR 51-1	となりも、 <u>しょだい</u> を、しました。
		わたしが <u>しょだい</u> を、しました。
		あかちゃんが、いさいになったときたんじょび <u>パーティー</u> をあげました。
ド イ ツ	De 1-1	ドイツから <u>いじゅう</u> しました。
		〈墓で〉 <u>ざっそ</u> を <u>じょそう</u> します。
		牧師は・・・(中略)・・・ <u>説教</u> をします。
		説教のあとで <u>墓参り</u> をする
		ろうそくを <u>てんか</u> します。
		そせんに <u>けい</u> いを表してうやまいます。
	De 2-1	市役所で公式な <u>結婚</u> をします。
		キリスト教の <u>結婚</u> をします。
		おおせいの人は宗教の <u>結婚</u> をしたいです。
		大きいな <u>パーティー</u> が行われます。
		家族と友だちは <u>げい</u> のうをします。
		皆さんと <u>ゲーム</u> をします。
	De 3-1	のんだり、 <u>ダンス</u> をしたり、たべたりしています。
		大晦日でいるいるな <u>決意</u> をします。
		新年もっと良くする <u>決意</u> をします。
	De 5-1	〈機能動詞結合使用無〉
	De 6-1	夕食を <u>用意</u> しなければならない。
		友達と合って、 <u>パーティー</u> をするか、
		<u>花火見物</u> だけしている人もおおぜいである。
		シャンパンを飲んで <u>乾杯</u> している。

	De 8-1	〈機能動詞結合使用無〉
	De 9-1	コスチュームで <u>へんそう</u> します。
		そのはたはきたない洗濯物を <u>象徴</u> します。
		<u>へんそう</u> ない人を <u>立腹</u> させます。
		うるさい音楽と叫び声と冗談をするなどに冬を追い払うつもりです。
	De 17-1	ふっかつさいについて <u>報告</u> します。
		ふっかつさいの時期は <u>変化</u> します。
		ふっかつさいまで人々は <u>断食</u> します。
		「 <u>ヨエズ</u> は <u>ふかつ</u> した」と言われます。
		頬にふたりの <u>キス</u> を <u>あげ</u> られます。
		子羊と山羊を <u>屠殺</u> されます
		このキスは愛のキスを <u>ひょうじ</u> されます。
オ ー ス ト リ ア	Fr 3-1	〈機能動詞結合使用無〉
	Fr 5-1	かぞくを <u>しょうたい</u> して・・・(後略)
		ブラセルに入るところを <u>えんじ</u> ています
フ ラ ン ス	Fr 2-4	ワープロソフトが <u>けいじ</u> する言葉の中に選ばなければなりません。
		<u>訓練</u> をよくしなかったら分かる漢字をおぼえていません。
	Fr 3-4	日本語を <u>勉強</u> している外国人として・・・(後略)
		漢字は、とてもよく似ていますから、何度も書かなければよく <u>混同</u> する筈です。
		危険があるのではではないかと <u>心配</u> しています。
	Fr 5-4	本日人も漢字チャレンジをよく <u>しっばい</u> します。
	FR 22-4	次の作文でこのことの <u>説明</u> を <u>やっ</u> て見ましょう
	Fr 24-4	日本語を <u>勉強</u> している外国人にとって・・・(後略)
	Fr 26-4	よく <u>練習</u> した方がいいです。
		学校で漢字を <u>勉強</u> したのに・・・(後略)
		忘れないように <u>練習</u> を <u>し続</u> けるべきです。
		社会はいつも <u>進化</u> しますので、人は・・・(後略)
		<u>手</u> で <u>書</u> くことをする時に綴りの間違いがたくさん・・・(後略)

	Fr 33-4	〈機能動詞結合使用無〉
	Fr 34-4	基本的な漢字しか <u>提示</u> されない
		漢字を電腦に出させるように既に <u>奮闘</u> しなければならない
		程度の低さに <u>慥</u> かに <u>憤慨</u> するでしょう。
		先生に宿題を <u>提出</u> する場合・・・(後略)
フ イ ン ラ ン ド	Fi 1-5	フィンランドで <u>留学</u> しました。
		自分達でお <u>そうじ</u> します。
		あきはばらで <u>買い物</u> をして・・・(後略)
	Fi 2-5	ご飯のあとで <u>そうじ</u> しました。
		ずっと前から <u>そうじ</u> しませんので・・・(後略)
		あとで <u>さんぽ</u> しました。
		長い間 <u>さんぽ</u> しませんでした。
	Fi 7-5	〈機能動詞結合使用無〉
	Fi 8-1	色々な <u>しごと</u> を <u>します</u> 。
		家で <u>そうじ</u> をして、家の中・・・(後略)
		クリスマスの平和を <u>宣言</u> します。
	Fi 9-1	たくさん <u>じゅんぴ</u> を <u>しなければ</u> なりません
		<u>そうじ</u> をしたり、クリスマスの <u>りょうり</u> をつくれます。
		クリスマスの <u>りょうり</u> をつくれます。
		クリスマスの <u>食事</u> を <u>している</u> とき・・・(後略)
	Fi 10-1	クリスマスの <u>へいわ</u> を <u>せんげん</u> します。
		クリスマスの <u>りょうり</u> します
	Fi 11-1	***さんカラジョキに <u>招待</u> しました。
		オウルまで <u>運転</u> したり、もテントとねぶくろとも・・・(後略)
		<u>運転</u> しましたから、***さんと***さん・・・(後略)
	けしきに <u>かんげき</u> しました。	
Fi 12-1	クリスマスの平和を <u>宣言</u> します。	
Fi 13-1	〈機能動詞結合使用無〉	
Fi 14-1	家を <u>掃除</u> したり、クリスマスのクッキーを <u>やいたり</u> 、・・・(後略)	
Fi 15-1	〈機能動詞結合使用無〉	
Fi 16-1	家を <u>そうじ</u> しますとクリスマスツリーきれいに・・・(後略)	
	クリスマスの <u>へいわ</u> を <u>せんげん</u> します。	

	サンタクロースは子どもを <u>しつもん</u> します。	
Fi 17-1	家を綺麗に掃除して家の前にはがを・・・・(後略)	
	フィンランドへ <u>旅行</u> したらいいです。	
Fi 18-1	いろいろな <u>ゲーム</u> をしました、	
	<u>でんとう</u> てきなり <u>ようり</u> はつくられました	
Fi 19-1	だれもよく <u>じゅん</u> びします。	
	母に <u>そうじ</u> させられて、父は木を家に持って来ます。	
Fi 20-1	母はたくさん <u>そうじ</u> させられて	
Fi 21-1	男の人と女の人 <u>やくそく</u> しました。	
	あいすることを <u>やくすく</u> します。	
	たぶん <u>ダンス</u> します。	
	早い <u>よやく</u> したほうがいいです。	
	〈結婚式で〉おいしい <u>ろうり</u> を食べて、 <u>はつげん</u> をもって、たぶんダンスします。	
フ ラ ン ス	Fr 38-4	それ〈ワープロ〉を <u>使用する</u> 日は、私の日本語のレベルは・・・・(後略)
		日本語のレベルは上分だと言いますから、もう <u>上達</u> したくないです。
	Fr 39-4	〈機能動詞結合使用無〉
	Fr 52-4	どのような問題が起き得るのかを <u>説明</u> したい
		手書でしたら、(間違いが) <u>発生</u> しなかっただろう
		数学を <u>勉強</u> しておかないと・・・・(後略)
		どんなに便利であっても、 <u>主張</u> したり、造語を書いたりすると、・・・・(後略)
	Fr 58-4	(前略)・・の方が早く <u>学習</u> すると思っている。
		日本語を <u>学習</u> したら漢字を書くよりほか仕方がない
		漢字はいろいろに <u>解釈</u> できていくつかの意味がある
		〈ワープロを〉 <u>上達</u> されて有益な使い方を求める
	Fr 59-1	皆が <u>参加</u> させるけれど男の人だけ・・・・(後略)
	Fr 68-1	ただの遊びたがる人々が <u>集合</u> できるようなお祭り・・・・(後略)
	Fr 69-1	日本の文化の <u>豊富</u> を表現します。
		1様な世界化を <u>表現</u> します。
	Fr 70-1	いとは再婚しました。
	ずっと以前からそのいとは会いませんでしたが結婚式 <u>招待</u> されました。	
	新婚夫婦は <u>感動</u> していました。	

	Fr 71-1	夏休みに日本で <u>旅行</u> をして、京都・・・(後略)
		お姉さんが <u>結婚</u> しました
		母は六月から <u>準備</u> をしたが・・・(後略)
		市役所で <u>結婚</u> して、午後は・・・(後略)
		家族共に教会で <u>結婚</u> する。
		食べるから <u>パーティー</u> をする。
		母は全部の <u>装飾</u> がしましたから彼女に労作がたくさんだった。
	Fr 76-1	全家族を招いて <u>祝宴</u> が行われた。
		クリスマス <u>樅</u> の木を <u>装飾</u> する。
		誕祭について <u>話</u> しようとする。
	Fr 78-1	フランス人の子供の誕生日パーティーを <u>紹介</u> しよう。
		<u>招待</u> した子どものお母さんはふつう、・・・(後略)
		お姉さんはゲームを <u>指導</u> する。
		望みを誰にも言わないと、これが <u>実現</u> するという習慣・・・(後略)
		子供達に <u>撮影</u> する
	Fr 90-4	その点に <u>注意</u> しなければいけない。
		<u>日本語の勉強</u> する外国人として・・・(後略)
	Fr 91-4	印刷技術を <u>発明</u> した時代には・・・(後略)
		(前略)・・・なるのだ。」と <u>批評</u> しました。
		〈漢字の〉構造を <u>改革</u> しないうち、ワープロで・・・(後略)
Fr 94-4	日本語の勉強は長いです。多くの人が <u>落胆</u> して <u>放棄</u> します。	
	文化に <u>没頭</u> してもかまいません。	
	ワープロを使うことに <u>反対</u> して本当の理由がないのに・・・(後略)	
	これを <u>普及</u> させてはいけません。	
アメリカ	En 3-1	たいてい <u>返事</u> しなければならない
		パーティーの場合は何か <u>ゲーム</u> をする。
		ろうそくは一年の一生を <u>象徴</u> する。
	En 3-4	漢字を <u>複製</u> できるでも見分けられる
	En 3-5	リグリアという地方に <u>由来</u> します
	En 3-6	〈勉強ができたので〉クラスにいてすぐ <u>退屈</u> されてきました
		<u>個人的な世話</u> しなければなりません。
		教師が <u>授業計画</u> をする時、同じ能力の学生のために <u>計画</u> した方が・・・(後略)

	En 3-7	どの大学で勉強するかどの専門にするか・・・(後略)
		入学試験をパスしたのに、・・・(後略)
		大学から脱落したら金や時間・・・(後略)
		卒業の準備ができます。
		能力を証明すれば奨学金など・・・(後略)
		社会の準備しなければなりません。
	En 8-1	神父といろいろの詳しい事項を処理しなければならなかったし・・・(後略)
		そこでパーティをしました。
	En 8-4	科学技術を速く採用するようにして・・・(後略)
		それに注意を払うと、日本の・・・(後略)
		事務何か仕事ができるようになる
		脳の発展が起こらないのである。
	En 8-6	誰と一緒に勉強したらいいか・・・(後略)
		平等に考慮に入れなければなりません。
En 8-7	点二つを考慮しないといけないのである。	
	申し込んだ生徒を考慮するために、・・・(後略)	
	ジョージ・ヴシの教育の考えを考慮すると、アメリカの教育・・・(後略)	
	はっきり標準を通信しなければなくて、困っています。	
インド	Bn 18-1	うさぎが緊張しないで〈ライオンに〉一つのうそを言っていました。
		一つの承諾を作りました。それは毎日一ぴっきはライオンの前に食いためにいきます。
		理知的に仕事をしなければ緊張して死んでしまいます。
	Bn 18-2.	健康に役に立ちやない物(=たばこ)も事も処分しなければならない。
	En 17-1	この伝話は現代のどの作品にも競争する力を持っています。
		人々の中の複雑な心理が鏡のように反映した(=反映した)装大な作品はマーハーバーラターであった
		インドは文化の高さは世界中皆賛成しているのです。
	En 17-2	公開の所に吸うことは禁止されている
		これに対する討論がおこなわりつつである。
		人間という者に選択する自由を写える
	心理的な教方より禁止される方法のほうがました。	
	たばこというような有害なものを製作した会社・・・(後略)	

	体に障するたばこというものは
	人々もこのことにはいりょうをかけないと〈＝配慮しないと〉いけないのです。
	仕事のきんちょうからや TENSION から緩和されているわけはない。
En 41-1	〈機能动詞結合使用無〉
En 41-2	こきよのばしょで禁煙しなければなりません。
	タバコの吸うのは禁止する
En 47-1	一緒になって散歩したり
	互いに知らせたり、話しをしました。
	コウノトリからごはんを食べに招待されて・・・(後略)
En 47-2	いつもきんちょうしている人々もしずかになるためにもたばこなどを使います。
	たばこをすうのを停止するほうがいい
En 48-1	そういうふにこどもにたいしてあいしくおもって、育つとけつしまいました。
	母親のライオンはしんばいして・・・(後略)
	たからをまづもっていくことがけつしました。
	かんそうされたえだをさがすためにしんりんへ行きました。
	しばらくたからと子供とのせんたくはむずかしくなりました。子供とたかいをいしょうにもって行くことができないとじつげんしました。
En 48-2	インドではタバコを紹介したのは英国人であります。
	タバコを吸って時分をリラックスさせたいのです。
	時分だけではなくいばん的な人々にも害をしています。
	こういうふ*なシステムを削除しなければならぬ
Hi 10-1	国王は老人になって、大臣に招待して、二人の中でだれが国を統治するために良いかと相談しました。
	二人の中から一人に選ぶためにそうだんしました
	二人におなじ質問をしました
	人気のためにどんなしごとをしなければなりません
	いつでもほかの国と戦争して・・・(後略)
	王子は文民のこころを獲得するため・・・(後略)
	大臣は国王と相談して・・・(後略)
	王子に国の次の統治になることにしました

Hi 10-2	大学で勉強していた学生・・・(後略)
	人々の墮胎に反対することと必要なもの・・・(後略)
	米国と日本といっしょうに発達国々は展開をせる国々のくらべるその数が広めています。
	健康のためにじぶんの必要なものを限定しなければならない
	たばこの広めることを限定するために・・・(後略)
	じぶんの限定するものはいちばん重要なものである。
Hi 14-1	急に木に火災が <u>発</u> っせいした。
	失敗のをもらったから父が一人で <u>探</u> しするを決まった。
Hi 14-2	たばこを <u>禁</u> じるため、いろいろな法律を・・・(後略)
	レストランなんかでは <u>禁</u> じられています。
	よいことと悪いこととの違はよく <u>理</u> 解できるから。
	そのような法律を <u>発</u> 行するのはだめなこと・・・(後略)
Hi 15-1	いつもくよくよしていた。
	前のようにくよくよし始めた。
	クジャクは本当に <u>び</u> っくりした。
Hi 15-2	なぜタバコが好き人はこのように <u>行</u> 動するか・・・(後略)
	紳士のように <u>行</u> 動してくれない人に対して・・・(後略)
	タバコを吸うのを大衆のための場所で <u>禁</u> 止する
	胸に <u>関</u> する色々な病の発生・・・(後略)
	色々な病の発生が一層 <u>増</u> 加してきている。
	タバコ問題の深刻さを <u>考</u> 慮しきびしい規則はもう不可欠になった
	他の人の健康のことに全然 <u>関</u> 心しないで、・・・(後略)
Hi 19-1	私の祖父が病気で <u>死</u> 亡した。
	話しを言ってから祖父はいつも <u>質</u> 問していた
	彼女と <u>結</u> 婚するためにたくさんの申し込みが出て来た。
	彼女は誰と <u>結</u> 婚するかは問題になった。
	彼女はいつも <u>笑</u> 顔をしていて話しにもしんせつだった。
Hi 20-1	先生が来て、 <u>あい</u> さつをしながら、・・・(後略)
	「今後こういう <u>いた</u> ずらをしないで、まじめに <u>勉</u> 強します」と自分の友達に約束しました。
	二・三回聞いてもシャムが <u>明</u> 白しませんでした。

	Hi 20-2	タバコに関する問題は印度でも日本と同じように <u>存在</u> しています。
		何か <u>対策</u> をとらないと、はいがんで患う人が増えていきます。
		タバコが体に与える有害を <u>宣言</u> した方が有効だと思います。
		タバコ広告を <u>放送</u> しない方がいい
		禁煙というような <u>規束</u> を実施するだけで・・・(後略)
		タバコが体に与える有害・・・(後略)
		今肺談の患いで困っている方でもご一緒になって自分のつらい経験を <u>宣言</u> すれば、・・・(後略)
		タバコはそれほどまで有害を与えている
	Hi 21-1	そのけいかお父さんはかなしくなったら死んでいました。そのけいかカケイーさんは自分のまちがいに <u>こう</u> かいた。
	Hi 22-1	ラーマさんはシータさんと <u>けっこん</u> しました。
		ラーマさんに十四年間のために <u>流罪</u> された。
	Hi 23-2	たばこを吸う人ではなくて回わりの人々も <u>そんが</u> いしている
		子供達はこの広告を見てそのことに <u>きょうみ</u> うける
	Km 3-1	ちしき人をよんできて <u>しつもん</u> をします。
カンボジア		そのことをクシたちは <u>そだん</u> してきこえます。
		まいとしひとりずつ <u>つていれ</u> する、そのときはまちにすんで・・・(後略)
		いろいろな事を <u>そうだん</u> したり・・・(後略)
		<u>でんてう</u> てきなあそびをします。〈伝統的な遊び〉
	Km 7-3	しょうがくきんで <u>留学</u> させること、あともう一つ・・・(後略)
		<u>発てん</u> している国は援助がとても必要で・・・(後略)
		自分の国を <u>発てん</u> するために・・・(後略)
		国をよく <u>努力</u> をもっと <u>すべ</u> きだ
		国のために自分が <u>努力</u> したい・・・(後略)
		外国から多くの <u>援助</u> ばかりを受けています。
	Km 27-3	がいこくで <u>べんきょう</u> したいです。
		いまからえんじよとにほん人の <u>ざいげん</u> を <u>きたい</u> さなければなりません。
	Km 28-3	このくにはじぶんで <u>ふっこう</u> させます。
		この国を <u>ふっきゅ</u> させるために、人間の <u>さいけん</u> と・・・(後略)
	がいこくじんの <u>かいしゃ</u> をひきつけるために、このくにの <u>せいふ</u> はこのくにを <u>おいてい</u> させなければなりません。	

Km 29-3	とくにボルボトじたいの中にいろいろなものがはかいされてきました。
	じぶんでかいけつしたことはありません。
	20年くらい <u>せんそう</u> をうけました。
	<u>のうぎょう</u> します。
	そして、 <u>がいこく</u> の <u>えんじょ</u> をもらなければなりません。
Km 30-3	せいふは国をがんばって <u>ふっこう</u> させっています。
	もしじぶんで国を <u>はってん</u> させたら、 <u>どんなしごと</u> をしますか。
	さらに私たちはほっかの国に <u>いぞん</u> していません。
	ますせいふはこく <u>みんけいざい</u> を <u>ふっこう</u> させなければなりません。
	のうぎょうはたいせつなことですから、せいふはあのことによく <u>じゅうもく</u> <u>さ</u> ければなりません。〈注目させ〉
	カンボジアじんはほんとに <u>のうぎょう</u> に <u>いぞん</u> しています。
	さらに <u>いなか</u> の <u>ちほう</u> を <u>はってん</u> さげなければなりません
	<u>はってん</u> する国はたくさんに <u>んげん</u> の <u>しげん</u> があります。
	みなさんとせいふが <u>いしょう</u> にこれを <u>はってん</u> するのを・・・(後略)
	もし私たちがあの <u>しごと</u> に <u>せいこう</u> したら、・・・(後略)
	カンボジアは <u>はってん</u> する国になります。
	さいきんカンボジアがあきらかに <u>多えんじょ</u> をくれました。
	けれども、また <u>がいこく</u> の <u>えんじょ</u> を <u>もら</u> たら、いいですか。
Km 31-3	かんがいが <u>ふっこう</u> させられて、・・・(後略)
	がいこくから <u>おおく</u> の <u>えんじょ</u> を <u>うけ</u> なければなりません。
	がいこくから <u>おおく</u> の <u>えんじょ</u> を <u>うけ</u> なければなりません。
	よいくに <u>はって</u> するために、ぜんぶでカンボジア人は・・・(後略)
	に <u>んげん</u> の <u>ざいげん</u> を <u>はってん</u> しなければなりません。
	カンボジアはがいこくから <u>おおく</u> の <u>えんじょ</u> を <u>はじめて</u> うけます
	じぶんのちからでくにをよくする <u>どりよく</u> を <u>もつ</u> と <u>すべ</u> きだ
	カンボジアはにほんのようなようになるのを <u>きたい</u> します。
	せいふはきつときけんなことにあうこく <u>みん</u> を <u>じょちよう</u> していません。
Km 32-3	がいこくから <u>おおく</u> の <u>えんじょ</u> を <u>うけ</u> ています。
	くにをよくする <u>どりよく</u> を <u>もつ</u> と <u>すべ</u> きだ
	カンボジアのわたしたちですからよく <u>せんそ</u> が <u>おこ</u> ります、
	カンボジアがほんとうによいくにする <u>どりよく</u> を <u>もつ</u> と <u>すべ</u> きだと。

	カンボジアは、 <u>こうずいのそんがいを</u> しています。
	こくみんは、 <u>こうずいのそんがいを</u> しています。
	がいこくからの <u>えんじょあげられ</u> ませんいつでもいいです。
	そのうえ <u>えんじょもらった</u> ひとと <u>えんじょもらわ</u> ないひとです。
	そのうえ <u>えんじょもらった</u> ひとと <u>えんじょもらわ</u> ないひとです。
Km 33-3	(前略)・・・がすこしは <u>ってん</u> します。
	その <u>えんじょは</u> カンボジアに <u>もら</u> いました。
	でもカンボジアは <u>えんじょに</u> もらわない。
	わたしたちに <u>しにます</u> <u>えんじょを</u> あげられ <u>ませ</u> ん
	カンボジアは <u>がいこくのえんじょに</u> もらわない。
	これはじぶんで <u>すめて</u> いてたよって <u>ない</u> して <u>き</u> します。
	とくべつ <u>せふは</u> <u>えんじょに</u> もらわなければなりません。
	わたしたちの <u>くには</u> <u>えんじょが</u> あられ <u>ませ</u> んたら・・・(後略)
	日本などこれから <u>せんそうに</u> <u>しっばい</u> して、じぶんで <u>がんば</u> って、 <u>はってん</u> の <u>くに</u> にまでです。
Km 34-3	がいこくから <u>おおくのえんじょを</u> うけています。
	くにをよくなる <u>どりよくを</u> もつと <u>すべ</u> きだ
	じぶんのちからでくにをよくなる <u>どりよくを</u> もつと <u>すべ</u> きだ
	えんじょで <u>きょういく</u> といなかを <u>はってん</u> する
	びょういんを <u>けんせつ</u> します。
	みちやはしなど <u>けんせつ</u> します。
	よわいのときくにを <u>はってん</u> する <u>ため</u> に <u>えんじょ</u> にたよります。
	くにをよくなる <u>どりよくを</u> もつと <u>すべ</u> きです。
	がいこくはよわいくに <u>たけ</u> <u>えんじょを</u> あげます。
	まいにち <u>えんじょを</u> まっ <u>て</u> 、 <u>しごと</u> を <u>はたら</u> き <u>ませ</u> ん。
Km 35-3	がいこくから <u>おおくのえんじょを</u> うけています
	くにをよくなる <u>どりよくを</u> もつと <u>すべ</u> きだと・・・(後略)
	かれらは <u>どうや</u> て <u>せい</u> かつ <u>して</u> いるのですか。
	くにをよくなる <u>どりよくを</u> もつと <u>すべ</u> きだ
	じぶんのちからで <u>どりよく</u> します。
	けいざいは <u>はつたつ</u> が <u>あり</u> ませ <u>ん</u> 。
	がいこくはカンボジアに <u>えんじょを</u> たくさん <u>あ</u> げ <u>ませ</u> ん。

	<u>えんじょをもらな</u> もしかからカンボジアじんは・・・(後略)
	カンボジアじんはくにのけいざいを <u>かい</u> はつさせるとおもいます
	くにはまだ <u>かい</u> はつしません。
Km 38-3	がいこくから <u>おおく</u> のえんじょをうけていて・・・(後略)
	がいこくから <u>おおく</u> のえんじょをうけなければなりませんか。
	しぜんをほごしています。
	<u>めんみつ</u> にけいかくを立てなければならない
	くにはこうぎょうととしては <u>はってん</u> しています。
	いっしょうけんめい <u>しごと</u> をする
	このこくにはけいざいを <u>はってん</u> になるとのうみんのまずしいせいかつをへらすために・・・(後略)
	しょうらいの <u>ほうしん</u> をすることです。
	みなさんはこくさいかんけいのぼうえきをふやしています。しゅこうげいひんのはばをひろげていることです。みんかんこうぎょうを <u>自慢</u> することです。
	くにはだんだん <u>はってん</u> になると思います。
	がいこくからのえんじょをもらったほうがいいです。
Km 52-1	はなよめのかぞくに <u>どうい</u> された
	ははなよめのかぞくのうちへいくように <u>こんやく</u> しています。
	それから <u>けっこん</u> するために・・・(後略)
	しきのまえにおきやくを <u>ごそ</u> たいなさっています。
	おきやくたちは <u>しょくじ</u> をします。
Mn 2-2	周りの人にも <u>悪い影響</u> を与える
Mn 9-2	たばこをすって、 <u>ダンス</u> をする
モン ゴル	たばこの人々が与える <u>良いえいきゅう</u> のついて書きたい
Mn 10-2	たばこを売ることを少々に <u>減少</u> するのが必要・・・(後略)
	外国からたばこを <u>ゆう</u> に <u>ゆう</u> するのをやめて・・・(後略)
	子供たちに <u>悪い影響</u> を与えます。
	たばこは人の健康が <u>毒</u> する。
	金を払って自分の健康を <u>毒</u> させるということなんですよ。
Mn 13-2	また外国からたばこを <u>ゆ</u> に <u>ゆう</u> するのはやめたほうがいいです。
	人はたばこをおもに <u>ストレス</u> かいしやす <u>する</u> のにつかった。

	もうたばこのはんたいしていろいろないりょうしてほうがいいです。	
	たばこのはんたいしてせんでは多いにあるけれども・・・(後略)	
Mn 15-2	タバコのどくを <u>反対する</u> ほうりつがあります。	
	アルコールのしゅるいの物をうるのを <u>禁止</u> してあります。	
	子供にタバコをうるのを <u>禁止</u> して あります。	
	「 <u>心配</u> したときタバコを■いたら心がよくなります」	
	タバコのどくについて話しをテレビやラジオなどで <u>普及</u> して、・・・(後略)	
	タバコを吸うのが <u>ぞうか</u> しています。	
	タバコのどくについて <u>話し</u> をして、 <u>注意</u> を払えば子供がタバコをきらう人になるかもしれません。	
	タバコのどくと <u>はんたい</u> するほうりつ・・・(後略)	
	外国からゆにゆうしているタバコをすくなくする	
	タバコは人口成長に <u>えいきょう</u> をあたえます。	
Pl 8-5	何の記念を <u>お祝</u> する時食卓にのぼります	
ポーランド	Pl 10-1	11月1日にお祝わいされます。
		ミサに <u>参加</u> するために集まり・・・(後略)
		親に毎年同じ質問をします。
	Pl 11-4	<u>異文化</u> の研究などができません。
		ある言語を <u>勉強</u> してから・・・(後略)
		忘れないように <u>復習</u> します。
		外国語を <u>勉強</u> しよう!
	Pl 12-1	いろいろ楽しくておかしい命冷をさせます。
	Pl 13-4	小さい時から英語を <u>勉強</u> していて、小学校のごろ・・・(後略)
		自分で <u>買い物</u> をしたりすること・・・(後略)
	Pl 14-8	2人はどうしているか <u>チェック</u> しに行くことがあった。
		とても近かったので、 <u>チェック</u> しに行くことはそんなに時間がかか なかつた。
		しかし <u>チェック</u> されたルスはよく留守だった。
		ルスはよくレフの方へ <u>訪問</u> しに行った
		ポーランドへ <u>戦争</u> するために・・・(後略)
		家を出て長い探検に <u>旅立ち</u> した。
	自分の決めた方へ <u>旅立ち</u> した。	

	スラブ国民は一緒に <u>協同</u> したら意見の相違でやはり別れる所がぜひ起こる	
Pl 15-8	すぐ共産主義が来て、この時代の美しさや真義が <u>破壊</u> されました。	
	重要な役割を <u>演じ</u> しました。	
	ポーランドの文化もヨーロッパの絵画芸術や文学や思考も <u>勢力</u> しました。	
	経済的な変化が文化的な <u>変化</u> 行こなわれました。	
Pl 16-1	国王に <u>反対</u> しました。	
	となりの国と <u>戦争</u> をしていました。	
	第1次世界大戦が終わった後、ポーランドが <u>復活</u> しました。	
	首相や誘ったお客さまも <u>特別な演説</u> をします。	
	お祭りの日はよく <u>体み</u> し、おもしろいイベントもあるし、	
Si 3-1	お正月の日の前には日本と同じように <u>おおそうじ</u> をする。	
ス リ ラ ン カ	お寺へ行くのです。 <u>ごぜん</u> をする人はそのとき……(後略)	
	先生の日は先生のために <u>かんしゃ</u> する日……(後略)	
	お正月には <u>いろいろなしゅうかん</u> をする日になっています	
	Si 3-2	〈機能動詞結合使用無〉
	Si 7-1	<u>かいもの</u> する人々はたくさんみる
		国のどくりつを <u>きねん</u> するためにいろいろ……(後略)
		国のどくりつのかんじんたち <u>おれい</u> をします。
		おしゃかさまのうまれなくなるなどを <u>きねん</u> する日です。
		二月四日にどくりつの <u>きねん</u> をします。
		とてもさむいです。 <u>きねん</u> する人々は12日にきょうへいきます。
	Si 7-2_	テルビばんぐみなどで <u>いろいろなせつめい</u> することもいいことだ
		たばこはからだに <u>わるい</u> えきょうをされます。
	Si 13-1	新しい年をむかえるために <u>じゅんぴ</u> します。
		ラーマサンと言う <u>行事</u> も行います。
		食べながら <u>おしゃべり</u> をします。
		<u>きれいな</u> ちょうちんと <u>きれいな</u> 電光もします。
	Si 13-2	そのお金が <u>ちょきん</u> すればいつか自分がすきなものをもらう
		このことについて <u>せつめい</u> します。
	Si 14-1	自分の文化によって <u>色々な</u> 行事をおこなわれます。
		1月から12月まで <u>色々な</u> 行事をおこなわれます。
	<u>ウェサシケ</u> 行事をよく行なわれます。	

	6月のまん月の日は <u>ポソン行事</u> を行こなわれます。
	その二つの行事は人々の心をよく <u>あんしん</u> して自分の生活をよく作るために・・・(後略)
	12月の25日は <u>クリスマス</u> をよく行なわれます。
	一年の間は色々な文化にかわって <u>色々な行事</u> をよく行なわれる
	二つの行事は人々の心をよくあんしんして自分の生活をよく作るために <u>せわ</u> をします。
Si 14-2	今から <u>よくじゅんび</u> しなければなりません。
	またかぞくは <u>びんぼう</u> な生活ももらいます。
	私たちの子どもたちにたばこやおさけなどのあぶないものがない <u>生活をあげる</u> ために・・・(後略)
Si 15-1	たいせつなことを <u>きねん</u> して <u>行う</u> 行事です。
	いろいろなもくてきをおもにして <u>行事</u> を行います。
	みんなのしみに <u>行事</u> を行われたのでしょうか。
Si 15-2	人々のからだに <u>わるい</u> えいきょうをあたえる
	<u>せい</u> かつしているときおこるもんだいをわすれるためにたばこをすっています。
	たばこの <u>えい</u> きょうはたばこをすう人々だけでなくそのまわりにいる人々にも <u>およぼ</u> します。
	たばこは <u>せ</u> かいじゅうの人々に <u>わるい</u> えいきょう <u>およぼ</u> す
	りょうしんからわかれて一人で <u>せい</u> かつしています。
	とてもさびしくて <u>せい</u> かつしている
	たばこをすったらどのぐらい <u>わるい</u> えいきょうが <u>およぼ</u> すと・・・(後略)
	人々に <u>せ</u> つめいしなければなりません。
Si 16-1	色々なもくてきのだから <u>行事</u> が <u>おこ</u> ないます。
	この月に <u>ワイセカ</u> 行事が <u>おこ</u> ないます。
	<u>いろいろ</u> な行事が <u>おこ</u> ないます。
	こどもたちが <u>た</u> こあげをしました
	<u>クリスマス</u> 行事が <u>おこ</u> ないます。
	みんな <u>い</u> えを <u>そう</u> じする、
	おかしはたべることや <u>お</u> としだまを <u>す</u> る
	おとしだまをすることや火をつけることなどの <u>しゅ</u> かんが <u>し</u> ます。
Si 16-2	ちかくにいる人々にも <u>え</u> いきょう <u>し</u> ました。

	人々のけんこうにたばこのけむりは <u>えいきょう</u> します。
	国は <u>はってん</u> することはむずかしいです。
	たばこは国のけいさいは <u>わるく</u> に <u>えいきょう</u> します。
	ほかに人のこころの中に <u>わるく</u> に <u>いけん</u> が <u>おこ</u> ります。
Si 19-1	<u>結こん</u> するときの行事などです。
	よく考えてその <u>行事</u> を <u>おこ</u> ないます。
	4月13日と12日にこの <u>行事</u> を <u>おこ</u> ないます。
	<u>でんとう</u> てきなスポーツをする
	<u>そうじ</u> をしてあたらしいふくを買い・・・(後略)
	ほとけさまのために <u>する</u> 行事もでんとうてきなことをたいせつにします。
	ぶっきょうにあるものをいってぶっきょうによって <u>行事</u> をします。
	行事をおこなうのは人々のくらしにある大切なしごとだ
	でもその行事もスリランカの文化によってちょっと <u>へんか</u> になってあると思います。
Si 19-2	社会に <u>生活</u> する人々はたばこをすう人についていい気もちでかんがえない
	たばこをすう人考えかたが <u>へんか</u> したいと思います。
	そのもんだいについてよく考えて <u>生活</u> することのかわりに・・・(後略)
	そのふくさつさに人々のくらしも意見も <u>へんか</u> に <u>され</u> ます。
	たばこをすう人の気持は <u>へんか</u> にならないと思います。
Si 20-1	またこの <u>行事</u> は <u>おこなう</u> 理由やしゅうきょうやおこなう場所や・・・(後略)
	ぜんぶについてこのようにかいて <u>せつめい</u> しておわることができない
	一つの行事についてみじかく <u>せつめい</u> する。
	たのしんでこの <u>行事</u> を行う
	おしょうがつの時みんないろいろな食べ物を特って <u>いろいろ</u> な <u>しゅうかん</u> をしてとてたのしんで
Si 20-2	〈機能動詞結合使用無〉

資料4 日本語作文と中国語対訳文との同形同義事態性名詞使用事例 (8.4.4 で使用)

《国立国語研究所作文データベース》

- 注 1) 中国語対訳は作文執筆者自身による。
 2) () 内の数字は、同一機能動詞結合の出現回数
 3) 〈 〉 及び下線は本論文筆者付加

(1) 中級 CLJ 正用

	日本語作文	中国語対訳
54	たばこを吸う人より人体を <u>侵害</u> することが深刻だ	在吸烟人旁边坐着吸烟味的人比本身吸烟的人受到身体的 <u>侵害</u> 更严重。
55	悪人に <u>迫害</u> されて、……(後略)	被坏人 <u>迫害</u> ,
	百姓は竜舟競渡をもって彼を <u>記念</u> します。	人们 <u>赛龙舟</u> 来 <u>纪念</u> 他。
	毎年の端午節に、……(中略)……みんな <u>活動</u> を行います。	都要 <u>举行</u> 很多 <u>活动</u> 。
	彼は百姓に <u>尊敬</u> されました。	他很受百姓 <u>尊敬</u> 。
	はくしゅ <u>喝采</u> したり、……(後略)	大家敲锣打鼓、 <u>拍手喝采</u> 、 <u>呐喊摇旗</u> ,
56	子どもに <u>悪い影響</u> を与える……(後略)	香烟广告也给孩子 <u>带来</u> 坏的影响,
	規則を作って <u>禁止</u> する……(後略)	制定这种 <u>禁止</u> 吸烟规定是很奇怪的,
	個人権利を <u>重視</u> する世界……(後略)	<u>重视</u> 个人权利的世界里
	若者は自分の好きな式で <u>旅行</u> したり……(後略)	按自己喜欢的方式去 <u>旅行</u>
58	<u>生活</u> する人の健康もこわせます	<u>生活</u> 的人的健康有 <u>损害</u>
	規則には <u>賛成</u> します。	我 <u>赞成</u> 在公共场所不许吸烟的规定。
	自分の権利だけ <u>重視</u> したら、……(後略)	每个人都只 <u>重视</u> 自身权利,
59	私が <u>説明</u> しましょう。	就让我来 <u>说明</u> 一下吧。
61	私にとって禁煙運動が全力で <u>支持</u> します。	我对禁烟运动是持全力 <u>支持</u> 的态度。
	空気が <u>汚染</u> されます。	自然 <u>环境</u> 、空气有 <u>污染</u> 。
	<u>禁煙運動</u> が <u>する</u> の必要	<u>禁烟运动</u> 有充分必要。
	<u>禁煙運動</u> しなければならぬ……(後略)	<u>禁烟运动</u> <u>必须</u> 实行。
	一件一件の事実は私たちにいろいろ <u>警戒</u> されます。	一件一件的事实向我们 <u>发出</u> 警戒
	環境、自然は私たちにいろいろ <u>警告</u> されます	环境自然对我们不断地 <u>发出</u> 警告,
	私は禁煙運動が全力で <u>支持</u> します。	我有力 <u>支持</u> 禁烟运动。

	凶悪犯罪が <u>増加</u> します。	青少年的犯罪率 <u>增加</u> 了，
63	悪い影響がある。	对人体有各种坏影响。
	全然 <u>禁止</u> できない。	“电台广播” <u>绝对</u> 不能 <u>禁止</u>
	人の自由な権力を <u>保障</u> する・・・(後略)	强调 <u>保障</u> 人的自由的权力
	人の自由な権力を保障するのを <u>強調</u> して・・・(後略)	<u>强调</u> 保障人的自由的权力
	人権は「他の人の利益」に <u>制限</u> されなければならない。	人权也必须以“他人的利益” <u>作为</u> 限制
	特別区」も <u>設置</u> する	<u>还</u> 设置“特别吸烟区”
	<u>生活</u> できる。	每个人才能正常地 <u>生活</u> 。
	いつも <u>絶対</u> に <u>確定</u> する方がよい。つまり、万物は二つに分けられる。	对许多事,通常是不能 <u>绝对</u> 地确定是非的。
	宣伝を <u>す</u> べきで、・・・(後略)	我们应该作更多的 <u>宣传</u>
	幹杯します。	最后大家一起 <u>干杯</u> 。
65	大人は子供に深く <u>悪い影響</u> を残しました。	大人们给孩子留下了很深刻的 <u>不好的影响</u> 。
66	危険なゲームを <u>選択</u> しますか？	为什么偏要 <u>选择</u> 烟——这个危险的游戏呢？
	他人の生命に <u>危害</u> を及ばさない。	对人体有直接的 <u>危害</u> 呢
67	休みを <u>利用</u> して、・・・(後略)	他们 <u>利用</u> 春节的假期
	人気がある漫才師、司会者は <u>出席</u> する。	受人们欢迎的相声演员、节目主持人会 <u>出席</u> 晚会
	クイズ番組、歌謡番組に <u>参加</u> する、	<u>参加</u> 猜谜、唱流行歌曲等活动。
	テレビで <u>広告</u> する。	商业都通过电视做广告。
	<u>割引</u> することを紹介する	对各种 <u>优惠</u> 作以介绍
	一番忙しい所は・・・(中略)・・・ <u>消費</u> する所かもしれない。	最忙的地方可能就是银行和 <u>消费</u> 场所。
69	織女は牛郎と結婚しました。	织女便和牛郎 <u>结婚</u> 了，
	王母娘娘は牛郎と織*女は会うことを <u>阻止</u> するために、・・・(後略)	王母娘娘为了 <u>阻止</u> 牛郎织女相会，
70	例をあげて <u>説明</u> します。	举个例子来 <u>说明</u> 吧。
	<u>禁止</u> する	<u>禁止</u> 吸烟的规定是不合理的，
	たばこが <u>燃焼</u> をする	香烟在 <u>燃烧</u> 的时候，

71	吸うことを <u>反対</u> する。	也 <u>反对</u> 在公共场所吸烟。
	気持ちを <u>悪く影響</u> して、・・・・(後略)	会影响同事的情绪,
74	閱兵儀式を <u>举行</u> しました。	<u>举行</u> 了大型的閱兵儀式。
	中国がさらに <u>繁榮</u> するなります。	将尽更大的努力把中国 <u>建设</u> 得更加 <u>繁榮昌</u> 盛。
	最大な努力で中国を <u>建設</u> して、・・・・(後略)	将尽更大的努力把中国 <u>建设</u> 得更加 <u>繁榮昌</u> 盛。
	よるは、天安門広場で文芸晩会が <u>举行</u> しました。	晚上, 天安门广场 <u>举行</u> 了大型的文艺晚会。
	春節の <u>準備</u> をしています。	人们常常好几个月前就 <u>准备</u> 过年了
	お礼を <u>準備</u> する。	<u>准备</u> 年礼等等。
	<u>紹介</u> します。	我 <u>介绍</u> 一下
77	人々は祝日を <u>重視</u> してきます。	人们越来越 <u>重视</u> 过节了。
	皆さんに <u>紹介</u> しましょう。(2回)	让我来向大家 <u>介绍</u> 一下中国的节日吧。
78	大学生はこの游行を <u>参加</u> しました、	北京的许多大学生都 <u>参加</u> 了。
	おいわいの儀式を <u>おこな</u> う・・・・(後略)	在全国 <u>举行</u> 重大的庆祝 <u>仪式</u> 。
	私は初めて <u>参加</u> した(2回)	我开始也想 <u>参加</u> ,
	では <u>発表</u> します。	而我本人也想就 <u>这个问题</u> <u>发表</u> 一下个人的观点。
	辺の人に <u>禁止</u> して吸いません。	也有 <u>权利</u> 去 <u>禁止</u> 周围的人吸烟
80	客たちにどのようなことをするのが <u>尊敬</u> してと思っています。	<u>这样</u> 才表示对客人的 <u>尊敬</u> 。
	中国人の感情を <u>表現</u> しています。	<u>这些都是</u> 中国的 <u>传统节日</u> , <u>表现</u> 了中国人不同的情感。
	〈中秋節の月が丸いのは〉一家 <u>団らん</u> するのが <u>象徴</u> します。	中秋之月特别 <u>圆</u> , <u>象征</u> 着一家 <u>团圆</u> <u>美满</u> 。
81	レストランを <u>連絡</u> したり、・・・・(後略)	前几天还要 <u>联络</u> 饭店买东西什么的。
	毒品のように <u>蔓延</u> してきました。	像毒品一样 <u>蔓延</u> 开来。
	たばこを <u>禁止</u> する	<u>禁止</u> 吸烟的标志
	ちちは <u>感動</u> しました。(2回)	爸爸看后 <u>感动</u> 了。
83	色々な <u>準備</u> をします。	人们做了各种各样的 <u>准备</u>
	<u>麻雀</u> を <u>やり</u> ます。	一 <u>边</u> 打着 <u>麻将</u> 。
84	お祭りをちょっとお <u>紹介</u> いたします。	天我想向大家 <u>介绍</u> 一下中国南方的祭祀

	実現したい夢を神様に頼んで	想实现的梦寄希望于神仙。
85	気体は環境に汚染しています。	这些气体严重污染我们的生存环境
	私は一番目の意見を支持しています。	我比较支持第一类人。
	放送などの影響を受けやすいです。(2回)	很容易受其它人和电视广告的影响
	この問題についての激しい討論があります。	日本社会就此展开了激烈的讨论。
	今はよく解決していません。早く解決したほうがいい。(2回)	至今仍未得到妥善解决
86	社会にいろいろな悪い影響を与える	吸烟带给社会许多负面影响
	女の人と子どもは男の人より悪い影響をうける	对女性和小孩的影响远大于对男性的。
	たばこのコマーシャルはこどもにわるい影響を与える。	对小孩的影响也大
87	年長者はみなさんに次の一年の要求を出してくれます。	长辈向大家提出来年的要求
88	掃除をする	又要大扫除，又要买东西，
	ご飯を準備しています。	大人们就开始准备年夜饭，
	春になることを暗示します。	这暗示着春天的到来，
	みなさんは感情をこうりゅうします。	要到亲属那里去拜年，大家做一下感情上的交流

中級 CLJ 誤用

	日本語作文	中国語対訳
55	汨羅江に投江自殺しなければなりませんでした。	被迫投汨罗江自杀
	他人の権利を悪く影響したら、・・・(後略)	给他人的权利带来不好的影响
	禁止られるべきです。	就应该被禁止
61	世界は一人の世界ではなく、自本の感覚が注意するばかりでなく、みんなのことで生存環境のことを注意しなければなりません。	世界不是一个人的世界，光注意自己的感觉是不行的，必须注意他人的环境。
63	他の人に悪い影響しないうちに・・・(後略)	在公共场所，自己的行为必须在不对他人产生不良影响的前提下产生。
66	まわりの人に危害を持ってくる	带来了很大的危害

	〈割引すること〉を <u>紹介</u> する。	对各种 <u>优惠</u> 作以 <u>介绍</u>
	記念日は・・・(中略)・・・正月よりずっと <u>重視</u> られる。	比春节更 <u>受重视</u> 。
	一日中 <u>娯楽</u> をして、〈食事をする〉・・・(後略)	一家人聚在一起 <u>娱乐</u> 、吃饭，非常的热闹。
70	犯罪の行為と言う言い方は <u>接受</u> できますか。	在公共场合施放毒气是一种犯罪行为这种说法是可以接受的吧。
	権利を <u>強調</u> すぎです。	我认为是 <u>过分强调</u> 了个人权利。
71	一人でたばこを吸ってほかの人を <u>影響</u> しないのは <u>まだ</u> 。	自己吸 <u>不影响</u> 别人尚能原谅
	健康に <u>有害</u> が <u>あ</u> って、・・・(後略)	吸烟 <u>有害</u> 健康。
72	春節を <u>準備</u> しています。	大家都忙着为过节作 <u>准备</u> 。
	赤旗がひらひらと翻る時、みなさん中国の強くに自分の <u>努力</u> をするはずでしょう。㊦	我们是否 <u>应该</u> 为祖国的强大尽自己的一份 <u>努力</u> 呢？
74	儀仗隊はすばらしい <u>表演</u> をしました。	仪仗队的官兵们 <u>做出</u> 了精彩的 <u>表演</u> 。
78	天安門広場で閱兵儀式と <u>遊行</u> をおこないました、	在天安门广场将举行 <u>盛大</u> 的閱兵式与群众 <u>遊行</u> 。
80	男の人たちは女の人たちとおどって、 <u>対歌</u> します。	男女跳舞， <u>对歌</u> 。
81	中国人は誕生日にだんだん <u>注意</u> をします。	现在越来越多的中国人 <u>注意</u> 自己的生日。
	中国人の誕生日を見ると・・・(中略)・・・ 「中国人は大変形式を <u>注重</u> します」	中国人比较 <u>注重</u> 形式
85	たばこは彼たちの肺に悪い <u>影響</u> を <u>酷</u> くしています。	特别是对孩子， <u>影响</u> 更严重，

(2) 上級 CLJ 正用

	日本語作文	中国語対訳
11	〈環境汚染をしないために〉政府から <u>禁止</u> されている。	为了不 <u>污染环境</u> 已经被政府 <u>禁止</u> 了。
12	その人を <u>興奮</u> させます。	从而使人 <u>产生兴奋</u> 。
	タバコを吸う人の体はニコチンに <u>適性</u> がある(2回)	吸烟人的身体已经 <u>有了</u> 对“尼古丁”的 <u>适应性</u> ，
	人によって差があるから、 <u>実施</u> することは難しい	因为人与人之间的差别存在，所以真正 <u>实施</u> 就比较困难，

	意見に <u>賛成</u> します。	我 <u>赞成</u> “ <u>应该规定</u> 在公司・・・・”这种意见。
	タバコを <u>製造</u> しています。	一些生产者正在 <u>制造</u> 含焦油量少的烟，
	タバコを吸えないよう <u>規則を作るべきだ</u>	<u>应该规定</u> 在公司、饭店、公共汽车等公共场所不能吸烟
	もし <u>禁止</u> したら社会の治安までに・・・(後略) (3回)	如果真的 <u>禁止</u> 了，他们说可能会做出一些对社会更加有害的事情来。
	もし <u>規則を作</u> って禁止したら、・・・(後略) (2回)	如果真的 <u>作了规则</u> 禁止他们，
	という考え方が <u>賛成</u> する。	我 <u>赞同</u> 在“公司或餐厅、
14	悪いものを <u>禁止</u> しなければならない	这种如此恶劣的东西不 <u>禁止</u> 不行。
	<u>調査</u> を行なった	曾把不吸烟者作为受害者 <u>进行过调查</u> ，
	たばこを <u>禁止</u> する	在公共场所 <u>禁止</u> 吸烟的必要是有的
	たばこを <u>宣伝</u> する	对烟草大肆 <u>宣传</u> 的行为，
15.	〈規則を作って〉 <u>制限</u> する	大体上可以分为 <u>撰定规章</u> <u>进行限制</u> 和 <u>强调</u> 这本是个人权利两大阵营，
	私は前の方が <u>賛成</u> します	我是 <u>赞成</u> 前者的，
	それ〈権利を〉を <u>曲解</u> します。	而不顾他人的行为是 <u>对此</u> 的一种完全的 <u>曲解</u> ，
	話しを <u>強調</u> する	<u>强调</u> 这本是个人权利
	彼に自由を <u>与</u> えます	会 <u>赋予</u> 他自由了吗？
	私利をはかること・・・(後略)	这难道不是 <u>为求一己私利</u> 的吗？
	<u>悪い影響</u> を与えない	如果写大点的话，就一定不会 <u>给孩子坏影响</u> 。
17	後で <u>説明</u> する。	后面再 <u>说明</u> 。
	<u>愛と希望</u> をこめて子供に・・・(後略)	父母把 <u>包含了爱和希望</u> 的
18	<u>禁止</u> する	“ <u>禁止</u> 吸烟太可笑了，
	<u>自殺</u> する	“每个人都有 <u>自杀</u> 权利”
	<u>靈感</u> を受ける	比如作家、诗人等。 <u>对他们来说</u> 只有烟才能给他们带来灵感，
	<u>注意</u> しなければ・・・(後略)	大人们应该 <u>注意</u> 这方面。
19	知っていることを少し <u>紹介</u> する。	但这儿就我所知的稍作 <u>介绍</u> 。
	<u>汚染</u> された空気を	呼吸被 <u>污染</u> 的空气。

	空気を <u>呼吸</u> せざるをえない。	人们的身体除了要承受工作的疲劳以外,还要呼吸被污染的空气。
	国家の繁栄も <u>実現</u> できません。	当然也不会实现什么国家的繁荣富强。
	他の人は休憩したり、次の日の <u>準備</u> したりする。	其他的人或休息、或为明天的事做准备。
	元氣よく <u>生活</u> するよ	保佑自己的父亲(或母亲)在另一世界中健康的生活
	お寺が <u>破壊</u> された	后因村里的古庙遭破坏,
22	<u>禁止</u> する	还是严格禁止,
23	<u>準備</u> しはじめます。	在一个月前就开始准备了。
	大気を <u>汚染</u> する	放鞭炮污染大气,
24	<u>紹介</u> しましょう。	我按照结婚仪式的顺序为大家介绍一下吧
	<u>禁止</u> されている	在结婚仪式前之所以新郎和新娘被禁止见
	<u>生活</u> する	“孤”字还含有一个人生活的意思
	<u>大掃除</u> する	房间也要先进行大扫除,
	<u>掃除</u> する (2回)	春节时是不能扫除的
26	日本とかに常に <u>侵略</u> されました。	屡遭欧美日列强侵略,
	<u>旅行</u> します	或是出外旅行,
	<u>参加</u> しました。	大学生们也参加了游行。
27	妊婦と子供にとってもっと悪い <u>影響</u> を与える。	对于孕妇和孩子的影响更坏。
	環境を <u>汚染</u> して、・・・・(後略)	污染了环境,
	たばこはぜったい <u>禁止</u> されるべき (3回)	是不是就应该完全地禁止吸烟呢?
	政府から吸わないことを <u>提唱</u> するべきだ、	政府应该提倡不吸烟,
29	人が <u>自殺</u> しても他人に関係ないこと	人可以自杀。
	<u>禁止</u> する (4回)	对于烟的广告,我觉得应该禁止。
	子供の将来に <u>影響</u> する	这会影响到他们的将来。
30	<u>解決</u> できない	这又不是一个短时间内可以解决得了的问题,
	<u>解決</u> しやすい	在家里这样的事要相对好解决,
	禁煙の <u>命令</u> を政府が <u>出</u> したら・・・・(後略)	让政府下达命令的话,
	<u>禁煙</u> するべき	在公共场所是一定要禁烟的,

上級 CLJ 誤用

	日本語作文	中国語対訳
11	環境汚染をしないために・・・(後略)	为了不污染环境已经被政府禁止了。
12	人間の体はタバコに含まれる物を <u>需要する</u> ようになる	人体对香烟有了 <u>需要</u>
	タバコを吸うことを <u>停止</u> しがります	很多人想 <u>停止</u> 吸烟,
14	人間の健康を <u>破壊</u> する。	<u>破坏</u> 了人们的健康
	大量のたばこを吸ったら、 <u>致死</u> する。	大量吸烟甚至会 <u>导致</u> 死亡。
	人はたばこを <u>依頼</u> する。	经常吸烟的结果使人对烟草产生 <u>依赖</u> 感
	たばこのコマーシャルを <u>制限</u> する必要もあると思う。	同时 <u>限制</u> 烟草的广告也是有必要的。
	<u>大損害</u> を受ける。	会受到更大的 <u>损害</u>
	社会に <u>批判</u> られる	应受到全社会的 <u>批判</u>
	たばこは人に有害する	吸烟对人体有害这是早经科学验证了的
	私たち成人は <u>努力</u> をつけるのは吝嗇ですか。	我们成年人应吝嗇 <u>付出</u> 自己的 <u>努力</u> 吗?
17	皆さんに <u>紹介</u> したい。	我想跟大家 <u>介绍</u> 一下。
20	<u>受けた毒害</u> が多い	周围人所受到的 <u>毒害</u> 更大。
	人々の身体は仕事の <u>疲労</u> を受けるほかに、・・・(後略)	人们的身体除了要承受工作的 <u>疲劳</u> 以外,
	人間の生命安全性を <u>脅威</u> してきています。	香烟一直在 <u>威胁</u> 着人类的生命安全。
	中国人を <u>了解</u> する	要想了解中国人,
26	中華人民共和国は五十年ぐらい前に <u>建立</u> されました	现在的中华人民共和国是约五十年前 <u>建立</u> 的
	国民はいろいろな <u>苦しみ</u> をうけさせました。	中国人民饱 <u>受</u> 苦难,
	に旅行しますとか、みんなが平和安定、 <u>繁栄</u> 幸福な <u>生活</u> を <u>すご</u> しています。	享受和平安定、 <u>繁荣</u> 幸福的 <u>生活</u> 。
27	環境を汚染して、別のたばこ吸わない人に <u>損害</u> する。	污染了环境,也 <u>损害</u> 了他人的健康。
	他人に <u>影響</u> しなところに吸う・・・(後略)	在不 <u>影响</u> 别人的地方吸烟
29	別の人に <u>えいきょう</u> しない	一天抽几支烟都可以,但不能 <u>影响</u> 别人,
	人権というのは人の行動が回りに <u>影響</u> しない	人权表示不 <u>影响</u> 任何东西的前提条件下,干什么都可以

資料5 日本語母語話者の作文（第9章）で使用された機能動詞結合

- 注 1) 〈 〉内及び下線は当論文執筆者付加
2) 作成者番号の右の数字は作文のタイトルを示す。

《国立国語研究所作文データベース》

- 作文タイトル：1 「あなたの国の行事について」
2 「たばこについてのあなたの意見」

Ja6-1	たくましく育ってくれることを <u>祈願</u> します。
Ja7-2	問題なのは <u>規制</u> するかどうかということ・・・(後略)
	つまり、 <u>規制</u> されないとマナーが守れない人間性自体が問題・・・(後略)
	よくよく考えてみると、 <u>規制</u> されなければ国民が道を汚さぬ・・・(後略)
	<u>規制</u> したことで、喫煙しない人々への影響は多少ある
	要は、 <u>規制</u> するかどうかではなくて喫煙者個人個人が、・・・(後略)
	<u>規制</u> して、喫煙者が減ったところで他人を思いやれる・・・(後略)
	国民が道を汚さぬ <u>努力</u> をしない・・・(後略)
	<u>喫煙</u> しない人々への影響は多少ある・・・(後略)
	人々への影響は多少 <u>ある</u> ・・・(後略)
	他人に <u>迷惑</u> をかけるようなまね・・・(後略)
	あえて <u>規制</u> に <u>反対</u> しようと思います。
	人間の最低限の良心が <u>存在</u> し <u>機能</u> することを信じたい
Ja8-2	喫煙を <u>規制</u> することに賛成です。
	喫煙は、法律で <u>規制</u> するべきだと思います。
	ですから、私は喫煙を <u>規制</u> することに賛成なのです。
	そんな危険のある <u>ポイ捨て</u> をするのでしょうか。
	たばこを吸う場所を <u>制限</u> したら、・・・(後略)
Ja10-1	伝統が現代まで <u>継承</u> され、それは私達の誇りだと思う。
	時代の流れによって <u>風化</u> してしまった・・・(後略)
	内容が <u>変化</u> してしまったもの・・・(後略)
	豊作を <u>祈願</u> したり、家庭の安全を祈ったりと・・・(後略)
	全国各地ならではのものが <u>存在</u> する。
	子供成長を <u>実感</u> する。
Ja13-2	10年も昔から <u>問題視</u> されてきています。

	喫煙者はある種の麻薬中毒者に似ている <u>行動を起こす</u>
	禁煙中にイライラして感情をおさえきれず・・・(後略)
	他人に <u>危害を加えて</u> しまったり・・・(後略)
	<u>喫煙すること</u> によって喫煙者の体をむしばむ・・・(後略)
	<u>喫煙をする</u> かしないかは自分の意志であり・・・(後略)
	体にも <u>害を及ぼす</u> のです。
	肺に <u>害を成す</u> のは非喫煙者・・・(後略)
	ふくりゅう煙という煙の方が <u>害になる</u> からです。
	他人に <u>危害・被害を与えて</u> しまう・・・(後略)
	他人に <u>危害・被害を与えて</u> しまう・・・(後略)
	タバコを規則で一律に <u>禁止する</u> べきだ
	子供に <u>確かに悪い影響を</u> 与えてしまう・・・(後略)
	喫煙者は <u>めい惑にならない</u> 所で吸うこと・・・(後略)
Ja14-1	最近では <u>簡略化されて</u> 、・・・(後略)
	ピンクや緑色に <u>きれいに着色されて</u> いて、・・・(後略)
Ja15-2	喫煙を <u>規制する</u> ことに私は賛成です。
	私が喫煙を <u>規制する</u> ことに賛成する理由は、・・・(後略)
	喫煙を規制することに <u>賛成する理由</u> ・・・(後略)
	腕や足を <u>骨折してギブス</u> をしている・・・(後略)
	喫煙を全面的に <u>禁止する</u> のではなく、吸える場と吸えない場・・・(後略)
Ja18-1	楽しく盛大に皆が <u>お祭り騒ぎをする</u> ・・・(後略)
	ユニークな <u>飾りつけ</u> がしてあり・・・(後略)
	車輪がついていて皆で引いて <u>移動する</u> のです。
	祭りに来ている人々に <u>披露する</u> ため、みこしや山車は・・・(後略)
Ja20-2	喫煙は本人にも他人にも <u>害になる</u> ・・・(後略)
	法律で <u>規制した</u> からといって、・・・(後略)
	コマーシャルについてだけ <u>規制する</u> ような、中途半端なこと・・・(後略)
	たとえ法律で定めたとしても、 <u>規制できる範囲</u> は限られてしまう・・・(後略)
	私の意見では、法律で <u>規制する</u> ことには反対であり、・・・(後略)
	はってあるさもかわらず、学生達は <u>喫煙</u> している。
	喫煙は禁止」とアナウンスしたり・・・(後略)
	ささいな決まり事をも <u>軽視</u> している・・・(後略)

	<u>法律化</u> しても何ら意味をなさない・・・(後略)
	子供達に <u>悪影響</u> が及ばなくなるであろうか。
	法律に頼れば <u>解決</u> するという考えに対しても、疑問を抱かず・・・(後略)
Ja21-1	織姫と彦星に <u>お願い</u> してみてもいいかが・・・(後略)
Ja22-1	新年を <u>お祝い</u> する行事・・・(後略)
	昔からその様式は <u>変化</u> していません。
	元旦に間に合うように <u>仕込み</u> を始めます。
	「お正月」と言って <u>連想</u> するものの1つに、・・・(後略)
Ja25-1	「死者が渡る川の向こう側」を <u>意味</u> するもの・・・(後略)
	先祖の霊を慰めるために、 <u>墓参り</u> をしている。
	ほとんどの日本人が <u>墓参り</u> をして、墓をきれいにし、 <u>掃除</u> をして、・・・(後略)
	きなこをまぶしたもので、先祖の霊に <u>お供え</u> するものである。
Ja29-2	喫煙を <u>規制</u> すべきか否かに関して、私は <u>規制</u> すべきだと思います。
	周りへの影響を考えると <u>規制</u> した方が良く・・・(後略)
	<u>喫煙</u> したところで何の利益もなくそれどころか・・・(後略)
	<u>喫煙</u> することによって起こる悪影響は・・・(後略)
	健康に <u>悪影響</u> を与えるだけ・・・(後略)
	喫煙することによって <u>起こる悪影響</u> は私達の健康にだけ・・・(後略)
	それを毎日 <u>掃除</u> し、迷惑に思っている人もたくさんいる・・・(後略)
	吸いすぎたりしないように <u>加減</u> したり・・・(後略)
Ja32-2	喫煙を規則で <u>禁止</u> する・・・(後略)
	周りの人に <u>迷惑</u> をかけないのがマナー・・・(後略)
	体に <u>悪影響</u> を与える為、周りにいる人は実際吸わないのに害を与えられてしまう
	たばこを吸えないように <u>規制</u> する・・・(後略)
	夜中に <u>放送</u> されるようになった・・・(後略)
	カッコいいことを <u>真似</u> したがる。
	タバコを売る為に <u>コマーシャル</u> をする・・・(後略)
Ja35-2	タバコを今さら法律で <u>規制</u> するのは・・・(後略)
	子どもに <u>悪影響</u> を与えるので <u>規制</u> すべきだという意見・・・(後略)
	それならスクーターや車など様々なもの <u>規制</u> すべき・・・(後略)
	法律で一律に <u>禁止</u> すべきものではない・・・(後略)
	同じレベルで <u>解決</u> していく問題・・・(後略)

	人に <u>迷惑を</u> かけないのなら・・・(後略)
	全席禁煙というのはどうも <u>納得</u> いきません。
	喫煙者の <u>喫煙する</u> 権利・・・(後略)
	未成年が <u>喫煙を</u> してしまうからでしょうか。
	子どもに <u>悪影響を</u> 与えるので規制すべきだ
Ja38-1	料理を年末から <u>準備</u> し、「お正月」に食べます。
	「お正月」を <u>楽しみに</u> するのは誰でも同じ・・・(後略)
	一番 <u>楽しみに</u> するのは、子供たちだ・・・(後略)
	ここで <u>紹介</u> したのは日本の習慣のほんの一部・・・(後略)
Ja48-2	喫煙は法律で <u>規制す</u> べきである。
	公共の場所での喫煙は厳しく <u>規制される</u> べきである。
	身体に <u>悪影響を</u> 及ぼしている
	妊娠中の女性がいたら、胎児に <u>悪い影響を</u> 与える・・・(後略)
	<u>寝たばこを</u> して、それが大きな火事につながり、・・・(後略)
	<u>歩きたばこを</u> する人がいるということである。
	<u>歩きたばこを</u> している男性と子供がすれ違い、その時・・・(後略)
	危うく <u>失明し</u> そうになった・・・(後略)
	誰にも <u>迷惑を</u> かけずに吸うべき・・・(後略)
Ja51-2	法律で <u>禁止</u> されている・・・(後略)
	<u>飲酒</u> や喫煙も、その日からは堂々と <u>する</u> ことができます。
	<u>飲酒</u> や喫煙も、その日からは堂々と <u>する</u> ことができます。
	犯罪を犯した場合、未成年は氏名が <u>公表</u> されません
	様々な面で <u>変化</u> する、節目の年である二十歳。
	“成人式”という <u>式典を</u> 行います。
	それが <u>変更</u> され、一月の第二月曜日となりました。
	<u>成人式</u> は、～二十歳を一か所に集めて <u>行う</u> ・・・(後略)
	オーケストラが <u>演奏</u> したりします。
	中には <u>仮装</u> して式典に <u>出席</u> する人もいる・・・(後略)
	<u>成人</u> したことを祝う・・・(後略)
	共に <u>勉強</u> していた者・・・(後略)
	<u>成長</u> している様子・・・(後略)
	意味はあまり <u>重視</u> されず、形だけ・・・(後略)

Ja52-2	たばこを法律で <u>規制する</u> か否かにあたって・・・(後略)
	今すぐ法律で <u>規制して</u> しまうのには問題がある・・・(後略)
	アルコールと <u>比較される</u> ことがあります。
	麻薬のように、 <u>禁止して</u> 皆一斉に逮捕又は病院へ・・・(後略)
	私は一律に <u>禁止する</u> という事には反対です。
Ja53-1	<u>溺愛</u> していた長男を海難事故で亡くした。
	その人が生きた証を <u>風化させ</u> ないように。
Ja54-2	十分 <u>承知</u> しているはずである。
	周囲の人の健康までも <u>害する</u> ・・・(後略)
	ということを十分 <u>理解</u> している人は少ない・・・(後略)
	ということを <u>強調する</u> のではなくて・・・(後略)
	よく考えて、 <u>判断</u> してほしい・・・(後略)・・・(後略)
Ja57-1	夏祭りについて <u>紹介</u> したいと思います。
	<u>夏祭り</u> は、だいたい7～8月に <u>行われ</u> ます。
	地域の人達が <u>協力</u> して、自分達の住んでいる地域の特色を・・・(後略)
	何人かで <u>声をかけ</u> あって持ちあげたり、さげたりします。
	地域の人達が集まって <u>練習</u> する・・・(後略)
	子供たちはこれが目的で <u>参加</u> する・・・(後略)
	ぜひこの夏祭りを <u>体験</u> してほしいと思います。
Ja59-2	喫煙を <u>規制</u> するかどうかで・・・(後略)
	私は喫煙を <u>規制</u> すべきだと思います。
	あまりたばこを <u>意識</u> しないで育ちました。
	本人だけに <u>害がある</u> のなら・・・(後略)
Ja63-2_	法律によって <u>規制</u> すべきか否か・・・(後略)
	たばこは何らかの形で <u>規制</u> （それが法であれ地方の条例であっても） <u>される</u> べきだということである。
	もしそうなったと <u>仮定</u> してどのような・・・(後略)
	人の権利というものは <u>尊重</u> されるべき・・・(後略)
	人々の権利は <u>尊重</u> されなくてもよいのだろうか。
	否、必ず <u>尊重</u> されなくてはいけない・・・(後略)
	健康に <u>害</u> をおよぼすと言われている。

資料 6 文字数 450 字以上の中級 CLJ の作文 (第 9 章) で使用された機能動詞結合

作文数 23

資料 1 で使用したものと同じものから下記を抜粋

個々の文例については資料 1 を参照のこと

《国立国語研究所作文データベース》

|53-1|56-2|SG58-1|65-2|67-1|69-1|70-2|71-2||JP72-2|73-1|74-1|80-1|81-1|
|82-2|83-1|84-1|

《華東法政大学》

|A-2|C-1|E-2|S-2|X-2|

《東京外国語大学》

|26-1|27-2|

資料 7 文字数 450 字以上の上級 CLJ の作文 (9.4.3) で使用された機能動詞結合

作文数 26

資料 3 で使用したものと同じものから下記を抜粋

個々の文例については資料 3 を参照のこと

《国立国語研究所作文データベース》

|11-1|12-2|13-2|14-2|15-2|16-2|17-1|18-2|19-1|20-2|21-1|22-2|23-1|24-1|
|15-1||26-1|27-2|29-2|30-2|

《華東法政大学》

|H-15|

《東京外国語大学》

|3-11|5-2|5-1|5-3|18-2|18-3|

- 7 彼女の作品は、新聞の書評でも、高い評価を（ ）た。 [报纸评价作品]
- 8 彼は体に障害があったが、周囲の人々の理解を（ ）て、無事学校を卒業することができた。 [人們理解 (他)]
- 9 その件については、昨日、部下から詳しい報告を（ ）たので、知っています。 [接到报告了]
- 10 オバマ氏は、圧倒的な国民の支持を（ ）て、大統領に選出された。 [国民支持 (总统)]
- 11 当教育相談所では、教育でお悩みの御父母の御相談を（ ）ております。 [接到商量了]
- 12 留学するとなると、また親に負担を（ ）ことになるので、決心がつかない。 [給 (父母) 增添负担]
- 13 彼の作品は、イギリス近代文学の影響を（ ）ている。 [被影响了]
- 14 今回のことでは、大変ご迷惑を（ ）てすみませんでした。 [給您添麻烦了]
- 15 この犬は、警察犬としての訓練を（ ）ています。 [被训练了]
- 16 今回、ある大手スーパーと販売の契約を（ ）することができた。 [訂立契約]
- 17 敵の激しい攻撃を（ ）、ローマ軍は多くの兵を失った。 [被攻击了]
- 18 火山活動に新たな変化が（ ）た時は、危険ですからすぐ避難してください。 [引起变化]
- 19 放射能汚染の影響が（ ）のは、10年後、20年後で、すぐにはわからない。 [有了影响]
- 20 話し合いの結果、結論が（ ）たら、すぐご報告します。 [下来结论]
- 21 子どもの成長に悪い影響を（ ）ので、テレビの見すぎに気をつけましょう。 [有影响]
- 22 あまり辛いものは胃に刺激を（ ）ので、食べないようにしている。 [有刺激 (胃)]
- 23 レストランを予約してあったが、少し遅れそうなので、電話を（ ）ておいた。 [用电话联络]
- 24 健康のため、規則正しい生活を（ ）てください。 [过生活]
- 25 生徒が問題行動を（ ）た時は、すぐ校長に報告してください。 [开始行动]
- 26 ギリシャ経済の低迷は、ヨーロッパだけでなく、広く世界経済に大きな影響を（ ）ている。 [影响到 (世界经济)]
- 27 昼間は仕事なので、電話は（ ）ないでください。 [打电话]
- 28 私たちは、2、3分話し合って、すぐに結論を（ ）た。 [有结论]
- 29 夏休みに、旅行の計画を（ ）たので、そのためにアルバイトをしています。 [制订计划]
- 30 急用ができて、田中さんと、至急連絡を（ ）たいのですが、どうしたらいい

でしょうか。	[跟 (田中) 联系]
31 悪かったのは自分なので、どのような <u>処分</u> でも () るつもりです。	[被处罚]
32 校則を守らない学生には、厳しい <u>措置</u> を () なければならない。	[実施措置]
33 今後の治療方法について、医者から詳しい <u>説明</u> を () た。	[得倒说明了]
34 このクラスは、委員の女の子が、全体の <u>指揮</u> を () ている。	[指挥]
35 結婚式で、花嫁は皆の <u>注目</u> を () て、恥ずかしそうに頬を赤く染めていた。	[受到注目]
36 高血圧なので、 <u>食事</u> の () 方には、いつも気を付けています。	[吃饭]
37 工場では、食品に異物が入らないように細心の <u>注意</u> を () ている。	[要注意]
38 不合格の場合も <u>考慮</u> に () て、他の学校も受験しようと思います。	[考虑在内~]

資料 10 産出実験の正答数集計結果 (第 11 章)

〈問〉の番号は、資料 9 の質問紙の番号

〈日本語能力試験 N1 合格者〉

問 協力者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	合計	
N1-1						1	1							1			1			1	1								1		1								8	
N1-2						1	1							1			1			1	1	1		1				1	1	1	1					1	1		15	
N1-3	1		1	1	1	1		1	1		1	1	1	1	1	1	1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					1	1		23	
N1-4					1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1							20	
N1-5				1		1	1	1						1	1	1	1			1										1		1					1		11	
N1-6													1	1	1	1	1				1		1				1	1	1	1	1						1		12	
N1-7	1	1				1	1			1	1	1	1	1	1	1	1			1	1	1	1					1	1	1	1	1	1						20	
N1-8		1	1			1	1				1		1	1	1	1	1		データから削除	1	1			1				1	1	1	1							1	15	
N1-9						1	1					1	1	1	1	1	1			1	1			1				1	1	1	1							1	15	
N1-10	1					1			1		1		1	1	1	1	1			1	1	1	1						1	1		1					1	16		
N1-11						1														1					1													1	4	
N1-12						1			1											1		1						1	1	1	1	1							11	
N1-13	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1			1						1	1	1	1	1	1	1	1						21	
N1-14							1							1															1										3	
N1-15	1					1	1						1	1	1	1	1				1	1					1	1		1	1							1	15	
N1-16						1		1		1																		1	1		1	1								8
N1-17	1					1							1	1	1	1	1					1	1					1	1	1									11	
N1-18	1					1			1												1	1							1	1	1	1	1		1				12	
N1-19	1	1				1							1	1	1	1	1				1								1			1							1	11
N1-20						1							1	1	1	1	1					1						1	1	1	1	1							1	11
N1-21			1			1				1	1		1	1	1	1	1						1						1	1	1	1	1			1			15	
N1-22	1		1			1	1						1	1	1	1	1				1		1						1	1	1	1		1				1	16	
N1-23	1		1	1	1	1					1		1	1	1	1	1			1	1				1			1	1	1	1	1		1		1	1	1	1	21
N1-24	1	1	1	1	1	1	1			1	1	1	1	1	1	1	1				1	1				1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	25
N1-25	1				1	1	1	1		1	1			1	1	1	1	1						1					1	1	1	1	1			1	1	1	1	17
N1-26						1							1	1	1	1	1				1	1	1					1	1	1	1	1							13	
N1-27					1	1							1							1	1	1	1		1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	21	
N1-28				1		1							1	1	1	1	1				1							1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		19
計	4	10	6	7	7	26	13	4	9	9	7	10	20	27	12	9	22	0	8	13	16	14	0	11	3	6	17	15	22	20	22	5	2	6	3	11	6	7	409	

